
仮面ライダーユカイド

Another

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーユカイド

【Nコード】

N0276I

【作者名】

Another

【あらすじ】

内田ユカと羽生の旅は続く。次の世界は希望か破滅か……無数に枝分かれした世界は彼女の瞳に何を見せる。

この物語は『みなみけ』の内田ユカがライダー＋他作品の世界を旅する話です！

原作側のライダーは物語の途中又は終了後の設定で基本的にゲスト

登場のみで本編には余り絡みません！

最後に過度な期待はせずに台本書きに注意して読んでください……
バカ野郎！！

（三十二話から台本ではありません）

割り込み投稿が私的に有り得ない仕様でしたのでLEを一旦削除しました（完結後に再掲載します）。

三十二話以前の話は完結後に修正予定です（ルビは直しました）。

第一話 崩壊（前書き）

キャラ崩壊をしているかも知
ですが：暖かい心で読んで
頂けたら幸いです

第一話 崩壊

仮面ライダーユカイド

第一話

マンション入口前に二人の小学生が仲良く歩いてきた

千秋

「なあ内田

どうしてついて来る？」

内田

「えっ？千秋ちゃんが遊びに来ないかって言っただよね？」

千秋

「言っていないぞ？私は、」

内田

「でも夏奈ちゃんが、千秋ちゃんが私と遊びたいらしいから家に来なっつて」

噂をすれば影、その本人が

こちらに歩いて来る

千秋

「本人に聞くのが一番！」

内田

「そうだね、」

千秋

「夏奈ちよつと、聞きたい事があるんだが？」

夏奈

「千秋おかえり、」

千秋

「えっ」ただいま、」

夏奈が隣に内田を見つけて

「いらっしやい」

そのまま外に出て行こうとする夏奈を呼び止める千秋

千秋

「待てバ力野郎！？」

夏奈

「お姉様にむかって
バカ野郎とは！！」

千秋

「内田を家に誘ったのは、
夏奈お前だろ？」

キョトンと首を傾げる様は

かぁいいが所詮は

夏奈であると思う千秋

内田

「夏奈ちゃん、
私に電話したよね？」

夏奈

「そうだったっけ？」

千秋

「救いようがない、
バカ野郎だな！！」

夏奈

「なんだと！！」

二人がケンカをするのを止
めようと内田が間に割って
入ったその時

グラツ―ゴツガア

地震が三人を襲う

夏奈

「頭を庇って！！姿勢を
低く傍を離れないで！！」

バカ日本代表なのに冷静だ
な夏奈？暫くして辺りに静
寂が訪れるが、建物は崩れ
道は裂けていた

夏奈

「二人とも大丈夫か？」

内田

「へいきだよお、」

千秋

「……………」

返事がない妹を心配するが
自分の袖を掴んで俯く
千秋にホツとする

夏奈

「ビックリした〜、」

内田

「あれなんだろう？」

内田が指差す方を見ると…

半透明灰色のカーテンの様な物から人間じゃない何か化け物・怪物・モンスター

全てが当て嵌まる

怪人が此方に向かって来る

夏奈

「逃げるぞ！」

千秋

「ああ…」

内田

「ま、待って…っキアア」

千秋

「内田っ!？」

夏奈

「此方に早く!!」

何もない道で転んでしまう
これぞ、バカクオリティ!
慌て追いかけるがカーテン
の壁にジャマされてしまう

内田

「そんな、まだ
死にたくないよう、」

怪人が目前に迫ったその時

周囲全てが闇へ溶ける

内田

「何これ…」

闇闇闇闇闇闇闇闇闇闇闇
闇闇闇闇闇闇闇闇闇闇闇

自分が立っているのか座っ

「9つの世界が1つに
成ろうとしている…
それを君が防がなければ
いけない、破壊しろ！！
ディケイド…でなければ
先程の様々な怪人共の
巣くう―混沌の世界が
生まれてしまう」

内田

「……………」

「大事な事だ、
…覚えておけ！！」

……………

徐々に世界に光が色が戻る
其所は闇に溶ける前の世界
周囲を見渡すと夏奈と千秋
が襲われている、鉄パイプ
で牽制するが時間の問題だ

内田

「千秋ちゃんッ

夏奈ちゃん！？！？」

直ぐに駆け寄るがカーテンにジャマされる、ふと千秋の足元を見ると何か落ちて
いる、内田は何故かソレが
彼が言っていた物だと直感

内田

「千秋ちゃん！

ソレを渡して、早く！！」

第一話 崩壊（後書き）

次回：変身します

てか読んでくれて

ありがとうございます

第二話 変身（前書き）

戦闘って凄く難しいですね
このまま終る作者ではない

たぶん

第二話 変身

仮面ライダーユカイド

第二話

「千秋ちゃん、

ソレを渡して 早く!!」

千秋

「ソレってどれ!?! アッ
こッこれ?」

内田

「そうそう、ソレソレ!」

千秋

「けど変なカーテンが!?!」

さすが!! お利口さんな千秋
よく周りを見てますね内田
と千秋達の間をカーテンが
遮っている

内田

「いいから早く!!」

千秋

「届いてえッッ!!」

綺麗な放物線を描く事なく
ソレは地面を転がるがカー
テンの壁を越え内田の下へ

ディケイドライバーと
ライドブッカードそれが

バックルとケースの名前ら
しい内田が触れた瞬間に頭
に響いてきた

内田

「いくよッ!グロンギ」

自動で腰に装着されケース
からカードが飛び出し
挿入口へ

《カメンライド》

内田

「へっ変身!？」

バックルのサイドハンドル
を叩くと

《ディケド ユカイド》

オーラ状のカード十枚が内田を包み異形なる物と戦う戦士、仮面ライダーに変身

ユカイド？…アツ内田ユカだからかなと一人納得するユカイドに、グロンギの右ストレートが迫るが左手で叩き返したユカイド

ユカイド
「グロンギにはクウガ」

《カメンライド・クウガ》
《フィニッシュライド》
・クウガ《

古代の戦士クウガに変身し
必殺技を発動

ユカイド
「まとめてえ…
オツリヤアア！！」

軽く助走をつけ地面を蹴り

グロンギに封印エネルギー
を込めたキックを放つ

グロンギ

「ゴラゲパ、バンザ？」

ユカイド

「ユカイドザジヨ

ゴドゲデゴベなんて」

グロンギ

「グガガ…」

グロンギの胸に紋章が浮か
び爆発する、後方のグロン
ギ達も爆発に巻き込まれて
一掃される

ユカイド

「ボセゼゴパシザベ、

チアキチャン？」

千秋

「…何を言ってるのか
私には分からないよ？」

ユカイド

「ああ今のは、これで

「終りだねって言ったの」

千秋

「アイツ達の

言葉がわかるのか!？」

ユカイド

「グロング語ならね、」

意味不明だ顔の千秋、どう説明すれば良いのか困った内田の二人にすっかり忘れられた夏奈の声が届く

夏奈

「助けてえ、つうか降ろせこの変態ヤロー!」

イマジン

「誰が変態だ!？
ダレがあ!!」

夏奈

「オマエしか居ないだろ？
私の大事な初めてが
コレなんて!!」

イマジン

「テメエの貧相な

身体なんか興味ネエ！
いや身体は要るが！」

夏奈

「何だと！？コレでもね
夏奈ってスゴイねえとか
言われるんだぞ！！」

崩れかけたビルを登る怪人
その肩に夏奈を担いでいる
怪人は上半身下半身が別れ
ていて、暴れる夏奈に凄く
苦勞しているみたいだ

千秋

「あれは漫才か？
楽しそうだな、」

ユカイド

「そうだねえ、」

千秋

「初めてって何の事だ？」

ユカイド

「えッそれは、その…
うんと…アレだよ、
そうアレなんだよ””」

千秋

「そうかアレか…」

（アレってなんだ？）」

ユカイド

「とにかく夏奈ちゃんを
助けないと！！」

《カメンライド

・デノオウ》

《フィニッシュライド

・デノオウ》

仮面ライダーなのにバイク
じゃなくて列車に乗ってる
電王に姿を変える

ユカイド

「私の必殺技パート1

いっくよう〜！！！！」

ライドブッカードを剣に変え
エネルギーを剣先へ集めて
上段から一気に振り下ろす
とエネルギーの刃がまるで
イメージをロックオンした
かの様に追尾、そして
その身体を貫き通した

イマジン

「不意打ちは正義の……
ヒーローとしてダッ……」

身体を貫かれたイマジンは
完全に砂へと化すと同時に
夏奈の落下が始まった

千秋

「かつ夏奈アッー!?!?!?」

夏奈

「ッ千秋、春香ゴメンね……
（最後のプリン食べたのは
私……なんてこんな時に）
アイツの顔が浮かぶだろ？」

「……………」

第二話 変身（後書き）

次回おじいちゃん役登場？
謎のオッサンも登場かな？

作者です、1話から12話
まで更なる修正を
開始しました

2010年1月21日

現在

第三話 墜落 別世界（前書き）

作者です、今回1・2話より

ちよっち長いです

本当ならコレを含めて

第一話の予定でした

前回は書きで書きましたが
鳴滝キヤラは三話登場せず

ゴメンなさい

おじいちゃんキヤラは

登場します

第三話 墜落 別世界

仮面ライダーユカイド

第三話

「……なんでアイツが……
……けどーもう……ッ」

「大丈夫か？…夏奈」

夏奈

「つわけないだろう…
落ちてんじゃん私さ…」

「落ちてる誰が？」

夏奈

「私だよ！（つてか初めて
名前で呼んでくれた＼）」

「夏奈ッ夏奈ッ！？」

カナッ、カナアア！！」

夏奈

「ちょッ耳元で

大声出すなッて！！＼」

ガバァッと眼を開けると、

そこには大粒の涙を流しながら抱き着いて何度も何度もいつもバカにしている姉の名前を呼び続ける千秋と既に変身を解いた内田が、満面の笑顔を二人に向けていた

夏奈

「あ…あれ私なんで？」

内田

「実はあの時…」

無慈悲に地面へ世界の法則の基に落下する夏奈そしてその事実千秋は取り乱す

ユカイド

「大丈夫、私に任せて！
千秋ちゃん、」

《カメンライド

・ファイズ》

《フォームライド

・アクセル》

進化した人類オルフェノク

と戦う、メカニカルな仮面ライダー、ファイズに姿を変えて更に装甲が開き超高速形態にフォームチェンジ

ユカイド

「形態維持限界は35秒、

起動限界は10秒だから

うん余裕だね!!」

ユカイド

「スゥハッ!!」

千秋

「ッファッ!?あれ内田?」

突風が吹き隣に居るはずの内田が消え慌て夏奈の方を見るが緑の煙に隠れみえない、だから千秋は夏奈の下へ駆ける、怖くないと言ったら嘘になる…本当は春香と同じくらい、いやそれは語弊が多少あるが大好きな事に変わりはないのだから

さて、時間を少し巻き戻し

スローで観て貰いましょう

起動すると同時疾駆し跳躍
落ちる夏奈を抱き留め一回
転して着地したユカイドが
顔を上げるとそこには緑の
蛹の様な怪人…ワーム達が
二人を囲んでいた

ユカイド

「ワームか！…アクセルは
使っちゃったから…

ここは、コレッ！」

《カメンライド・カブト》

《アタックライド

・クロックアップ》

人間に擬態、地球を侵略し
ようとするワームと戦う同
じくメカニカルな仮面ライ
ダー、カブトに姿を変える
と同時タキオン粒子を纏い
世界は再度ほぼ完全に時が
止まる

ユカイド

「夏奈ちゃんに手は
出させないよ!!
コレでも喰らえッ!!」

《アタックライド

・カブトクナイガン》

銃・斧・刃として使用できる武器、カブトクナイガン（銃）で攻撃、クロツクアッ
プできないワーム（蛹）は緑の煙と化す、しかし既に脱皮したワーム（成虫）はユカイドの攻撃から逃れていた

ワームABC

「（ニタアア）」

ユカイド

「余裕って顔してるけど!

ワームの貴方達に…

勝ち目はないッ!!」

ワームABC

「（!?!?!?!?!）」

右手人差し指を天に翳して

ユカイド

「主人公に勝る敵役は
居ないッ居るとしたら
それは、ヒロインだけ
だってね、」

ユカイド

「ゴドゲデゴベ

…なんて」

《フィニッシュライド

・カブト》

タキオン粒子を右足に集め
跳躍、ワーム達に向かつて
回し蹴りを放って粒子の波
動がワーム達を煙に変えた

夏奈

「そうだったのか、
全然、覚えてない…」

内田

「うんッ助けた時には夏奈ちゃん気を失ってたから」

内田

「でもあの時の千秋ちゃんかぁいいかったよう」

千秋

「ッウルサイ！あれはただその……っ心配したから……—うう」

夏奈

「ッお持ちち

帰りいゝ””

」

千秋

「ヒイッ内田助ける、いや助けてください！！」

しかし内田は二人の姉妹の微笑ましい光景をニコニコ見ているだけだ……決して夏奈が千秋を舌の様な腕で搦め捕り本物の舌で舐め回してなどいない筈……たぶん

そんな事をしてる間に南家に辿り着いた内田一行

夏奈

「やっと

着いたアアッ〜!!」

千秋

「……………」

千秋は既に屍のようだ

内田

「お家が無事で、

良かったね千秋ちゃん」

千秋

「…………ああそうだな…………」

良かった良かった生きてたんだね千秋ここに至るまでにいろいろな困難や天然…バカ野郎な事が起きたのが長くなるのでバツサリと行かせて貰う

夏奈

「ああ”ッしまった!?”」

千秋

「どうした？」

夏奈

「実は家に…」

タケルが居るんだ！」

千秋

「な”ッ何故タケルを
家に入れたあ！？」

夏奈

「だって春香が、居留守
なんていけませんって」

内田

「タケルって誰？」

千秋

「そっそうか春香姉さまが
姉さまには懇切丁寧に…
タケルが如何に迷惑な、
おじさんかを教えて差し
上げなければいけないな
絶対ッ必ず！！」

内田

「ねえ！タケルおじさん
ってダレなのお？」

夏奈

「とにかく入るぞ！」

千秋

「ああ！！！」

内田

「ひどいッ！！」

夏奈が玄関のドアを開ける
前にドアが開いた

夏奈

「ツァいたっ！？」

タケル

「あれっ夏奈ちゃん千秋
ちゃん、それと…内田
ちゃんだっけ？お帰り
そしていらっしやい」

夏奈

「おいッタケル、ドアを開
ける前に人が居ないか確認

しろ…ううデコ痛い、」

内田

「なんで私の名前
知ってるんですか？」

タケル

「ゴメンゴメン
さあ上がつて、」

タケル・夏奈・千秋の順で
家に入っていた

内田

「ホントにひどいッッ！！」

三人をリビングに招き入れ
た迷惑おじさんタケル！！
そこは…シアタールームに
変貌していた

タケル

「みんなで映画でも
観ようと思ってね！」

千秋

「そっそうか、

（幾らするんだ？夏奈）」

夏奈

「（私が知るわけ
ないだろう？）」

内田

「何の映画ですか？」

タケル

「劇場版先生と
二宮君だよ」

内田

「ホントですか！？
私、観たかつたんです！！」

千秋

「あの変なドラマ
映画になっていたのか」

夏奈

「私も観たい！」

タケル

「因みに正式タイトルは、
「先生と二宮君サヨナラ先
生」死んだハズの先生は生

きていた！？しかし悪の組織

「恐逝威陰会」によつて先生は改造人間に、そして二宮君は組織に記憶を奪われていた！？恐陰威陰会の目的は、そして二人は結ばれるのか！？怒濤の展開そしてラスト30分衝撃の結末……

「二宮君ッ！先生え！二人の必殺技を受けてみる、愛と微笑みと慈しみのラァアブ&ラァアアイク！！」
「……ハアハア……フウ」

千秋

「……長い長すぎる！なんだそれは！？——2時間ドラマも尻尾巻いて逃げ出すぞ！？」

内田

「面白そう！」

夏奈

「早く観よう！！」

タケル

「分かったから落ち着いて……えっとコレかな？」

タケルが映写機を操作する

が何も起こらない

夏奈

「なんだ観れないのか？」

徐にスクリーンに近づいた

夏奈がそれを叩く

千秋

「スクリーンを叩いても
意味ないだろう？」

しかしスクリーンが光に包
まれるとそこには、桜舞う
学校と奇妙な形の電車の絵
が浮かび上がった

千秋

「なんだコレは？」

タケル

「おっかしいなあ、」

夏奈

「私のせいだよねえ
……ゴメンッ、」

その時ただ一人だけ内田は
一体何が起きているのかを
理解していた

内田

「世界が
変わっちゃった、
」

第三話 墜落 別世界（後書き）

「デイケイドは私が
倒す！！覚悟したまへ」

「バルサミコすう」

「大変や、パス
失くなってもうた」

「皆さん、
落ち着いて下さい」

「ああッもう！私が倒す、
答えは聞いてない！！」

次回仮面ライダーユカイド

陵王学園！？らき ライナー
らき 王、私参上ッ！！

作者です、ここで問題です
内田ユカの決め台詞は
グロング語ですが
何て言ってるでしょう

第四話 私達ッ参上!! (前書き)

「さあて、今回の

らき 王はっ違うか!？」

「つかさ…アンタねえ、」

「三年ッU組」

内田せんせえゝ!!」

「ふっふんがゝ〃〃」

「マジメに

始めなさいよッッ!!!!!」

「あつ曖昧3センチ」

「内田、乗らなくていい」

「バカ野郎はステータスだ
希少価値だあー!!」

「ばッバカ野郎ばっか、」

第四話 私達ッ参上!!

仮面ライダーユカイド

「世界が…
変わっちゃった、」

夏奈

「は、何言ってるんの内田」

夏奈

「世界が変わる
わけないじゃん？」

内田と自分の額に手を沿え
熱を測る夏奈

夏奈

「熱無し、天然ならともか
く電波はダメだ内田？」

千秋

「夏奈ア、コッチ
向いてッ（ニコニコ）」

夏奈

「っ何だい千秋””」

今まで夏奈だけに決して見
せた事のない無邪気な笑顔
で甘えてきた千秋に夏奈の
頬が緩む

夏奈

「〃〃どうしたの
千あきツぶフあ”！！」

千秋

「三途の川で顔を洗って
来いダメバカ野郎ツ！！」

千秋のフィニッシュライド
伝家の宝刀「ふじおか投げ」
が炸裂して夏奈をリビング
の床にノックダウンさせる

内田

「だッダイジョブ！？
夏奈ちゃんッ」

千秋

「内田ッそんなバカ野郎は
放っておけ、ソレより
此処はどんな世界だ？」

夏奈

「二度と千秋の前では
ボケない！命が幾つ
あっても足りない！！」

早い復活だな、まあ千秋の
お怒りも尤もだぞ…夏奈？
三人が家にたどり着く間に
内田が変身した事や謎の男
の話を生懸命に説明した
のにソレはないな

内田

「えとツイマジンと戦う
電王の世界だと思う」

夏奈

「変態ヤローの世界か、
嫌だなあゝ、」

千秋

「なあ内田さつきから
外が騒がしくないか？」

内田

「イマジンかもしれない！？
二人とも此所において
私が見てくるよ！」

夏奈

「分かった千秋は私が護るから内田も気をつける」

内田

「うんッ千秋ちゃんを宜しくね、夏奈ちゃん」

千秋を夏奈に任せて内田は玄関のドアを勢いをつけて開け放つ

「今日抜き打ちだったさ」

「嘘ッマジかっとうしょ？私、勉強してないって」

「ヤベッ体操服忘れた!？」

「ご愁傷様。」

「なあ今日帰りさ、――…」

「ウン、いいよッ」

「ほら急げ、チャイム鳴るぞー!」

「ハアアーい!」

内田

「何コレ学校？」

学校の廊下そのものだった

第四話

そして内田の方へ全力疾走して来たオバツ…金髪女性
はかなり慌てているみたい

黒井

「どないしょ、何で
全部失くなるんや？」

黒井

「校長に何て説明すれば
ええんや〜!？」

内田

「アあの、ちよつと！」

黒井

「何や自分ウチは今、
急いでるんやけど！」

内田

「（うわぁ近くで
見ると凄く美人だ！！）」

黒井

「しゃッ車掌さん！？
今の聞いてたか？」

内田

「へッいえ全然、全くコレ
ぼっちも聞いてまへん」

黒井

「そうかーならええんや
ほなウチは行くで教師が
遅刻はまずいさかい！」

嵐の様に去っていった黒井
先生の後からコレまた全力
疾走の今度はーお子さっ…
青髪アホ毛の女の子が内田
の方へアレッこのスピード
だと多分

こなた

「って、こなたは

急に止まらないッッ!？」

内田

「ええ、えッッ!?!？」

ドッカアアッーン

こなた

「ちよっ何てイベント!？
フラグ立ったかなあ？」

内田

「いッッたあーっい!!」

こなた

「あれっ車掌さんじゃん、
どつたの？」

内田

「し車掌さんッ?どうして
みんな私の事、車掌さん
てっ呼ぶんだろう？」

説明しよう!内田が玄関を
出た瞬間から服が誰が見て
も車掌さんだと思っ服装に

変わっていたのだ以上説明
終わり！

こなた

「アッ落としたよーはい」

内田

「ふえッ…ありがとう」

激突した拍子にユカイドラ
イバーとライドブツカーを
落としていたらしくアホ毛
の娘が手でぽんぽんと埃を
払って渡してくれた

こなた

「んと…まつまさか貴女
デイクイド！？此処で遭った
が百年なんとやらだ！」

こなた

「変身ッッ！！」

《こなソードフォーム》

♪テッテテッテッテッテテ
ンガシャガシャテッテテッ
テッテッテテンパカアテッ
テテッテッテッテテン♪

らき 王

「私、早速参上ツツ！！ディ
ケイド覚悟したまへ！！！」

こなたの腰に顕現したベル
トにケース状のライダーパ
スを触れさせると剣撃特化
型、らき 王・こなソード
フォームに変身！！

内田

「ふえ” ツまつ待つて！？」

らき 王

「問答無用！」

《フルチャージ》

らき 王

「私の必殺技ツツ！！
パートツワン！！」

らきガツシャーソードの剣
先にスターエネルギーを集
めーそしてユカイドが使用
した電王（ユカイド）の必殺
技パート１（第二話参照）を

放つ

内田

「くっ変身、」

《カメンライド

・ユカイド》

《アタックライド

・ウォール》

ユカイドに変身してカードをバツクルに挿入すると自身の前方に壁を出現させてらき 王の必殺技を止める

らき 王

「なッ」ずるい！だつたらコツチはつかさ頼んだよ」

らき 王（つかさ）

「こなちゃん！？」

つま待ってえッ」

《つかアックスフォーム》

♪テッテテッテッテッテ
ンガシャガシャテッテテッ
テッテッテッテッテッ
テッテテッテッテッテッ

♪

らき 王（つかさ）

「私の強さに

私が泣いた？」

《フルチャージ》

攻撃力と防御力に優れたつかアックスフォームに変身らきガッシャーアックスにスターエネルギーを集めてジャンプ、壁に振り下ろす

ズツガゴオオーンツ

壁は見事に崩れ去る

らき 王（つかさ）

「必殺つ大絶断！！」

らき 王

「つかさ？ソレは

出す前に言おうね！」

らき 王（つかさ）

「そんなのカンケーねえ！

なっなんちゃって””」

ユカイド

「調子が狂うなあ…」

らき 王

「よし！ここはみゆきさん

よろしく～（o^・・）b
」

らき 王（つかさ）

「バルサミコすう」

らき 王（かがみ）

「アンタ達ねえ！…、」

らき 王（みゆき）

「皆さん、

落ち着いて下さい。」

《みゆロッドフォーム》

♪ テッテテッテッテッテ
ンガシャガシャテッテテッ
テッテッテテンガツクルン
テッテテッテッテッテテン

♪

らき 王（みゆき）

「私に、みWikiられて
みますか？」

《フルチャージ》

スピードと水中戦に優れた
みゆロッドフォームに変身
らきガッツシャーロッドにス
ターエネルギーを集めて
ユカイドに投げ付ける

ユカイド

「ワアッ?!?!」

スターラインが腕に巻き付
き上空へ飛ばされロッドが
変形、亀甲状のスターエネ
ルギーの網スターキャスト
に身体を拘束されてしまう

らき 王（みゆき）

「いきます!」

必殺技らきライダーキック
を空中のユカイドに放った

《アタックライド

・リバーズ》

ユカイドにキックが当たった瞬間！——そのダメージは
らき 王に返されてしまう

らき 王（みゆき）
「ツツンぐう……」

受け身も取れず墜ちていく
らき 王とソレと対照的に
ユカイドは着地した

らき 王

「みつみゆきさあん！？！？」

らき 王（つかさ）
「いっやあああっ——！！」

らき 王（みゆき）
「——…ツン大丈夫ですよ？でも戦えそうに
ありま…せつん、」

らき 王（かがみ）
「みゆきっ…ああっもう！！
私がやる！！」

《かがガンフォーム》
♪ テッテテッテッテッテテ

ンガシャガシャテツテテツ
テゝテツテテンカカシャン
テツテテツテゝテツテテン

♪

らき 王（かがみ）

「お前を倒すッ！」

答えは聞いてなッい!!」

《フルチャージ》

銃撃特化型のらき 王かが
ガンフォームに姿を変える
と同時怒りと共にスターエ
ネルギーをらきガツシャー

ガンに集める

らき 王（かがみ）

「ウワアアアッッ!!」

いっけえええーッ!!!!!!」

ユカイド

「ハアハアっーくう…」

ここまでの連戦で疲弊した
ユカイドは動く事が出来ず
らき 王の必殺技ワールド
ショットが目前に迫る

ユカイド

「もう、…ダメだ、」

ドグワツアーン

らき 王（かがみ）

「やった……な…！！」

「大丈夫か？ユカイド

いや、内田ユカ？」

ユカイドを守る様に立ち塞がっていたのは仮面ライダーディエンドだが胸にHのマークが刻まれていた

ディエツチ

「俺は仮面ライダー、

ディエツチ！またの名を

南春香を愛する男だ！！」

第四話 私達ッ参上!! (後書き)

「泉こなたの友人達は、
イマジンだ!!」

「俺は南春香を護る!
内田ユカ…きみは
この世界を護れ!!」

「みさおちゃんを
助けて、お願いッ!!」

「チケット・パスが無いと
らき ライナーは
運行出来ない、」

「時の砂は、俺の物だ!!」

「お前の好きには、
させないッ変身ッ!!」

「コレが私達とユカイドの
必殺技ッファイナル
バージョンだあ!!」

次回仮面ライダーユカイド

彼の名はH、奪われた過去
現在・未来、ダイヤ…

遂に登場！？

F・フォームライド！！

&

F・フィニッシュライド！！

次回も変身（ハッピー）！！
ユカイド

さて今回は内田ユカの決め
台詞を出題したけども

「ゴドゲデゴベー！！」

なんて

でしたよね、ここで正解！

発表しません

（ふざけんな！教えるよ！！）

うるさいなあ（ 〃、ゝ、 〃 ）

そんな事を言う人には
教えない

（どうしても知りたい）
（教えて下さい）

ダイジョブみんなの
みWikiさんだよ！

第五話 クライマックスで超ハッピーじゃん!! らき 王編 完(前書き)

作者です、かがみ達は何故
イマジンが良く分からない
事でしょうね？

時の砂？魔女？ボス？
みさおの願い事が何故
チケット・パスを奪う事に
なるのか？

本編を観ても分からない事
でしょう

分かった人は素直に凄い

ココからネタバレパーティ

始まり

始まり

始まり

魔女に関しては物語が
続けば分かると思います

時の砂はライナーの動力源
であり各チケットパスの素
です

ココまでは何とか分かると
思います

みさおの正しい願い事は、
「テストを受けたくない」

ボスは見事に叶えます

陵王学園の授業は全て
チケットパスを
使います

詰まり全校生徒のチケット
パスが無ければテストは
疎か授業も出来ない

黒井先生が慌てていたのは
このためです、では
何故スペルキアは願い事を
律儀に叶えたか？

スペルキア自身が時の砂が
欲しいからです

イマジンは基本的に実体が
ありません

人に憑き願いを叶える事で
実体及び過去に行く事が
できます

←はオリジナル

さらに時の砂を自身に取り
込めば自分自身が時の列車
になる事ができます

スペルキアにとって

みさおの願いは

好都合だったのです

最後にかがみ達ですが

スペルキアは自分の敵

らき 王を過去から消す為
こなたとつかさの出会い
を無かった事にしました、

しかし四人の絆はソレだけ
では断ち切れませんでした

最初の出会いがずれた事で
こなた以外の三人は定まっ
ていた未来に空白が出来た
ため現在の存在（こなたと
出会った事になっている）
が不安定になりイマジニ化

しました

以上ネタバレ終り

第五話 クライマックスで超ハッピーじゃん!! らき 王編 完

仮面ライダーユカイド

「南春香を

愛する男、保坂だ!」

ディエツチ

「らき 王…いや泉こなた
正義の味方が聞いて呆れる
ソレで正義を語るのか?」

らき 王

「な”ッなに、」

らき 王(つかさ)

「こなちゃん、まずいよ
ディエンドまで出て
来ちゃった!?!」

ユカイド

「ほさかさん?春香さんの
センパイの保坂さん?」

ディエツチ

「ああそうだ、保坂だ!
内田ユカ…ライダーの
差をらき 王に

見せてやろう!!」

ユカイド

「はっはいッ!!」

らき 王の前に立ちはだかるユカイドとディエツチ!!

らき 王

「私に任せたまへ」

《こなソードフォーム》

♪ テッテッテッテッテッ
ンガシャガシャテッテッ
テッテッテンパカアテッ
テッテッテッテッ

らき 王

「私!再びッ参上おお!!」

らき ガッシャーソードを構え、らき 王は考え無しでこちらに向かって来る

ユカイド

「きつ来ましたよ!?
保坂さん!!」

ディエツチ

「フツ問題ない、なぜなら俺と君でダブルライダーだからな!!」

ユカイド

「保坂さん」(カッコイイ春香さんと付き合ってるのかなあ?)

《K A M E M R I D E D E N ・ O 》

電王

「本物の俺! 参上ッッ!!」

らき 王

「ウソオツ! ?」

そんなのアリイッ! ?! ?」

50口径の銃型の変身ツール
ディエッチドライバー横の
カード挿入口にカードを挿
入し引き金を引くと銃口か
ら仮面ライダー電王ソード
フォームが現れた

電王

「ウリヤットオリヤア
オリヤリヤー!!!!!!」

らき 王

「ちよつまッワッてつて
ヒイ私よりムチャクチャ
だあゝゝ」

隙だらけの攻撃だがソレを
補うほどの速度で次々と刃
が襲いらき 王は圧倒され

防戦一方だ

ディエツチ

「さて終りにしようか？」

《FINISH RIDE DEN・O》

電王

「俺の…必殺技!!
幻のパート4ッ!!!!!!」

らき 王

「う”う、かぁなありッ
見たいッッ!?!?!」

《Full Charge》

電王

「いくぜいくぜいくぜいく
ぜええーっと見せ掛けて
ユカイドバァーシヨン!!」

パート1 R i D A S H っ!!」

デンガツシャーソードへと
フリーエネルギーを集めて
上段に構え一気に振り下ろ
しオーラソードが真っ直ぐ

らき 王に向かう

らき 王

「わ私だつてえ、

負けないよー!!」

《フルチャージ》

らき 王

「私の必殺技アア!パート
ツーだつりやゝアツ!!」

電王に向けてらきガツシャ
ーソードの先端を垂直に構
え駆けるがオーラソードと
激突!! : しなかった

らき 王

「な”なんで!?”」

電王

「言つた筈だぜ!

パート1 RIDASH っ てな!!」

消えていたオーラソードが

らき 王の10センチ手前に

現れベルトを打つ

らき 王

「そんな、私が

負けるなんて……」

変身が解けその場に

へたり込む…こなた

電王

「じゃあなっカメと賭けの

続きをしねーと!…筋は

良かったぜ!らき 王」

徐々に消えていく…電王に

こなたは顔を上げ

「次は…負けないよ!

絶対強くなるからーその

時まで負けないですよ?

約束だからね」

「約束かー待ってるぜ！
ただ！その時は俺も……
かぁなあり強くなってる
けどな！」

つかの間に交わされた約束
さらば、電王……

ユカイド

「私……何もしてない、」

ディエツチ

「内田ユカ、君が居たから
俺は戦えた、君が彼女より
も俺を強くしてくれた！！
言っただけだー内田ユカと
俺でダブルライダーだと」

ユカイド

「保坂さん」 （ダメだよ
保坂さんは春香さんの彼氏
なんだから……それに年う、
年上の王子様！はうツ」
お持ち帰り……なんて」

一方その頃、南家では

タケル

「何なんだ！お前は？」

「俺？さあ忘れたな」

タケル

「ッざける！！」

部屋はめちゃくちゃに破壊
されて謎のイマジンが気を
失った夏奈と千秋を抱えて

タケルと対峙する

タケル

「夏奈と千秋を放せ！！」

二人はまだ子供だぞッ！！」

「嫌だね、願いを叶える
為には必要なんでね！」

「おっと、時間なんでね、
コレで失礼ッ……——」

イマジンがタケルの顔に手
を翳すとタケルの意識は…

そこで途切れてしまう

「時間厳守ッ時間厳守ッと
お待たせ連れて来たぜ、
世界の魔女さん……―」

時の列車の車内にフードが
付いた黒のコートを羽織つ
た美女、組んだ足から覗く
太股はイマジンから見ても

魅力的だ

「相変わらず
妖艶だな、魔女さん？」

世界の魔女
「イマジンに褒められ
てもねえ？クスクス」

世界の魔女
「スぺルキア、二人は？」

スぺルキア
「ココだ、」

イマジン、スペルキアが手を振ると夏奈と千秋が横たわった状態で世界の魔女の前に現れる

世界の魔女

「貴方にしては上出来よ」

スペルキア

「望みは叶った筈だ
報酬を渡して貰おう！」

世界の魔女

「スペルキア…
焦らないの、」

世界の魔女が手を開くと手のひらから虹色に光る時の砂が溢れ出る

スペルキア

「ソレが時の砂ッ、ふふっ
はっハハハッくくッ遂に
過去を現在をそしてエエ
未イ来ッアアいをお！！」

スペルキアが時の砂に手を伸ばすと魔女は自分の手を

引ッ込める

スペルキア

「ンッ何のつもりだあ？」

世界の魔女

「もう一つ頼まれてくれないかしらあ？ふふふっ
お願いしまゝす」

スペルキア

「魔女の頼み事ほど、
面倒な物はないなあ？」

世界の魔女

「ユカイドを倒して
欲しいの…貴方なら
楽勝でしょう？」

スペルキア

「なぜユカイドに拘る？
ソレが解らないんでね」

世界の魔女

「時の砂は渡すのよ、
貴方が彼女を倒そうが
倒さまいと今すぐにね」

世界の魔女

「口約束で

構わない訳よ……」

口角だけを器用に吊り上げ
無言で微笑を浮かべる魔女

スperlキア

「……………わかった、」

世界の魔女

「ありがとッ、

さあ受け取りなさい」

世界の魔女

「チケツト・パスを時の

砂に還元するのは私でも

大変なんだから！！

大事に使いなさい……」

サアアーと魔女からスperl
キアへ時の砂が溶けてゆく

世界の魔女

「昨日に行きなさい

ユカイドは必ず現れる」

スperlキア

「昨日か？まあ構わない
時の力を試すのには
丁度いいかもしれない」

時の列車から下車して行く
スperlキアを見送りながら
世界の魔女は誰もがはつと
する微笑を浮かべる

世界の魔女

「チケットパスが無ければ
時の列車は運行出来ない
けど…彼女なら恐らくは
持っているでしょうね？
フリーパスを——勝てる
かしらねえ？ふふっフー

堪え切れずに口許を抑えな
がら笑い声を漏らす魔女と
眠る二人を連れ時の列車は
光の中へと走り出す

第五話

陵王学園・保健室

「そうか、命に別状は無し
直ぐにそっちに行くーは
ー君に任せるーの心配は
いらないーそれじゃ」

保坂

「直ぐに別世界に行く事になつた、南春香と妹達は俺達が必ず助けるからこの世界を君は護れ！
いいな？」

内田

「千秋ちゃん夏奈ちゃん
春香さん——ッ——」

保坂

「大丈夫ッ俺と彼で
ダブルライダーだからな
信じてくれ！」

内田

「〃〃保坂さん…はい！
信じます、こっちは私に
任せてください！！〃〃」

くしゃくしゃと頭を撫でられて保健室を出ていく彼をぽーっと見詰めていた内田だったが――気を取り直して

内田

「そ〃それで日下部さんに憑いたイマジンがチケットとパスを盗んだんですね？ええと……峰岸さん？」

あやの

「その通りだよ！それと

あやのでいいよ

ユカちゃん。」

内田は今朝の廊下で黒井先生が言っていた無くなった物：チケットとパスの行くへを知る人物、日下部みさおが眠る保健室にあやのが助けを求めた彼女、あなたと一緒に事件を調べている既に誤解は解けたみたいだ

こなた

「イマジンに憑かれた事に
気付かずに願い事紛いの
望みを独り言で口にする
とはねえ？」

こなた（かがみ）

「呆れた、テストの答案
用紙を盗うだなんて…
ハアッ日下部、」

あやの

「でも思い止まって帰ろう
とした時にイマジンが勝手に
願い事を叶えちゃったの
よね？みさちゃんが！！
全部悪い訳じゃないわ！！」

こなた（かがみ）

「う””わかってるわよ
日下部はバカだけど悪い
事はしないって！！」

こなた（みゆき）

「其れにしても困りました
チケット・パスが無いと
らき ライナーは勿論…
学園も運営不能ですね」

こなた（つかさ）

「どんだけ〜!？」

こなた

「私のライダーパスも
反応無しだし…」

沈黙が場を支配するその間
も眠るみさおの身体は砂と
化していく

内田

「あ、あのうもしかしたら
コレで行けるかも？」

内田が内ポケットから取り
出したのはライダーパスと
並ぶ超が付くレアのフリー
パスだった……――

昨日の陵王学園・中庭

「……………
……………むう——暇だ……」

一人寂しく突っ立っている
イマジンことスペルキア…
実にシニールである

カシヤカシヤカシヤカシヤ
カシヤカシヤカシヤカシヤ

カシヤカシヤカシヤカシヤ
カシヤカシヤカシヤカシヤ

パアッアアアアアアーン

スペルキア

「ツらき ライナーだと！？
ばバ力なあ！？チケットも
パスも無しでどうやって
昨日に過去に来れる！？」

らき ライナー機関室

四人の少女が必死の形相で
自転車？を漕いで列車へと
エネルギーを送る

つかさ

「お姉ちゃんッ
疲れたよ、ふえ〜ん！！」

かがみ

「がっ頑張んなさいッて
クッアアアアーッ！！」

みゆき

「かがみさんには良い
ダイエットですね？」

かがみ

「（黒みゆきさんッ！？）」

あやの

「みさちゃんと学園の皆の
為にガンバって！柊ちゃん
私も頑張るから！！」

ガシャガシャガシャガシャ

ガシャガシャガシャガシャ

ガシャガシャガシャガシャ

こなた

「スぺルキアッ！！

待たせたようだね？」

内田

「チケットとパスを返して
みんなも元に戻して！！
お願いッします！！！」

らき ライナーから飛び降
りた内田とこなたの二人は
スぺルキアと対峙する

スぺルキア

「嫌だねえ？時の砂はあ
もう俺のモノなんでね」

こなた

「じゃあ仕方ないか？
ねえ！うつちー！！」

内田

「そうだね、こなたちゃん
（ん？ちゃん付け…小学
コホンー黙ってよ、）」

こなた

「うつちー今、失礼な事を
考えてたでしょ！！」

内田

「ふえッそ、そんな事
な”ないよう！？」

こなた

「まっ良いけどねえ、
うつちーだしッ！！」

スperlキア

「——…長げーな！」

こなた

「あ”ー忘れてた、」

内田

「あれ、居たんだ？」

スぺルキア

「ひどいッボスキャラ

なのに、この扱いは!!」

スぺルキア

「フン、時の砂がある限り

らき 王だろつと過去・

現在・未来を掌握した

俺は倒せないからな!」

内田

「この世界を大切な時間を

壊そうとする…貴方をッ

私達は絶対に倒す!!」

こなた

「それじゃ…うつちー

いッくよ…!!!!!!」

内田

「うんッこなたちゃん!!

変ん身ッ!!」

こなた

「私、変身ッ!」

《カメンライド

ユカイド》

《こなソードフォーム》

♪ テッテッテッテッテッテ
ンガシャガシャテッテテッ
テッテッテテンパカアテッ
テテッテッテッテテン♪

らき 王

「私ッ三度目の

参上おお!!」

ユカイド

「わっ私も、参上ッ!？」

ケースから二枚のカードが
飛び出してユカイドの手に

らき 王

「ソレは？」

ユカイド

「こなたちゃん

ビックリしないでね？」

《ファイナル

フォームライド

ラキ オウ》

ガシャガシャガシャガシャ

ガシャガシャガシャガシャ

ガシャガシャガシャガシャ

らき 王

「なに”、この音！?!?」

パアッアアアアアーン

らき 王

「ちよっマジかぁーッッ

ひいッやあアアー!?!?」

らき 王を追い掛ける列車

ハッピー ライナー!!!!

どゆこと…うっちー?

ユカイド

「逃げちゃダメだよ、

こなたちゃん!!!!!!」

らき 王

「無茶つ言つなよおお!!
ツて、…あべちつ!?!?!」

《ハッピー ライナー

フォーム》

♪ テッテテッテッテッテ
ンガッガコンテッテッテ
ッテッテテンガックルンテ
ッテテッテッテッテテンカ
カシヤンテッテテッテッテ
ッテテンパカアテッテテッ
テッテッテテンパアッンテ
ッテテッテッテッテテン♪

らき 王HL

「私達ツクライマックスで
超おお参上ッ!!!!」

らき 王HL(つかさ)
「すッごおおーい!」

らき 王HL(かがみ)
「あ、あれっ

らき ライナーは？」

らき 王HL(みゆき)
「コレが内田さんの
力なんですね？」

時の列車らき ライナーが

ハッピー ライナーに変形
更にらき 王と融合変身！

スペルキア

「す姿が変わったぐらいで
全ての時を掌握支配した
俺には勝てない！！」

ユカイド

「それは、どうかなあ？」

《ファイナル

フィニッシュライド

ラキ オウ》

ガシャガシャガシャガシャ
ガシャガシャガシャガシャ

ユカイド

「レールに乗って、

こなたちゃん！！」

らき 王HL

「オツケイ

了解しやした」

目の前に現れた二つの
レールに飛び乗る二人

ユカイド

「お前の好きには
させないようー！」

スperlキア

「お前達は俺を倒せな
あなたは黙りなさい！
団長命令よ！！！！」

ユカイド・らき 王HL

「私達の必殺技ああ！！
ファイナルフィニッシュ
バアーJohnson！！！！」

レールの上を駆ける二人は
ハピ ガッシャーとライド
ブッカーソードを共に構え

らき 王HL

「私達の剣が！
光って叫ぶうッ！！」

ユカイド

「過去、現在、輝く明日を
…掴めと煌めく！！！」

ユカイド・らき 王HL

「シャイニング ハッピー

ブレイカー ブレード！
面ツツ面ンン…！！！！
メエエツーン！！！！！！」

ドオオオオーーーーーッ

陵王学園・映画写真部

因みに南家です

「それじゃ
お別れ…だね」

こなた（つかさ）
「さみしいね、
お姉ちゃん！」

こなた（かがみ）

「べ別にユカと」

さよならだからって”

こなた（みゆき）

「道中のご無事を

お祈りします。」

こなた

「時の砂を取り戻しても

ダイヤが直つても未だに
イマジンな三人でした」

内田

「事件を覚えてるのは

結局…私達五人だけ？」

こなた（かがみ）

「日下部と峰岸も全然
覚えてないってさ」

こなた

「だったら良いんじゃない？

悪い事を覚えていても
仕方ないしさ！！」

内田

「――…そうだね、」

こなた（つかさ）

「マジ、ハンパねえ！」

こなた（かがみ）

「つかさ…はあ、」

こなた

「良い事もあつたしね〜」

内田

「…良い事？」

こなた

「だってかがみと何時も
一緒に過ごせるんじゃない
うれしいぐ（ω）」

こなた（かがみ）

「ええつと…こなた、

わ私も””その””」

こなた

「プッフウ照れた、ぷぷつ
かがみん萌え（o^ω^）b」

ゴンッ

こなた（かがみ）

「殴るけど良いよね？」

答えは聞いてない！！

（私も痛いのが忘れてた）

こなた

「既に殴ってんじゃん」
「かがみん強く暴く！」

こなた（かがみ）

「あゝ あんゝ」

こなた

「ひアツみつみゆきさん
助けてグスツ、エグツ」

内田

「アハハ、アツハハハ
可ッ笑し〜ハハハ！！」

こなた

「やっとなつたね！
うっちーは笑顔が
一番似合うよ！！」

内田

「ふえッーうんそうだね！
こなたちゃん（ニカッ）」

満天の笑顔を浮かべた時…
スクリーンが光り輝き天に
翳した右手人差し指に蝸が
止まっている絵に変わった

内田

「次はカブトの
世界だね！」

第五話 クライマックスで超ハッピーじゃん!! らき 王編 完(後書き)

「三年〜Hぐー

言わせねえよ!!」

「何とか間に合ったわね、

いい加減にしなさい!!

こなた! 大事な後書きの
コーナーなんだから!」

「ちっ、」

「ねえ、ちんちー

言わせねえよ!! つかさ?」

「ちえっ、」

「皆ちよつと聞いて

グロ^グンギ語で言えば

良いんじゃないかな?」

「おおっナイス! うっちー

さっすが主人公!!

話が分かるねえ!」

「エヘッ (*^ ^*)」

「いやダメだから!!」

「僕を殺すのですか？」

「来い！ヤシロゼクター」

「神は私なのよ」

梨花ちゃん、

「ごめんよ、梨花ちゃん、
僕は鷹野さんを
信じてあげたいんだ！」

「ヘッ俺達
部活メンバーが相手だ、
覚悟しやあがれええ！！」

「各個撃破ッ活路を開け」

「をっほっほ、
ワームなんて私の敵じゃ
ありませんわあ！！」

「私が相手しますんね！」

「梨花ちゃん、
君を助けに来た！！」

「運命を覆す力

を見せてみる、人の子よ!!」

「羽生これが私と、

貴女の変身よ!!」

次回仮面ライダーユカイド

百の夏を生きる魔女と

あなたを見つめるもの

突通し編

次回も変身（にぱにぱ）

ユカイド!!!!!!

第六話 魔女と女王（前書き）

少女は信じた少年は信じた
彼は信じた、彼女は信じた
少女は望んだ少年は望んだ
彼は望んだ、彼女は望んだ
少女は未来を少年は仲間を
彼は彼女を、彼女は過去を
少女は明日を少年は貴女を

彼は共に歩く事を
彼女は振り返る事を

そしてアナタは何を信じた
そしてアナタは何を望んだ

I s u k a ・ D e k a n a 著より抜粋

第六話 魔女と女王

仮面ライダーユカイド

第六話

『こちら燕、目標は営林署
教室内：遮断物は無し！！
繰り返す目標は——』

『こちら梟、視認した…
発砲許可を——』

『こちら雛、許可します！
やりなさい！！』

『あんな可愛い子が、…
命令とは言え嫌になるな
全く…遣るせない』

カチャ シュツカ

「んすうんつむにやむにや
千秋ちゃん、夏奈ちゃんが
作ったホットケーキ美味し
いねえ！（へへへ）あつシチュ
ーもある……ウツぐー！？！？
み水ツ春香さん水をお……」

ガバアッ

内田が目を覚ますと其処は

山の中だった

「あうあうっ

大丈夫なのですか？」

「あっはい大じょうぶ……
えと、怪人さん？」

雛見沢分校 営林署

『やったか？確認しろ！
それまで警戒を怠るな』

『こちら燕、ゼクターを
確認、女王は生きている
繰り返す女王は—』

『ちっ、ホッパー隊を前に
出せ！梟は安全圏まで
後退…燕は引き続き—』

分校・教室内

「僕を殺すのですか？
来い！ヤシロゼクター」

長い黒髪の少女…梨花が叫
ぶと機械のカブトムシが何
処からともなく現れて
その華奢な手に収まる

梨花

「オヤシロサマが言っていたのです、僕は百の夏を生きる魔女お前達ごとき敵じゃないのです!!」

《ヘンシン》

梨花の腰に巻かれたベルトにヤシロゼクター（カブト）を装着ヤシロノカネが梨花を包みマスクドフォームに

彼女を变身させた

リカブト

「キャストオフなのです」

《キャストオフ》

《チェンジリカビートル》

ゼクターの角を反対側に引き切るとヤシロノカネがパージ、ライダーフォームに移行する

『こちら雀、』

ホッパー隊突入する！」

教室内に量産型仮面ライダー、ホッパーが雪崩れ込む

リカブト

「オヤシロサマが言っていたのです、オリジナルに勝る量産型は居ないのでしょクロックアップ！」

《クロックアップ》

《1、2、3》

リカブト

「ライダーキック

なのです！！」

《ライダーキック》

クロックアップ発動、更にゼクターのスイッチを順番に押しホーンを引き戻し引き返すとタキオン粒子が右足に凝縮される、滑る様に

移動しホッパー達に蹴りを
叩き込むリカブト

『く、こちら雀！女王は
既に脱皮している！！
クロックアップの
許可を！？クツがは、――』

『こちら燕、雀チーム全滅
棕鳥チームが突入、』

『何をしているのっ！
貴方達はソレぐらい
自分で判断しなさい！！』

「落ち着いてくださいんね
女王は袋の鼠です…
長くは持ちません、」

「もういい私が出るわ、
付いて来なさい小此木」

「な”待つてください雛！？
ちッ―こちら駒鳥、雛と
前に出る援護しろ！』

『ドレイクとWホッパーに
連絡を！！通信を終る』

指揮車から軍服に身を包んだ男女、鷹野三四と小此木が降りてきた

鷹野

「神は…私、鷹野三四！
決して女狸の古手梨花—
貴女じゃない！！」

鷹野の頭上にザビーゼクターがジョウントして現れる

鷹野

「変身ッ」

《ヘンシン》

鷹野の手首に着けたライダーブレスにゼクターを装着ヤシロノカネが身を包んでマスクドフォームへと変身

古手神社境内

「大体分かった、この世界を破壊する気はねえて事だな、ユカちゃん」

現在、内田は分校部活メンバー（圭一・魅音・レナ・沙都子、そして何故か梨花以外には見えない筈の羽生を内田は知覚が可能！？）とそれぞれの状況を確認中…

レナ

「とにかく梨花ちゃんを助けに行かなきゃ！！」

魅音

「そうだね、仲間を助けなきゃ！私達じゃないよ」

沙都子

「をゝほほっほ、ワームなんて私のトラップで

イチコロですわー!!」

圭一

「へへッなんか燃えてきた鷹野さん覚悟しやがれってんだ!!俺達部活メンバーを敵に回した事を後悔させてやらああッッ!!!!!!」

羽生

「スゴイのです、――これなら運命を打ち破れるかも知れないのです!？」

内田

「うっん違うよ羽生ちゃんかもじゃなくて絶対だよ」

羽生

「ユカ…はいそうなのですぜったい!!ぜったい!!絶対なのですよーっ!!」

分校 教室内

「うっく、はぁハア——
う”∴くそゝなのです」

倒しても倒しても次々と現れるホッパー達に流石の梨花にも限界が近付いていた

「此所に居たのか、
梨花ちゃん!!」

リカブト

「誰ツードレイク!?
その声は富竹か……」

ドレイク

「そうだよ、僕だよ!
富竹だよ、梨花ちゃん」

教室の入口に立っていたのは仮面ライダー、ドレイク
富竹ジロウだった

リカブト

「富竹、そのネタは
ちよつと……みい」

ドレイク

「あれ、まずかったかい？
とりあえず本編を
続けよう梨花ちゃん！」

《ライダー

シューティング》

ドレイクゼクターを折り畳
みヒッチスロットルを引き
タキオン粒子を銃口に集め

発射

リカブト

「ツ、ーハアッ！」

横に飛び込んでなんとか回
避したリカブトは直ぐ様に
ゼクターのスイッチを押す

リカブト

「ライダーキック！！」

《ライダーキック》

机を踏み台にし跳躍！！ドレイク目掛け足を振り下ろす

ドレイク

「グハ、つまだまだあ！」

《ライダーキック》

ドレイク

「なんだとお！？！？」

再度放ったライダーキックでドレイクゼクターを粉々にし変身の解けた富竹の脇腹に蹴りを入れる

富竹

「っぐう！？……」

リカブト

「富竹、貴方は間違ってるのです。信じる事だけが……愛ではないのですよ、過つた道に行く相手を正す事もまた愛……なのですよー！？」

教室入口のドアを蹴破って
ホッパー第五隊が突入

リカブト
「ち、しつこいのです。」

ガシャンカラカラ…カッ—

窓ガラスを割った手榴弾が
閃光を放ち教室を包み込ん
でホッパー達は視界を
奪われる

梨花ちゃんッ

コ
ッ
チ
だ
！
！
！

第六話 魔女と女王（後書き）

「かがみです出番が終つて
少し、さみしいかな？」

「こなたです何言つてんのか
かがみん？私と一緒にだから
さみしくないでしょ？」

「みゆきですトイレやお風呂
に行かなくても、大丈夫と言われても
なかなか慣れなくて…」

「つかさです私達、お笑い担当ですつかさです
つかさですつかさです」

「それにかがみん、昨日は
”””キャツ”””」

「えッ！お姉ちゃん、まさか””ダメだよー！？」

「まあ！それは、””おめでとうございますー！」

「ッて、ちがう違うー！
”こなた！変な事”

「言わないでよ!?!?!」

「ひどい(ω)」

「一夜限りの女って事!?!」

「なあ夏奈、

何がダメなんだ?」

「まあなんだ…もう少し

大きくなったら

教えてあげるよ…」

「春香です、

私の出番まだ?!?!?!」

「一言も喋って

ないんだってヴァ」

次回仮面ライダーユカイド

突通し編・解 祭

次回も読むですよ！あう

第七話 貴女とアナタ リカフト編 完（前書き）

アナタは何を信じた
アナタは何を望んだ
アナタは何を願った
アナタは何を求めた
アナタは何を掴んだ
アナタは何を零した

私には―わからない
私には―判らない
私には―分らない
私には―解らない

只…一つだけ私は
知っている…
それは―だと

尚―これ以上の
修復は我等には不可能

I s u k a ・ D e k a n a 著より抜粋

第七話 貴女とアナタ リカブト編 完

仮面ライダーユカイド

第七話

「梨花ちゃん、

コッチだ！」

リカブト

「けっ圭ー！？？」

どうして！？！？」

リカブトが教室の窓に目を
向けると圭ーが飛び込んで

来た

圭ー

「梨花ちゃん俺達は全部
知ってる鷹野さんの事
東京の事そして羽生と
梨花ちゃんの事を！！」

リカブト

「ちがうのです全部、

悪い夢なのですよ！！」

違うわー！みんな居るッ…

魅音もレナも沙都子も！！
そして羽生とユカもだ！！

リカブト

「そんな、ユカが？圭一は
羽生が見えるのですか！？」

圭一

「いや見えない、けど！
ユカちゃんが伝えてくれた
羽生の声を…だから俺達を
信じてくれ梨花ちゃん！！」

圭一が右腕を伸ばし梨花が
変身を解く

梨花

「僕は、…」

圭一

「梨花ちゃん、どうして
俺達が此所に来たか…
分かるかな？」

梨花

「…分からないのです、」

圭一

「確かにユカちゃんから

話を聞いた時はさすがに
驚いたΣ（。□。）顔を
してたかもな、」

梨花

「みい、」

梨花の顔が曇り俯く

圭一

「だけど俺達は今、
梨花ちゃんを助けに
此所に来た！！」

圭一

「それはー梨花ちゃん、
仲間を信じるって事だ…
俺達が運命を打ち破る」

知ってるか？

奇跡ってのは

起きるのを待つんじゃない

起こすんだ、この手を掴め

掴むんだ！！梨花ちゃん！！

怖ず怖ず手を伸ばす―だが
あと1センチ届かない

圭一

「この手を掴め！！その先に
梨花ちゃんの…俺達が望む
明日が未来が待ってる！！」

仲間を…俺を信じろ！

この

前原圭一をなあ！！！！！！

梨花

「ッ、けい””いち””」

圭一の胸に飛び込んだ梨花
を圭一はしっかり抱き留め

圭一

「行こうッ梨花ちゃん、」

梨花

「はいなのです！」

教室の窓から外へ駆け出す

そこに――みんなが…魅音が
レナが沙都子が、…そして
羽生と内田が微笑みで
梨花を迎え入れる

圭一

「魅音、梨花ちゃんを
頼んだぜ！！！」

魅音

「おじさんに任せな！！！」

魅音が梨花ちゃんを

おんぶする

魅音

「各個撃破、
活路を開けえ！！！」

レナ

「はうう梨花ちゃんには、

指一本触れさせないよ！」

どーーーーーん

どおおーーーーん

ぴかつあーーーーん

レナの両腕から繰り出された通称・レナぱんに周りのホッパー達は緑の煙と化する

ホッパー隊

「バカな！？素手でライダーを倒すだと！？雛見沢村の子供は化け物か？！？」

沙都子

「をっほっほ、レナさんの半径10メートルには…近付かない事を！！お勧めしますわっ！！」

ホッパー隊

「チイツ、」

レナから距離を取る
ホッパー隊達だが…

沙都子

「ですけど、距離を取ると
チエック―メイト！！
なんですよー！！」

ずっどーーーーーーん

ホッパー隊

「な”にいつー！？！？」

謀ったかのように落とし穴
炸裂！！人がすっぽり収まる
だけの幅しかなく顔だけが
地面から出ている

圭一

「ぷふッ、
さすが沙都子だな！！」

魅音

「ッよし！脱出う校門へ」

校門へ駆け出した一行に
立ちはだかる影一つ

???

「そうは行きませんよ、
お姉え…皆さん…」

魅音

「し詩音ッ！？あんだ、
興宮で葛西さんと
待機してたんじゃない？」

其所には魅音にそっくりな
双子の妹、詩音がサソード
ヤイバーを持って
立ちはだかる

詩音

「ゲヘゲヘヒツヤハハツヒ
ヒツヤハハゲデゲデゲデゲ
デヘンシングヒゲラッハ」

《スタンバイ》

《ヘンシン》

詩音

「ハアッーキャストオフゲ
ゲケゲゲヒツヤハハフー
ガハアーゲッゲグッガギ」

《キャストオフ》

《チェンジスコーピオン》

仮面ライダーサソードへと

変身した詩音

沙都子

「そんな！？ねーねーが、
ワームだなんてえ！？！？」

圭一

「落ち着け、沙都子！！
アイツがオリジナルの
詩音とは限らない！！」

レナ

「そうだよ、詩いちゃんは
ワームなんかには殺られない
きっと返り討ちだよ！」

内田

「先に行ってください！！
彼女は私に任せて、」

圭一

「ユカちゃん、
いいのか？」

内田

「はい！」

魅音

「行くよ、みんな！！」

内田以外がサソードの脇を
通り抜けて行く

サソード

「私に勝てるんでも？」

内田

「ライダーの差つてやつを
見せてあげるよう！！
変ッ身ッッ！！」

《カメンライド

・ユカイド》

10枚のカードが内田を包み
ユカイドに変身！！

再び圭一達の前に影が
立ちただかる

圭一

「な” 富田君に岡村君!?”」

富田

「すいませんッ

前原さん……」

岡村

「あちら側に付けば、古手のスク水と北条の体操服&ブルマを後でくれるって言わうんです!! 貰わない訳にはいかないんですよ……、前原さああん!!!!!!」

圭一

「な” つなんだってえええ
~~~~エエゴホッゴホ」

圭一

「ソレは、ほ本当なのか?

富田君! 岡村君!!」

富田・岡村

「本当です(ゝす)!!」

圭一

「クッなんて卑劣で下劣な  
手を……鷹野さん!!」

悔しそうに地面を拳で殴る  
彼を複雑な表情で見詰める

魅音とレナの二人

レナ

「魅いちゃん…圭一君の事  
時々…分からなくなるよ  
はうはう…」

魅音

「アハハアハハアハハ」

圭一

「ところで、その腰に  
着けたベルトは？」

富田

「僕達は、  
Wホッパーなんです、」

圭一

「そうか、だが！富田君、  
岡村君…二人は本当に  
ソレで良いのか？」

富田・岡村

「????」

圭一

「無理矢理奪ったスク水と体操服&ブルマで二人は萌えるのか?富田君!」

富田

「え、も萌―このバカ野郎おおをを―!!!!!!」

富田・岡村

「ひい!?!」

圭一

「そんなヤツは、ただのオスだああ!!!!!!」

ゲットバックヒア―だ!!!

圭一

「いいか!!よく聞け!!!そして想像するんだ...」

梨花ちゃんと沙都子が顔を  
赤らめながら、ソレを脱ぐ  
様を！！脱ぎぬぎ脱ぎぬぎ

そして―梨花ちゃんは

（受け取って欲しいのでよ  
…みい〃〃にぱー〃〃）

そして―沙都子は

（その―べ別に〃あなたが  
物欲しそう顔…してるから  
今回だけ特別ですわよ〃）

どうだああああ！！！！！！

富田・岡村

「ぶはっブシャー――」

ボンッポボン…ドサッ

鼻血を滝の様に噴出させて  
倒れる二人と同時に何故か  
爆発してしまったゼクター

圭一

「フツ正義は必ず勝つ！」

沙都子

「私…圭一さんには、  
二度と近付かないように  
しますわ！！！！！」

梨花

「それが良いのですよ、  
みい（さっきのトキメキ  
返せ）圭一いい！！」

????

「あら、楽しそうね？」

????

「私が殺ります、雛！」

一難去ってまた一難

一方…うっちは

「ライダースラッシュー!!」

ユカイド

「ぐっくうーくあつ、」

サソード

「さっきまでの威勢どこに行ったんですか?」

鏑ぜり合っているが明らかにユカイドが押されている

ユカイド

「へへっん勝つのは…私ッだよ!!!!!!」

《カメンライド

・ラキ オウ》

♪ テッテテッテッテッテッ  
ンガシャガシャテッテッ  
テッテッテッパカアテッ  
テテッテッテッテッ♪

ユカイド

「私、参上だよ!!」

カメンライドと同時に

後方へジャンプ

《フィニッシュライド

・ラキ オウ》

ユカイド

「私の必殺技あッ

パートスリー!!」

サソード

「ふんッ

ライダースラッシュ、」

サソードが突撃!!…だが

ユカイドは地面にソードを

突き刺す

サソード

「バカなんですかあ？

私はココですよ!!」

ユカイド

「うん、分かってるよ

パートスリーだから!」

ビシッ!と指を三本立てる

ゾッソォー————ン

サソード

「はいっ?…アツハハゲデ

ゲデゲハあんたハンブンコ

ゲデゲデゲヒツヤハハ!」

ユカイド

「貴女が……

真っ二つだからだよ!」

サソード

「ゲデゲハ！？！？ギツギヤイ  
ヤゲツガグゴボゴボ―」

地中から飛び出したスター  
ソードがゼクターごと彼女  
を真っ二つに斬り捨てた！！

再度、圭一達は

小此木

「変身でさ、  
キャストオフ！」

《ヘンシン》

《キャストオフ》

《チェンジ

ロングホーンビートル》

カミキリムシ型ゼクターを  
ベルトに装着キャストオフ  
仮面ライダー天切に

変身する

天切

「ライダーザン、」

《ライダーザン》

天切の両肩に付いた巨大な  
刀―所謂、太刀にタキオン  
粒子が走ってエネルギーの  
斬撃を圭一達に飛ばす

圭一

「く、此処で終りかよ…  
違っただろ？約束した！  
俺達は！！夏を越えるんだ  
くそををおお～～！！！！」

《ライダーカッティング》

突如、現れた仮面ライダー  
ガタックのガタックダブル

カリバーを用いた必殺技で  
ライダーザンを相殺！！

ガタツク

「大丈夫かい？みんな！」

梨花

「あっああ…赤坂アア！！！！  
どうして！？どうして！？」

ガタツク

「梨花ちゃん、

言わせてくれるかな？」

梨花

「????」

梨花ちゃん！

君を！！

助けに！！！！

来た！！！！！！

顔を真っ赤にして涙を零す

梨花

天切

「コイツは私が、貴女は女王をお願いします」

ザビー

「フフ、変身しなさい！  
古手梨花、私が神！！」

梨花

「魅い、降ろして  
下さいなのです、」

魅音

「だダメだつて、  
梨花ちゃん！？」

梨花

「鷹野は、僕が倒さなきゃ  
ダメなのですよ!」

魅音から降りた梨花の手に  
ゼクターが止まる

《ヘンシン》

《キャストオフ》

《チェンジリカビートル》

ガタツクVS天切

「梨花ちゃんッ?!?!」

《ライダーザン》

ガタツク

「しまッッ!!」

ぐはっ—!!?!」

天切

「よそ見は…  
いけないな！」

直撃を受け倒れたガタツク  
を踏み付ける天切

天切

「私の勝ちだ！」

ガタツク

「ッそれは、

どう…かな…！」

天切

「なに、ーグホッ！？」

専用バイク、ガタツクエク  
ステンダーエクスマードが

天切を突き飛ばす

ガタツク

「行くぞ…！」

エクステンダー…！」

ガタツクがエクステンダー  
に搭乗、そして上空へ

《1、2、3》

ガタツク

「ライダーキック！」

真下の天切目掛けてエクス  
テンダーと一緒に突っ込む

天切

「さけるなよ！！！！！！」

《ライダーザン》

両者の必殺技が爆発を生み  
黒煙が舞い上がる中から姿  
を見せたのは天に向かって  
伸びた二本の角と赤い複眼

リカブトVSザビー

リカブト

「うわぁぁぁー!!?!?」

吹き飛ばされ衝撃で変身が  
解けてしまいうりカブト

梨花

「ううッ……」

ザビー

「不様ねえ、

梨花ちゃん!?!」

ピカッアアーーーーーン

レナ

「よくも!!!梨花!!!?うあ  
は離して!!!!!!」

ザビーがレナぱんを止めて  
強く握る

ザビー

「いやよう？礼奈ちゃん  
の声を、もつともつと  
聴きたいもの〜!!」

ググッギギヂ、グヂヂ

レナ

「ヒイツくあつううあああ  
ううぐつぎいかはあ」

レナの手から嫌な音が鳴つ  
ても更に力を込めるザビー

レナ

「う”ひつくつああ…  
”ごごめつ、ああぐう!?”」

レナっ！そんな野郎に

謝る事はねえ!!

ザビー

「なんですつて!?  
やっぱり、勉強だけの  
ガキって事かしら?」

圭一

「テメエは、ぶつ倒されるんだからな！！！！！」

《フィニッシュライド

・ユカイド》

ザビーの目の前に10枚のオーラカードが出現する

ザビー

「な——！？」

ユカイド

「ラアイツダアア…

キイックウ！！！！！」

ゴッバアアアア——ン

ユカイドキックが炸裂してザビーは菜園に吹き飛んだ

ユカイド

「ハアハア間に合った、  
レナさん…大丈夫？」

レナ

「だっ大丈夫！ドアに  
挟まれるのに比べたら、  
全然だよっだよ！！」

笑顔を返すレナだが額に汗  
が浮かび右手は青黒く変色  
していて魅音が状態を確認  
する―幸い骨は無事だった

圭一

「―グッドタイミングだ、  
ユカちゃん！―これで  
終了だよな？」

ユカイド

「まだだよ！圭一さん」

ゆらりと立ち上がるザビー  
その身体は全くの無傷

沙都子

「ヒイツ化け物！？」

魅音

「ちっさすが、  
鷹野さんて事か！」

ザビー

「フフ来いッ神の証よ！」

ザビーの手にジョイントし

現れた物は

ユカイド

「あれは、  
…」

ハイパーゼクター！？」

ザビー

「ハイパー  
キャストオフ！！」

《ハイパーキャストオフ》

ザビーが腰にHゼクターを  
装着してゼクターホーンを  
倒しハイパーフォームへと

変身を果たす

ザビー（H）

「世界があゝ私をツ神と！！  
認めたわ！さあ崇め讃え  
敬え人間ども！！！！」

梨花

「誰がお前に？変身！！」

《ヘンシン》

《キャストオフ》

《チェンジリカビートル》

リカブト

「一緒に鷹野を…

倒そうなのですユカ！」

ユカイド

「一緒に戦うのは、

私じゃないよ！！」

リカブト

「？？？」

ユカイド

「ね！羽生ちゃん？」

羽生

「あう！？

ぼーボクなのですか？」

突然、ユカイドに話し掛け  
られた羽生は驚く

ユカイド

「羽生ちゃんは信じてる？  
梨花ちゃん達―仲間が、  
運命を打ち破る事を？」

羽生

「信じてるのですよ！」

ユカイド

「本当に？」

羽生

「あう、それは…」

俯き黙る羽生

ユカイド

「怖いんだよね？  
梨花ちゃんが自分を  
忘れるかもって、」

寂しそくに頷いた羽生

リカブト

「貴女を忘れる―私が？  
この百の夏を共に一緒に  
繰り返してきたのに…  
忘れるには長すぎよ」

羽生

「梨花…一緒に居て…  
良いのですか？ボクが  
…―ボクが一緒に？」

当然よ！羽生…私と貴女は

友達…仲間…家族

掛け替えのない…大切な人

羽生

「…信じる、信じるのです  
ボクは梨花を…みんなと  
奇跡を起こす―！」

ケースから3枚のカードが  
飛び出してユカイドの手に

ユカイド

「羽生ちゃん、

驚かないでね！」

《ファイナル・

フォームライド

・リカブト》

ユカイドが羽生に触れると  
光に包まれゼクターに変身

リカブト

「羽生…これが、

私と貴女の変身よ！！」

《ハニューキヤストオフ》

《チェンジ

ハニュービートル》

オヤシロノカネが身を包み  
巫女装束の様な姿に変わる

《ファイナル・

アタックライド

・リカブト》

Hカブトの手に剣が現れる

羽生

「これは鬼狩柳桜！?!?」

ユカイド

「鬼狩柳桜・祭だよ！」

Hカブト

「まさに…至れり尽くしね  
いけるわ、これなら!!  
羽生ッ!!!!!!」

《ファイナル・

フィニッシュライド

・リカブト》

鬼狩柳桜・祭が光り輝いた

Hカブト

「ハニュー…」

クロックアップッ!!」

背中のアーマーが開き

桜色の羽が現れる

Hカブト

「明日と言う未来を！」

私達はこの手で掴む!!」

羽生

「運命を覆す力、  
見せてみる!!」

Hカブト・羽生

「楔げ! その魂! ! ! ! !」

ザビー(H)

「いや嫌!! わ私は! ? 神…

神に、ただ認めてほし—

お、おじいちゃ——

パアアアアアアアアッ

鬼狩柳桜・祭が悪しき魂と

過去に囚われし彼女の心を

浄化していく

古手神社境内の高台

「もう行くのですか？」

内田

「うん、これを  
貰ったしね！！」

内田が手に持っている鏡は  
昨晚羽生が夜なべして神通  
力で創造した世渡りの鏡だ

南家とスクリーンを失った  
内田の為に――羽生が九つの  
世界を巡り渡れるようにと  
梨花の世界を救ってくれた  
お礼に渡してくれた鏡

羽生

「お別れを言わなくて  
良いのですか？」

内田

「絶対に  
泣いちゃうから、」

羽生

「そうですか…」

梨花とみんな

圭一と魅音とレナ

沙都子に詩音は

広場で鬼ごっこをしている

圭一がレナを襲ってる感じ  
に見えるが気のせいだろう

内田

「それじゃ、羽生ちゃん  
バイバイ……！」

羽生

「バイバイなのです！」

にっこり笑い手を振り合う

内田と羽生の二人

世渡りの鏡には――長すぎる  
坂道を元気に駆ける美少女  
と溜め息をする男子学生が

映っていた

内田

「何の世界だろ？」

すぐ会えるのですよ！あう

第七話 貴女とアナタ リカフト編 完（後書き）

「私が団長！本日付けで  
二人は団員よ！！」

「ファイズの世界だ、  
内田ユカ…」

「長門、知ってるか？」

「困りましたね？」

「それは禁則事項です」

「あうあうあうあうあう」

「…問題は…ない」

「ええと宇宙人と未来人に  
超能力者…―それで私が  
異世界人！？」

「オルフェノクなんか！  
大っ嫌い！！」

そうかい…

次回仮面ライダーユカイド

スマートブレイン附属北高

世界改変する美少女と

溜め息、学生

次回も変身（めがっさ）

ユカイド

第八話 不思議と555（前書き）

猫は箱の中……生きてる？

猫は箱の中……死んでる？

彼は箱の外……動ける？

彼は箱の外……動けない？

彼女は箱……満足してる？

彼女は箱……満足してない？

アナタは器……知ってる？

アナタは器……知らない？

私は牢獄——逃げれる？

私は牢獄——逃げれない？

I s u k a ・ D e k a n a 著より抜粋

我等の計画は

順調に進んでいる

## 第八話 不思議と555

仮面ライダーユカイド

### 第八話

俺が宇宙人、超能力者、異世界人、将又―悪の秘密結社に、其れと戦う正義の味方を信じざるを得なくなつたのは…後席に座る美少女涼宮ハルヒに他―ツて何しやがるハルヒ！コイツは俺を目覚まし時計か何かと間違えてんじゃないだろうか？そうじゃなきゃ、心地好い程に俺の後頭部をズバンと叩いたりしない筈だ

ハルヒ

「キョン！私の話を聞いた？今日、来た転校生は絶対怪しいわ！！」

ああそうかい？親の仕事で転校なんてよくある事だろ？―まあ行き成り二人もつてのは珍しいかもな？

ハルヒ

「だから怪しいんでしょ？  
キヨン…鈍いわね！」

お前の様に…自分を中心に

世界が動いてたら

さぞや楽しかる？

ハルヒ

「行くわよキヨン、

ついて来なさい！」

何処行くんだよ？俺は

朝比奈さんと優雅な

ランチタイムを——！？

ハルヒ

「っさい——！！！」

へいへい…コイツが機嫌を  
損ねると決して良いことは  
ない、断言しても構わん——！

ハルヒ

「ふふふふふふ」

それにコイツの笑顔は

悪くない…寧ろ良い

って付き合ってる訳

ないだろ…

ハルヒ

「あつ居た！」

あああ見つかったか

さあ二人の運命は？

ハルヒ

「あの二人……

付き合ってるのかしら？

妙に仲よさ気じゃない」

転校生同士だから

気が合うだけだろ

内田

「あの保坂さん…  
千秋ちゃん達は？」

保坂

「…すまない今後の  
報告を待つてくれ、」

ハルヒ

「何を話してんのかしら？  
此所じゃ聴こえない…」

つておい、二人の雰囲気  
を壊すな…―あぁったく

ハルヒ

「こんにちは！（^ - ^）何を  
話してたの？内田さんに  
保坂くん？」

内田

「？えと―」

（誰？保坂さん）「

保坂

「（俺達は今日、北高に転  
校して来た事になっている

因みに此処は…ファイズの世界らしいな、其れと彼女は涼宮ハルヒ…俺達と似た世界改変の力を持っている本人に自覚はないが、」

内田

「へえ凄いね！？ハルヒさん  
―…ハッ（ヤバ！）」

ハルヒ

「はぁ谷口ね？アイツの、  
話しの99%が法螺だから  
気にしないでね内田さん  
それと…保坂君もね！」

保坂

「了解した、」

今の二人のアイコンタクト  
かなり親しい中って事か？  
二人共…美男美女だしな―  
ってか内田さん小学生！？  
かぁいいって俺は口リか？

決して口リじゃない！

朝比奈さんと良い勝負だな  
メイド服姿きつと似合うぞ

ハルヒ頼みとは…正に  
神様って事か？嫌だな

ハルヒ

「光栄に思いなさい！！  
二人共、SOS団に  
仮入部よ！！！！！」

内田

「…SOS団！？」

やっちゃった、御免なさい  
内田さん！決してメイド姿  
が見たいが為にハルヒを止  
めなかった訳じゃないです

ハルヒ

「さあ！！！！部室へッ  
レッツゴー！！！！！」

まあ…ハルヒが楽しければ  
ソレで良い―訳ねえだろ！

SOS団・仮部室

ハルヒが保坂の後襟と内田さんの腕を掴んでズンズンと足音を響かせ部室の前で漸く止まった、内田さんは

「ハアハアアッンヒツ」  
「はぁんアーくうん」

と息を切らしながら、肩で呼吸を整えている―妙に…色っぽいですよ内田さん！

そして勢いよく部室のドアを開く、いつも思うがこのドアは超合金Z製じゃなかるうか？バツツアンと此所まで振動が伝わってくる…

「やあ遅かったですね？  
そちらの紳士淑女は…  
どちら様で？」

紳士淑女ってお前は…この  
無駄にイケメンが古泉で、  
本を読んでいる物静かな美  
少女が長門有希で、お茶く  
みをしてくれている美少女  
天使が朝比奈みくるさんだ

てか何時まで俺に地の  
文をやらせる気だ！？

ハルヒ

「キョンなに？さっきから  
ぶつぶつ言ってる！！！！

——気持ち悪い、」

ちっ、ヒロインだからって  
俺が表現しなきゃ存在出来  
ない事になるって言いたい  
言いたいのがソレは言わない

俺と皆のお約束事だ

保坂

「彼も…ある意味では涼宮  
ハルヒと同じ力が使える  
ようだな？内田ユカ、」

内田

「そ、そうですね」  
（言って良いのかな？）

ハルヒ

「部活会議を始めるわよ！  
保坂ちゃんとユカちゃんも  
席に着いてね！」

・  
本日の議題

学校で不思議を探そう

古泉

「難しそうですね？」

朝比奈

「そ、そうですね」

長門

「……………」

保坂

「ふむ」

内田

「あ、あのう……」

ハルヒ

「ハイ、ユカちゃん！」

内田

「えと不思議って、  
具体的に何ですか？」

ハルヒ

「宇宙人―未来人―  
超能力者―異世界人―  
でツチノコと妖精よー！！」

内田

「……お、王子様は  
ダメですよね？」

ハルヒ

「学校に王子様が居たら  
ソレこそ不思議よ！  
ユカちゃん！！」

良いのかよッ！？と  
長門以外がおそらくは  
思っただろう

ハルヒよ、オルフェノクは  
不思議じゃないのか？

ハルヒ

「あんな人殺し、  
不思議じゃない！  
大っ嫌いい！！」

そうかい…

北高・中庭

我等がSOS団と仮部員の  
二人は草を掻き分けごみ箱  
を漁り更に呼び掛ける等を  
して不思議を探しているが  
まあ見つけられる訳がない

何故かって？宇宙人に未来  
人に超能力者と…捜し物は  
お前の傍に居るぞ！！

あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあうあう

幻聴まで聴こえる俺は  
もう…お終いかもな？

内田

「羽生ちゃん、  
どうだった？」

羽生

「ふしぎな生物は学校には

「いなかったですよ。」

保坂

「羽生が不思議生物  
一号なんだがな……」

羽生

「ガアーーーーーン」

内田

「アハハッ羽生ちゃん  
面白い（ゝ）ププッ」

「おや？内田さんのスマイル  
凄い威力ですーありがとうございます」

ハルヒ

「ちよ、キョーン！  
なに見てるの？……」

ハルヒ

「ム、可愛いものね  
ユカちゃん…メイド服も  
さぞ似合っでしょうねえ」

キヨン？（ニコニコ）」

うつ黒いオーラが見えます  
はハルヒさん！？

古泉

「困りますね貴方は彼女を  
見えて貰わないと！！確か  
に内田さんに見蕩れる気持  
ちは解りますが…いやはや  
素晴らしい笑顔ですね！」

古泉くん…忠告ありがとう  
ただ、もう少し早く言っ  
てほしかった、それとだな…  
顔が近い！！息が当たる！！

「キャッ！？―痛ったゝ、」

「退け、邪魔だ！」

俺が声のした方を見遣ると

ハルヒが誰かとぶつかつた  
みたいだ何をやってんだか

「好奇心は時に牙を剥くぞ  
…これは忠告だ、」

ハルヒ

「ご忠告ありがとう、  
ラッキークローバーさん  
心配は要らないから…」

ラッキークローバー、学校の  
アイドル4人組で名前は  
忘れた…皆がLC1、2で  
呼ぶからだ…俺も人の事は  
言えないな

LC2

「まあ落ち着きなつて  
（彼女がファイズかも  
…なんだからね!）」

LC4

「怪我はない?  
大丈夫―立てる?」

ハルヒ

「ええ平気！」

LC 4

「良かった、  
ほら3も謝って！」

LC 3

「チツ、」

LC 4

「あつ何処に行くの!!」

LC 1

「放っておけ…  
俺達も行くぞ」

LC 2

「夢で逢えたら嬉しいな、  
それじゃバイバイ」

LC 4

「ゴメンね？  
涼宮さん―またね！」

LC 1

「忠告はしたぞ  
涼宮ハルヒ…」

意味ありげだな？ラッキー  
クローバーの諸君

ハルヒ

「今日は…終りにしましょ  
これ以上続けても収穫は  
無いだろうしね…」

古泉

「そうですね、」

朝比奈

「それじゃ、  
失礼します（ペコ）」

長門

「……………（じーっ）」

うん？どうした…  
気になる事でもあるのか？

長門

「…無い……………さようなら」

俺が気になる！――ねえ  
内田さんも気にな……

居ッねえし！……！！

その日の夜 北高・校門

欠伸をしながら警備員の男  
が校門を見遣ると女子学生  
が手招きしている

警備員

「その制服ここの生徒だね  
こんな時間に何を？」

女子生徒

「寂しいの……」

ねえ一緒に居て？」

警備員

「大丈夫かい？」

警備員が近付くとシユルリと制服を脱ぎ始めた彼女…

警備員

「…何してるんだ？」

一糸纏わぬ姿で微笑み抱き着き―そして唇を近付ける

『ん…ふうークチュ…ヂュ  
アッふーチプユぱア…』

唇を離れた二人の間を繋げる…月明かりに照らされて

金色に輝く糸

女子生徒

「これで一緒だね？」

彼女から伸びた触手が彼の  
胸を突き刺し…そして灰と  
成り果て―崩れ落ちた

女子生徒

「ザンネン、」

ペロツと唇を舐めた彼女は  
踵を返して校門を潜る

ブオッオオン

マフラー音が響きライトが  
彼女を強く照らす

女子生徒

「ダアレ？」

《5、5、5》

「お前は倒される…」

正義の味方にな！」

《スタンディングバイ》

「変身！！」

《コンプリート》

赤いフォトンブラッドの光  
が収まると仮面ライダー、  
ファイズが立っていた

女子生徒

「…ファイズ、アアア！」

灰色の怪人オルフェノクに  
彼女も姿を変える

ファイズ

「……これだ」

乗って来たバイク、オート  
バジンのハンドルを引き抜  
きミツシヨンメモリーを挿  
入するとフォトンブラッド  
の刀身が出現する

オルフェノク

「チィッー、」

脱兎、逃げ出す彼女を追う  
でもなくベルトに装着した  
ケータイを開いてエンター

キーを押す

《エクシードチャージ》

エネルギーがファイズエッジに流れ込み、エネルギー波を彼女に飛ばし拘束

オルフェノク

「あつぐ、クソ！？…ガア―

右肩から左腰にエッジを振り下ろして刀身を反して横に薙ぎ―彼女に背を向ける

斬撃を喰らった彼女は

Φのマークを刻み爆発

ファイズが立ち去った後の  
中庭でオルフェノクだった  
彼女の灰を見詰める人影…

「ファイズが学校を…」

ん？―生徒手帳…正義の  
味方の落とし物かな？」

第八話 不思議と555（後書き）

「うそ…ウソ―嘘よ!!」

怖い、怖い？  
そう…だよな……

「そんな！プロテクトが  
効かないなんて！？  
貴方達は…一体？」

「久しぶり、なんでね!!」

「こんにちは、  
なんてね！クスクスッ」

「…希望は…貴女？」

「閉鎖空間が同時多発的に  
出現しています」

お前の世界は護るさ！

「君達の世界が…  
終る事と同意義だ」

「私は信じる、絶対ッ！」

次回仮面ライダーユカイド

E n d ・ W o r l d ・ L o v e

次回も変身（オルゴン）

ユカイド

次回も読むですよ！あう

第九話 告白は告白 彼女の箱編 完（前書き）

「お疲れ様でした！！」

お疲れ様でした〜

わぁーパチパチパチパチパチ  
チパチパチパチパチパチッ

「ほらほら！！ジャンジャン  
持ってきて食べて飲んで  
無礼講だよ！！！！！！」

「しかし、魅音よく会場の  
許可が下りたよな？」

「園崎の家紋を舐めちゃ  
イケナイよう？」

「前後書きなんて…  
チヨチヨッイ って  
奴です！圭ちゃん！！」

「ハハ、スゲエな！？」

「泡麦茶はドコですか？」

酢葡萄ジュースは？」

「をゝほほ、から揚げは！！  
私の物ですわゝ！！！」

「生憎、沙都子の食べ物  
はこの前原圭一が全ゝ部ッ  
貰ったあゝ！！！！」

「ああ私のお肉がああ！？」

「大丈夫ですよゝ  
沙都子にはピーマンの  
カボチャ詰めがあります  
たぁんとお食べゝ！！」

「ヒイツし詩音さん！？何故  
○○詰めの○○の部分が  
おっお肉じゃなくて！！  
カボチャなんですの！？」

「ニンジンからアスパラに  
ブロッコリー、それから  
カリフラワーで一周して  
ピーマン詰めと…ハアイ  
たぁんと召し上げれ」

「おつ鬼くふえくん!!」

「はうう、レナお姉さんに  
まっかせて!!!!!!」

ピッカアアアアー——ン

「「「お…見事、

さすがは…レナ」」」

「コレ続くのですか？

まあコレが飲めれば、  
構わないけど——みい」

「——そうそう！羽生は何処  
かしら？たく肝心な時は  
居なくてどうでもいい時  
は居る疫病神なんだから  
まあ羽生らしいけど」

## 第九話 告白は告白 彼女の箱編 完

仮面ライダーユカイド

### 第九話

長門有希・自宅マンション

「つまり、二人は別の世界から此の世界にやって来た所謂…異世界人だ？」

保坂

「そう、通りすがりの仮面ライダーだ、それと二人には恐らく見えないだろうが…オヤシロ様の羽生、ぶかぶか浮いてるこの二本角の娘だ…」

自分と内田の間でぶかぶか正座している羽生を指差して説明する保坂先輩

羽生

「よろしく

なのです、あう」

有希

「…よろしく、」

一樹・みくる

「?????」

ペコと頭を下げた羽生と微かに首を縦に傾げる…有希

キヨン・ハルヒを除く

SOS団メンバーと仮部員  
内田と保坂が会議中?

一樹

「それで…貴方達の目的は  
やはり涼宮さんですか?」

取り敢えず話を続けることに  
した一樹が本題に入った

保坂

「内田ユカは世界を護る為  
に来た―俺は古泉一樹、  
長門有希、朝比奈みくる

に協力を頼みに此の世界  
へ来たただけだ…」

内田

「保坂さん、  
そうなんですか？」

保坂

「ああ、南春香と  
妹達を助ける為にな」

内田

「ほ本当ですか！？」

身を乗り出して詰め寄った  
内田をやりわりと引き剥し  
て三人に向き直る保坂先輩

一樹

「協力とは？」

保坂

「未来に行きたい」

みくる

「ふえ！？」

保坂

「タイムマシンを…」

貸して貰いたい」

みくる

「ソレは禁則事項です！」

保坂

「単純だな…予定より  
簡単に済みそうだ、」

みくる

「えと…き禁則事項が禁則  
…、えとえと禁則事項が  
で、な”なんです!!」

保坂

「よく解った!それで—  
朝比奈みくる、協力して  
くれるのか?」

みくる

「…!!?!?!?!プロテクトが?  
どうして!?!?!」

本来現代人に未来人の知識  
技術を誤って伝えないよう  
に『禁則事項』としてプロ  
テクトを掛けられている筈  
なのに全てが筒抜けの状況  
にみくるはショート寸前!?

一樹

「――私は何を？」

保坂

「特殊空間に入りたい、  
…閉鎖空間とは異なる」

一樹

「閉鎖空間でない…」

目を瞑り考え込む一樹

有希

「……………（じーっ）」

保坂

「長門有希、君には魔女が  
未来の何処に居るのかを  
捜し出して貰いたい」

一樹

「魔女とは？」

保坂

「長門有希、君は  
知っている筈だ？」

コクと頷き、有希は魔女に

ついて語り始める

有希

「先月9月30日に、極めて小さな空間変動と時空断裂を観測した、ソレは我々の法則及び事象を超える若しくは全く別の存在であると判断した―更にその二つの生命体と仮定する、を追って新たな生命体が現れた―我々の知る彼と似た存在で二つと一人は交戦、その後二つは別れ一つは未来に もう一つは現在に留まり、一人は未来に行った一つを追跡したが見失い、朝比奈みくるの現在―私達にとつての未来に留まっている―彼の言う魔女は未来に居る筈の一つだと推測する」

確認する様に有希は保坂の瞳と自分の瞳を交差させる

保坂

「其の通りだ！長門有希」

内田・みくる

「??????」

全く話に付いていけてない  
我等が主人公と美少女天使

保坂

「魔女は特殊空間を広範囲  
に生成、その為に正確な  
位置の特定が難しく更に  
侵入も容易にいかない」

一樹

「そこで私の力を試した  
いと…言う訳ですね？」

保坂

「そうだ、協力して  
貰えないだろうか？」

一樹

「協力しましょう」

有希

「…問題…ない」

みくる

「禁則事項です」

何時もの爽やか笑顔の一樹と無表情で僅かに首を縦に振る有希と一瞬大人びた微笑を返した…みくるちゃん

保坂

「ありがとう、感謝する」

二人のSOS団メンバーは  
それぞれの帰路へ

内田

「保坂さん、魔女って  
何者なんですか？」

保坂

「……………」

内田

「保坂さん？」

「俺の…親友だ」

「えっ、…と」

「魔女を放置すれば  
世界の終りと…  
—同意義だからな」

「保坂さん、—（ぎゅっ）」

「ん、どうした？」

「私にも、…解りません」

「そうか、ありがとう」

二人は有希の自宅に  
お世話になっており  
床に就いている

「君は、優しいな…」

「そーなこと」  
「ないですよ」

腕に抱き着いている内田の  
頭を優しく撫でた彼は

「もうお休み」

「〃〃お休みなさい〃〃」

翌日、有希家

有希

「ソース…取って、」

内田

「ハイ、有希ちゃん」

内田

「『ほ保坂さんは？』」

（昨日どうして、あんな事  
しちゃったんだろ『顔』  
『見れない』（＞|＜）」

保坂

「いや、長門有希の料理  
本来の味を楽しみたい」

内田

「『そ、そうですか』』」

パクパクパクパクパク  
もぐもぐもぐもぐもぐ  
あうあうあうあうあう

パクパクパクパクパク

もぐもぐもぐもぐもぐ  
あうあうあうあうあう

パクパクパクパクパク

有希

「…ごちそうさま」

羽生

「ムグモグゆうパクきムグ  
モグかぶもぎゅもぎゅのん  
パクムグおいハムユしいペ  
ロパクかぶムグモグです」

有希

「…ありがとう」

お口いっぱいには有希の料理  
を掻き込んだ羽生は頬っぺ  
を押さえながらあうあう  
微かに頬を染める有希

## 北高・教室

俺が妹に引きずり起こされ  
酸素欠乏症に陥りそうな坂  
を上り、友人と他愛もない  
会話を交わし席に着く、…

…ん？足りない、何がだ？  
—ハルヒが居ない！あれっ  
靴はある、登校はしてるか  
まあ静かで良いな、そして  
催眠術の様な授業を何とか  
熟して部室へ向かうと仮部  
室入口で立ち尽くしている  
我らがSOS団メンバー達

な長門…何事だ！？  
何か知ってるか？

長門

「……通せん坊、」

朝比奈

「と通して下さいい」

古泉

「困りましたね、」

LCメンバーの皆さんが！？  
SOS団に御用…ですか？

LC1

「キョン、

涼宮ハルヒは何処だ？」

さあ、知らん、

てかお前もか！？○ルー○ス

LC 1

「そうか、

（感づかれたか？）」

LC 3

「（さつさと、始末しろと言った筈だがな…）」

LC 2

「（でも、これではつきりしたよね！）」

LC 4

「（残念ね、仲良く出来そうだったのに？涼宮ハルヒさん…）」

おや？さつさと帰って行く  
何だっ たんだ！？

内田

「涼宮さんを捜して下さい  
急いで！キヨンさん！！」

どういう事です？内田さん

保坂

「急いだ方が、

良いぞ？キヨン！！」

何だってんだ！？クソ！！

保坂

「行っただか、

内田ユカ！君も急げ」

内田

「ハイ！保坂さんも

頑張ってくださいね！！」

シユタツと敬礼した内田は  
キヨンの後を追いつける！！

一樹

「私達の方は、

まだ準備中ですが…」

有希

「…そう、」

みくる

「まだ禁則事項が禁則で  
ーゴメンなさい!!」

保坂

「フツ構わないさ!」

北高・中庭

「無い…わね、ハア」

LC1

「探し物はコレかな?」

ハルヒ

「あっーありがとう、」

ハルヒが手を伸ばすが  
ソレは投げ捨てられた

ハルヒ

「ちょっと！

何するの！！」

LC3

「白々しい、ファイズ！」

ハルヒ

「はい？」

LC2

「ファイズギア、

返して貰うよ！！」

ラッキークローバーは

オルフェノクに変身を遂げ

ハルヒに迫る

ハルヒ

「ヒッ、オ、

オルフェノク！？！？」

てめえらの

探し物はコレか？

ハルヒ

「ツキヨン！？逃げて！！」

そうは、いかないな…

正義の味方は助けを求める

者達を救うのが仕事だろ？

《5、5、5》

LC4

「驚いた！？

貴方がファイズ…」

《スタンディングバイ》

いくぞ…オルフェノク

覚悟するんだな！！

…変身ッ

《コンプリート》

フォトンブラッドの目映い

赤い光からファイズが

姿を現した

ファイズ

「ハルヒ！下がってろ、」

ハルヒ

「ダメ、こ腰、

抜けたみたい！？」

LC2

「人の心配より、

自分を心配しなよ！！」

ファイズ

「――！ッグア！？」

一瞬で間合いを詰めたLC  
2の振り貫いた拳で植木に  
突っ込む

ファイズ

「ッ野郎、オラァ！」

LC2

「今までベルトの力で、  
戦ってみたいだね？」

殴り掛かった右手を掴み  
捻り「堪らずに背を向けた  
ファイズの無防備な背中を  
蹴りあげる

LC2

「だったら、  
僕の敵じゃないよ」

ファイズ

「…そうかい、」

《レディ》

《コンプリート》

胸部アーマーが開き銀色に  
姿を変えて「ポインターを  
脛に装着する

ファイズ

「言っ たな、

「10秒で決めてやる！」

《スタートアップ》

左腕に付けたファイズ  
アクセルのスイッチを押し  
腰を落とす

LC 2

「????」

LC 1

「まずい!？」

「退け2!！」

LC 2

「へ?...」

《3...2...1》

《タイムアウト》

中を刻みLC 2が爆発する

《リフォメーション》

ファイズ

「俺の敵じゃないな！」

LC1

「フン、仕方がない…」

LC1が左手を高く挙げる  
と生徒が周りを取り囲んだ

LC1

「ファイズを見つけた！  
奴を倒した者は晴れて  
LCメンバーだ、」

集まった大勢の生徒が

オルフェノクに変身

ファイズ

「……………」

ハルヒ

「ウソでしょ！？！？」

驚愕するハルヒを無視して  
オルフェノク達が迫る

《アタックライド

・イリユージョン》

《アタックライド

・ブラスト》

複数のユカイドの銃撃を受け後退するオルフェノク達

ユカイド

「大丈夫ですか！

キヨンさん、それと

怪我は？ハルヒさん」

ファイズ

「その声は、内田さん！？」

ハルヒ

「ハハ、もう驚かない

自信があるわ？」

ユカイド

「今は、この場を

どうにかしないと！」

ファイズ

「分かった、」

ファイズフォンを取り  
出したファイズは

《3、8、2、1》

《ジェットスライガー

カム クローザー》

ヒイイイツツイーーン

大型の超高性能バイクが  
上空から降りて来る

ファイズ

「乗れ！ハルヒ！！」

ハルヒ

「ちよつと、キャア！？」

ファイズがハルヒを抱えて  
ジェットスライガーに乗り  
込むが――

LC3

「逃がすか！！」

ファイズ

「ッオワァ！」

LC3がJSからファイズを蹴り落とし変身が解ける

ハルヒ

「き、キヨン！？」

くっそ！、ベルトは？

蹴り落とされた際にFフォンとFドライバーが吹き飛んでしまっていた

LC4

「ファイズギアは、返して貰いますね」

LC3

「そして、お前の相手はこの俺様だ！！」

LC3がキヨンの前に立ちはだかる

ユカイド

「私が相手です！」

《カメンライド

・リカブト》

ユカイドはリカブトに  
姿を変える

LC 1

「あの方の言っていた

ユカイドか、昨日の…」

LC 3

「関係ない！」

LC 3 が向かって来るが  
ただ突っ立てるユカイド

LC 3

「死ねえ！！」

組んだ両腕をユカイド  
目掛けて振り下ろす

ユカイド

「羽生ちゃんが言っていた  
私は世界を救うライダー  
ユカイドだつてね!!」

《ライダーキック》

LC3は攻撃を当てる直前で動きを止めた…いや時が世界が動きを止める中で―

ユカイド

「でええい!!」

廻し蹴りが炸裂しLC3は灰と帰すと同時に世界は時を確かに刻み始めた

キヨン

「うわぁ!!」

ユカイド

「キヨンさん!?!」

ユカイドが振り返ると  
キヨンがオルフェノク達に  
襲われていた

俺の事は気にするな！

ユカイド

「で、でも！」

ファイズギアを早く―  
ああクソ、…うあー！！

キヨンの顔に奇妙な  
模様が浮かび上がる

ハルヒ

「キヨン！？ああ…

うそ、ウソ、嘘よ！！」

ハルヒ！？チツ、オート  
モードが壊れたのか？

キヨンが上を見るとJSが  
未だにホバリングしていた

《アタックライド

・クロックアップ》

再び時が止まる中でLC4  
にユカイドが迫り顔に掌打  
を浴びせてファイズギアを  
奪い返しキヨンに投げ渡す

LC4

「ツツ、なに!？」

ファイズギアが!?!?」

《5、5、5》

《スタンディングバイ》

《コンプリート》

ファイズ

「乗って!内田さんも!」

ユカイド

「ハイ、」

JSに乗り込み三人は  
北高を後にする

有希自宅

「現在、我々は私の家で休息中…因みに保坂、古泉一樹、朝比奈みくるは未来に行った―何故私が此所に居るかは未来に居る私に現在の私の記憶情報を統合・結合したからである、涼宮ハルヒは奥の一室で外部と接触を断とうとしている、古泉一樹の言う閉鎖空間が同時多発的に発生、世界が終る…私は…どうすれば…いい?…キヨン…希望は…内田ユカ…貴女なの?」

長い説明…ご苦労様、長門  
しかし…どうすればか…  
古泉だったら俺にハルヒと  
キスでもしろ後ろから抱き  
着いて、愛の言葉の一つや  
二つでも囁けとか言うだろ  
そうに決まってる…世界が  
ソレで救われるなら、やる  
けど多分、今そんな事した  
ら、即あの世逝きだ…ハハ

ユカ

「笑えません、」

手厳しいですユカちゃん！  
因みに内田さんが下の名で  
呼んで下さいって言ったか  
らであつて他意はない  
本当に本当だぞ！！

ユカ

「ハア、ハルヒさん  
出て来ないですね…」

長門

「……（コク）」

ユカ

「お願い！ハルヒさんの  
心を開けるのは貴方だけ  
…キヨンさん！！！」

分かってます…ユカちゃん  
ちよつくら行つてきますね

そしてハルヒが引き籠もる  
部屋の前に俺は立っていた  
がドアに背中を預けて中の  
様子を窺う

なあハルヒ…出てこいよ？

後世に涼宮ハルヒが地球を  
滅亡に導いたなんて宇宙人  
に言われても良いのかよ？

ハルヒ

「…それも良いかもね？  
キョンあんたにしては  
面白いじゃない！！」

そりゃ…どうも……

ハルヒ

「キョン！」

なんだ？

ハルヒ

「私…ずうつとあんたを  
傷付けてた…のに…ッ  
どうして一緒に？」

さあ…なんでーだろうな？

ハルヒ

「楽しかったよ…私は…  
あんたと一緒にね？」

そこは疑問形かよ！！

ハルヒ

「ッさいーば〜か…うゝ」

泣いてんのか？…ハルヒ…

ハルヒ

「ッだって…だって…」

なあーハルヒ…高校生にも  
なつて真面目に七夕やらさ  
悔いのない夏休みなんて俺  
は初めてだったよ…サンタ  
クロースは居るぞ！！冬休  
みに捜そうぜ？…だから…  
だからさ…俺は世界の終焉  
なんか望まない！！SOS団  
で…ハルヒ…お前と一緒に  
居たい…退屈つてのは以前  
なら好きだったけど…今は

ハルヒ！非日常ばんざい！！

ハルヒ…

お前が大好きだ！！！！！！

あれ、今凄く勘違いさせる  
セリフ…言っただ…よ…な？

ハルヒ

「バツカじゃない！！」

うおっ！？ハルヒ…

ハルヒ

「あんたの暗い声なんて  
聴きたくないから…」  
「ソレだけだからね！！」

ああ…それで良さ！

ハルヒ

未来・保坂一行

「朝比奈さんを  
待たせて正解でしたね」

有希

「…そう…ココ？」

保坂

「ああココだ！」

現在、保坂一行はみくるを  
待機させて特殊空間の前で

最終確認中

保坂

「入れそうか？」

一樹

「ええ、閉鎖空間と同じ  
要領で行けそうです」

三人は灰色の壁の中に  
消えていく

????

「あら、よく  
入れたわね？」

保坂

「久しいな、  
世界の魔女！」

世界の魔女

「こんばにちわ、  
なんてねクスクス、」

三人が空を見上げると魔女  
が宙に浮かんでいた

一樹

「探す手間が  
省けましたね！」

有希

「違う…あれは偽者、」

有希が瞬間移動で魔女の背後を取って右手に顕現させた光の剣で突き刺した

世界の魔女

「まさか？ライダー以外でこんな芸当が出来るなんて流石は…情報統合思念体の創造――」

掻き消えていく魔女と静かに降り立つ有希

有希

「本体は―アッチ」

保坂

「そうか…行こう」

有希が指差す方向へ向かう

「ハアハア……」

世界の魔女

「もう止めたら？」

有希が指差した方向に魔女と……ある人物が戦闘を繰り広げていた

「そうは、いかない！  
南を助けるまでは……！」

《3、7、3》

《スタンディングバイ》  
《コンプリート》

フォトンブラッドの光から黄色を基調にしたファイズ  
カナースが現れる

カナース  
「いくぞッ！」

世界の魔女

「愛の力は、偉大ね？」

《エクシードチャージ》

跳躍、一回転しポインターからビームを伸ばして魔女をロックオン、フォトンブラッドと共に魔女の背後に

抜ける

カナーズ

「ーやったか？…チツ、」

中のマークを刻まれる前にソレを消し難を逃れた魔女

世界の魔女

「残念ねえ、クスクス」

カナーズ

「くっ、（ここまでか？）」

世界の魔女

「ーチツ…と、」

ボツワアアツン

火の塊が魔女を襲うが彼女は大きく後方に下がり躲す

「外しましたか、」

カナーズ

「遅いです、保坂さん！」

保坂、有希、一樹が魔女と  
カナーズの間に割って入る

有希

「……………ツツ！？！？」

有希が魔女の喉元に指で挟  
んだ8本の光の剣を突き付  
けるが微動だにしない

世界の魔女

「かぁいい顔して、物騒な  
物を―イケナイ子！」

有希

「ん、…ぐ、ンンッ」

世界の魔女

「ダメ、無理したら、  
貴女が存在が傷ついちゃう  
死にたくないでしょ？」

有希

「……………」

世界の魔女

「いい子、でもダメ！」

世界の魔女

「ディフェアゼルイン」

有希

「――」

有希は巨大なガラスの様な  
柱の中に閉じ込められ停止

一樹

「長門さ――」

世界の魔女

「貴方も同様、クスクス」

世界の魔女

「さあ！邪魔者は居ない、  
相手してあげる…」

保坂

「世界の魔女、いや速水  
俺が…お前を救う！！」

世界の魔女

「ハハ、アツハハハ」

速水

「本当に？」

魔女の凍てつく微笑の中に  
一瞬だけ暖かい笑顔が戻り  
彼は強く頷いた

保坂

「ああ、」

世界の魔女

「冗談でしょ！？本気か…  
保坂…だもんね？」

カナーズ

「保坂さん！！」

彼に駆け寄り右腕に付けた  
リストウォッチを操作する

保坂

「ああ！いくぞ、

藤岡…変身！！！！」

《カメンライド

・デイエツチ》

ドライバーにカードを挿入  
天に向けて引き金を引くと  
幻影が保坂に重なり十枚の  
オーラカードがデイエツチ  
へと変身させた

スマートブレイン附属北高

ヒギィイツツアオーン

ジェットスライガーが校門  
を突っ切って車体で蹴散ら  
し内装されたミサイルで群  
がるオルフェノク達を道連  
れに校舎に最高速度のまま  
突っ込んだ

ドッオグアアーーーーン

ユカイド

「いッよし！大成功！！」

ファイズ

「たっまやゝかつぎやゝ」

校門からファイズフォンで  
JSを操作していた二人は  
直ぐさまグラウンドへ

LC4

「ありや、盛大な  
花火ですね！綺麗！！」

LC1

「スペルキア…  
どうするつもりだ？」

スペルキア

「いや、どうするてー  
(LC4は天然だったか)」

グラウンドにはLC1、4  
と何故かスペルキアが居た

そこへ駆け付けたユカイド  
とファイズの二人

ファイズ

「待たせたな、  
ラッキークローバー！」

ユカイド

「あれ？  
スベッキーさん？」

スペルキア

「違う、スペルキアだ！」

ユカイド

「ああ！」

スペースシャトルさん」

スペルキア

「なんで長くなる！？」

ユカイド

「スピリチュアルさん？」

スペルキア

「わざとだろ！！」

ユカイド

「バレたか！テヘツ」

ユカイド

「おふざけは…」

「ココまでだよ！！」

ファイズ

「いくぞ！！」

右手を振り鳴らすファイズ

LC 1

「終焉らしい…」

LC4

「そう…ですね、」

スperlキア

「オリジナルの

…まね事か？」

ライドブツカーから三枚の  
カードが飛び出す

ユカイド

「コレが…ハルヒさんと  
キヨンの力の力!!」

《ファイナル・

フォームライド

・ファイズ》

ユカイド

「驚かないでね？  
キヨンさん!!」

ユカイドがファイズに触れ  
ると光に包まれてフォトン  
ストリームは黄緑色に変化

ファイズのボディを新緑の  
オルゴンブラッドが満たす

ファイズ（〇）

「ハルヒ…お前の世界は  
俺が―俺達が護る!!」

LC1

「そうか終焉は免れたか…  
だがファイズだけでも!!  
今ッここでええ!!」

LC1の拳を叩き弾き片手  
で地面に叩き付け背後から  
襲ったLC4の腕を掴んで  
彼同様に地面へ投げ落とす

ユカイド

「キョンさん!ENTERを  
ダブルクリックして!!」

ファイズ（〇）

「分かった、」

《エエクシードチャージ》

ファイズ（〇）

「喰らえッ！！」

両腕のポインターからビームが伸びLC1、4をロツクオンー両足に二基ずつ取り付けられたポインターと連動してオルゴンブラッドと共に二人の背後に抜ける

そして

ライトグリーンの炎に

包まれていく二人は…

LC1

「ぐ、まだ俺は…やれる！  
そうだろ？…リナ―

LC4

「大丈夫！みんな居る！！  
私も、安心して…っぐ、  
だから…アッス―…カあ  
一緒にいこう…ね―

寄り添い合った二人は中の  
マークを2回刻み爆発

ファイズ（O）

「…次は、お前だ！  
確か…スベツキー…！」

《ファイナル・

アタックライド

・ファイズ》

大破したJSとは別のJS  
が上空から降りて来て変形  
レールガンへ

ユカイド

「いくよ！キヨンさん…！」

《ファイナル・

フィニッシュライド

・ファイズ》

ユカイド

「世界を変えるのは…  
SOS団で充分…！！！」

《レディ》

ファイズ（〇）

「終らせるぞ！！悪の  
秘密結社の怪人！！！」

《エクシードチャージ》

スperlキア

「ちよつコレで終りか！？  
次回予告のセリフすら！！  
言つてねえ！！！！！」

〇スライガーブラストモ―  
ドを二人で持ち構える

ユカイド・ファイズ（〇）  
「この世界を大いに！！  
盛り上げるSOS団を…  
よろしく！！！！！」

ドツオオオグオバアアア―

超質量のエネルギー弾が周

りの空間を引き摺りながら  
射線上の全てを飲み込んで  
突き抜けていった

## SOS団仮部室

有希

「……………そして、」

ハルヒ

「私が団長！あれ？  
言ってなかった！？」

みくる

「涼宮さん、  
頑張ってください！！」

ハルヒ

「ありがとう、  
みくるちゃん」

ハルヒ

「んん…改めて保坂くんは  
大事な用事で居ないけど  
ユカちゃん！！後で  
伝えてね、絶対よ！」

内田

「ハイっ！」

ハルヒ

「うん！良い返事」

私がSOS団、団長！

涼宮ハルヒ！！

ユカちゃんと 保坂くんを

本日付けで

SOS団…正式…！

団員に…任命します…！！

…以上ッ…！！

北高・校門

「彼は魔女を追い別世界へ  
私達は足手まとい…  
だったみたいですネ」

内田

「そんな事ないです！」

有希

「……残念、」

内田

「みくるさんは？」

一樹

「良い意味、悪い意味でも天然ですから、涼宮さんの機嫌が頗る良い時には彼に近付かないようですよ？」

内田

「ハア……？？」

羽生

「あうあう有希く  
お別れなのです」

有希

「……バイバイ羽生、」

一樹

「何故、羽生さんが  
見えるのでしょうか？」

内田

「信じれば、見えますよ？  
絶対にです……！！」

一樹

「絶対ですか？いつか  
見えると信じましょう」

有希

「…羽生コレ、  
後で食べて」

羽生

「あつ？何ですか？」

有希が風呂敷に  
包んだ物を渡す

有希

「…中身は  
…シュークリーム、」

羽生

「あうあうあうあうあ  
うあうあうあうあうあ  
パクッ美味しいのです」

内田

「羽生ちゃん！？今、  
食べちゃダメだよ！！」

有希

「構わない…」

内田

「もう、  
…」

バイバイゞ（＊・ ・ ＊）  
「」

羽生

「バイバイなのです、  
」

一樹

「さようなら！！」

有希

「羽生…またね！ノシ  
」

笑顔で手を振り別れた内田  
と羽生の二人…世渡りの鏡  
には合わせ鏡の様に仮面と  
竹刀が映っていた

内田

「龍騎の世界か…、  
」

第九話 告白は告白 彼女の箱編 完（後書き）

「へ？私が犯人！？！？」

「新作コロッケ食べる？」

「キ、キリノ……………」

「フフツ優勝だああ！！」

「ダンキュウ……………ん」

「冷静になろう、みんな！  
彼女はきつと無実だ」

「あの、  
バナナはおやつ？」

「ウツシャアアラー」

「…えと、アニメ好き？」

次回仮面ライダーユカイド

ライダー剣道！?!?!女子高生  
殺人事件と猫とタマちゃん

次回も変身（メエエツーン）  
ユカイド

次回も読むですよ！あう

第十話 ユカが逮捕！？（前書き）

「…これまでの…仮面…  
…ライダー…ユカイド…  
は…内田…ユカと…南―

長門…

「…なに？」

長門が…説明をするとだな  
そのなんだ―分かるだろ？

「…（コク）」

良かった後でユカと羽生に  
差し入れを持って行こうな

「…うん」

「シュークリーム…  
食べて…くれたかな？」



## 第十話 ユカが逮捕！？

仮面ライダーユカイド

### 第十話

《リフォメーション》

「うあああ！？ーッぐー！！」

雲を突き抜けて空から地面へと墜ちるカナーズは両足で叩き衝ける様に着地して  
カナーズフォンを操作

《3、8、2、1》

ファゴツアアーーーン

JSが戦闘の中で優雅に――  
蔑む様に空に浮かび二人を見下ろす魔女へと突撃する

カナーズ

「やれ！ジェット

スライガーー！！」

JSの内装ミサイルが魔女  
目掛けて発射されるが不  
然な軌道を描きJSに直撃

世界の魔女

「無駄よ？藤岡くん！」

カナーズ

「チツ、魔女め！」

《アタックライド

・ウォール》

カナーズの周囲を壁が覆う

ディエツチ

「ー時間稼ぎは  
期待出来ないか？」

カナーズ

「…保坂さん、」

世界の魔女

「…リディアス」

魔女が呪文を唱えると壁が  
崩れさり破片が二人を襲う

ディエツチ

「切りがないッ…」

《アタックライド

・リバース》

破片の全てをカードの力で

弾き返す

速水

「保坂…私を助けてよ、」

ディエツチ

「その手には、乗らん！」

《K A M E M R I D E D E C A D E》

仮面ライダー、ディケイド  
をドライバーから召喚

ディケイド

「魔女っ子の世界か…  
まあ悪くない！」

世界の魔女

「大盤振る舞いね！  
あら…居ない、」

辺りを見回すが彼以外  
人っ子一人居ない

ディケイド

「振られたのか？  
コスプレ魔女さん」

世界の魔女

「……………」

ディケイド

「大体分かった！  
可愛い魔女っ子を  
倒せて事か！！」

世界の魔女

「貴方が私を  
倒せるのかしら？」

見下した笑みを向ける魔女

ディケイド

「言っ たな……」

《KUUGA AGITO RYUKI  
FAIZ BLADE HIBIKI  
KABUTO DEN-O KIVA》

《FINAL

KAMEN RIDE

DECADE》

タッチパネル式携帯ツール  
ケータツチを装着して変身  
コンプリートフォームへと

ディケイド（C）

「フン、」

パンパンッと手を上下に叩  
きライドブツカーソードを

手でなぞる

世界の魔女

「あややま！？ちよつぴ、  
まずいかもねえ？」

ディケイド（C）

「どうした…

来ないのか？」

世界の魔女

「仕方がない…か」

前方に手を翳してカーテン  
を出現させて中から九体の

怪人が現れる

ディケイド（C）

「―平成怪人が勢揃い  
鳴滝みたいだな―！」

世界の魔女

「そ、オリジナルの  
实力を見せて―！」

ディケイド（C）

「フツ人気者は辛いな―！」

「うう  
」

お腹すいたよう…」

「ゴメンなさい

なのです、あう”ゝ」

街を彷徨う内田と羽生  
はて？なんでだろ

内田

「まさか全部、食べちゃう  
なんて！（くきゅう）」

内田のおながが可愛く鳴る

羽生

「あうあうあうあうあう」

内田

「ハア、お金も無いよ」

内田のサイフには！？

一円が2枚、五円1枚  
十円1枚足して十七円

さ淋しい……ハハ

内田

「ー！クンクン、  
いい匂い！ー！ー！」

ふらふら～フラフラ～

羽生

「！！？！？ゆッユカ！ー！」

「どこに行くのですか!？」

何処から伴なく漂う香りに  
誘われて内田は羽生を置き  
去りにして人込みに消える

????

「♪♪♪」

鼻歌を歌いながらスキップ  
するこれまた美少女は室江  
高校女子剣道部・部長こと  
千葉紀梨乃! (かぁいい、)

紀梨乃

「♪♪、

(むっ! 殺気ω・)」

「???

「うゝうゝ あゝゝ、」

紀梨乃の前にゾンビが!?

ゾンビ?

「コロツゲエゝゝメンヂゝ  
グリゝムゝ あゝゝ」

紀梨乃

「……………食べる?」

バックを開けて中から弁当箱と一緒にタッパを取り出して揚げ物をゾー内田に差し出した

内田

「ーいいの?本当に?

ほんとにホントに!?!?」

紀梨乃

「うん、良いよ(・ω・)」

内田

「うつぐず、えぐ、ふえゝ  
おいしいようゝゴホッ」

瞬く間に無くなる揚げ物達

紀梨乃

「落ち着いて？」

（うわ、八人前が！?!?!）  
「」

内田

「最後の一つ、  
いただきま…パクッ—

紀梨乃

「あゝッソレは、  
」

内田

「うぐ!?!おお—グハ!!  
（吐血?）———

ボタン

紀梨乃

「—やっぱし、（・ω・）  
」

いやオクラとアボカド入り  
納豆コロツケはねえだろ？  
紀梨乃ちゃん!!!!!!

???

「んん、んゝッあれ？」

内田が目を覚ましてふと隣  
を見ると紀梨乃が寝ている

内田

「あの、起きて!？」

彼女に内田が触れると

内田

「——冷たい、」

もう紀梨乃は怒らない

もう紀梨乃は泣かない

もう紀梨乃は笑わない

???

「13時24分―現逮、」

内田

「――え？」

ガチャツリ

無機質な音が内田を  
捕まえた

室江高校・剣道部

「腹減った！」

「キリノまだ、」

「ダンキュ~~~~ン」

「先輩、遅いですね？」

「うん…」

女子部員

川添珠姫 桑原鞘子

宮崎 都 東 聡莉

他2名

（石田虎侍・中田勇次）

忘れてた

（栄花段十朗）

剣道部・顧問&メンバーが  
紀梨乃を待っている

聡莉

「何か…」

あつたんでしょうか？」

珠姫

「うん…心配です、」

タマちゃんとさとりん

先輩思いだねえらいよ！！

野郎1（コジローだよ、）

「俺の朝昼晩飯がああ！」

野郎2（ユージだよ、）

「（この人、給料

何に使ってんだろ？）」

野郎3（ダンだよ、）

「ミヤミヤ〜！」

都

「ダンキュ〜〜〜〜ン」

ドタバタドタバタドタバタ

珠姫

「？」

バッアアンガラッバアアン

???

「先生は！」

石田先生居ますか!!」

コジロー

「どうしたんですか!？」

吉河先生、慌てて…」

大慌てで入って来た美人は  
担当科目国語・吉河先生だ

吉河

「実は（斯く斯く然然!）」

コジロー

「な（本当ですか!?!）」

二人が耳打ち囁きあう

コジロー

「みんな！」

自主トレしてろ、」

さっさと部を出ていく二人

聡莉

「やっぱり…何か、」

珠姫

「うん、」

不安げな後輩二人と

都

「フフ、おもしろそ！  
尾行しましょ！！」

鞘子

「名探偵サヤの出番だね！  
ウツシャアアラーー  
燃えてきた！！！！！！」

楽しそうな先輩と後輩

都

「シッ！  
うるさい！！！！」

鞘子

「ごめんね、」

聡莉

「マズイですよ、」

都

「なにか？（ニコッ）」

聡莉

「ヒイツなんでもないでしゅ！！」

珠姫

「（キリノ先輩ッ、）」

摺り足で後を付ける女子達

ユージ

「さっ僕達は練習練習！」

ダン

「……ハハ、」

室江高校・職員室

コジロー

「…………マジかよ、」

吉河先生

「ッ本当です……」

職員室のテレビは事件を伝えるニュースを流している

女子アナ

「本日…午後1時頃、室江高校生徒、千葉紀梨乃さんの刺殺体が一で発見されました、警察では遺体や現場の状況から今月に入って、8件に及ぶ連続女子高校生殺人事件と同一犯による犯行と断定——あつ、新しい情報が入りました犯人は……ええと——犯人は小学生！？小学生です——尚、番組の

予定を変更してこの後も引き続き事件の――

都

「……………」

聡莉

「うッ、」

珠姫

「キリノ…先輩、」

鞘子

「―そっくりさんだよ？

キリノが死ぬ訳がない！

キリノがツツキいのが―

うぐ、うぁスッン、…

うぁぁわぁぁー！！！」

職員室の前で聞き耳を立てていた彼女達はただ悲しみに信じたくない現実に関心を  
守るのに必死だった

## 留置場

内田

「違うんです！犯人じゃ…  
ありません！！わ私は…  
し、信じてえ！！―？」

頂垂れる内田の耳にこちら  
に近付く足音が聞こえた…

ガチャガチャ

「これから

審判が始まる、」

内田

「…審判？ですか？」

「そう、生か死の…」

「ライダーバトルがな、」

「明日の10時半頃に  
審判会で開かれる、」

内田

「…貴方は誰？」

「通り掛かりの  
お節介さんだ、」

「一応、  
覚えておくんだな、」

内田の意識はそこで途切れ

「世界の破壊者…か」

ディケイド…ディケイド…

戦え…

目覚めの日は、近い

漆黒の世界

「ハアハア―く、かはッ」

「大丈夫か？」

心配なんでね、」

「黙りなさ…い、ハアぐう  
スperlギア——…」

「かなり痛め付けられたな  
世界の魔女…やはり」

「ッ大した、事…ない——」

「舞台は整った、」

「そ…うクスクス、ゲホ」

「行きッなさい……——」

第十話 ユカが逮捕！？（後書き）

次回仮面ライダーユカイド

「私はユカイド？それとも  
…世界の…破壊者？」

「お前が、キリノを殺した  
お前が殺したんだ！！！！」

「タマちゃん、お願い  
キリノ先輩の仇を！！」

「返してください、  
キリノ先輩を！！」

「私が…殺した？」

「戦います、キリノ先輩の  
為に―私は戦う！！」

「私が弁護士の本心です」

次回も読むですよ、あう

第十一話 片鱗 内なる鏡（前書き）

「  
♪♪♪  
」

「何を作ってる？藤岡、」

「カレーです、かつ南に、  
以前ご馳走になったから」

「そうか、どれ味見をば」

「どうです？保坂さん、」

「足りないな…」

「な何が？」

「それは、  
自分で見つける物だ！  
分かるな？藤岡」

「はっはい！！」

「！あの子の目は、  
愛する娘に自分の気持ちが  
伝わってほしって目だ」

「なあ千秋、私達って―」

「皆まで言っな！  
バカ野郎！！」

「だって出番があゝ！！」

「こっコラ、  
頭をシェイクするな！！」

## 第十一話 片鱗 内なる鏡

仮面ライダーユカイド

### 第十一話

薄暗い廊下を金属が擦れる音が響く――鎖で後ろ手に縛られた内田は彼の言葉を頭で反芻しながら職員の男に連れられ大きな扉の前に立たされた。不安げな表情で職員を見るが男は見向きもせず職務を熟す

「此所だ、入れ！」

内田

「……はい、」

内田が開かれた扉の先へと

彼女が？ 子供じゃん

凶悪な本性を仮面の下にな

怖い怖い　　始めましょ！

ざわざわザワザワざわざわ

ザワザワざわざわザワザワ

真っ暗な部屋の中ポツと  
置かれた椅子と仮面…仮面  
仮面達…が内田を見詰める

午前10時

街頭テレビに審判の模様を  
伝えるニュースが映る

「本日、午前10時に開廷  
しました、連続女子高校生  
殺人事件の審判ですが被告  
は三つのライダーバトルの  
内―剣道を選択し…これを  
クリアしますと被告は無罪  
放免、自由の身と―  
尚、ライダーの募集を―  
ここで三つの審判のルール  
を―氏に解説して―

「タマちゃん、お願い  
キリノ先輩の仇を…、」

そのテレビを凝視する二人  
都は深々と珠姫に頭を下げ

珠姫

「ミヤコさん……」

都

「無茶は  
分かってる、けど―!」

オロオロと困っていたが都

が次に発する言葉に気付き  
スツと彼女を見詰め

珠姫

「私は剣道を、そんな事の  
為には…ゴメンなさい」

都

「ゴメンね！  
忘れて？タマちゃん」

気まづくなつた二人は  
本来の目的地へ歩を進める

審判会

内田の前に2 m近い鏡が用

意され不安に包まれた自分が映り余計に心が連揺れる

「ルールは簡単だ、五人のライダーを倒せば…無罪負ければ―死が待つ、」

内田

「…………ハイ、」

内田の前に14個のカード  
デッキが置かれる

「好きな物を取れ、」

内田

「―こ、コレで!」

内田が手にしたのはライド  
ブッカーだった

ヒイキイイヒイキイイ

鏡が不快音を発する

内田

「（コレで入れる？）」

内田が鏡にケースを翳すと  
ベルトを巻きドライバーを  
着けた自分が映る

内田

「――変身！」

腰に顕現したバックルへ飛  
び出たカードを挿入し変身  
すると鏡の中へと

午前10時30分

数日後

## 川添珠姫の家

不定期で開かれるは珠姫の  
アニメ鑑賞会

アニメなど誰も見ていない  
だが皆はテレビを食い入る  
様に見ている

「今日も―被告少女Aは…  
バトルをクリアあと二人  
で無罪となります―」

鞘子

「――（ぎりっ）」

都

「……………なんで、」

聡莉

「えと、…（オロオロ）」

珠姫

「…………（ギョッ）」

「…尚―明日のライダーが  
欠員となり再度、新たな  
ライダーを一般募集する  
と審判会が―」

鞘子

「頼む、タマちゃん―  
このままじゃ…キリノが  
私じゃダメなんだよ、」

都・聡莉

「私達からも、  
お願い（します）」

珠姫に頭を下げる三人の内  
鞘子の口の端から血が滲む  
唇を強く噛んだ所為だろう

珠姫

「わかりました、戦います  
審判なんかじゃ本当の事  
… 真実が解らない、」

珠姫

「キリノ先輩の―みんなで  
もう一度心から笑い合う

為に私は戦います!!」

ミラーワールド

「あと二人、あと二人で…  
私は犯人じゃない!!」

ホントウニ?

ユカイドは真ん中に噴水が  
ある吹き抜けの広い建物の  
中で次に戦う相手を落着  
きなく待っている

ヒイキイイヒイキイイ

ユカイド

「四人目、大丈夫…  
きっと勝てる！！」

バツシヤア

仮面ライダー、龍騎が噴水の  
水から飛び出る

## 《ソードベント》

空から剣が龍騎へと  
降って来る

くライダー剣道・ルールく

### 第二条

ライダーは剣を装備していない  
場合、ソードベントを  
バトル開始前に使用しなければ  
ならない、正し開始後  
はその限りではない

注：カードデッキに入っていない  
場合は審判会側から  
支給される

ライダー審判全書

剣道の欄より一部抜粋

龍騎

「……ふう、」

剣を構える龍騎に隙は無い

ユカイド

「……コレだ、」

《カメンライド・FAIZ》

《ATTACK ライド

・ファイズ EDGE》

ファイズに変身、ファイズ

エッジを構える

龍騎

「！（変わった！？）」

一瞬を突いて一気に懷に踏み込んでファイズエッジを

逆手にし振り上げる

ガッギン

超速の反応で鎧迫り合いに  
龍騎は持つて行く

龍騎

「ッ、（危なかった!）」

ユカイド

「――フツ、」

《フィニッシュ R I D E  
・ファイズ》

ユカイド

「うああわああー!!」

龍騎

「なぐあッ!？」

必殺の力で剣を裂いて吹き  
飛ばし噴水に激突した龍騎

龍騎

「ぐう（早く立たなきゃ）」

《FINISH ライド  
・ファイズ》

何とか起き上がろうとする  
龍騎にユカイドは容赦無く  
右足にフォトンブラッドを  
走らせる

龍騎

「殺られる訳には!!」

《ファイナルベント》

巨大な龍、ドラグレッダー  
と共に跳躍して火球を纏い  
ユカイド目掛けてキックを  
放つ

ユカイド

「——フッ!!」

ポインターで龍騎をロック  
オンし跳躍!! 赤き閃光へ

龍騎

「リツヤアアアア——!!」

ユカイド

「――」

《アタックライド

・ R E V E R S E》

両者が必殺技の直撃を  
喰らうが…その殆どを  
龍騎が受ける

ドサッ ドッ

龍騎

「――ッゴホ…ゲホ、」

衝撃で肺が縮み、咽び込む

《カメン O U T ・ ファイズ》

ファイズの変身が解け

ユカイドに戻る

ユカイド

「ハア、ぐっハ…」

イマダーリュウキハ  
ウゴケナイ

トドメヲサセ…

ユカイド

「勝負は…着いてる、」

タオセ…デナケレバ  
ツギハ―オマエダ

ユカイド

「でも、……」

ヤレ―コロセ…ディケイド

コロセコロセコロセコロセ

コロセコロセコロセコロセ

ユカイド

「……嫌だ―!」

……  
……ザンネン  
……  
……ダヨ  
……ユカ  
……

《FI - ATTACK  
RIDE》

ユカイド

「！？だダメ、」

ブッカードからカードが自動でバツクルへと挿入される

ユカイド

「言うこと！？聞いて？」

《YUK...DECADE》

10枚のカードが龍騎へと並べられる

ユカイド

「私は、

ディケイドじゃ——」

ディメンションキックがまだ立ち上がれず動けないでいる龍騎に放たれる

龍騎

「ああ——（動け！！！！！）」

《ファイナルベント》

???

「出乱裂破斬!!」

漆黒の斬弾が真横から  
ユカイドを弾き飛ばす

審判会

鏡から内田が飛び出して床  
をごろごろと転がり止まる

どうやら気絶している様だ

何事だ！？ イレギュラー…

ナイトだと？ 審判リストに

は載っていないかった筈だが

ヒイキイイヒイキイイ

珠姫が鏡の中から長髪長身の美女に肩を貸されて姿を現した―美女は周りの仮面達を見回して

心

「私は弁護士の榊心です！！  
―内田ユカさんの弁護を引き受けました、よってバトルは一時中止です」

午後2時45分

審判会・被告控室

「もう大丈夫？痛みは？」

内田

「あーい、まだ少し」

心

「御免なさい、あの時はアレしか……………」

内田

「榊さんが、謝る事…」

フン、ヨケイナコトラ

内田

「ッ（黙ってて！！）」

気絶した内田を医務室で適切な処置をして、たった今控室へと戻ってきたとこだ

心

「ーやっぱりまだ横に、」

華麗にベッドメイクする心  
何故に…ベッドが？

内田

「いいですよ、、」

心

「そう？」

心

「それじゃ、本題に入りましょ、内田さん」

内田

「ユカで、いいですよ」

心

「私もウラって呼んで、」

少し心を開いた内田に  
心は事件が起きた時の  
事を聞きはじめた

心

「つまり、記憶が  
無いって訳ね…」

内田

「…はい、」

心

「千葉紀梨乃さんの、  
死亡推定時刻は12時から  
13時の間、凶器はフォ  
ークで首筋の傷と一致…」

内田

「フォークは彼女から、」

心

「—そう、」

口許に手を当て考え込む心

心

「千葉紀梨乃さんと、  
会った時刻は？」

内田

「…分かりません、」

心

「—そう、」

フン、オマエガ—コロシタ  
チガウカ？ディケイド

内田

「（違う！）」

ナゼイイキレル？  
キオクナイダロ？

内田

「（そ、それは…）」

シンシンソウシツデムザイ

タジュウジンカクデムザイ

キオクソウシツデ—ムザイ

イヤア

カイリセイドウイツ  
セイショウガイカ？

八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八

八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八  
八

ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク

ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク  
ク

アツハハハハハハハハハハ

アッハハハハハハハハハ

ドレニセヨムザインダヨ  
ヨカツタナユカ

内田

（煩い、五月蠅い、）——  
——うるさい！！！！！！」

心

「!?!?!、ユカさん?」

内田

「ッなんでもないです、」

声を荒げた拍子に机に置かれた紅茶を零して小さくなる内田をカップを片付け机を布巾で拭きながらも冷静に分析する心

心

「（情緒不安定? いや…仕方ないか、）」

心

「ユカさん疲れてるのに 気分の良いものじゃないわね、」

内田

「……………」

心

「今日は、おしまい! 食べたい物ある?」

内田

「……シュークリーム、」

ポンと手を合わせて微笑みながら尋ねた心に遠慮がちに結局食べれなかった有希のシュークリームを思い出して返事を返した内田

心

「待ってて、美味しいお店を知ってるの！」

ボタン

規則だからと部屋を施錠して駆けて行った心の足音を聞き終えて内田は机に顔を伏せる

内田

「ツツく、ヒィア——  
グズ、うああわあ——」

ついに堪え切れず泣き出す

彼女の傍には…誰も居ない

審判会・関係者控室

「タマちゃん、大丈夫？」

珠姫

「ええ平気です、」

鞘子

「で、犯人は…  
どうだった？」

聡莉

「…やっぱり、  
恐い人ですか？」

珠姫

「…悪い人には

「見えませんでした、」

鞘子

「犯人、庇うの!!」

ドンッ

都

「……………」

聡莉

「!?(ビクッ)」

机を強く叩いた鞘子に都は顔を顰め聡莉は身体を縮こまらせて彼女の様子を窺う

珠姫

「まだ犯人と決まってるじゃない!」

鞘子

「あ、うゴメン、」

珠姫

「…いえ(ユージくんじゃないけど、戦って…よく

「分かんないや、」

紀梨乃が居なくなつて以来  
皆で集まつても笑顔は無く  
代わりに沈黙と悲痛

そして鞘子は自分の底から  
芽生えた黒い感情の扱いに  
困っていた

鞘子

「取り敢えず、  
明日会つてみる」

都

「（サトリ、あんたも  
付いてゆきな！）」

聡莉

「へ？」

都

「（サヤ先輩だけじゃ  
心配だから…ね、）」

聡莉

「（分かりました！）」

午後3時17分

翌日 午前9時21分

審判会・被告控室

「おはよう、  
よく眠れた？」

内田

「はい、」

心

「…そう、」

内田の目の下にはつきりと  
隈が見えるの確認しながら  
バッグから桜の意匠が施さ  
れた小綺麗な箱を取り出す

心

「…またシュークリーム、  
買ってきたの食べる？」

内田

「ありがとうございます」

阻喪とシュークリーム一つ  
を両手で持って食べる内田

心

「貴女に会いたって  
人達がー居るんだけど」

内田

「？私に、」

心

「そう、ただ…」

内田

「なんですか？」

心

「女子剣道部の  
子達なのよね、」

内田

「…………平気ですよ？」

心

「無理しないでね

貴女達——どうぞ」

そう声を掛けると鞘子に  
聡莉が部屋に入って来た

心

「ここに座ってね」

鞘子・聡莉

「失礼します、」

二人が内田と対面する

内田

「……………」

聡莉

「ええと…その、

（本当に小学生なんだ！？）」

内田

「……………」

コイツラノモクテキハ……  
フンツツマラナイナモノダ

内田

「（貴方には分かるの？）」

タイシタコトジャ… ナイサ

鞘子

「……ッ」

サツキカラユカヲニランデ  
ルコイツハワカリヤスイナ

内田

「……（そうなの？）」

聡莉

「… きツキリノ先輩を  
か返してください!!」

緊張に堪えられなくなった  
聡莉は鞘子を止める役も忘  
れて思いをぶつけてしまう

オヤオヤジツニツマラナイ

内田

「……（そんな言い方！  
ひどい！ひどいよ！！）」

鞘子

「――いつまで黙ってたんだ！  
お前が殺した！キリノを  
殺した！！返せえ！！！」

内田

「ひッ――ああ！？！？！？」

痺れを切らした鞘子が声を  
荒げて内田は自分に向けら  
れた怒りや憎しみに驚いて  
頭を腕で庇いながら震える

心

「貴女達！落ち着いて、」

「クク、アッハハッハハ」

心・鞘子・聡莉

「！？！？！？」

三人に…黒い笑い声が響く

内田？

「ぷ、クク私が殺した！！  
それが聞きたかった！！！！  
ズブツグヂュブジュツ！！  
違うか？アツハハハハハハ  
ハハハハハハハハアツハハ  
ハハハハハハハハハハハハ」

内田？

「お前達も！黄色髪の女の  
様に殺してやろうか？」

心

「ユカ…さん！？」

突然だった…一日しか内田  
を知らない心だか優しい娘  
だと思っていた彼女の余り  
の豹変ぶりに驚きを隠せず  
鞘子と聡莉は啞然と目の前  
の壊れた笑顔に固まる

内田？

「肉を突く感触は素晴らし  
い…溢れる赤にジュブビツ  
グチュツビュブ生の渴望を

求める！あの眼を！！見せて  
やりたい……見せてやる」

聡莉

「……誰？」

心

「ッ、危ない！！！！！」

心が叫んだ時には三人を遮  
る机を越えて内田は鞘子に  
飛び掛かり床に押し倒して  
彼女の首に掴み掛かる

鞘子

「な——うぐあ！？」

聡莉

「さサヤ先輩ッ！！」

心

「……ユカさん！！！！！」

引き剥がそうと内田に  
二人が掴み掛かったが

内田？

「邪魔を…するな！！！」

心・聡莉

「くっああ！？」

（キヤアッ！！）」

小学生の彼女からは想像で  
きない力で吹き飛ばされる

心

「だッ大丈夫…東さん？」

聡莉

「ッはい、なんとも  
…榊さんは？」

心

「平気ッ——よ？」

聡莉を咄嗟に庇って机で背  
中を強打した心は苦しそう  
に声を絞り出す

内田？

「黄色髪のトコロニ  
ツレテツテアゲルヨ！」

鞘子

「ーぐツツがあーヒウ…」

鞘子の頸部に内田の指が爪  
が痛々しく食い込む

心

「ッー（ユカさん！！）」

自分のスーツの内ポケット  
を慌てて弄る心

聡莉

「????」

内田？

「キイロガミノ  
オンナハ、イタカ？」

鞘子

「————」

内田の手の中で藻掻くだけ

で答えない…それも徐々に  
弱く小さくなっていく

聡莉

「さ…サヤ先輩ッ  
サヤ先ぱッ——え？」

心

「耳、塞いでて！」

心

「二人とも今—助ける—！」

机に置かれたティーカップ  
の銀の装飾にデッキを翳す

心

「変身—！！！」

腰に顕現したベルトに  
デッキを装着して変身

《ナスティベント》

巨大な蝙蝠の増幅超音波が  
部屋を包み込む

聡莉

「んン！？ン~~~~！？！？」

内田？

「ウグ！？アアアー！！！！」

耳を塞ごうとも頭に直接響く形容しがたい音が鞘子の首を絞める内田を襲い手を離して机に寄り掛かる

鞘子

「————！！？ぶはっ！！！！！！」

内田？

「グウ…アジナマネヲ！？  
オマエハ—ダマツテイロ  
ユカア！！！！！！」

そうは、いけないよ！！

内田？

「クソ…オマエノキュウチ  
ヲナンドスクツテヤッタ  
コトカ！！！！！」

それは感謝してるよ…でも  
こんな事はイヤアだ！！

内田？

「ダマレエエッ！！！！！」

内田は何度も額を机に打ち  
付ける…赤い飛沫が可愛い  
彼女の顔を汚していく

内田？

「フフクハハ…マアイイ  
モウートメラレナイ…」

内田？

「うああ…——  
(ビクッビクッビクン)」

心

「ユカさん！！！」

崩れ落ちる内田を抱き抱える彼女の眼は焦点が合わず  
身体は痙攣を繰り返す

心

「大丈夫、もう大丈夫ッ  
だから安心して、」

内田

「うあッああっちがうー！  
わた、わたしは殺して……  
しーしんじて？おねがいい  
ちがうちがうちがううう」

心

「東さん、医務室の先生を  
呼んでくれる！！医務室は  
分かる？」

聡莉

「ヒヤッい、分かります」

心

「それと鎮静剤も必要だと  
伝えて！よろしくね？」

聡莉

「はい！あつサヤ先輩は」

鞘子

「平気！自分で行くから  
ほら、早く？」

首を摩りながら起き上がる  
鞘子は笑顔を聡莉に向ける

聡莉

「すぐに戻ります！」

医務室へ駆けていく聡莉を  
見送ると鞘子も…ゆっくり  
部屋を出ていく心は鞘子が  
出ていく時に本当に小さく  
頭を下げたことに気付いた

心

「――ふう、」

内田

「スウークウ……」

午後6時3分

ベッドから安らかな寝息を  
たてる内田の髪を手で梳く  
心は優しく微笑む

????

「悪いな、ウラツち」

心

「!?!?―びつくり

させないで下さい、」

男は気にした風もなく話を  
続ける

????

「お疲れモードか？」

心

「—そうかもね？」

彼は心の隣に椅子を持って

きて座る

心

「あの—近いです””」

????

「ん、そうか？」

心

「ええ近いです！！」

又しても気にした風もなく  
話を続ける彼に嫌そうな顔  
を隠さずに向ける心

心

「いつも、

そうなんですか？」

????

「—ん、なにが？」

内田のほっぺをぶにぶにと  
指で突つつく彼は振り向か

ずに返事を返す

心

「もう！どうして貴方は…  
知りません！」

???

「ハハッ怒った顔も  
良いね！ウラツち？」

心

「ハア、  
大変だったんですよ！！」

???

「知ってる、サヤツちも  
かぁいいな！」

心

「見てたんですか！？」

???

「まあな、」

心

「見てたのなら  
助けてください！！」

???

「こつちにも事情がね…」

制約をクリアするのに  
時間が掛かったからな」

心

「謝りに来た時は  
驚きましたよ」

????

「だっけか？」

心

「そおうです!!  
何を見てたんですか？」

????

「いや、ユカツちが  
心配で…ずっと…」

心

「——（じーッ）」

彼の眼を凝視する心

????

「惚れたか？ウラツち、」

心

「ちツちがー生憎だが俺は  
ユカツちが好きだ!!」

心

「――（ダメだ全然  
この人が掴めない）」

頭を抱えだす心

???

「俺が滞在できる時間は  
ぎりぎり…だな」

心

「――そうですか…」

遡ること3時間

「ありがとついでいます」

「いえ、これが私の  
仕事ですから、」

「また何かありましたら  
お呼びください」

颯爽と去っていく医師  
うんうんと感心する心

心

「さすがプロって感じ？」

ガチャ

心

「？忘れ物ですか、」

先程の医師が何故か急いで  
引き返してきた

「今回の報酬はス〇ス銀行  
に振り込んでください」

心

「は？」

再度去っていく医師？

心

「どこの

スナイパーですか、」

コン コンッ

心

「その手の頼み事は、

ロ○ナプ○のホテル

モス○ワか若しくは

ラ○ーン商会にでも

お願いッします！！！」

鞘子

「？あの、室江校の

桑原ですけど、」

心

「え！？御免なさい」

今、開けますから」

またかと思ってツツコミを入れたが恥ずかしい思いをしたと頬を紅葉させながら

ドアを開け鞘子を中へ通す

心

「〃〃コホン、ご用件は  
なんでしょうか？」

鞘子

「??? 顔―赤いですよ、」

心

「き〃気にしないで〃〃」

鞘子

「? はあ、」

心

「貴女、一人?  
ケガは大丈夫?」

鞘子

「はい! 全然、  
平気でツツ痛てて!!」

右左そして最後にクルンと  
首を回したのがマズかった  
のか顔を顰める鞘子

心

「無理しないで!？」

鞘子

「そっうですね、痛てて」

心

「ここ座って？」

心が椅子を引き示す

鞘子

「すぐ失礼しますから、」

心

「ーそう」

鞘子

「内田さんは？」

「ーて寝てますね、」

鞘子

「じゃ、また今度に

ー待ちなさい!!」

ベッドで寝ている内田を見て帰ろうとする鞘子の肩をギュッと掴んで引き止めた

心に鞆子は錆び付いた玩具  
みたいに首を彼女に向ける

鞆子

「ナンデスカ?――」

心

「まだ用を  
聞いてないけど」

鞆子

「いやあ大した事じゃ  
ないんで…あはは?」

心

「決めるのは―私よ!」

心の勢いに押され顔が  
引き攣る鞆子

鞆子

「ッ内田さん?ちゃん?  
謝ろうと思って――」

心

「じゃ謝って!―!」

鞘子

「いや寝てます…し」

心

「だから？」

鞘子

「ええええ！?!？」

心

「睡眠学習って知ってる？  
実際は効果ないけど、」

鞘子

「まあ学生ですし…  
成績も残念ですけど」

心

「要するに気持ちの問題！  
後でユカさんには私から  
伝えるけど貴女の口で、  
言葉で、言わないと！！  
ダメだと思うよ！！！」

心

「今は寝てる…でも心には  
届くと私は思いたいから  
ううんー想ってる」

鞘子

「榊さん…キリノなら多分  
同じ事を言うと思います  
でも私は彼女を犯人じゃ  
ないかと…疑ってますよ  
あれを見たら誰だって―  
こんな気持ちで……」

心

「私はそれでも構わないと  
思うよ 桑原さん」

鞘子は内田が眠るベッドの  
隣にあるイスに座る

さつきは…その言い過ぎた  
その歳でライダーやら審判  
をやらされてさ私を含めて  
内田さん？ちゃんかな？の  
気持ち考えてなかったよね

その事は謝るよ

ゴメン！！ゴメンなさい…

頭を下げる鞘子の肩に  
そつと手を添えた心は

心

「さ、帰りなさい…お友達  
待たせてるんでしょ？」

ほらほらと鞘子を急かす心

鞘子

「えと！？そッそれじゃ！」

バタンッ

「うああ！？いやッイヤだ！！  
嫌アア！！！！！！」

数十分おきに痙攣と謔言を  
繰り返す内田の看病で日は  
暮れていく

現在・被告控室

???

「進行が早いな、……」

???

「それで真犯人は  
解ったか？」

心

「――」

顔を伏せて首を力無く横に  
振る心を見て彼は

???

「空を飛ぶ牙について  
調べてみる、」

心

「空を…飛ぶ…牙、」

???

「大事な事だ一応じゃなく  
覚えておくんだな、」

全てを知っている様な彼に  
問い掛ける心

心

「貴方は、何者なの？」

???

「通り掛かりの  
お節介さんだ!!」

心

「空気を読まないが  
抜けてますよ？」

???

「そう褒めるなよ！  
ウラツチ」

心

「もう!! いいです!!  
それは!!!!!!」

盛大に溜息を吐いた心が顔  
を上げると彼は部屋から掻  
き消えていた

## 第十一話 片鱗 内なる鏡（後書き）

さあて次回のユカイドは？

「こなたです、いきなりの  
シリアス展開…さらに！？  
ウラちゃんがつくい！！」

「…今回は真面目ね、」

「私がナイトだ！！  
—お前だったのか！？  
私もナイトだ！！  
また騙されたな！！」

「つかさあ、ハア」

「さあ、みくるさん  
やつちやて」

「ふええ！？なんですか？」

ゴンツ！！

「こなたを信じた、  
私がバカ野郎だったわ」

「ぐおお！？！？かがみん…」

次回仮面ライダーユカイド

強敵デ○ア○ー登場!?

戦えブ○ード○レイバー!!

次回も変身(ブレイブ)

ユカイド

次回も読むですよ!あう

第十二話 叶えたい決意 叶える力 タマ龍騎編 完（前書き）

今、闇の魔王が目覚める…

「ふふつかあゝかつか！……！！

トミー、クラウド、イリー

待たせたな、クツクク！」

「さて、読者の諸君も

待たせたな！かつかか、

これより闇の魔王Kが

前書きを乗っ取るのだ！

クツクク見ている！いや

読んでいろ！……！！」

「先ずは、ふっクク、フフ

内田ユカアアアア！」

「なんですか？圭一さん」

「充分な素材だ！ワツハハ

そうだなあ？スク水だ！

ベントラー！！！！！！」

「へっ？きつキャアア！？」

「やはり俺の目に

「狂いは無いクウツク」

「恥ずかしいよう、」

「フフ！ハアツハハ！！！！  
次は南力ナアア！！！！」

「おおー！？やっやめろ！」

「ふんツムゝカアツ！！」

「！似合つてんじゃん？  
私、＼どうかな」

「グツジョブ！俺、やはり  
メイドだろメイドじゃない  
メ・イ・ドだああ！！！！」

「次は南チアキい！！！！  
先生だ、教育実習生＋  
メガネだ、あえてな！」

「ムツ普通だな？」

「分かってないトコも  
萌えるぜええいい！！！！！！」

「今・前書きラストは  
南ハル力だああ！！！！  
勿論、白ヒモビキニだ！  
ブッハア…読者の諸君に  
お見せできないのが…  
残念でならん！！！！」

「うう、やっと出番かと  
思ったのにいい！！！！」

こうして闇の魔王Kの  
前書き&後書き支配は  
続くのだ！良いぞ！！  
もっとやれ！！！！！！

第十二話 叶えたい決意 叶える力 タマ龍騎編 完

超剣戦隊

ブレードブレイバー

デスアーマー

「フツワハハハハハッ！！  
今日がブレイバー！！  
お前達の最期だ！！！」

レッドブレイバー

「くっ俺達は負けない！」

デスアーマー

「コレでも喰らえッ  
ブレイバー！！！！！」

ピカアアアアアアアア

ドッガン、ドガアアッッ

レッドブレイバー

「ぐわああ、——うう」

デスアーマー

「私の勝ちだ！ブレイバー  
ワッアハハハハ！！！」

????

「そうは、させない!!」

デスアーマー!!!!!!」

????

「トオウツ!!」

デスアーマー

「!?!?!?何者だ!!!!!!」

レッドブレイバー

「き君は!?!」

ブラックデュラン!」

ブラックデュラン

「ブレイバー!!」

ダブル・アトミック!!

ファイヤーブレードだ!!

いくぞ!!!!!!」

レッドブレイバー

「ああ!

ブラックデュラン!!」

レッドブレイバー  
ブラックデュラン  
「ウオオオオーーーー！！！！！！」

デスアーマー

「ムダだ！キサマ達では  
私には勝てん！！」

ブラックデュラン

「黙れッデスアーマー！！  
俺達は負けない！！！！」

レッドブレイバー

「俺達の剣には――この星に  
生きる全ての生命の思いが  
込められている！！！！！！」

レッドブレイバー

ブラックデュラン

「アアトミツクツツ！！  
ファイヤアー！！！！！！  
ダッブウルツツ！！！！！！  
ブレエエドオオ！！！！」

ドンパンドンパンドンパン

ドーンジャンジャンジャン

次回予告

真超剣戦隊

ブレードブレイバー

NEW・LEGEND

ピッ

審判会・被告控室

「……………（ぽかーん）」

心に勧められ内田は

『真超剣戦隊

ブレードブレイバー

NEW・LEGEND』

第12巻に収録された

パイロット版第一話

『プロローグ』を

一緒に観ていた

心

「どうだった？ ユカさん！」

「キラキラキラキラ」

内田

「へ！素晴らしいです、

はい（よくわかんない）」

心

「うんうん！特にブラック

デュラン、変身前は――

エトセトラ・etc.etc.etc.

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

et c . et c . et c . et c . et c .

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

e t c . e t c . e t c . e t c . e t c .

etc. etc. etc. etc. etc. etc.

内田

「ぽかーん」

## 仮面ライダーユカイド

### 第十二話

#### 漆黒の世界

世界の魔女

「順調ね、クスクス」

スperlキア

「どうしてだ？ユカイドと  
龍騎は生きてるぞ…」

????

「バカ野郎だな」

スperlキア

「あゝあゝん！」

世界の魔女

「ハイテート役立たずに  
構うことはない」

ハイテート

「その通りだな」

スperlキア

「誰がバカだ役立たずだ！  
腹立つんだけどな！！」

ハイテート

「なに本来の計画通り  
事は進んでるだけだ」

スperlキア

「ユカイドを  
倒す筈じゃ？」

世界の魔女

「どうやらディケイド化が  
進んでるみたいだから」

スperlキア

「それで？」

ハイテート

「龍騎の世界を  
彼女に救ってもらう」

スperlキア

「えッ！？―そうなの……  
てか、なんでデメエは  
偉そうなんだ！！」

ハイテート

「… 同格と



午後5時56分

「そうですか、  
ありがとうございます―ふう」

心は彼から聞かされた空を  
飛ぶ牙について事件関係者  
達に聞いて回っている

心  
「かなり目撃されてる  
一体：何なの？」

考え込む心だが日の陰りに  
気付き携帯の時刻を確かめ  
ると内田と約束した時間が  
迫っていたので急いで審判  
会へと駆け出したが

ドンッ

???  
「―っきゃ!？」

心  
「ッ―御免なさい、

貴女は…川添さん!？」

珠姫

「あ! 榊さん、」

心

「急いでて…怪我は？」

ぶつかった拍子に尻餅を突いた珠姫を引き起こした心は心配そうに彼女に怪我がないか確認する

珠姫

「はい、大丈夫です!」

心

「こんな所で、  
どうしたの？」

同じく急いでたようなので珠姫に疑問を尋ねてみた心

因みに繁華街である

珠姫

「＼＼えと＼＼プレイヤーの  
限定BOXの発売日…で  
その＼＼予約してたから」

心

「！ソレって新シリーズの  
ブラックデュランも出てる  
えッ川添さん好きなの！？」

普段のクールさは消え失せ  
普通の女の子に戻る心

珠姫

「＼＼＼＼はい＼＼」

心

「そうなんだ！特に  
ブラックデュランが」

珠姫

「いえプレイヤーが」

心

「いえいえデュランが」

キャッキャッキャッキャッ

キャッキャッキャッキャッ

手を握り合いくるくる回る

心

「タマちゃん!!!!!!!!!!」

珠姫

「ウラさん!!!!!!!!!!」

抱き ヒシ ギュ

人目も憚らずに抱き合つて  
見つめ合い彼女が同士だと  
確信した心と珠姫

午後7時19分

審判会・被告控室

心

「……買ってしまった、」

超が付く大ファンとは言え  
仕事中に我慢出来ずに限定  
BOXを買ってしまった自分  
に呆れて机に置いたソレを  
複雑な表情で見詰めてる心

内田

「…アハハ、観ますか？」

心

「いえ、でも、やっぱり  
ダメダメ……」観る」

いそいそと三つあるBOXの  
一つを開ける、一つは保存  
一つは鑑賞、一つは予備だ  
因みに基本中の基本である

心

「（ワクワクドキドキ）」

内田

「（ホントに好きなんだ）」

真超剣戦隊

ブレードブレイバー

NEW・LEGEND

ナレーション

「突如、復活したデスアーマーにブルー、イエロー、グリーン、ピンクが倒されてしまう、そしてレッドも窮地に、しかっあしい！！そこへブラックデュランが現れ共に放った正義の突きがデスアーマーを倒したかに見えたが！?!？」

珠姫

「おお（キラキラキラキラ）あッ！この港よく特撮で使うな―ムツ！ここつて地下水を貯める施設なんだよね アレの最終回で王と激闘を繰り広げて…それから必ずこの場所は

出てくるようになったな  
…若干使いすぎだね、」

珠姫家・タマちゃんの部屋

珠姫

「（内田さんもプレイヤー  
好きだって―無実を証明  
するには…）」

珠姫

「よし！明日ッ捜すぞ！」

午後9時35分

グツと握りこぶしを作って  
明日に燃えるタマちゃん

翌日とある土手

シャカシャカシャコシャコ

珠姫が猛スピードで自転車を風を切り裂きながら漕ぐ  
3、40キロ程は出てる筈

たぶん

???

「あつ！タマちゃぁーん」

キイキイイイツツ

珠姫

「サヤ先輩？それに  
—みんなも！？」

鞘子と都に聡莉が  
仲良くお散歩中？

鞘子

「急いでどこ行くの？」

珠姫

「…実は、——」

心と出会い、そして内田の  
為にこれから——に行く事を  
申し訳なさそうに話す

珠姫

「——ゴメンなさい！！」

シャカシャカシャコシャコ

頭を下げると直ぐ様に  
走り去る珠姫

鞘子

「……………」

聡莉

「あの、サヤ先輩？」

都

「——（ハア、）」

鞘子

「ゴメン!!!!!!!!!!」

都・聡莉

「へ！？（ひゃあ！？）」

いきなり、最敬礼よろしく  
頭を下げた鞘子に驚く二人

聡莉

「どうしたんでしゅか！？  
シャヤしえんぱい！？」

都

「サトリ取り敢えず  
落ち着きなさい！」

鞘子

「私らしくなかった  
キリノが見てたら  
笑い者だね！」

聡莉

「サヤ先輩……」

都

「ふふつ（世話が焼ける  
先輩だことで””」

鞘子

「ようし！私達も！！  
タマちゃんと一緒に  
……―何だっけ？」

聡莉

「ええと、あれ？」

都

「空を飛ぶ牙、でしょ！」

鞘子

「そうそう、ソレソレ！」

エイエイッオーと駆け出す

三人だが…

♪ テッテッテッテッテッテ  
ンテッテッテッテッテ  
ン俺、参上ッ！！！！！！♪

都

「あっ！？  
ダンくんからだ」

ドガシャアアアア――

盛大にずっ転けた

鞘子と聡莉

都

「もしもし、ダンきゅん？  
え！？今から…ゴメンねえ  
とっても大事な用事なの  
―もちろんダンきゅんが  
世界で一番好き””」

ピッ

都

「さっ、行きましょ！」

クルッと雰囲気を変える都

鞘子・聡莉

「（何っ―変わり身だ！）  
（さすがミヤコさん！）」

真超剣戦隊

ブレードブレイバー

NEW・LEGEND

レッドブレイバー

「く、先に行け！

ブラックデュラン……」

ブラックデュラン

「ブレイバー……どうした！？  
なッその傷は！？！？」

レッドブレイバー

「フツ正義の味方に嘘は  
吐けないようだな、」

デスアーマー

「フツワハハハハハ！！  
ブレイバーは動けない！  
ブラックデュラン貴様も  
死ねえい！！！！！」

ピカアアアアアアアア

ズドンドガンボガアーン

レッドブレイバー  
ブラックデュラン  
「うわああああー！！」

ブラックデュラン  
「——ぐう大丈夫か？  
ブレイバー、」

レッドブレイバー  
「すまない…君に再び  
剣を持たせてしまった」

ブラックデュラン  
「この—剣は怒りや憎しみ  
じゃない！全ての優しさや  
愛！人の…世界の希望を！  
護る為に俺は立ち上がった  
ブレイバー！！こんな所で  
倒れている暇は無いぞ！！  
ブレイバアアアー！！」

レッドブレイバー  
「俺は…皆の笑顔が見たい  
デスアーマー…諦めない  
最期までなアー！！！！」



ひとり寂しい内田は全52話をぶっ続けで観てみたい

内田

「ウラさんまだかな？  
――さみしいなあ」

.....

内田

「羽生ちゃんは、  
どこだろう？」

午後3時29分

内田の傍に羽生は居た

羽生

「ユカああ！ボクが、  
見えないのですか？  
あうあうあうあう」

.....

一方、心と珠姫達は

心

「ーそう、ありがとう」

珠姫

「∴ “ありがとう”」

聡莉

「へーティツシュ配り？  
ちち違いますー！！」

都

「写真？（ぶつ殺すぞー！！  
テメエエー！！！！！！）」

鞘子

「ー∴ ダアーツー！！  
全然ダメだ！？」

空を飛ぶ牙についてみんな  
で聞き回るが全く収穫無し

午後5時53分

心

「今日は本当にありがとう  
タマちゃんに…みんなも  
ユカさんの為に！！」

珠姫達に深く頭を下げる心

珠姫

「キリノ先輩の為ですから  
それにブレイバー好きに  
悪い人は居ません！！！！  
頭を上げてください」

心

「ふふっ

ユカさんも喜ぶわ」

鞘子

「あれっ何だろ？見て！」

鞘子が指差す方を皆が見る

心

「！？空を飛ぶ牙」  
逃がしません！！」

宙を漂う透明な牙を追って  
駆け出した心

珠姫

「ウラさん！？！？みんなは  
此処に、危険だから！！」

鞘子

「わかった、――  
……タマちゃん！！！！」

駆け出した珠姫の背に  
鞘子が声を掛ける

珠姫

「？」

鞘子

「頼んだよ……  
あの子の為にもね！」

珠姫

「はい！頼まりました！！」

珠姫は心を追って路地裏へ  
消えて行く

聡莉

「タマちゃん、  
大丈夫でしょうか？」

都

「サトリ…  
心配は要らないよ」

鞘子

「だって川添珠姫だよ！」

路地裏

「キャアアアッー！！」

「その命！  
俺が貰い受ける」

ステンドグラス色の彫刻を  
思わせる姿…キバの世界の

怪人、ファンガイアが女子  
高生に迫る

# 《アドベント》

G y a x t s u a x a

巨大な蝙蝠がファンガイア  
を突き飛ばす

ナイト

「！？彼の言っていた  
ファンガイアですか？」

ハイテート

「お早い到着で」

ナイト

「貴方が連続女子高校生  
殺人事件の真犯人ね！」

ハイテート

「だったらどうする？  
ナイト…いや榊心」

ナイト

「貴方を審判会に  
叩き出す！！！！」

ハイテート

「おお怖い怖い」

翼召剣ダークバイザーの柄  
に装填しようとデッキから  
カードを取り出したが

ハイテート

「おっと！」

ナイト

「！？カードがー」

吸命牙によつてナイトの手  
からカードが弾かれる

ハイテート

「さて、食事の続きだ」

無数の吸命牙が出現、女子  
高生へ牙が向けられる

「ヒイ！？ヤアイアア！」

《ストライクベント》

襲い掛かった無数の吸命牙  
を火球が焼き飛ばしていく

ハイテート

「……龍騎か？」

振り向くとドラグレッダー  
と共に龍騎が火で燦るドラ  
グクローを突き出していた

龍騎

「ウラさん、彼女を！」

ナイト

「ええ!!」

《トリックベント》

三体に分身したナイトの一  
人が彼女を路地裏から連れ  
出して一人がハイテートに  
剣を振り上げる

ハイテート

「虚像ごときが…

俺に勝てるとても？」

振り下ろされる前に剣を掴んで握り折り分身は消える

龍騎

「ウラさん！」

ナイト

「逃がす訳には！」

ハイテート

「時間は大切に使え

ライダーは…特にな」

龍騎

「!?!?!」

ナイト

「チイツ、」

ハイテート

「それに―此拠は

鏡の世界だからな」

龍騎・ナイト

「そんな!？」

午後5時58分

審判会・被告控室

足音が控室に近付いてくる

内田

「（ビクッ）だっ誰？」

「釈放だ、ユカっち！」

控室に入って来た出店のお  
面を着けた男がそう告げる

内田

「…その声、」

「ほら」

内田

「わわッ!？」

内田にドライバーとライド  
ブッカードを投げ渡す彼

「この世界のライダーは  
鏡の世界に於いて時間  
制限がある、ユカイド  
二人を助ける!」

内田

「ッでも、二人の居場所が  
私…わかんないよ!」

「便利アイテムを  
持ってんじやん  
なあ甘党の羽生」

羽生

「もちのろん!あう  
持っているのですよ  
エッヘンなのです!」

羽生が天高く掲げるソレは  
世渡りの鏡だ

内田

「そつかあ！ソレがつてえ  
羽生ちゃん！？居たの！！  
あれっ？見えない、」

宙に浮かんでいる鏡の辺り  
を見回すが羽生の姿はない

羽生

「ユカ、ボクはずっと傍に  
居たのですよ…あう、」

内田

「あッ！声は聞こえる」

「ほら、急げ！あと6分」

内田

「あッハイ！てえいッ！！」

鏡にバックルを翳すと腰に  
顕現しブッカーからカード  
を取り出して挿入口へ

内田

「ライダァァ、  
変ッ身ッッん!!!」

《カメンライド

・ユカイド》

1号よろしくポーズを決め  
ユカイドに変身

羽生

「ユカを珠姫と心の下へ  
あうあうあうあう」

鏡に龍騎とナイトが映った

ユカイド

「ーしゃあ!!!」なんて」

口許に拳を持っていき気合  
いを入れるとユカイドは鏡  
の中へ飛び込んだ

ミラーワールド

午後6時

活動限界まで約5分

ヒイキイイヒイキイイ

ユカイド

「ウラさん！川添さん！」

ナイト

「ユカさん！？どうして？」

水溜まりから飛び出し二人  
の下へ駆け付けたユカイド

ユカイド

「釈放だそうです？」

ナイト

「釈放？そんな筈は、」

龍騎

「とにかく今は怪人を！」

ナイト

「そうね、」

振り向く三人と律儀に待つ  
ファンガイアのハイテート

ハイテート

「どうも、ユカイド」

ユカイド

「ッファンガイア！貴方の  
所為で私がどれだけ酷い  
目にあつたか許せない！！  
覚悟してよね！！」

.....

ハイテート

「それでいい、内田ユカ」

ユカイド

「え？」

ハイテート

「仮面ライダーの諸君！！  
俺が相手をしてやる」

ナイト

「言われなくとも  
喰らいなさい!!」

《ファイナルベント》

ダークウイングと共に飛翔

ナイト

「出乱…裂破斬!!!!!!」

漆黒の翼がナイトを包んで  
斬弾となってハイテートに  
突っ込む

ハイテート

「残念だが、  
キャンセルだ!!」

もう少しで直撃の筈が  
カードの効果が消える

ナイト

「何!? ツク、」

体制を立て直して着地する

龍騎

「…どうして？」

ユカイド

「……タイムベント」

ハイテート

「ご名答！よく見てたな  
君は……実に頼もしい」

ハイテートがひらひら振る  
手には1枚のカードが

ハイテート

「タイムベントが有る限り  
俺は決して倒せない」

ユカイド

「それはどうかな？」

《フィニッシュユライド

・ユカイド》

《ファイナルベント》

オーラ状のカードが10枚  
ハイテートの前方に出現し  
更にドラグレッダーと共に

龍騎が跳躍

ユカイド・龍騎

「いっけえええー！！！！！」

しかしナイト同様  
途中で失速する

ハイテート

「無駄だ！永遠に  
勝てはしない！！！」

ナイト

「ハッ！！！！！」

ハイテート

「つぐあ！？！？！」

背中に鋭い痛みが走り思わ  
ずカードを手放してしまう

ナイト

「フツ大技に気を取られて  
背中、がら空きね！」

ハイテート

「クリアーベントか！？！」

ハイテートの背後から徐々にナイトが姿を現した

ユカイド

「ーよつと、」

宙を舞うカードを背伸びをしてキャッチしたユカイド

ハイテート

「……………」

ナイト

「さっ観念しなさい！」

ハイテート

「何故だ？」

龍騎

「状況を理解してますか？  
…ファンガイアさん」

ハイテート

「してるから  
余裕なんだよ」

ナイト・龍騎

「!?!?!?!?」

「ああーぐ、ぎ…がう!?!?」

ナイト・龍騎

「ユカさん（内田さん）!?!?」

ユカイドが頭を抱えて  
倒れ込み藻掻き苦しむ

ハイテート

「さてと、」

ユカイドからタイムベント  
を奪い取る

ハイテート

「状況理解が

出来ないのは誰かな?」

龍騎

「…（そんな!?!?）」

ナイト

「最悪ね、」

切り札を二人が使って内田も気を失い活動限界が迫る中でタイムベントも奴の手の中に有る状況に仮面の中で顔を顰める心

心

「——え！…どうして！？」

「ハイテート  
詰めが甘いな」

ハイテート  
「なに！？」

彼がハイテートからカードを奪い取り懐に納める

「油断大敵って奴だ、」

ハイテート  
「何者だ？」

「ただの通り掛かりだ  
一応、覚えおけ!!」

変身の解けた内田に近付き  
ブッカードから2枚カードを  
取り出す

「絶体絶命のピンチに  
タマは…どうする？」

龍騎

「諦めません!! みんなの  
笑顔を取り戻す為に私は  
ライダーになったんです  
だから私は最期まで戦う  
ブレイバーの様に!!!」

2枚のカードが輝く

「よく言った、  
切り札を受け取れ!!」

カードを龍騎へと投げ渡す

ハイテート  
「させるかあ!!!!!!」

カードに腕を伸ばすが

ハイテート

「！？動かないだー！！」

見えない腕にハイテートは  
身体を掴まれた様な感覚に  
捕われる

「ラディアス、  
一時停止だ！」

ハイテート  
「ー魔女と同じ力か？」

呪文がハイテートを拘束し  
て龍騎はカードを掴み取る

龍騎

「コレは？」

「今回だけの特別仕様さ

ベントインするんだ!」

龍騎

「…わかりました、」

龍騎がカードを左腕のガン  
トレットに近付けると周囲  
を烈火の風が吹き荒れて左  
腕を包み込んだ

ハイテート

「サバイブのカードか?」

「違うな!」

ガントレットが長剣へ  
変化する

龍騎

「コレ!? ブレイバーの、」

《ブレイブ》

長剣の柄の中へとカードを  
装填すると烈火の風が龍騎  
の鎧へと変わる

ナイト

「まるで本物の  
レッドブレイバー!？」

龍騎B

「——ふう、」

鎧の端々から烈火が溢れる

《フィニッシュイベント》

長剣が龍騎Bから  
溢れ出る炎を纏う

龍騎B

「——ハァー、」

ハイテート

「（拘束は解いたが龍騎の  
気で…俺が動けないか  
彼女を舐めていたな）」

龍騎B

「リヤッ！！」

キアツヤアアア！！！！」

気合い一閃

瞬迅の突きがハイテートの  
身体を貫き通した

ハイテート

「ッッゴオブ！！！！」

ハイテートを串刺しにした  
長剣の纏う炎が消し炭さえ  
残さずに燃やし尽くす

ナイト

「急いで！既に

限界時間を過ぎてる！！」

世界が存在を喰らい始める

ナイト

「貴方も早く！！！！」

「ユカを連れていく、  
先に行つてろ！！」

龍騎

「…内田さんには  
謝らないと…生きて、  
帰つてきてください！！」

自分達の世界へ戻る二人を  
見送ると内田の頭を優しく  
彼は撫でる

「切り札は最後に切る物だ  
ジョーカー…だからな」

「テメエは寝てろ！  
ユカっち、またな」

翌日 室江高校 剣道部

鞘子

「急に先生、  
何だろうね？」

都

「さあ、退屈だけは  
しないでしょうね！」

聡莉

「……………」

珠姫

「——サトリさん？」

聡莉

「ッお弁当！？  
間違えました！！！！！」

鞘子・都・珠姫

「（またか！）」

聡莉の鞆を開けると

そこには！？

鞘子・都・珠姫

「アハハ、ハハ？」

（ドリ〇ヤスつてえ！！

どんだけえー！！！！）」

聡莉

「どうしよう！？！？」

都

「パンなら奢ったげる、」

聡莉

「ミヤコちゃん！一生

ついて行きましゅ！！！！！！」

抱き合う二人は別の世界へ  
旅立ち…武道館の扉が開く

コジロー

「なあにやってんの？」

ダン

「ミヤミヤ、」

都

「あッ、ダンきゅん!!」

パッ クルン ドサ

放り出された聡莉は地面と  
熱い口付けをした

コジロー

「遅刻だぞ！」

さあ朝昼晩飯だあ!!!!」

チャキチャキと部室へ戻る  
先生と野郎二人にミヤミヤ

鞘子はやれやれと肩を竦め  
部室に入っていく

聡莉

「…………グスッ、」

珠姫

「…大丈夫?起きれる?」

聡莉

「タマちゃあぁーん」

珠姫

「よしよし、行こ？」

肩を貸してもらい  
聡莉は漸く部屋へ

???

「もう！みんな！」

遅いよ、冷めちゃうよ？

あっ！新作食べる？

( - ω - ) 美味しいよう

「きッキリノ……、」

紀梨乃

「どうしたの？―サヤ!？」

鞘子

「き…リノ!？本物か？」

紀梨乃

「私の偽者がいんの？」

んゝ？と首を傾げる紀梨乃

鞘子

「キリノオオオゝゝ!!!!!!」

紀梨乃に思わず抱き着いた

鞘子はウルウル涙目

紀梨乃

「うわ!？どつたのサヤ？」

そして鞘子の後に続き珠姫

と聡莉が腕に抱き着く

聡莉

「キリノしえんぱあい!」

珠姫

「…暖かい、」

紀梨乃

「!?!?!? ホントどうしたの？  
私、何かしたのかな？」

都

「ースンッ

（本当に良かった!）」

何がなんだか分からないと  
困る紀梨乃と…涙ぐむ都達

因みに野郎共は？マークを  
頭に浮かべている

日付は内田が龍騎の世界に  
やって来た日に戻っている

鞘子

「キリノ…（じーッ）」

紀梨乃

「なッ何かな!?! サヤン？」

真剣な眼差しを向ける鞘子  
に若干…引き気味の紀梨乃

鞘子

「——ん、チュ」

紀梨乃

「〃〃！？！？！？！？！？〃〃」

『ん—チュプ〃〃ふ〃あ』

だあ！？お前ら何してんだ！！

サヤ先輩に何が！？ユージは  
どう思う？

さっ練習、練習！！

ユージ！？空気を読め！！

今日も室江剣道部は  
騒がしいのだった

審判会・2階ロビー

内田

「タイムベントですか」

心

「彼曰くタイムベントの正しい使い方だって」

心

「（連続殺人事件も起きなかった…）」

考え込む心

羽生

「ユカ、次の世界なのです！」

内田

「良かった！羽生ちゃんが  
見えるようになって」

羽生

「もうシュークリームは  
懲り懲りなですよ」

心

「じゃあ、コレは  
要らないのかな？」

桜の意匠の箱には例の物が

内田

「残念だよ、  
美味しいのに…」

心

「本当に残念ね！」

羽生

「あう！？食べるのです！！  
ユカもウラも、ボクを”  
いじめるのです！あうう  
あうあうあう”」

内田

「アハハッゴメンね！」

羽生ちゃん許して、」

心

「ふふっ御免なさい！」

ポカポカと二人を叩く羽生の懐にある世渡りの鏡には悪戯書きされた写真と散らばったカードの山が映った

内田

「剣の世界だね！」

第十二話 叶えたい決意 叶える力 タマ龍騎編 完（後書き）

「好きな車種はバギー」

「勉強、大好き！」

「ひよろん」

「ふじおかが怖い」

「楽器は弾けません」

「フィッシュ食べたい！」

「ラッパッパ」

「至って健康なバカ野郎」

「一撃必殺。単騎待ち。」

「——では」

「明日は…きつと幸せや」

「少年漫画の

読みすぎね！」

「私の夢は金持ちではない  
大金持ちよ！」

「チクショー家ですね、」

「死ねばいいのに！」

「ヴぁっ、うう、あうう」

「俗に言うキャラかぶり」

「手前共は

シャイですんで、」

次回仮面ライダーユカイド

ライダーはひきこもり！？  
初恋……大好きだから！！

次回も変身（みるみる）

ユカイド

次回も読むですよ！あう

### 第十三話 彼の日常（前書き）

仮面ライダーユカイド

#### 第十四話予告

「怪人の居ない世界！？  
私の役目は一体？」

「きっとこれがユカの  
すべき事なのです！」

「そんな貴方…  
見たくなかった」

「俗に言う失恋の  
ショックですね」

「魔法のアメちゃんや！」

「どうして！？  
アンデッドが……」

「大丈夫だよ、  
——ちゃん……」

「——ちゃんなら

きつとできる！！！！！」

次回仮面ライダーユカイド

初恋と二度目の奇跡

今も昔も変わらない想いと  
キミから零れ落ちる雫は？

次回も変身（諭吉さん）

ユカイド

次回も本編も読むですよ  
あつあつあつ

### 第十三話 彼の日常

カタカタカタカタカタカタ

カタカタカタカタカタカタ

カタカタカタカタカタカタ

カタカタカタカタカタカタ

真つ暗な部屋の中で  
P Cだけが光を放つ

「……ッてかdrop率が0以下  
ありえねー……ウ……」

寝才チしました

チュンチュンチュンチュン

チチチッチュンチュンチチ

チッチ力チッチッチッチッ  
チッチッチッチッチッチッ

部屋の中に朝日が差し込む

「Z u z u z u、Z u z u z u、先輩、  
——し——：：センッ」

この物語の主人公、元木司  
時刻は午前7時過ぎ、支度  
をしないと完全に遅刻だが

司

「朝か…寝よ……——」

二度寝を決め込む司は今日  
がdrop率反転のサービス日  
だと思ひ出す

司

「——あ——…眠い、——」

この場合は二度寝？

トントントントントント

トコトコトコトコトコトコ

「お兄ちゃん

起きてる？朝だよ！！」

階段を上り司の部屋の前で  
声を掛ける女の子

司

「寝てまゝす、」

「えええ！？  
起きてるでしょ？」

ドンドン

「お兄ちゃん！  
遅刻しちゃうよ？」

ドアを強くノックするけど  
動く気配無し

「あッ開けるよう、」

ガチャ

「キャッ！――わふッ」

司

「おはよ、今日も  
かぁいいね！」

彼女がドアを開けると司が  
突然抱きしめてきた

「〃おッお兄ちゃん！？〃  
ち遅刻〃しちゃう〃〃」

司

「休む！」

「だッダメだよ！！五日も  
休んじゃ絶対ダメ！！」

司

「う、」

何とか司を自分から引き剥  
がし胸の動悸を治める彼女

「もう、朝ごはん  
冷めちゃうよ?」

「ツカサ?  
起きるのですよー!!」

1階からもう一人の妹から  
声が掛かる

司

「分かった…俺の負け、」

「〃お兄ちゃん〃」

兄が学校に行くのが嬉しく  
顔が綻ぶ彼女

司

「妹が作った朝飯を  
無駄にしたくない!」

「私も手伝ったんだよ!」

彼女は小さく握った両手を  
顔の横に持ってきて微笑む

司

「そっか、早く食べないと  
最高の朝食を俺がダメに  
しちゃう、いくぞ!!」

「あッ待つてよう!!」

階段を滑るように駆け下り  
ていく司を慌てて追い掛け  
るツーサイドアップの彼女

## 司家の食卓

司

「美味い!マジで、  
この里芋も最高だ!!」

「当然なのです!」

「おッ兄ちゃん、卵焼きは

私も手伝ったんだよ、」

ツイとソレを箸で摘まんで  
司の口へ持つていく

「僕はアドバイス？しか  
していいのですよ！」

パクッ

「どうかな？おいしい？  
それとも……まずい？」

モグモグモグモグ

司

「……………」

「ーやっぱり……ゴメンね  
捨てて来るよ、」

席を立とうとする彼女

司

「スゲーうめえ！ユカ、」

ユカ

「…え？―ホントに？」

司

「ああ、本当に美味しい」

パアツと暗い顔から笑顔に  
変わったユカ

ユカ

「やったあ！！エヘヘツ〃〃  
私に羽生ちゃんが丁寧に  
指導したおかげだよ」

羽生

「僕は失敗しないか見てた  
だけなのです、あう！」

喜び合うユカと羽生の二人  
を微笑みながら見つめる司  
だが時間は残酷に刻まれる

羽生

「あう！？大変なのです、  
遅刻なのですよ！！」

ユカ

「わわッ！急がないと、」

慌てて朝食を胃に  
流し込む三人

司

「（これから  
早起しよう！！）」

と胸に誓う司

羽生

「ユカア、靴下は  
どこなのですか？」

ユカ

「あれ？ああゴメン  
こつちだよ！！」

二人は現在、お着替え中

司

「（二人には＂＂女の子  
としての恥じらいを  
教えないとな？）」

司がいるにも拘わらず下着  
姿でアッチに行ったり

コッチに行ったり

因みに司は二人に背を向けている兄妹とは言えさすがに見てはいけない事もある

羽生

「ツカサ？ツカサ、」

羽生が司の肩を掴み自分の  
方に向けさせる

司

「ーどうした？

羽にゅ……ぶッ””」

慌てて顔だけ横に向ける司

羽生

「？ツカサ、ツカサも早く  
着替えるのですよ！」

羽生はブラウスを着ている  
それだけなら問題はない！  
ただ、…ボタンを半分しか  
留めてなく、二つのお山が  
ぷるんツと揺れる……………

司

「着替えて来るよ」

自分の部屋に駆け上る司を  
不思議に見つめる羽生

羽生

「あう？」

支度を済ませ玄関を開けた  
司に続くユカと羽生の二人

「ふあッくう、」

大きな欠伸をしたショート  
カットが似合う水色髪の娘  
遠日奏でに朝の挨拶をする

三人

ユカ

「あツカナデさん

おはようございます!」

羽生

「カナデ、

おはようなのです!」

司

「——おはよ、」

奏

「あッおはよ!ユカちゃん

羽生ちゃん!てツツ」

ツカサああ!?!?!?」

顔を真つ赤にし

狼狽える奏

奏

「見てた?ツカサ」

司

「バツチリ、喉んぐまで  
しっかりと、はいッ」

口をパクパクさせて  
耳まで赤く染まる奏

奏

「ツカサのバカ野郎！！！！」

ドゲシッ

司

「痛ってエエ！！！！」

奏

「ツカサなんて〇年マンガ  
の読みすぎで、んゝが腫れ  
て死んでしまえばいいのに  
死んでしまええー！！！！」

ダァッと駆け出す奏と脛を  
思い切り蹴られ悶絶する司

司

「ゝどれただけだ、  
どれだけ！！！！痛ッ！！！！」

ユカ

「お兄ちゃん！？  
しっかり！！」

羽生

「ツカサも  
悪いのですよ？」

司を心配するユカと  
少し呆れる羽生

司

「いつもの事だ、しかし  
身体が持たん！！」

羽生

「（ツカサが気づけば  
いいですよ！あう）」

仮面ライダーユカイド  
第十三話

ニギニギ ギュッウウッ

司

「（俺って勝ち組だな、）」

右手をユカが握って左腕に  
羽生が抱き着く―羨ましい

ユカ

「よかった！お兄ちゃんが  
漸く学校に行くって、  
言ってくれて（　　）」

羽生

「僕も嬉しいですよ！！」

これが司達のいつもの登校  
風景なのだ、……羨ましい

奏

「……バツカじゃない、」

奏は少しだけ戸惑っている  
幼なじみで何でも知ってる  
筈なのに、いつの間にか妹  
が二人も…確かに記憶も思  
い出もある…けど納得でき  
ない自分に苛つく

司

「？カナカナどした、」

奏

「カナカナ言うな！」

ユカ

「カナカナさん？

気分が悪いんですか、」

羽生

「オヤシロさま特製

このありがたームグ！？」

ユカ

「（ダメだよ！

羽生ちゃん、）」

羽生の口を塞ぐユカ

司

「じゃれてないで、

遅刻しちゃうぞ！

カナカナみたいに！！」

奏

「カナカナ言うなアアアア  
アアアアアア！！！！」

ドゲシ

そして進学校BOARD学園に  
遅刻せずに辿り着いた司達

司

「カナカナのせいで  
遅刻しかけた！！」

ユカ

「カナカナさんも  
悪気はないですよ？」

羽生

「ツカサもユカもカナデを  
カナカナカナカナカナカナ  
カナカナカナカナカナカナ  
言っではダメなのです！」

奏

「よし、三人とも  
歯を食いしばれ！！！！」

握り拳を作り負のオーラを  
撒き散らすカナカッ……奏

司・ユカ・羽生

「げッ（ひッ）」

（ボクもですか！？）

「オースツカナカナ！！」

三人が覚悟を決めた瞬間に  
ある意味空気を読んだ声が

届く

司

「おお！！マイコおはよ、  
（助かった！！）」

ユカ

「マイコさん

おはようございますー！」

羽生

「マイコ、

おはようなのです！」

麻衣子

「グッ モーニン！ ツッキー

ユッキー、ハニー！……！」

白雪麻衣子、喋らなければ  
モテまくりのルックスだが  
残念ながら暴走爆裂鬼畜だ

奏

「マイコさん、覚悟を」

おっはよーアスカ！！」

飛鳥

「くうーすう、おはよう……

ムニヤムニヤ……くー」

そして、この夢遊病患者が  
夢原飛鳥ヘンテコ関西弁を  
喋る愛すべき天然さんです

1 アスカにキスをする

2 アスカの胸を触る

3 アスカのスカートを捲る

司

「うーん、じゃあ3番で」

いやいや1番か2番………

ゲフンゲフン

奏

「やめんかい!!」

ドゲシ

幼気な飛鳥に迫る変質者に  
正義の鉄槌を見舞う奏

司

「痛いぞ? カナデ、」

奏

「ツカサ、アスカさんに  
何をする気だった?」

司

「起こそうかと、」

奏

「ホンキ？」

司

「軽い冗談だ！」

奏

「大体ツカサは——それに  
——あと——アスカ——  
——わたし……ゴニョゴニョ」

奏のお説教タイムが始まる

司

「よく聞こえないぞ、」

奏

「だから、アスカのを捲る  
んだったら」わっ私が……  
「えと、ゴニョゴニョ」

司

「はい？はつきりと  
喋れよ！カナカナ」

奏

「つつツカサなんて！  
突き指して内出血で  
死んでしまえばいいのに



飛鳥

「本当に仲ええなあ!!  
うち羨ましいわ」

司・奏

「だから……  
仲良くない!!!!!!」

見事にハモる二人パート2

♪キンコーンカンコーン♪

みんな

「あ” ツッ!!!!!!」

完全に遅刻した七人だった

### 第十三話 彼の日常（後書き）

闇の魔王の力で次回予告は  
前書きに押しやられる

今回も酒池肉林の宴が  
始まるのだった

「ククツフツハハハッ  
さて次のケーキは誰だ？」

「ここは何処？  
なんだってヴァー！？！？」

「よく来たな、みさお」

「誰だア！？ひい！！！！」

「そうだな、これだ！！！！！！  
グーチョキパー！！」

「うう、お嫁にいけない」

「ただのスク水？違うな！！  
白スク敢えて新型だあ！！」

「よく解らん…」

「解かったら  
負けだぞ千秋！」

「次は―魅音おおん！……！」

「なんでおじさんが！？！？」

「パツとサ○ゼ○ヤ……！」

「圭ちゃんに着せようと  
思ってたのにいい……」

「フハハツツハハハツ……！！  
梨花ちゃんバージョンの  
エンジェルモートコスは  
どうだ？魅音ん、」

「夏奈、千秋！  
見ちゃダメ……！！」

「今、後書きラストは……  
千葉紀梨乃おお……！」

「私……？！？」

Σ(。ω。ノ)ノ

「ふんムム、カア！！！！」

「？これ作務衣かな、」

「はい、これ」

「！？鉈と薪？」

「薪割り百本、始め！！！！」

「ひえええええ、、、、」

カンカンカァーンカンカン

カァーンカンカンカァーン

「…お、終わりました””」

「うむ、ご苦労！！」

「見る大量の汗、張り付く

髪、張り付く作務衣……

開けた作務衣から覗く…

鎖骨！！素晴らしいハハハ

フハックツハハハッ！！」

「誰か助けてえええ！！！！」

内田ユカの叫びも

虚しく…

こうして闇の魔王Kの

前後書き支配は続く…

いいぞ！もっとやれ！！

## 第十四話 私の日常（前書き）

「大変なのです！ーあうあう  
あうあうあうあうあう」

ドンドンドン

ガチャリ

「どうしたの？  
羽生ちゃん、」

「Another 大変なのです！  
前書きと後書きが！！！！  
闇の魔王Kに乗っ取られ  
たですよ！！！！！！」

「またまたあ？」

「本当なのですよ！これを  
読むのです！！！！！！」

「——！！大変だあ！？  
羽生ちゃん大変だよ！！」

「さっきから  
言ってるのですよ！！」

「どうしよう?」

「Another、作者が  
何とかするのです、」

「——ッよし羽生ちゃん  
一緒にきて!!!!!!」

ボワン

「これは!?!」

「近道を創ったんだ!」

「すごいですよ!!!!!!」

「まあ、作者だし!!」

何もない空間にゲートを  
創り出し、そこへ入る二人

漸く事態に気づいた作者  
果たして、闇の魔王Kの

野望を阻止できるのか？

全ての乙女達<sup>ケーキ</sup>が

魔王の胃袋に収まる日は

遠くない、急げ作者！！！！

ゆっくりと焦らず急げ！！

道草も大事だぞ！！！！

慌てちゃダメだ！！！！

ほら一休みも忘れるな？

## 第十四話 私の日常

仮面ライダー ユカイド

### 第十四話

「ハア今時、廊下で  
立たされるなんてな？」

七人は遅刻した罰として  
絶賛棒立ち中だ

麻衣子

「頼むよ、カナカナ!!」

蓬

「俗に言う  
傍迷惑ですね!」

ユカ

「疲れたよう、」

飛鳥

「スウーくー…ムニヤ、」

羽生

「あつあつあつあつ、」

奏

「私！？私が悪いの！！！！」

遂にキレた奏が喚きだす、

「うるせえぞ！！」

お前ら！！！！」

みんな

「ゴメンなさい！！」

晃ちゃん、」

担任の晃ちゃんに怒られた  
七人は粛々と罰を受ける？

♪ キーンコンカーンコン♪  
♪ キンコーンカンコーン♪

みんな

「だはああ（ぷはああ）

！！！！！！！！！！」

授業が終り解放された七人

シャバの空気を目一杯

吸い込む

司

「カナデ、その歳で人様に

迷惑をかけるな！！！！」

奏

「ゴメン、（何か違う？）」

ユカ

「（クキユウ、）””」

麻衣子

「お昼にしましょ！！！！」

人差し指を天に翳し

宣言する麻衣子

羽生

「賛成なのです！」

ワラワラと机を引っ付ける

七人

司

「ヨモギは相変わらず  
キャラ弁か？」

蓬

「はい、何と無く！」

司

「ふうん、

アスカもアレか？」

飛鳥

「チャーハンにギョウザ―  
メンマもあるねん！！！！！」

司

「バイトの残り物か、  
麻衣子は豪勢だな、」

麻衣子

「とーぜん！！！！！」

司

「昔から何でもそつなくか  
カナデはサンドイッチか  
美味そうだな？」

奏

「ヤッやらないから！！」

ガツと司から弁当をガード  
する奏は少し顔が赤い

司

「そこまで、  
しなくても？」

奏

「ふっふんだ！！」

そつぽを向く奏に若干  
傷付く司

司

「俺も相変わらず  
店の……アレ？」

鞆を見ると可愛い包みが？

司

「!?!?!?!?!」

包みを開けるとお弁当が！

ユカ

「エヘッいつもコンビニ  
スーパーのパンじゃね」

羽生

「とっても

美味しいですよ!」

司

「……うツツく、」

堪らず涙ぐむ司

ユカ・羽生

「お兄ちゃん

（ツカサ）！？！？」

奏

「ッバカ、泣いてないでちゃんと食べなさいよ！」

麻衣子

「どれ、厚揚げ頂き♪」

パクツモグモグ

司の弁当から煮物の厚揚げを奪う麻衣子

麻衣子

「おッ美味しい（〇ハハハ〇）」

司

「当然だ！羽生の煮物は世界一だ！！！！」

蓬

「私は卵焼きを頂きますね？」

パクツモグモグ

司

「どうだ？」

蓬

「んゝ美味しい（へゝへ）」

司

「ソレはユカが  
作っただ！！」

ユカ

「〃〃〃〃〃〃」

飛鳥

「二人とも将来立派な  
お嫁さんになるなあ！！」

和気あいあいと食事を  
楽しんだ司達だった…

奏

「……………」

司がギターを弄るのを二人の妹が興味津々で見つめる

司

「ええと、  
やりにくいんだけど？」

ユカ・羽生

「気にしないで  
（なのです）、」

司

「よしと、」

ユカ・羽生

「ジーツー！  
（ワクワクドキドキ）」

司

「ー何かな？」

チューニングを終えた司に  
二人は期待の眼差しを送る

ユカ

「何か弾いてみてよ！  
お兄ちゃん！！」

あうあうと羽生も頷く

司

「フツ仕方がないな？  
驚くなよ！！」

ギターを構える姿は凄く

決まっている！！

ユカ・羽生

「カッコイイよ（のです）！！  
お兄ちゃん（ツカサ）」

♪チャラリ～ララ

チャラリラリララ～♪

ズコッ

まさかのチャ○メラを弾き  
二人は机に額を打ち付ける

羽生

「ま～さか！！なのです」

ユカ

「お兄ちゃん…  
カッコ悪い、」

司



♪ジャジャッジャンジャン

ジャ〜ジャンジャラ〜♪

ユカ

「仮面の〜あ・な・た？  
私だけに〜素顔を〜」

♪ジャララジャッジャラン

ジャカジャカジアツ〜♪

司・羽生

「ええー、」

ユカ

「進る〜火花が僕たちを  
引き離す〜から!!!!!!」

〜間奏〜

絶対ツ限界を超える〜、  
光を掴めえ!!!!!!」

ガララッ

「ツカサア！？いつの間に  
上達したの！！」

軽音部の戸を開け奏が

見たものは…

司

「ハハハッ……」

羽生

「どっ努力すれば  
たぶん…あう、」

ユカ

「ハアハア―あれ？」

落ち込む司と励ます羽生と  
一汗かいたユカが……

奏

「？……何があったの、」

「ぷふ、あはは―ツカサプ  
あっははは！！死ぬう、」

部活帰りだった奏と  
現在帰宅中

司

「――」

羽生

「あうあうあうあう、」

ユカ

「……………（しゅん）」

初めてギターを触った妹に  
一年間練習してきた自分が  
バツサリ負けたのだ…  
奏は笑いすぎだが

奏

「ツカサ？」

私を殺す気…ぷふ、」

司

「――」

羽生

「カナデ！

言い過ぎなのです！…」

ユカ

「ーゴメンッう私い…  
お兄いッヒッうう、」

遂に泣き出すユカ

奏

「ーあッ、、」

司

「ーッ帰るぞ、  
じゃあな…カナデ、」

奏を睨みつけユカと羽生の  
腕を掴みズンズン先に  
行ってしまう

奏

「ッツカサ！ごッゴメー」

その声は彼には届かない

「ねえユツキー、  
ハニー、二人どした？」

今朝からぎすぎすした空気が流れる司と奏を心配した麻衣子が話し掛けてきた、

ユカ

「……………」

羽生

「大した事じゃないですよ、」

蓬

「俗に言う、  
夫婦喧嘩ですね、」

麻衣子

「ふうん、」

飛鳥

「うち、頑張る！」

そう言っていると飛鳥は司と奏の前へと向かう

飛鳥

「ツカサ君、  
カナデちゃん、これ！」

司・奏

「なに？」

飛鳥

「魔法のアメちゃんや！  
食べると幸せになるねん」

二人に飴玉が入った包みを  
差し出す

飛鳥

「これ食べて  
仲直りしてな？」

司・奏

「……………」

奏はチラッと司を見て口へ  
アメちゃんを放る

飛鳥

「ツカサ君の事  
うち好きやで、」

司

「へ！？」

飛鳥

「けど今のツカサ君は、  
うち嫌いや!」

奏

「…ねえツカサ?」

奏が怖ず怖ず声をかける

司

「…何だよ、」

奏

「昨日はゴメンね、  
言い過ぎた…、」

憂いだ上目遣いで謝る奏に

司

「―謝る相手が違う、」

奏

「え?」

司

「ユカにだろ?」

そう言って僅かに

笑みを浮かべる司

奏

「〃〃うん〃〃」

奏はユカに向き直り

奏

「ユカちゃん、  
ゴメンね、」

ユカ

「全然気にして  
ないですから!!」

ぶんぶんと手を振るユカ

司

「よし、  
許すぞ!カナカナ」

奏

「〃〃ツカサ〃〃  
——でもね?」

奏

「カナカナ言うなアアアアアア！！！！！！！！！！」

ドツゲシィッ

司

「痛ッッてええええええ！！！！！！！！！！」

そして俺達はモールに

繰り出す此処しか

近場で遊ぶ所ねえしな

「避暑地として有名な」

「緑豊かな田舎町、」

みんな

「……………」

「モールは買い物が、  
楽しめる学生達の  
溜まり場であるのだ!!」

司

「コイツは休みや放課後は  
特に元気で暴走するな?  
そう思うだろ、みんな」

みんな

「アハハ…、」

唐突にナレーションを  
始める麻衣子

麻衣子

「そして私は!!」

この田舎町が好きだ!!

愛してるぜ!! ベイビ!!」

蓬

「俗に言う…」

バカ野郎ですね!」

容赦ないね、モッチー

ユカ

「結構広いですね！」

奏

「え？ユカちゃん、」

ユカの発言に怪訝な顔の奏

羽生

「ええと久しぶりに来た  
からなのですよ！  
ねえユカ！！」

ユカ

「そうそう、ソレソレ！」

奏

「？そっか、」

ユカ

「（ゴメン、  
羽生ちゃん！）」

羽生

「（ユカ、  
気をつけるのです！）」

麻衣子

「ねえツツキー！」

アレ買って!!」

妹達が内緒話をしてるのを大人になっただなと司が寂しく思ってたら俗に言うバカ野郎が話し掛けてきた

司

「何をだ？」

麻衣子が指差す先を見ると切り身ちゃん人形? いや?ぬいぐるみだろ……たぶん

蓬

「かぁいいです!」

奏

「本当に可愛い!!」

飛鳥

「ほんまや」

美味しそう!」

いやいや飛鳥よ! 違うだろ

女の子として

ユカ

「魚平…鯉? なに?」

蓬

「俗に言うヒラメです、  
ユカちゃん！」

ユカ

「へえゝでも、切り身だと  
赤身か白身しか  
違い不是吗ね？」

蓬

「ええそうですね、」

奏

「でも可愛いよ？  
―ねえツカサ〃〃」

上目遣いで見つめてくる奏

司

「欲しいってか？〃〃」

奏

「〃うん〃」

不覚にも奏を可愛らしいと  
思ってしまった司

司

「300円か、」

因みにクレーンゲームだ

司

「どれが欲しいんだ？」

奏

「ええと……アレ!!」

ケースを隅々まで見渡して  
指差したのは切り身（九絵）  
クエだーアラとかハタとも

呼ばれるが白身だ  
違いが判らん

麻衣子

「私は無視か？」

（カナカナ頑張って!!）

蓬

「（最初にかぁいと  
言いましたのに、）」

飛鳥

「（いいなあ、  
カナデちゃん）」

三者三様である

クレーンは切り身ちゃん  
（クエ）の真上で止まった

ユカ

「やった！」

羽生

「まだ、

分からないのです！」

ウイーン ガチッ

奏

「掴んだよ！ツカサ！」

司

「ッああッ」

クレーンは切り身ちゃんを  
ガッチリとロックした

奏は司の腕を掴んで笑みを  
浮かべる

司

「（カナデってこんな  
可愛かったかな？）」

ポトッ

切り身ちゃんは取出し口に  
落ちた

奏

「ツカサやったあ！！  
ありがとう」

切り身ちゃん（クエ）を抱き  
抱え司の手を握り微笑む奏

司

「あーああ、カナデ」？」

奏

「なに？ツカサ」

司

「その…手を」

司の指摘を受け自分の  
行動を確認する奏

奏

「な」〃〃違ッ違うこれは  
嬉しくて他意はないから  
私が―を好きなんて事は  
ない！―寧ろありえない  
ツカサを好きだなんて〃  
絶対ないからね！！！！」

一気に捲し立てバツと手を  
離す奏の顔は桜色に染まる

麻衣子

「（カナカナかぁいい！）」

蓬

「（俗に言う

ツンデレですね！！）」

飛鳥

「（クエ…一度でいいから  
食べたいなぁ、うち）」

三者三様…いやだから飛鳥  
違うだろ？女の子としてさ

司

「そこまで

言わなくても、」

奏

「〃〃勘違いされたら  
私が困るの！〃〃」

麻衣子

「ああ、お二人さん？  
イチヤつくのはいいけど  
ユッキーとハニーが  
見当たらないけど！！」

司・奏

「イチヤついてない!!!!!!  
——ッ二人が居ない!?!?!」

見事にハモる二人パート3

「可愛いね!キミ、」

ユカと羽生は司達が遊ぶ  
ゲーセンの裏手で…俗に  
不良さんと呼ばれる  
二人に絡まれていた

ユカ

「あの!…困りますう」

不良さん・その1

「そう言わずにさ?」

不良さん・その2

「その制服

BOARD学園のじゃん!」

不良さん・その1

「マジで!?!ちっちゃいから

○学生だと思つてた、」

だとしたら本当の

下劣野郎だな！！その1

不良さん・その1

「―してもいい訳だ？」

その1の汚らわしい手が

ユカの頬を…撫でる

ユカ

「ひッ！？（怪人なら

変身できるのに！！！！！！）」

羽生

「ユカを離すのです！！

―うあ！？やめるのです」

その2が羽生を羽交い締め  
角の様に跳ねた髪を弄る…

不良さん・その2

「俺はツノ毛ちゃんが

好みだな！」

.....

「そこまでだ!!」

下劣野郎ども!!!!!!」

不良さん達

「誰だ!?!?!?」

不良さん達が声がした方を見遣ると麻衣子がポーズを決め、ニヤリと不敵に笑う

「一応、俺達もな、」

麻衣子の後ろに司達もいた

不良さん・その1

「なんだ? 野郎一人に

女の子ばっかじゃん、」

司

「不良さん二人に忠告だ!

麻衣子は容赦ないぞ?」

《ターンアップ》

腰のバックルが回転、

光のゲートが麻衣子の前に現れ通過すると赤を基調と

したダイヤ+クワガタの  
仮面ライダーギャレンに  
変身する

ギャレン

「テメエらは  
私を怒らせた！！！！」

《ドロップ》《ファイア》

《ジェミニ》

《バーニングデバイド》

銃型のカードリーダーに、  
ダイヤの5、6、9を挿入

不良さん達

「ライダー！？！？」

ギャレン

「ハッ！！！！！」

ジャンプと共に二つに分身  
宙返りから野郎二人に炎の  
二段つま先蹴りを打ち込む

ドガアアッーーーーン

ギャレン

「安心しなさい、

峰打ちよ！……！」

司

「峰打ちな訳

あるかああ！……！」

ボカツ

ギャレン

「痛ッ！？」

そんな事を宣わる麻衣子の

頭に鉄槌を落とす

ギャレン

「叩かなくても、」

司

「ッさい！！ヨモギ、

医療班に連絡を！」

蓬

「もう連絡済みです！」

司

「さすがヨモギ！

——おわ！？！？」

ユカ・羽生

「お兄ちゃん（ツカサ）

うわああーん！！！！！」

妹二人が司の胸に飛び込む

司

「よしよし怪我はないな？

火傷とか火傷とか、

あと火傷とか！」

ユカ・羽生

「うん！

大丈夫（なのです）！！！」

飛鳥

「麻衣子ちゃん、反省文に

始末書に晃ちゃんの説教

地獄が待ってるねん、」

ギャレン

「うそお！？助けたのに！！！」

奏

「ライダーに

変身するから、」

みんなが憐れみの目で

麻衣子を見る



次話に続く

## 第十四話 私の日常（後書き）

「恋をしましょう……!!」

「――ナミ先輩……」

「ツカサ？」

「ツカちゃん、  
付き合ってる娘いる？」

「私じゃダメ？」

「好きやで……」

「私も、  
貴方が好きです……」

「お兄ちゃん大好き……」

「俺は、  
変身できないんだ……」

次回仮面ライダーユカイド

第十五話 私達の日常

次回も変身（みるみる×2）

ユカイド

次回も読むですよ あう

## 第十五話 私達の日常（前書き）

闇の魔王Kによつて

阿鼻叫喚酒池肉林の

宴が続く…

「フハハハ！！！！泣け！

叫べ！！最高の歌を…我に！！  
聴かせる乙女達<sup>ケーキ</sup>よ

ハハハハ、クッフフ、」

「こなた？バイトつて、

ココ…ヒイ！？何これ！？」

「どうしたの？お姉ちゃん

キヤアアアアア！？！？」

「かがみさん？…アア—」

「ようこそ、我が宴へ！！」

ガチガチ…ブルブル…

「まるで子羊だなクッフ」

「かつがゝみんな!!  
どしたの?……お?」

「会いたかったよ!  
伝説の勇者こな!!!!!!!!!!」

「お前は、まッ魔王!!!!!!!!!!」

「そうだ!我が魔王……  
魔王Kだ!!!!!!!!!!」

「……私が勇者、  
勇者こな!!!!!!!!!!」

ピッシヤアアアアアン

ゴロゴロピカアッゴロゴロ

勇者こなと魔王Kの邂逅……

「フハハハ!!!!!!!!!!」

「アハハハ!!!!!!!!!!」

魔王と勇者の出会いは何を  
齎すのか?そして作者は?

次回U線上の魔王

え？…続くのか？

## 第十五話 私達の日常

仮面ライダーユカイド

### 第十五話

「恋をしましょう!!」

そして、泳ぎましょう!

暑くて脳みそがカボチャ

プリンだわ!!!!!!」

暴走爆裂バカ野郎がそんな  
事を言い出しやがった

麻衣子

「ね! 皆も恋して、泳いで  
夏を楽しむのよ!!!!!!」

「まあ取り敢えず  
授業中だマイコさん?」

「頼むから! ともに授業  
受けてくれ!!!!!!」

このクラスいや、麻衣子の  
担任になった事が間違いだ  
晃ちゃん先生!!!!!!

「ほんまやゝ暑いゝ、  
——くう……すう」

暑いのか眠いのかどっちだ

「どっちもやあゝ  
ーじゅる」

！？！？重症だな飛鳥よ、

♪ キーンコンカーンコン  
キンコーンカンコーン ♪

麻衣子

「よし！終り！……！晃ちゃん  
夢で会いましょう！……！」

そして麻衣子は司達を引き  
摺り学園を後にする…

晃ちゃん

「会いたかねえよ……！！……！！」

「で？」

「ここは何だ！？マイコ！！」

麻衣子

「はぁ？水着屋さん」

麻衣子に引き摺られ司達は  
モールの水着ショップへと

司

「てか、ハズい」

蓬

「ツカサ君！

これ似合いますか？」

ムニムニ モニュモニュ

司

「ーぶは！？」

ソレやばいって」

蓬は水着を胸に押し付けて  
寄せたり上下左右に動かし

司に迫る……羨ましい

蓬

「似合いませんか、  
ーグス」

よよとしな垂れかかる蓬

司

「〃似合うよヨモギ〃〃」

蓬

「ほんと？」

頬を朱色に染め必殺の

上目遣い

司

「〃〃〃〃〃〃〃〃」

蓬

「興奮しますか？」

司

「え？」

「〃する〃するから〃」

蓬は伏し目がちにツツと

司の身体に指を這す

蓬

「起つき…」

「しちやいますか？」

司

「いや〃その〃えと〃〃」

「「「じとーッ」「」」

司が蓬に籠絡していく様を  
三人の乙女達が醒めた目で  
見つめる

奏

「サイテー、」

ユカ

「…お兄ちゃん、」

羽生

「不潔なのです、」

司

「な” 違っ 誤解だ!？」

慌てる司を無視して三人で  
水着選びを再開する… 恐い

蓬

「ぷっツカサ君弄りは  
止められません!」

口許に手を当てクスクスと  
微笑を浮かべる蓬

司  
「（やられた！！！！！）」

蓬  
「ひやめてうゝ  
いひやひれふえよゝ」

司が蓬の頬つぺたをつねり  
タコさんを作る、

司  
「うりゃ！この口か！！」

蓬  
「ごみゃんらはひいゝ  
もひまひひんゝ」

司と蓬がじゃれる横で真剣  
に水着を選ぶ飛鳥

飛鳥  
「うゝん、ウゝン、」

麻衣子  
「二つとも  
買っちゃいなよ！！」

飛鳥

「水着って高いんやね〜  
マイコちゃん…、」

麻衣子

「へ？ーそうだね！？  
（その二つ三千円と  
四千五百円なのに）」

麻衣子

「（ねえツツキー、）」

一通り蓬の頬っぺで遊んだ  
司に麻衣子がつんつん  
してきた

司

「何だよ？ーえ、」

麻衣子

「（アスカに水着、買って  
あげなよツツキー！！）」

司

「（俺が？——たく、）」

飛鳥がスク水に手を掛けた  
のを見て司はその肩を叩く

飛鳥

「ん！？―ツカサ…君？」

司

「バカ、遊ぶんだぞ！  
それに燕さんもきつと  
自分を責めるぞ？」

飛鳥

「でも…うち、  
お金―無いねん、」

司

「俺が買ってやる！  
好きなの選べ！！」

飛鳥

「ツカサ…君、  
ほんまにありがとう」

向日葵の様な笑顔が咲いた

因みに夏みたいな発言が、  
あつたが異常気象なだけだ

ドコの世界でも…な？

「海だああああ！！！！  
血祭りじゃああああ！！！」

「プールだが？」

日曜日、基本的に皆の休日  
司達一行はレジャープール  
に遊びに来ていた

麻衣子

「プ、プール？」

司

「ああプールだ！」

麻衣子

「そ…そんな！？  
プールですって、  
…死ねえい！！！！！」

ドゴオッ

司

「グハ！？」見事だ！  
越えて行け私の屍を…」

司と麻衣子が意味不な事を  
してる間、五人はと言うと

奏

「ユカちゃん羽生ちゃん！  
可愛い」

ユカ・羽生

「」

お揃いのチューブトップと  
ボーイレッグの黄色と青紫  
の色違いを二人は着ている

蓬

「センス良いですね！  
カナカナさん！」

奏

「」ありがと」

飛鳥

「うちは？」

飛鳥はワンピーストップに  
フリフリのスカートの水着  
を着ている——ゾク！？

奏

「（ツカサはこんなのが  
好みなんだ？へー、）」

蓬

「（俗に言うヤンデレ）」

飛鳥

「!?!?!?!」

奏が飛鳥をジト目で睨んで  
いる間にユカと羽生は流れ  
るプールに飛び込む

良い子は真似を  
しちゃダメだぞ

ユカ

「冷たい」

羽生

「気持ちいいですよ」

ゆらゆらと流れに身を任す

二人

司

「やっぱ、かぁいいな!」

休憩所から二人を眺める司

麻衣子

「ツツキーてシスコン？」

司

「否定できない

自分が恨めしい」

肯定できる私は何だ？司！

ユカ・羽生

「お兄ちゃん（ツカサ）

お腹すいた（のです）！」

小1時間程遊んだ妹達が

お腹を空かせて戻ってきた

司

「カレーとラッメーン」

どっちだ？ヤキソバは

一応、許すぞ！」

ユカ

「ええええ！？三つだけ？」

奏

「なにそれ？ユカちゃん！  
好きな物、お食べ！！」

逡巡したユカは天に  
人差し指を翳し発言する

ユカ

「カップヤキソバ！！！！」

みんな

「ええええええええ！？！？」

ユカ

「パクッ、ちゅぱッ……」

羽生

「ペロツ、ぷは」

司

「美味かったか？」

二人は特大パフェを  
堪能、夢心地である

ユカ・羽生

「うん（あう）」

奏

「よく食べること！？  
——パクッ」

奏も司の奢りでパフェ（並）  
を食べている

麻衣子

「落ちてしまえええええ  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドゲシ

飛鳥・蓬

「嫌やああ!!!!!!!!!!——ヴァ!？  
（あれえゝゝゝ）」

麻衣子達はスライダーで

遊んでいる

真似しちゃうダメだぞ

ユカ

「よし！羽生ちゃん、

次は飛び込みだあ！！！！！」

羽生

「あうーなのです！！！！！」

司

「気をつけるよ！！！」

はぁーい と返事をして  
飛び込み台に向かう二人

奏

「ーゴチでした、ツカサ」

司

「いえいえ、」

奏

「でも大丈夫？あの水着も  
結構したんでしょ、」

司

「まあ、お礼かな？  
俺から皆へのさ、」

照れくさそうに頭を掻く司

奏

「お礼？」

司

「引き篋りの俺に付き合う  
なんて…うぜえ、」

奏

「…てえい！！」

ドゲシ

素直じゃない司に  
蹴りを見舞う

司

「痛い…」

奏

「バカ、」

「ーツカちゃん？」

司の背中に声が掛かる

司

「！？――…ナミ先輩、」

奈美

「久しぶりだね！  
元気してた？」

司の元彼女、藍田奈美が髪  
を掻き上げながら司の元へ

別れた理由は長くなるので  
バツサリ行かせて貰う

奈美

「大きくなったね！  
昔はこんなだったのに」

自分の膝下に手を持って

行く奈美

司

「知らないでしょ？  
先輩は！！」

奏

「……久しぶりです、」

そだっけ？と笑う奈美に  
感情の無い挨拶をする奏

奈美

「……………そうだね、」

奏

「ツカサ、ユカちゃん達と遊んでくるね!」

司

「あッおい!!」

さっさと歩いていく奏

奈美

「嫌われちゃった、」

司

「最近はあるんじゃないかなかったのに、」

奈美

「付き合ってるの? カナデちゃんと、」

司

「ッ付き合ってますん!!」

ブンブンと首を振る司

奈美

「他に今、」

付き合ってる娘いる？」

司

「……いません、」

奈美

「気になる娘は？」

司

「……いますよ、」

奈美

「――そつかそつか！  
へえ、いるんだあ」

ニコニコと司を小突く奈美

司

「奈美さんは？」

奈美

「……ツカちゃん！だよ、」

司

「へえ、そうなんだ？  
奈美さん！？……それ――」

キヤアア！？　ウァワアア！？

悲鳴がプールを包み込む

司・奈美

「!?!?!?!?」

「ツカサ君!よかった、  
無事ですな?」

司がいる休憩所に蓬達が  
駆けてくる

飛鳥

「うえ、お昼戻しかけた…  
気持ち悪い!」

麻衣子

「だらしないわね!」

お前がライダーから  
突き落とすからだろ!!

奈美

「何があつたの?」

♪♪♪♪

蓬

「わかりません、—あッ  
電話です、」

蓬が休憩所に置いておいた

ケータイに出る

蓬

「ーえ？そんな！？」はい、はい、許可確認しました  
：大丈夫です！」

司

「誰からだ？」

蓬

「晃ちゃんからです、ツカサ君！！マイコさん！！変身の許可が下りましたアンデッドです！！！！」

一気に緊張が増す司達

奈美

「おかしい、アンデッドはツカちゃんが全部、封印したんでしょ？」

司

「どうして、アンデッドが…」

麻衣子

「考えてもしようがない、今はアンデッド！！！！！！」

ギャレンバックルを装着

麻衣子

「変っし…あれ？」

カナカナと妹ちゃんは」

司

「！？チツイ…くそ…！！！！」

飛鳥

「ツツカサ君！？」

司

「マイコ！先輩と

二人を頼むぞ…！！！！」

逃げ惑う人混みに  
突っ込んでいく司

麻衣子

「たく、モツチー！！

二人を頼める？」

蓬

「はい、任せてください」

《ターンアップ》

ギャレンに変身

人混みを掻き分けていく

蓬

「二人ともコツチです!!」

二人を出口へ先導する蓬

「ツカサああああ!!!!」

奏が司を見つけ駆けてくる

司

「カナデ!!よかった、  
…二人は?」

奏

「…ゴメン、この騒ぎで  
逸れちゃった…」

司

「そっか…カナデが  
無事で、よかったよ」

俯く奏の頭を撫でる司

「グルルツギョアアア!!」

司

「―カナデ!!!!」

ドンッ

奏

「!?!?キャッ、」

ゾッオオッ

咄嗟に奏を突き飛ばす司  
二人が居た場所の地面は  
綺麗に抉り取られる

「ガアアアア…フシュ、」

司

「アンデッド…本物か？」

2メートルを超える身長、  
真っ黒な身体にヘルメット

の様な顔、口は大きく裂け  
頭から背中・腕に棘か触手  
の様な物がびっしりと  
生えている…

司

「ジョーカーに似てるか？  
カナデ、離れてろ！！」

ブレイバツクルを装着

司

「ふー、変身！！！！」

《ターンアップ》

光のゲートが司を…弾いた

バツヂイツ

奏

「ツツカサ！？しっかり！！」

ゲートに弾かれて倒れた

司に駆け寄る奏

司

「俺は、ライダーに  
変身できない……」

《オープンアップ》

「下がってる！後は、俺とギャレンがやる、」

仮面ライダーレンゲルが二人とアンデッドの間に割って入る

ギャレン

「無理しないでよ！久しぶりの実戦でしょ？森先輩、」

レンゲル

「心配いらないさ、」

レンゲル

「俺とマイコで、ダブルライダーだしな！！」

謎のアンデッドへと駆けるレンゲル

一方、ユカ達は

ユカ

「変身！……！」

《カメンアウト》

ユカ

「変身だよ……！」

《カメンアウト》

ユカ

「――もう！変身して……！」

《カメンアウト》

羽生

「変身、

できないのですか？」

正体がばれない様にトイレ

の裏で变身しようとカード  
を挿入するのだが

何度やっても变身できない  
自分に驚きを隠せないユカ

ユカ

「私の役割が、  
―妹だから？」

「それは違うよ！  
ユカイド、」

ユカ・羽生  
なのです  
「誰！！！！」

七美

「羽田七美、通りすがりの  
魔法使いだよ」

赤髪の少女がニコリと笑う

次話に続く

## 第十五話 私達の日常（後書き）

「無賃乗車ですか！」

「結果を言えばな、」

「駅弁、  
買ってきました！」

「しつかり、  
働いてね！クスクス」

「はい、魔女……」

「融合係数が低すぎる、」

「封印できない！?!?!」

「ツカちゃんには、  
私がついてる……！」

「私が……  
ツカサのこと、」

次回仮面ライダーユカイド

第十六話 奴らの日常

次回も変身（諭吉さん×2）

ユカイド

次回も読むですよ あう

## 第十六話 奴らの日常／Hの策略（前書き）

魔王K… 勇者こな…

酒池肉林の宴は終らない…

「見ろ！勇者よ、我の乙女

（ケーキ）達を！！！！」

「やるじゃん！特に千秋の

コスは素晴らしい！！！！」

「なんか、

恥ずかしくなった」

「私んが可愛い！！！！」

「夏奈、恥ずかしいから

静かにして！！！！！！」

「ふふ、私の実力！

見せてあげる！！！！！！

勇者でしょでしょ！！！！！！」

ボワン

「何だ!？」

「あッキリノ!!!!!」

「やぁ…サヤん、」

「さあ!いくでガンス!!」

勇者こな の 攻撃

ズバッ 会心の一撃

「何じゃこりゃー!?!?」

「ほうナースか、しかも

ピンク…できる!!!!!」

「更に頑張り屋、どじっ娘  
属性付きなのだ!!!!!」

マ○ラギ

「ゴブツ!?!さすがだ、

勇者こなよ……」

魔王Kに162のダメージ

「まだだ、

まだ負けんぞ!!!!!」

「パン工場パン工場」

「お姉ちゃんが壊れた!？」

「どっどっしょう!？」

こうして更に、

前後書き支配は続く

次回 U線上の魔王

続くのかよ!!!!!!

## 第十六話 奴らの日常〜Hの策略

仮面ライダーユカイド

### 第十六話

「乗車券を

見せてくださーい!!」

はいはいと次々とパツチン  
していく小さな可愛い  
車掌さん帽子が大きいのか  
何度も位置を直している、

「乗車券見せてください」

最後の乗客にアレを向ける  
(アレは何て言うのかな?)

「すまないが  
持っていない、」

「無賃乗車ですか?  
困りますよー!!」

ぷうと頬っぺを膨らます

「申し訳ない、  
事情がな……」

頭を下げる男は何を隠そう

保坂先輩である、

「どんな事情ですか！

—あわわ！？…よし、」

怒った拍子にまた帽子が

垂れたのを直す車掌

保坂

「斯く斯く然然な訳だ！」

ミュウ

「ですか〜大変ですね〜、

私は星の列車、車掌！！

ミュウです」

保坂

「よろしく！」

ミュウ

「料金は、

最高額を頂きます」

保坂

「そッそつか、」

差し出した手をガクリと  
落とす、財布が寂しい…

ミユウ

「変なお客さんは、  
貴方達で4人目です」

「保坂さん、  
駅弁買ってきました!!」

藤岡が二つ袋を持って  
隣に座る

保坂

「ご苦労…4人目？」

ミユウ

「ハイッ!!」

「あわわ!?!?!よし、」

藤岡

「?何の話です、」

保坂

「変な客が、俺達以外にも  
居たらしい、」

弁当を開けながら  
話を続ける保坂達

保坂

「…コレは何だ？」

藤岡

「ええと、  
シチュー弁当です!!」

因みに藤岡の弁当はカレー

保坂

「……次から俺が買う、」

ミュウ

「ソレさっきの駅の  
一番人気ですよ!!」

保坂

「……………すまん、」

?を頭に浮かべる藤岡

ミュウ

「私はフルーツポンチ  
弁当がオススメです」

味を思い出したのかホッペ  
を押さえてほほ笑むミュウ

保坂・藤岡

「（ソレはない!!!!!!）」

保坂

「―で、変な客は、  
どんなだった（美味しい）」

藤岡

「気になります、  
（美味しい）」

二人はフルーツポンチ弁当  
も食べてみたいなと思った

ミュウ

「気になります〜？  
あわわ！？―よし！」

帽子を直しながら話し出す  
ミュウ…可愛すぎる”

ミュウ

「1時間程、前です〜  
真っ黒なフードコートを  
着た二人で〜一人は凄く  
美人さんでした〜そして  
もう一人は小学生みたい  
でしたね〜」

1時間前 星の列車

世界の魔女が隣に座る同じ  
黒のフードコートを着た子  
に話し掛ける

魔女

「あなたには、  
期待してる！クスクス」

「ありがとうございます、  
速水ーリアリスさん」

リアリス

「魔女魔女言われるの何か  
嫌だったの！クスクス」

「……………」

リアリス

「倒す相手はディエツチと  
カナーズ…あなたにも  
ライダーの力をあげる」

カードリーダーを渡す魔女

「……………！?!?!」

リアリス

「腕に着けるのよ、

クスクスッ」

装着箇所が分からない様だ  
ったので優しく教える魔女

「コレで、  
戦えるんですか？」

リアリス

「不安？大丈夫！——

ミュウ

「次は——次は——  
荷物の置き忘れに  
注意です、あわわ！？」

リアリス

「行きましよう、  
二人が待つてる！」

「はい…リアリスさん！」

現在 星の列車

ミュウ

「ライダーなんて滅多に

見れませんから…本当は  
お客様の会話を聴いちゃ  
ダメなんですけど、」

しゅんとなるミュウ

藤岡

「ええと！？その！？」

落ち込むミュウを  
どう励まそうか慌てる藤岡

保坂

「ライダーか…」

調べる価値はあるか、」

ドライバーを取り出す保坂

ミュウ

「ワオ…！！かつくい…！！」

さっきまで落ち込んでいた  
ミュウはキラキラした瞳で  
ソレを見つめる…かぁいい

藤岡

「（アツサリだあ！！！！！！）」

《カメンライド・ダブル》

銃口から仮面ライダーWが

現れる…

W

「俺達を呼んだのは、  
お前か？」

ビツと保坂を指差すW

保坂

「そうだ、調べて  
貰いたい事がある、」

W

「ちょい待ち！  
報酬は先払いだ！！！！」

ミユウ

「かッ仮面ライダー」  
でも半分個だ…ダサい」

W

「聞き捨てならねえな！！  
お嬢ちゃん？」

ミユウ

「やあ…い半分個怪人！！」

べえと舌をだすミュウ

W

「仮面ライダーに向かって  
怪人だと！？ふざけんな！！  
おチビちゃん！！！！」

ミュウ

「わあああ！？！？」

後ろ襟を掴み上げるW

W

「ハッハッハ！！バカ！！」

ミュウ

「はッ離せ！変態痴漢  
変質者不潔下劣卑怯者  
半分個怪人んっ！！！！」

バタバタ ブンブン

両手両足を振り回すが

Wには届かない

W

「謝れ！！俺達に、  
おチビちゃん！！！！」

ミュウ

「グス、嫌だ……！！！！ふえッ  
うぐ……ウアアアーン」

W（フィリップ）

「ああ泣かした……！！！」

パチパチと右目が点滅する

W

「俺は悪くな……い」

ガチャリ

ドライバーとカナーズ  
フォンを彼の額と背中に  
突き付けるディエツと  
カナーズ……

カナーズ

「ミュウちゃんを  
降ろせ……！！！」

ディエツ

「安心しろ、

痛みは一瞬だ……！！！」

凄まじい殺気にひゃいと

従う……カッコ悪い

カッコ悪いぞW

W

「OK！依頼内容は…謎の  
仮面ライダーを捜せか！  
フィリップ頼む！！！！」

W（フィリップ）

「検索すべきは、  
謎の仮面ライダー…」

両手を広げ静止、  
地球の本棚へダイブ

W（フィリップ）

「多過ぎ！  
キーワードの追加を！！」

保坂

「世界の魔女、小学生、  
カードリーダー、

……南春香だ！！！！」

W（フィリップ）

「見つけた！」

一つの本棚から一冊の本を  
取り出す

W

「楽勝だな！

さあ報酬を！！」

つんつん

W

「何だ？く……お嬢様、」

ミュウがWの足を突つつく

保坂

「報酬は、  
乗車賃の免除だ！」

パチとミュウにウィンク

W

「はあ？」

藤岡

「ただ君達は二人、もう  
一仕事してもらう！」

W

「ふざけるなよ！てめえら  
いい加減に——…ん？」

ミュウが二人分の乗車賃  
最高額を電卓で示す

W

「ちよつ！？桁がおかしい！！  
0が二つ三つ多いつて！  
払えるか！！！！！」

ミュウ

「じゃあ今すぐ星の大海に  
放り出します」

ガララッ、ゴバアアアア

列車のドアを開けると全て  
を飲み込もうと闇が広がる

W

「ハイツ無償で働かせて  
貰います！！！！！」

世界の魔女及び協力者の  
追跡調査にWが旅立った後

ミュウ

「おぬし悪よの〜！！  
―あわわ…よし、」

保坂

「上手くいったな!!」

藤岡

「悪いことしましたね、」

そう既に持ち金を使い果たした保坂はWを嵌めたのだ!

ミュウ

「次は〰七夕駅〰

次は七夕駅〰です〰!!」

藤岡

「ユカちゃんは

大丈夫でしょうか?」

保坂

「フツ遠く離れても

心は繋がっている!!」

ミュウ

「お二人は、

どこで下車を?」

保坂

「鬼土養成学校だ!!」

「ギョアアア！」

ガハア―ガアアア、」

「チィ、コイツ…やる…！」

アンデッド

VS

レンゲル・ギャレン

レンゲル

「ギャレン…！」

一気に決めるぞ…！！…！」

一旦アンデッドから

距離を取るレンゲル

ギャレン

「ハイッ…ッのオ…！！…！」

ドン ドン ドンッ

醒銃ギャレンラウザーから

高威力弾丸を牽制射撃

「グル！？ギジョヲ…」

ズドドドッ

更に速射、アンデッドを  
その場に足止める

《フロート》《ドリル》

《トルネード》

《スピニングダンス》

醒杖レンゲルラウザーに  
ハートの4、5、6を挿入

レンゲル

「ハアア”！！！！」

凄まじい竜巻を纏い  
ドリルキックを打ち込む

「グエエツッ!？」

ガブユ……………」

錐揉み倒れるアンデッド

ギャレン

「取って置きを

見せてやる！！！！！」

《アブソープ・クイーン》

ラウスアブゾーバーに  
ダイヤのQを挿入

《フュージョン

・ジャック》

更にダイヤのJを挿入  
ジャックフォームへと

ギャレン」

「森先輩!!」

足止め、お願い!!!!!!」

レンゲル

「わかった!」

《スクリュー》

《ブリザード》

《ブリザードゲイル》

ヨロヨロと立ち上がる  
アンデッドに冷気を纏った  
コークスクリューパンチを  
叩き込む

「!?!?グーギ…ガア…!」

氷漬けになるアンデッド

《バレット》《ラピッド》  
《ファイア》

《ジャック・

バーニングショット》

オリハルコンウイングを  
展開、遙か上空に飛翔

ギャレン」

「飛んでえー、

落ちる！！！！」

急降下、アンデッドの胸に  
ラウザーを叩き付けて  
引き金を引く

ズガガッアアアア——

吹き飛び、スライダーに  
突っ込むアンデッド

容赦ねえな！！！！

ギャレン」

「見たか！

マイコ様の強さ！！！！」

「……………えげつねえ」

「……敵じゃなくて  
良かった」

すっかり忘れられた司と奏

レンゲル

「後は封印だけだ」

カツカツとスライダーに

向かう二人

「——ツカちゃん！……！！  
大ッ丈……夫？……」

息を切らしながら奈美が  
駆けてくる

司

「先輩？なんで、」

奈美

「ツカちゃんが心配だから  
に決まってるでしょ……！！！！  
やられたの？怪我は？」

司を抱きしめる奈美

司

「弾かれちゃいました、  
ゲートに、アハハハ…」

奏・奈美

「ツカサ（ツカちゃん）…」

ドッ  
シャアアアア

司・奏・奈美

「!?!?!?な”!?!?!?”」

レンゲルが司達の前を

転がる…

ドン ドン ドンッ

ギャレン

「コイツ、封印できない！  
それに攻撃が効かなく  
なってきたる!?!?!?”」

ギャレンが後退してくる

レンゲル

「くそ！

退くぞ、マイコ！」

ギャレン

「でも！！！！」

レンゲル

「避難は完了している！  
封印できないなら、  
俺達の仕事は終りだ…」

ドンッ      ズガガッ

ギャレン

「…わかりました、  
ツツキー？二人頼める」

司

「—ああ！（キングに  
…変身できれば！！！！！！）」

「ガア、バアア！！！！」

司達の間にドンッと着地

奏・奈美

「ヒイツ、

—ツツカ…助け—

《アタックライド

・クロックアップ》

二人に迫る凶刃は動かない

「ふう、間に合った？」

我らが主人公ユカイド漸く

私、参上！！！！

ヒイイツフオオオーン

ユカイド

「羽生ちゃん！

みんなを乗せて！！！！」

羽生

「あいあいさー！

なのです！！！！」

フワフワと司達をJSに

乗せる羽生

《フィニッシュライド

・リカブト》

ドガアアッ

必殺の蹴りでアンデッドを  
蹴っ飛ばしJSに乗り込む

《クロックオーバー》

奏・奈美

「ーてええ！！！！！！」

「……あれ？」

ユカイド

「お兄ちゃん！みんなも  
しっかり掴まってて！！」

司

「——ユカ？」

ユカイド

「ゴメンね、

今は逃げないと……」

驚く司達にペコと頭を  
下げ、JSを操作する

ヒイイイ…ドッオオオオン

最大出力でプールを後に

「ハア…」

「フシュッ フシュ、」

むくりと起き上がる

アンデッド

ブクブクッ ブジュリ

ズブブヌ チュリ

黒い影が次々と現れる

続く

## 第十六話 奴らの日常／Hの策略（後書き）

「これだけの高高度魔法は  
見たことない！！！！」

「やるしかない！！」

「いくよ！

羽生ちゃん！！！！」

「立ち向かう勇氣！！  
見せてみる！！！！  
人の子よ！！！！」

「もう一度だけ…  
変身！！！！」

次回仮面ライダーユカイド  
希望と言う名の切り札は…

貴方の手の中

次回も変身（アルカイツク）

ユカイド

次回も読むのです！！  
人の子らよ！！！！！！！！



第十七話 みんなの日常編 完（前書き）

元気な蝸が落ちてくる程の  
どんよりした空気が流れる

「フフフツ、ハハハッ

私のターン！！！！」

バシユッー

「ツカサアア、ヒッう」

「くくっ！！」

カナデ、ようこそ！！」

「魔王、容赦ないね、」

「読者の諸君は何故彼女が  
泣いているのかは本編を  
読んでくれたまえ！！！！」

「攻撃魔法発動！！！！」

サンダーボルト！！！！！！！！！！」

ドッゴーン

「勘弁してよ、」

「く！？定番の巫女服！！！！！！」

「まだ我のターン！！！！」

ドロー、補助魔法！！

ツンデレ発動！！！！」

「ツツこなた何て！！PCの

やり過ぎで視力が落ちて

死んでしまえばいいのに

死んでしまえ！！！！！！！！」

イ○ナズン

「うわああああ！！！！」

勇者こなに358ダメージ

「くう…負けるもんか！！」

こうして魔王、更に勇者の

前後書き支配は続く…

次回 U線上の魔王と勇者

続くんた？これ…

## 第十七話 みんなの日常編 完

仮面ライダーユカイド

### 第十七話

それじゃ行くよ!!

みんな!!!!!!!!!!

ワアアアアアアアアア

ワアアアアアアアアア

「融合係数が低すぎる、  
それが変身できない  
理由な訳だな……」

BOARD・本部

司達一行は蓬の連絡で  
学園の地下にある

対アンデッド機関

BOARDを訪れ、  
司とプレイバツクルを検査

奈美

「今まで  
変身できてたのに？」

飛鳥

「晃ちゃん、何でや？」

晃ちゃん

「……………」

蓬が人差し指を立てて  
晃ちゃんの代わりに答える

蓬

「俗に言う、  
失恋のショックですね」

ちらりと奈美を見る蓬

奈美

「ちよつと、  
私のせい……！！！」

森

「落ち着け！奈美、」

食って掛かる奈美を  
言葉で制する森

奈美

「ッでも、振ったのは  
ツカちゃんの方だよ!!」

蓬

「それでも、  
失恋に違いありません」

飛鳥

「ツカサ君、  
もう変身できへんの？」

晃ちゃんに尋ねる飛鳥

晃ちゃん

「本人が変身したけりや  
そりやできるさ、」

森

「適合者の感情とかに  
左右されるからな、」

麻衣子

「まだ時間が必要ってか」

そのまま黙り込む、みんな

BOARD本部・別室

司と奏にユカと羽生が  
事情説明を終えたところだ

ユカ

「ゴメンなさい、お兄…  
ツカサさん、」

羽生

「ごめんなさい、  
ツカサ…、」

頭を垂れるユカと羽生

司

「謝んな！氣にしてない」

奏

「寧ろ、  
スッキリしてる！！」

微笑みを浮かべる二人

ユカ・羽生

「お兄ちゃん（ツカサ）」

カナデさん（カナデ）「

司

「偽物の記憶と思い出でも俺達には本物だ！！！！」

奏も、そうだと肯定する

♪~~~~♪

奏

「ーッと電話だ！？」

ケータイを取り出す奏

奏

「もしもし？ーそうですか分かりました…伝えますー平気です！私が一番、ーことーますから！！」

ピッ

奏

「ツカサ…  
晃ちゃんから、」

深刻そうに司に顔を向ける

司

「変身の事なら、  
理由は分かってる、」

首を横に振る奏

奏

「例のアンデッドが此処に  
向かってきてるの……  
ローチを引き連れて、」

司・ユカ

「まるで、  
ジョーカーだ！」

司

「それだけか？」

奏

「ギャレンとレンゲルで  
対応するから――  
司は待機だつて……」

司

「当然だろ、」

奏

「でも！キングがツカサが  
いなきや勝てない！！！！」

司

「……………」

ユカ

「私が戦います!!」

決意の顔で二人に告げる

「こんな多重高度魔法、

見たことない!!?!?」

ユカが司達を助ける少し前

七美がユカのバツクルに  
触れ、驚きの声をあげる

ユカ

「?何それ、」

羽生

「……!」

お節介さんなのです!!」

羽生の頭に電球が灯る

ユカ

「…お節介さんが、  
どうかしたの？」

羽生

「ユカに緊急処置をしたと  
言っていたのです、」

七美

「……あの人か、  
（だからこそか！）」

納得する七美とぽかんと

口を開けるユカ

七美

「変身したい？けど、  
それは貴女が貴女じゃな  
くなるかもしれない、」

ユカ

「―お兄ちゃんを、  
千秋ちゃん達を助ける！！  
私は…通りすがりの、  
仮面ライダーだよ！！！！」

《カメンライド》

バックルがカードを認証

七美

「レディアス、気をつけて  
力の使いすぎに…、」

《ユカイド》

住宅街・防衛ライン

アンデッド・ローチ群

VS

ユカイド・レンゲル  
ギャレン

《アタックライド

・ブラスト》

《スタップ》

《スクリュー》

《ブリザード》

《ブリザードストライク》

《ラピッド》《ファイア》

《ジェミニ》

《バーニングツヴァイ》

ブツカーでローチを牽制、  
銃撃を潜り抜けたローチを  
ラウザーの横殴りで粉碎、  
更に分身炎の速射を浴びせ  
群がるローチを一掃する

レンゲル

「チッ切りがない、」

ズブ、ズチュリ、ヌタア

倒せば倒した以上のローチ  
が地面から湧き出る

ユカイド

「やっぱり、アンデッドを  
倒さないと…ダメ？」

ギャレン

「…こっちの攻撃が  
効かないんじゃないね、」

BOARD本部・別室

司に人生の節目が訪れる

司

「どした！？…蓬さん、

飛鳥さん、奈美先輩…」

司に三人が迫る…羨ましい

飛鳥

「うち、ツカサ君が  
好きなんや」

蓬

「私も貴方が、  
大好きです」

奈美

「ツカちゃん、  
—好きです」

「（はわわ！？あわわ！？）」

奏はあたふた、もじもじ、

かぁいいな、おい！！！！

司

「ハア、ふざけんな？  
ナミさんまで…、」

麻衣子だろ？と司が溜め息

奈美

「ありゃりゃ！？」

飛鳥

「なんでや～！！！！！」

蓬

「俗に言う、  
鋭い！ですね～！！」

奏

「へ？え？は？ん？な？」

司

「餅つけ！カナデ、」

奏

「うん、餅つくーッて！？  
…なんでよ！！！！！！」

ドゲシ

蓬

「俗に言う、お邪魔虫！  
私達は退散です！！」

奏

「へ？」

いちゃつく二人を残して  
飛鳥と奈美を連れ出す蓬

司・奏

「ん？　” ” ” ”」

顔を見合わせ、しだいに  
真っ赤になる二人――

蓬

「あッそうそう！！」

司・奏

「うわぁ！？（キアア！？）」

ババッと背を向き合う二人

蓬

「さっきの告白…みんな  
本心ですよ、ツカサ君」

それじゃごゆつくりあッ  
初めてだから無理ですね



一方、ユカイド達は

「ガハァー、フシュフシュ  
ガアアアア…グルル、」

ブクブク、ブジュリ

レンゲル

「ハアハア、

チツ…やばいな…、」

ギャレン

「……………」

（ツツキー！！まだ？）」

アンデッドには攻撃が通らず、ローチの群れとも戦い  
三人は限界を迎えていた…

ブオッオオン、キュキュ…

「待たせたな！！」

マイコ、先輩、ユカ、

司が駆け付ける

レンゲル

「遅せーぞ！！ブレイド、」

ギャレン

「やっぱ、私の作戦が効いたみたい！！！！」

司

「ある意味な、」

ユカイド

「戦えるんですか？

…お兄ちゃん、」

ユカイドは灰色のカードを

2枚持つて尋ねる

こくと頷く司

司

「もう一度だけ、俺に…」

力を貸せ！！変ッ身ん！！」

ひよついと飴玉を口に含む

《ターンアップ》

ゲートが司を…ブレイドへ

バアア

灰色のカードが輝く

ユカイド

「お兄ちゃん!!」

ビックリしないでね?」

《ファイナル・

フォームライド

・ブレイド》

ユカイドがブレイドに  
触れると、辺りは暗くなり

星空が広がる

そして星がブレイドに

向かって降り注ぐ

ギャレン

「綺麗!!!!!!」

レンゲル

「言ってる場合か？」

「グルル？」

二人とアンデッドは、  
降り注ぐ星の涙を見つめる

そして瞬き、ブレイドの  
鎧が変わる

《アブソールドロップ》

《レボリューション

アルカイク》

その瞬きがローチを一掃

ブレイドA

「…驚くなつてのが  
無理だな、」

「ガアアアア！？フシユー」

しーん

「グルル？」

ローチは現れない

ユカイド

「もういつちょー!!」

ブッカードから3枚  
カードを取り出す

ユカイド

「いくよー!!」

羽生ちゃん!!!!!!」

《カメンライド

リカブト》

《ファイナル

フォームライド

リカブト》

リカブトに変身、更に

羽生はゼクターへ

羽生

「ユカ、

無理はダメなですよ」

ユカイド

「大丈夫ー!!」

《ハニニューキヤストオフ》

《チェンジ

ハニニュービートル》

装着したハニニューゼクター

のホーンを倒し  
ハニユーカブトへと

《ファイナル

アタックライド

オニガリノリユウオウ》

ユカイド

「お兄ちゃん！交換！！」

鬼狩柳桜と星醒剣、アルカ  
イックラウザーを投げ渡す

ブレイドA

「ハハ？」

負ける気がしねえ！！」

ユカイド

「お二人さん、

足止めお願いします！！」

おお！？と、すっかり

見とれてた二人

《ブリザードゲイル》

《バーニングショット》

二人の必殺技を受け  
怯むアンデッド

「ゲエエツツ！？グルル、」

《ファイナル

フィニツ シュライド

ブレイド》

ドツ シュ シュ シュ ツン

54枚のカードが、  
アンデッドの前方に出現

更に2枚の巨大なカードが  
ユカイドとブレイドの前に

ユカイド

「いくよ、お兄ちゃん！！」

ブレイドA

「これで、上がりだ！！」

アンデッド目掛け走り出す  
二人に次々とカードの力が  
加わっていく

「グルル！！」

ガアアアア！！！！！！！！！！

両腕から黒い斬撃を放つが  
カードに弾かれる

ブレイドA

「アルカイツク！！！！」

ユカイド

「スマイル！！！！」

ユカイド・ブレイドA

「ハアアーツツ！！！！」

振り抜いた逆袈裟切りが  
アンデッドを捉える

「ーゲエエツツ！！！！」

ガハアーツツ！！！！」

力任せに押し返してくる

羽生

「そんなものか？

立ち向かう勇氣は？

見せてみる！！！！」

希望の力を！！！！」

ユカイド

「ッこのおお！！！！」

ブレイドA

「…好きだああああ！！！！！！！！！！

——！！！！！！！！！！」

「ギョア!!!!」

「ギジョヲヲ!?!?」

徐々に押し返し

鬼狩柳桜とアルカイツク  
ラウザーがアンデッドを

消し飛ばす

ズッドオオアアアアー――

「用意はいいか？」

「オツケーだよ！」

「お兄ちゃん!!!!!!」

「うう、緊張する」

「大丈夫！ゲーセンで練習したねん！！！！！」

「俗に言う、付け焼き刃！！！！！」

「頑張つて！！ツカちゃん！！！！！」

「後輩の晴れ舞台、見せてもらおうか！！！！！」

「頑張つて！！ユツキー」

「ねえみんな、僕のこと忘れてない！！！！！」

居たのか大樹

ユカと司達はステージへと

「続きまして、軽音部の演奏です！！！」

司

「部員は、一人だけど…友達と一緒に”””演奏してくれます」

奏

「わひゃ、キーン…

私、カナデとユカが

歌います（ペコッ）””」

蓬

「頑張りましょう！！！！」

蓬はキーボード……あれ？

どっかで見たような？

チャッチャッチャッ

スティックでリズムを取る  
飛鳥力チューシャ似合うね

ユカ・奏

「私達の歌を！！

聴ッけええ！！！！！！」

♪タンツタンツタン♪

ジャカッジャカッジャアン

ユカ

「仮面の〜ア・ナ・タ？」

奏

「私だけに素顔を！  
見せて〜！！！！」

ユカ・奏

「零れ落ちる雫は  
何処から生まれ、  
私を優しく撫でる〜  
」

♪デッデッテテ♪

奏

「仮面に隠した〜  
瞳で…私だけを見てッ  
欲しい〜soo！！！！」

チャッチャッチャッチャン

ユカ・奏

「アナタのせいで！！私の  
トキメキdramatic〜」

ジャッジャッジャッジャン

ユカ・奏

「进ッる火花が〜私達を  
引き離す〜から！！！！」

ユカ

「絶対ッ Jump」  
限界ッ Punch」

奏

「絶対ッ Jump」  
限界ッ Kick」

ユカ・奏

「私だけの、  
仮面ライダーアア」

ユカ・奏

「絶対ッ 限界の、  
光を掴めええ」

ジャッジャンジャッジャン

♪ズツタンズツタン」

デッデッデッデッデッテン

ユカ・奏

「ジャンプ」

♪ズツタン」

ワアアアアアアアア

パチパチパチパチパチ

ワアアアアアアアア

パチパチパチパチパチ

そして、ユカと羽生は

ユカ

「うう、

お嫁に行けない…」

羽生

「忘れるのですよ？犬に  
噛まれたと思えば…」

そう二人は最後のジャンプ

でコードに足を引つ搔けて  
転んだのだ…憐れユカと奏  
パンツ…まる見え

羽生

「そッそう言えばツカサは  
何て言っただのですか？」

ユカ

「ああ！それは—  
ヒ・ミ・ツ」

羽生

「あう！？

教えてえなのです！！！！」

ユカ

「教ッえない」  
♪♪」

駆け出すユカと追い掛ける  
羽生の懐の世渡りの鏡には

巨大な何かに立ち向かう  
鬼のシルエットが映る…

ユカ

「響鬼の世界―痛い!？」

痛た!! やめてえ!!!!」

羽生

「教えるゝなのです!!!!」

ポカポカポカポカポカ

## 第十七話 みんなの日常編 完（後書き）

内田ユカと羽生が訪れた、  
次の世界は！？天使と戦う…  
鬼士を養成する学校だった

突如、現れた天使の声に  
悪魔がユカに囁く！？

果たしてこの世界をユカは  
救えるのか！？そして響鬼は

次回仮面ライダーユカイド  
輝け！！心のバツクル！！！！！！

次回も変身（ペーコペコ）  
ユカイド

次回も読むですよ あう

第十八話 鬼土師範と囚われの姫君（前書き）

私フェル！！今朝やってきた  
女の子が、まさか先生！？！？  
すつごく強いの！！！！

教官とテレサさんは何やら  
考え中？ウーン？

へちやー>(<|>)ゞ  
朝からマラソンは乙女には  
きついよ！教官！！！！！！

プリーシアに代わって  
輝け！！心のバツクル！！！！！！！！

一度言ってみたかったんだ

よし、魔法の勉強頑張る  
我が意に従い…我が手に…  
集うべし！！！！！！

みづんな読みたくなれ

## 第十八話 鬼士師範と囚われの姫君

仮面ライダーユカイド

### 第十八話

「キリキリと走れ!!」

そこ!! 歩くな!!

死にたいのか!!!!」

「あの、

ココはどこですか？」

ユカがいかにも日本の武士な格好をした女性に尋ねる

「!?! お主、拙者の背後に立つとは…出来る!!!!」

カチャ… シャキン

ユカ

「!?! ひッええ、」

女性が太刀を抜き、ユカの首筋に当てるしかも二刀流へなへなど、座り込むユカ

「きッ教官!?! まだ子供です刀を降ろして下さい!!」

優等生風な金髪美少女が  
ユカに刃を当てつつける  
女性に意見する

「プリーシア、拙者に  
意見するとはな？」

プリーシア

「ッ（ゴク）！！！！」

ユカに向けて放つ殺気を  
今度は金髪美少女、  
プリーシアに

「フッフ冗談だ、  
プリーシア！！」

スッと刀を鞘に納める

プリーシア

「——ふう、」

冗談には感じなかった様だ

プリーシア

「華鈴教官、

——転校生では？」

ふむと口許に手を当て思案

華鈴

「すまぬ、拙者は壬生華鈴  
ローゼンベルグ鬼士養成  
学校の実技教官だ！！！！」

ニコツと笑い、ユカに手を  
差し延べる

ユカ

「…私は、  
内田ユカです、」

手を握り立ち上がるユカ

華鈴

「故郷は和の国か？」

ユカ

「？―…そ…です？」

そうかそうかとバシバシッ  
背中を叩く華鈴、痛い

華鈴

「よし、拙者に  
ついて来い！！ユカ」

ユカ

「はッはい！！」

校舎とは反対側に向かう

華鈴…

プリーシア

「教官！……！」

校舎はコッチです、」

慌てて目の前の入口を

指差すプリーシア

華鈴

「む、そうか

…行くぞ、ユカ」

何とか入口へ向かう教官に  
プリーシアは懇切丁寧に、  
校長室への行き方を教える

華鈴

「―バカにするな！！！！！！  
それぐらい分かる”””」

フン、と校長室とは逆方向  
に向かう華鈴教官

「プリーシア様、

フェルが…逃げて、」

プリーシア

「ん？神楽、

フェルがーなんだ…！？」

黒髪の巫女装束を着た  
美少女が彼女に危険を

知らせる

「うわあああ！！！！！

どうしよう！？！？」

プリーシア

「ひッ！？来るなフェル！！！！！！  
止せえ！！嫌アアア！！」

小さなピンク髪魔法少女が  
ピコペコハンマー型の杖兼  
箒から巨大な魔法陣を暴走  
させながら彼女に迫る

フェル

「プリーシアああ！！！！！！  
助けーへっくち！！！！！！」

バsshャーーン

神楽

「プップリーシア様！！！！！！」

フェル

「へちやー、>(<—>(>)ゞ」

水浸しのプリーシア…

プリーシア

「フェル！！…クシユン、」

神楽

「ッ今、暖めます！！」

シユルシユルと装束を

脱ぎだす神楽

フェル

「＼＼ 凄い＼＼」

プリーシア

「かッ神楽！？

脱がなくていい！！！！」

大慌てで神楽を止める……

チッ、あと少しなのに……

神楽

「でも、ハヤウェイが一番

早く人を暖かくする方法

だって、……」

プリーシア

「ハアアヤアアウェイッ

貴様はアアアア！！！！！！！！」

ハヤウエイ

「な”誤解だあ!?”

プリーシア! ! ! ! !」

プリーシア

「問答無用! ! ! ! !」

レイピアを抜き、へんちくりん髪の少年に突き付ける

プリーシア

「必殺、……………」

グロウ! ! ラッシュ! ! ! ! !」

ズツババババババ

無数の突きが彼を襲う

ハヤウエイ

「ギアアアアアアアア

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !」

ユカと華鈴は……

ユカ

「どこですか？」

華鈴

「……………むう？」

学校の中で迷子さん二人…

「華鈴？また迷子、」

華鈴

「ちッ違う！！！！決して！！！！  
違うんだ、テレサ！！」

クスと微笑を浮かべる

色々と超絶な美人シスター

テレサ・ティレット

テレサ

「華鈴！私の前で

嘘はいけませんよ！！」

華鈴

「すまぬ…校長室は、  
どっちだ？」

テレサ

「……………」

ユカ

「????……!」

呆れるテレサを見て、

ふと横を見上げると校長室  
彼女の態度に納得するユカ

テレサ

「ココよ、華鈴?」

指で示すテレサ…

友達も大変だ

華鈴

「知ってる」

聞いたただけだ」

ささ、お入りとユカを押す

華鈴は真っ赤だ……可愛い

ガチャ

華鈴

「キザーロフ校長殿!!内田  
ユカを連れて来ました」

へんちくりん髭の校長に、  
深々と頭を下げる華鈴教官

キザローフ

「おお！！待ちくたびれたぞ  
鬼士師範殿、」

ユカ

「…はい？」

華鈴

「なに！？それを早く言え！！  
おと失礼、師範殿、」

ユカ

「？…はあ」

ニコニコ顔の校長と今度は  
ユカに頭を下げる華鈴

キザローフ

「早速、ペガサスクラスの  
授業を頼みますぞ！！」

二人の後ろにいたテレサに  
ユカを案内するよう伝える

テレサ

「畏まりました、」

ボタン

テレサ

「華鈴！いい加減、道を覚えなさい！！！！！」

サクツと華鈴に注意しユカを案内するテレサ

華鈴

「いやテレサ？私はしっかり覚えて……」

テレサ

「だったら何故、午後はいつも授業に遅れるんですか！！！！！」

トコトコトコトコトコトコ

テクテクテクテクテク

華鈴

「ッほら、着いた！！！」

テレサ

「私に付いて来たんでしょ！！！」

シユンとなる華鈴、さつきまで鬼の様に生徒を走らせていた教官とは思えない……

ガララッ

華鈴

「よく聞け！今日から、  
このクラスの鬼土師範を  
勤める内田ユカ先生だ！！  
…挨拶をユカ殿、」

華鈴が教室に入ると、  
ぐったりしていた生徒達は  
ビシッと席に着く

ユカ

「ええと、  
よろしく（o^\_^）b」

シーン

「はいはい！！」

ちっこい生徒が手を挙げる

華鈴

「なんだ？フェル、」

フェル

「ユカ先生は  
何歳ですか？」



教科書を開いてみたユカは  
その複雑怪奇な内容に驚く

ユカ

「その…頭より心体で、  
鬼（技）を学んで…！  
いこッー！！！！！！」

はい！！！！！！

鬼士学校・グラウンド

<sup>プリズム</sup>  
魔法石で動く

木人君を用意！！

ユカ

「それじゃ、変身！！」

《カメンライド

・ユカイド》

身

仮

札

変

面

ユカイドに変身する

木人君

「モクジン!!」

ブンッ

ユカイド

「ーうわ!?…と、」

そのちやちいボディから想像できない踏み込みからの  
渾身のぶん殴りを紙一重で  
躲す…木人は―地面を挟る

木人君

「…モクジン（キラーン）」

ユカイド

「へえ、やるじゃん!!」

ブリーシア

「（教官!!あれ…

暴走してません?）」

華鈴

「（やはり、  
…ただ者じゃない、）  
」

テレサ

「（音叉を  
使わずに変身か―）  
」

ドッゴーン

木人君

「モ…ク…ジ、ン―」

バタッ

粉々に倒れる木人君

《3…2…1…》

《タイムアウト》

ユカイド

「ま！こんなもんかな、  
」

《リフォメーション》

変

速

赤

数

複

時

閃

《カメンアウト

・ファイズ》

ユカイド

「さあ！皆も

やってみよー！！！！」

みんな

「出来るかああああ！！！！」

ファイズにカメンライド

ポインターで木人を

ロックオン容赦なく粉碎

ブリーシア

「見えなかった！？！？」

フェル

「時のプリズム？」

神楽

「…神速、」

ハヤウエイ

「凄いな、ユカ先生!!」

素直に驚く生徒達

テレサ

「（華鈴、

後で話があります）」

華鈴

「（ん、テレサ?）」

険しい表情で告げる彼女に  
何かを察する華鈴

華鈴

「（分かった）」

授業が終り華鈴とテレサは

華鈴

「サブルムが?」

テレサ

「ここ最近の動きは  
怪し過ぎます、」

職員室でヒソヒソ話

テレサ

「ヴィントラント以外の  
国に天使を派遣したら  
直ぐに撤退…おかしい」

華鈴

「しかも今まで以上に  
強力な天使か…、」

テレサ

「最近、噂の世界の魔女に  
関係あるのかも…」

華鈴

「ユカ殿が怪しいと？」

テレサ

「用心に  
越した事はないかと」

華鈴

「注意しておく、」

華鈴・テレサ

「誰だ（誰です）！！！！」

バタバタ

窓から蝙蝠が飛び立つ

華鈴

「…鼠か、」

テレサ

「―猫かもしれません、」

二人の瞳は細くなり  
口許は僅かに上がる

華鈴

「ふッふふ、」

テレサ

「クックス、」

ユカ

「美味しい（o^\_^o）」

フリーシア

「当然です、ユカ先生」

ユカはフリーシア達と

ランチタイム

神楽

「もぐもぐ、

ちゅるちゅる」

フェル

「いいな～Sランチ、」

ハヤウエイ

「ミートボール、

あげるから…」

羨望の眼差しで二人を

見つめるフェルにフォーク

に刺した肉団子を口に

持っていく…

フェル

「パクッ！！！！ハヤウエイ  
大好き」

プリーシア

「フン、ふしだらな!!」

神楽

「はむはむ、ずるずる、」

フェル

「ハヤウェイには  
レタスあげるね!!」

ハヤウェイ

「いらんわ!!!!」

フォークに刺したレタスを  
払いのけるが放物線を描き  
プリーシアのスープの皿に  
ダイブイン……あああ

プルプル…ワナワナ

プリーシア

「フェル!!!!!!」

ハヤウェイ!!!!!!」

レイピアを抜きだし

プリーシア

「必殺、

サザンクロス!!!!!!」

十字の斬撃が二人を襲う

ズッダアーーン

ユカ

「美味しかった（＾＾）b」

神楽

「ご馳走様、」

ユカ

「神楽ちゃん、  
寮はドコ？」

神楽

「…コッチ、付いて来て」

トコトコ寮へ向かう二人

ハヤウエイ

「ッ話せば分かる！?!?」

フェル

「そッそうだよ、」

ブリーシア

「最初に言っておく、

私は…容赦せぬ……!」

レッドホットショット

ミラージュ…ラッシュ

ズドドドドドドドドドドドド

ドガガガガガガガガガガ

ハヤウェイ・フェル

「ゴメンツツなさああい

!!!!!!!!!!!!!!」

サブルム領レスレクション

地下施設・ウーム

「ソレが鍵の代わりか？」

「――」

「……、」

「力は天使の活躍を見れば  
分かるでしょ？ ジュダス  
クスクス、フッフッ」

魔女と精悍な顔に研ぎ澄ま  
された身体を、白銀の鎧で  
包んだ最強の騎士ジュダス  
と魔女の隣で醒めた瞳で彼  
を見るフードコートの少年

「――」

三人の間で空虚な瞳で虚無  
を見つめ横たわる彼女は…

リアリス

「……南春香、器を満たす  
プリンセスよ、クスッ」

「QとJを見つけた！！  
今回の依頼は、

「これで決まりだ！……！」

## 第十八話 鬼士師範と囚われの姫君（後書き）

魔王と勇者の戦いは続く…

勇者こな

「私のターン！……！」

覚悟したまへー！！……！」

バシユッー

「録画するチャンネル  
間違えてた…此処は？」

紀梨乃

「今度はタマちゃんか…！」

勇者こな  
の攻撃  
こなスラッシュ

珠姫

「…暖かい……！」

魔王K

「顔出し着ぐるみだと……？」

勇者こな

「（ニヤリ）」

魔王K

「甘い！！トラップ発動！！！！  
コスチェンジ！！！！」

トラップカード

コスチェンジ

相手側のキャラがコスプレ  
している時、発動可能

一度、任意のコスに変える  
ダメージは相手側へ

魔王K

「白熊からペンギンへ！！」

♪絶対ッJump限界ッPunch  
絶対ッJump限界ッKick♪

珠姫

「！！！！？ああ、」

テチテチテチテチテチ

トテトテトテトテトテ

マ○ンテ

勇者こな

「そんな！！！！ぐう！！！！」

勇者こなに

1855のダメージ

魔王K

「不様だな？」

勇者こなよ！！！！！」

勇者こな

「まだ、

まだ私のターンだ！！！！！！」

U線上の魔王Kと勇者こな

次前後書きに続く

次回仮面ライダーユカイド

鬼士生活と姫君の騎士

輝け！！心のバツクル！！！！！！！！

次回も変身（ニーコニコ♪）

ユカイド

次回も読むですよ あう

## 第十九話 鬼士生活と姫君の騎士（前書き）

拙者は壬生華鈴、鬼士学校で実技教官を勤めている！

ユカ殿が怪しいとテレサは言うが、私には彼女は心優しい娘だと思えるのだが――テレサのこと真に疑ってる

訳じゃないだろう

しかし先日 of 半分個怪人は何だ？拙者とテレサで叩きのめしたが結局逃げられた

サブルムの刺客？まさか！ただテレサの戦闘服は……目の遣り場に困るな”””

コホン、それでは拙者も！輝け！！心のバツクル！！！！！！

意外と気持ち良いな！！

お主！読まぬのなら………  
剣の錆びにしてくれる！！！！！！



## 第十九話 鬼士生活と姫君の騎士

仮面ライダーユカイド

### 第十九話

「……鼠が一匹、」

カツカツコツコツ

「侵入者が…」

この聖域に、」

「記念すべき初陣ね！」

微笑を浮かべる魔女とジツと通路の先を見つめる少年

「やれるのか？少年、」

柄に手を置き醜悪な表情で殺気を押し殺すジユダス…

「魔女！！南と…千秋ちゃん  
春香さんを返して貰う」

《3・7・3》

《スタンディングバイ》

少年

「スラッシュ!!!!」

《IN - STALL》

左腕のカードリーダーに

カードを挿入…

藤岡

「変身!!!!!!」

《コンプリート》

フォトンブラッド（黄）から

カナーズが現れる

少年

「変身…、」

《UP - DATE》

リーダーから粒子に変換された  
アーマーが少年を包む

カナーズ

「…お前が

例のライダーか、」

黒

蜂

赤

筋

銀

赤の筋が走る黒いボディに  
胸と間接部位に銀の鎧、  
蜂の様な仮面に漆黒の眼を  
鈍く光らせる仮面ライダー

ザデイス

「仮面ライダー…ザデイス  
お前じゃ助けられない」

カナーズ

「……………、アア……!!」

振りかぶった拳が  
ザデイスの顔面を捉える

ザデイス

「ッ、…お返しだ!!」

ハイキックが胸を蹴り抜き  
床に膝を着くカナーズ

カナーズ

「ツツツツヤア……!!」

脛脈にポインターを装着、

ENTERを押しロックオン!!

ザデイス

「!?!?!?!?!」

カナース

「南を、

俺が助けるんだああ!!」

跳躍一回転、円錐状の  
ブラッドに…突っ込む

ツギヤアアアア

カナース

「ッ、―タアッ!?!?!」

光りと共に背後に抜ける

デッキヤアアウ…ン

Φを刻み爆発

カナース

「ハア、…次は魔女だ!!」

リアリス

「まだよ、藤岡くん?」

《IN-STALL・Recover》

リーダーにカードを挿入、  
あっという間に傷が癒える

ザデイス

「スラッシュ…、」

《Storm - Lance - Turbo》

カードを挿入、漆黒の槍が  
顕現、構える

ザデイス

「デイズター…

ブラスト、」

吹き荒れる風が切っ先に

集まり…超加速

カナーズを貫く

ドッグウアアアオオ…ン

ジュダス

「……………フンッ」

ザデイス

「ハア、ハア…ハアッ」

爆煙が収まり魔女が瓦礫を

拾う

リアリス

「残念、

オートバジンよ……」

鬼士学校・女子寮

ユカ

「みんな！

おっはよう……！！！！！！」

プリーシア

「お早うございます、」

フェル

「おひやなにちは、」

神楽

「チョマジイ〜カゼ」

同じ部屋に入ることになり  
朝の挨拶を交わす

プリーシア

「フェル、

だらしないぞ！！！！」

フェル

「へちやー>(<|>)ゞ」

神楽

「もぐもぐ…」

プリーシアが注意する横で

神楽とユカは

ユカ

「何食べてるの？」

神楽

「…お饅頭、食べる？」

ユカ

「食べる！食べる！！」

もぐもぐ…もぐもぐ…

プリーシア

「大体…がーだから…」



「もぐもぐ、」

再び ランチタイム

ユカ

「どうやるの？」

フェル

「まずイメージーそれから  
詠唱呪文を唱えてー…  
魔法陣を安定させるの」

ハヤウエイ

「やってみなよ！

ユカ先生！！！！」

ユカ

「ゝえと、」

テーブルの蝋燭に手を翳す

ユカ

「我が意に従い、我が手に  
集うべし…ええと、」

フェル

「大いなるだよ！」

あッそうかと詠唱を続ける

ユカ

「大いなる焦がれる力！！  
眠れるサラマンドルの炎  
…ファイヤーヴォルト」

ボウ

手の魔法陣に炎が揺らめく

ユカ

「えい！！」

フワフワッボツ

見事、蠟燭に火を灯す

凄く凄いと騒ぐユカ達から  
三つ離れたテーブルの席に  
着く華鈴とテレサ

華鈴

「今日のBランチは、  
和食かあゝ””」

「テレサさんは  
何にします？」

Aランチがオススメかなゝ  
と接客する少女フィーリア  
因みにハヤウエイの妹だ！

テレサ

「華鈴と同じ物を…」

フリーリア

「畏、かしこまり〜!!  
かな、かな〜!!……!!……!!」

パタパタと厨房に向かう

華鈴

「Bランチで、  
——いいのか？」

テレサ

「Bランチには、お肉が  
入ってないので…」

華鈴

「…そうだったな、」

お肉も食べた方が  
いいぞと注意する

テレサ

「ありがとう…華鈴、」

華鈴

「友を心配するのは、  
友達として当然だ””」

フィーリア

「お待たせしました!!  
御ゆつくりかな〜!!!!!!」

ピュ〜と次のテーブルへ

テレサ

「コレは？」

フォークで掬ったソレを

華鈴に見せる

華鈴

「高菜だな、辛いぞ!!  
美味しいがな」

テレサ

「……………てい!パクッ」

もぐもぐもぐもッ……

華鈴

「?テレサ、」

テレサ

「……!?辛りやーひたは!!  
いはい!!いひゃい〜!!」

涙目で助けを求めるテレサ

華鈴

「一気に口へ  
入れるから、」

テレサ

「みひゅー!!みじゅをー!!!  
ひたがいひゃいー!!!」

華鈴

「ほら水をーあッ!？」

バシヤッ

手を滑らせコップの水を  
テーブルに飲ませる

テレサ

「かりいん!?ひゃはく、  
みひゅをー!!!」

ユカ

「テレサさん、  
コッチ向いて!」

振り向くと自分に向かって  
手を翳すユカと生徒達

ユカ

「我が意に従い、」

我が手に集うべし！！  
静かなる繁栄の海、母な  
るウンディーネの安息…  
ウォーターボール！！！！！！」

フワリ〜ゴクン、

テレサ

「ーありやひよと、  
ゆはひえんひえ！！」

ユカが作り出した水の塊を  
飲み込み礼を口にする

フェル

「……もう  
使いこなしてる！？」

ハヤウエイ

「俺も練習しよ、」

神楽

「…菖蒲、」

赤く腫れたテレサの舌に  
癒しの魔法を当てる神楽

テレサ

「神楽さんありがとう」

フリーシア

「早く食べましょう、  
午後の実技に遅れます」

「お礼をしなければな、」

「鬼士学校には二度と  
行きたくないからな!!」

「ん？何の話だ、」

保坂とWは話が  
噛み合わない…

W

「だから鬼教官とシスター  
ヘルに殺されかけたって  
言ってるの!!!!」

保坂

「何故、鬼士学校に？」

W

「えええ！？」

保坂

「依頼は魔女及び協力者の  
追跡調査の筈だが？」

W

「サービスでユカちゃんの  
報告もしてやろうと、」

藤岡

「ハア、疲れた…」

保坂

「ご苦労、」

フラフラ戻ってきた藤岡

藤岡

「厄介ですね、

あのライダーは、」

保坂

「南春香と妹達は、」

藤岡

「ダメです、

いませんでした…」

保坂

「だが、この世界に  
居るのは確かだ、」

チラッとWを見る二人

W

「……………報酬は？」

藤岡

「プリズムでどうかな？」

色の無いプリズムを渡す

W（フィリップ）

「やった！凄く

気になってたんだ！！」

喜び跳ねる右半身に  
振り回される左半身

保坂・藤岡

「これで決まりだ！！！！！」

W

「それは、

俺達の台詞だ！！！！！！！！！！！」

鬼士学校・グラウンド

ユカ

「今日は皆さんの属性を  
見せてください!!」

生徒達の前に音叉を

置いていく

ハヤウエイ

「これで鬼士に、  
一歩近づく訳だ!!」

フェル

「緊張するねー!!」

神楽

「(ドキドキ)」

プリーシア

「漸く…変しープリーシア

ちゃん!! 静かに!!!!!!」

音が乱れるでしょ!と  
注意されるプリーシア

プリーシア

「(どうして、  
わらわだけ!?)」

フェル

「(怒られちっ!!!)」

プリーシア

「(キッ!!!!!!!)」

ハヤウエイ

「(まあまあ、)」

神楽

「(プリーシア様、  
…喧嘩…! だめ、)」

キイイイイイイイイイ

音叉に共鳴する様に炎や風  
雷等に包まれる生徒達

フェル

「あれ? 安定しない、」

フェルを含め何人かの生徒は属性が乱れて安定しない

因みに全ての生徒が鬼士になれる訳じゃない

鬼士は修行も大事だが  
素質も必要なのだ

そのため騎士と魔法操者の  
学課、どちらかを必修

プリーシア

「わらわもか、」

神楽

「しゅん、」

二人もダメか

ハヤウエイ

「俺も？」

様々な属性が彼を  
包み、渦巻く

ユカ

「ハヤウエイくんは  
決めかねてるかな、」

ハイ終り属性が安定しない  
人は後で用紙に書いて  
提出してください

そう言つて音叉を

止める、ユカ

プリーシア

「鬼士にはなれぬのか、」

神楽

「プリーシア様…、」

落ち込むプリーシアを

心配する神楽

フェル

「でもこれで騎士と操者に  
集中できるじゃん!!」

プリーシア

「フェル…そうだな!!」

わらわは騎士になる!!」

ユカ

「それじゃ今日は、お終い

また明日!!」( \* . . \* )

ありがとうございました！！

### 職員室への帰り道

あうあうあうあうあうあう

ユカ

「羽生ちゃん！？！？」

辺りを見渡すと空から

羽生が降りてくる

羽生

「ユカア！！」

やっと戻れたのです、」

ユカ

「よかつたー！！無事で、」

説明しよう！羽生は、この  
世界のヴィントラント特有  
の風に吹き飛ばされ今まで  
お空で迷子さん

羽生

「ふうーユカ、役割は、  
分かりましたか？」

ユカ

「鬼士を…

育てることかな？」

続く

第十九話 鬼土生活と姫君の騎士（後書き）

魔王と勇者が激闘？を

繰り広げる中

つかさ

「お姉ちゃん！

しっかり、」

かがみ

「——んんッ

あれ、つかさ？」

みゆき

「ご無事で何よりです。」

紀梨乃

「しっかし、

何なんだろうね！」

千秋

「取り敢えず、二人とも  
バカ野郎だ！！！！！！」

春香

「粗茶ですが、」

鞘子

「あッどうも、」

夏奈

「甘い物は？春香！！」

みさお

「私だけ扱い、  
ヒドイんだってヴァー！！」

本編で…

魅音

「おじさんもだよ、」

本編で…

奏

「ツカサ、

どこ〜（＜―＞。）」

珠姫

「この着ぐるみ〃〃  
貰っていいのかな？」

内田改めユカ

「珠姫さん、

かぁいい””」

らきぬこ

「にゃも〜ん」

次前後書きに続く

次回仮面ライダーユカイド

鬼土浴場と姫君の妹達

輝け!!!心のバツクル!!!!!!

次回も変身(天誅)

ユカイド

次回も読むですよ あう

## 第二十話 鬼土浴場と姫君の妹達（前書き）

私は和の国の巫女、神楽…

…プリーシア様…大好き…

ユカ先生も…好き…教官と

…テレサさん…フェルも…

好き…ハヤウエイは……？

…ハヤウエイのえっち…

…教官と…テレサさんは…

えっちな人が…大嫌い？…

斬り捨てる…斬り捨てる…

プリーシア様に…代わって  
輝け…心の…バツクル…

…恥ずかしい””あうあう

…空飛ぶ…女の子は…誰？

御免なすって…読んで”…

…神楽からの…お願い””

## 第二十話 鬼土浴場と姫君の妹達

仮面ライダーユカイド

### 第二十話

メディアード

現在、宗教戦争とも言える  
レリヒオン教とサルース教  
との争いに中立を貫き  
双方に様々な物資を与える  
悪く言えば死の商人の都市

しかも城塞都市であり迂闊  
に手は出せない為双方共に

胡麻搦り状態

「凄ーい！！！！」

「はしゃぐな！

バカ野郎！！」

「数日だが外の空気を

しっかり頂け姫達よ、」

漸く出番の夏奈と千秋

そして漆黒の鎧を纏う騎士

魔黒鬼神こと暗黒騎士

夏奈

「ケバブだって！

千秋食べよ！！」

千秋

「何だソレは？」

きゃっきゃつと千秋の手を  
引っ張って向かう夏奈

暗黒騎士

「……………」

夏奈

「黒子さん、お金！」

暗黒騎士

「……………」

千秋

「美味しい！！」

暗黒騎士を黒子呼ばわり…

夏奈、恐ろしい娘！！！！

夏奈

「？綺麗！！！！」

千秋

「うん！！！！！！」

暗黒騎士

「…プリズムだ、」

路地裏の商店に陳列された  
魔法石を眺める二人乙女だ

千秋

「あの…騎士さん、  
一つ、いいですか？」

夏奈

「あッずるい、私も!!!!!!」

暗黒騎士

「…好きにしろ」

より取り見取りのプリズム  
から赤い魔法石を選ぶ夏奈

夏奈

「私ッコレ」

千秋

「……………うん、」

暗黒騎士

「どうした？」

彼を見上げ春香お姉さまに

どれが良いか悩んでるんだ

……… 千秋！！お利口ちゃん

夏奈

「見て見て！！」

空飛ぶ箒だつて！！！！」

シツクな箒に跨がる夏奈…

暗黒騎士

「姫よ、降りた方が  
いいぞ…」

夏奈

「？ホントに飛ぶ訳  
ないじゃん！！！！」

千秋

「かつ夏奈！？  
浮いてる！！！！」

フワリと地面から1センチ

程浮かぶ、夏奈の両足

夏奈

「おお！？すっげー！！！！」

千秋

「危ないぞ、夏奈！！」

夏奈

「平気、平気♪」

更にフワフワと上に浮かぶ

夏奈

「……あー、黒子さん！

どうやって降りるの？」

暗黒騎士

「……………」

千秋

「……ッのバカ野郎！！！！」

ブンッ

千秋のフィニッシュライド  
伝家の宝刀ふじおか投げで

夏奈を叩き落とす

夏奈

「ひどい！？藤岡にも

殴られた事ないのに！！」

千秋

「ほう夏奈、口の聞き方に  
気をつけるとふじおか  
が言ってるぞ！！！！」

ぐりぐりぐりぐり

暗黒騎士

「……………」

夏奈のほっぺにふじおかを  
押し付ける千秋…（o^\_^）b

鬼士学校・女子寮

ユカ

「浴場が壊れたので、  
男子寮に借りに行きます  
気をつけてね！！！！」

華鈴

「案ずるな、拙者と  
テレサが警備する…  
プレーター、エイ○アン  
ゴ○ラ、ガメ○だろうと

斬り捨てる！！！！！！」

シスター・ヘル

「愚か者に裁きを！！！！！！」

既にテレサはヘルモード！！

彼女の身の丈を越える

十字剣が光る…マジだ

フェル

「…頼もしい、」

プリーシア

「何故、私が男子寮に、」

神楽

「お風呂…気持ちいい」

これは3バカトリオの  
出番だが登場しません

悪しからず

鬼士学校・男子寮

フェル

「ハヤウェイ、覗いちゃ

ダメだぞ〃〃キャツ」

プリーシア

「フン、借りにきたぞ!!」

神楽

「ちやぷちやぷ」

引率のユカに教官とテレサ  
そして女の子達がぞろぞろ

浴場に向かう

ハヤウエイ

「ゆっくりな、」

フリーリア

「後でね、お兄ちゃん!!」

パタパタパタパタ

ハヤウエイ

「さてと、

……予習しなくちゃ」

自室へ戻るハヤウエイ  
因みに3バカトリオは  
ミッションで遠征中だ

フリーリア

「それじゃ、

お先になッかな〜!!」

ピューと寮に戻る

プリーシア

「教官！私達で最後です、  
一緒に入りましょう」

華鈴

「む、しかし…」

ユカ

「覗きする人は、  
此処には居ませんよ!!」

テレサ

「華鈴？お言葉に  
甘えましょう、」

神楽

「教官も…一緒…嫌？」

ぴとッ神楽が教官の  
袖を握る…やばい”

華鈴

「”仕方ない、入るか”」

シュルシュルリ 脱ぎ脱ぎ

ぬぎぬぎ パサッパサリ

ガララッ

フェル

「おおー！？

変わらないね、」

プリーシア

「当然であろう、

造りが同じなのだから」

飛び込み騒ぐフェルを  
寝めるプリーシア

華鈴

「まず掛け湯！

それから―」

テレサ

「…（また

大きくなった気が…）」

はあと自分の胸を見つめる

神楽

「いっしゅいっしゅ、ばしゃー！」

プリーシア

「フェル？バスタオルを  
いつまで着けておる、」

フェル

「キニシナイデ…アハハ」

ユカ

「おッ風う呂♪おッ風呂、  
ピカピカごしごし〜」

フェル

「フェル！

行きまーす！！！！」

ユカ

「こちらユカ、  
発進どうぞ！！！！」

バツシャアアアーン

華鈴

「こら、

ユカ殿まで…ふふッ」

神楽

「大丈夫、…私も、

…飛び込むもの…」

バツシャン

プリーシア

「認めたくないものだな…  
若さ故の過ちは…」

バシャアン

テレサ

「湯舟よ！」

私は帰ってきた……！」

ザッブーン

華鈴

「壬生流は、  
伊達じゃない……！」

ザッパアーン

結局全員で飛び込むユカ達

フェル

「何分息を止められるか  
勝負だ……！」

仲良く息止め大会

神楽

「（ぶくぶくー、）」

ユカ

「（~~~~~）」

華鈴

「（——いぶ、）」

テレサ

「（……………）」

プリーシア

「ぷはッ、あれ？」

（もう一度！！）」

顔を上げ見渡すとみんなは  
湯舟の中…慌てて潜る

フェル

「ぷは、ーへちゃー」

プリーシア

「~~~~！もう無理！！！！！」

華鈴・テレサ

「く拙者の（私の）…、」

羽生

「（ユガア、

さぷぷいのべピュ）」

ユカ

「（£§@ ゐ）ぶは！？！？」

突然に湯舟の中に現れた  
羽生に驚き息を吹き出す

神楽

「ぷはー、」

息止め大会優勝は神楽

フェル

「いいな、私にー分けてよ

テレサさん！！！！」

テレサ

「ええ！？そんな」

無理です””」

ユカ

「確かにずるい！！みんな  
何でそんなに……、」

フリーシア

「騎士としては  
邪魔なだけだ!!」

神楽

「重たい…ぷるん、」

華鈴

「しかし女性には必要だ」

フェル

「ぶー、えい!!!!!!」

テレサ

「キャッ!? フェルダメーう  
アン、ふア…」くア」

むにむに にぎにぎ

ユカ

「フリーシアちゃん!  
神楽ちゃん!! 覚悟!!!!!!」

手を嫌らしく動かし二人に

飛び掛かる

フリーシア

「な”ーうあ”止せ!! くッ  
はあッん…むア””」

神楽

「ん〃〃ふ〃〃き〃  
あ〃〃やん〃〃」

ぶにぶに　くにゆくにゆ

華鈴

「（拙者は、）」

仲間外れな教官憐れ？

カタン

シスター・ヘル

「……裁きを！！！！！」

華鈴

「下衆め！！！！！」

脱衣所からの物音に二人は

戦闘体勢

てか何処から剣を出した？

「無いな？浴場の中か？」

憐れな彼？は

プリーシア

「怖いもの知らずが  
居ようとは……、」

フェル

「見物だねー！！」

神楽

「…えっち？」

ユカ

「覗き？」

ガララッ

華鈴

「天誅ツウウ！！！！！！」

シスター・ヘル

「愚か者に審判を！！！！！！！！」

華鈴教官は虎鉄と菊一文字

を振り上げる

ヘルはエクスピアティオを

腰の辺りで構える

忘れ物を取りに来た  
ハヤウエイは…

華鈴

「壬生流剣術！！！！  
太刀乱舞！！！！！」

シスター・ヘル

「クルクス…

グラディウス、」

ハヤウエイ

「へ！？——あー！！！！！」

この日の事を彼は  
一生忘れない

桜に染まる肌、揺れる果実  
しなやかな曲線美

そして教官とテレサさんの

自主規制

―…真の鬼を彼は見た

天国と地獄…

神楽

「ハヤウェイの…えっち  
…えっち、えっち」

♪テンテンテ…テン♪

ヴィエーラ・施設

レリヒオン教の総本山

サブウムにある聖地奪還を  
掲げヴィントラントと協力  
最強の騎士団を率いる

そんな王国の施設では

「G U a a - a a - a a ! ! ! ! !」

ガシャ ガシャ

「G a a a - g u r u r u、」

ドン ジャララ

巨大な黒き鎧を纏う怪物と

三人の老人…

ケスビム

「ついに完成した!!」

トーラ

「後は邪魔な鬼士を…」

ネイビム

「真実は闇の中!!!!!!」

「奴はどうする?」賢者「



ジユダス

「（傀儡か、）」

ウーム

リアリス

「楽しかった？」

夏奈

「空、飛んだ！！！！！」

千秋

「疲れました、」

意外に仲良くしてるな

暗黒騎士

「……………」

少年

「……………」

何か喋れ二人！！！！

千秋

「お姉さま、

おみやげです……」

カプセルの中の春香に  
プリズムを見せる

春香

「――」

力無く腕を下ろす千秋

夏奈

「千秋！今日は夏奈様特製  
絶品カレーだぞ！！！！」

両手を上げ宣言する夏奈

千秋

「……そうか、」

春香の眠るカプセルから

目を離さない……

リアリス

「夏奈ちゃんのカレー  
好きよ！！私、」

少年

「…楽しみです、」

暗黒騎士

「……………」

夏奈

「何か喋れ！！黒子！！！！！」

ベシッ

暗黒騎士の頭を叩く

夏奈…恐ろしい娘！！

暗黒騎士

「…チヨコを隠し味に使う  
とコクと深みが出る…」

千秋を励まそうとする四人

千秋

「…………甘くな、」

くるつと振り向いた千秋は  
四人にほほ笑む”

夏奈

「フランスの黄色い

お菓子より甘いやつだ!!

夏奈様に任せろ!!!!!!!!!!」

妹思いだね 夏奈

続く

## 第二十話 鬼土浴場と姫君の妹達（後書き）

魔王Kと勇者こなが  
激闘を繰り広げる中

紀梨乃

「三人は、

コスプレしてないね、」

かがみ

「ハハ、不幸中の幸い？」

みゆき

「少し、

興味はありますね！！」

つかさ

「パンッパンッ♪

メタボリック♪パン♪」

鞘子

「あッ！このお茶…

美味しい！！！！」

春香

「有名な

お茶なんですよ！」

夏奈

「カスタードレモンチーズ  
シフォンケーキが…  
食べたい食べたい！！！！！」

みさお

「おッ、私も食べたい！！！」

春香

「ふふ」  
しょうがないな！！！」

奏

「私、お手伝いします！」

魅音

「おじさんも  
一丁手伝うよ！！！！！」

珠姫

「（うずうず）」「」

ユカ

「一緒に教わりに  
行きましょ！！！！！」

広がる友達の輪

次前後書きに続く

次回仮面ライダーユカイド

鬼士戦慄と姫君の天使

輝け!!!心のバツクル!!!!!!

次回も変身(裁きを!!!)

ユカイド

次回も読むですよ あう

## 第二十一話 鬼士戦慄と姫君の天使（前書き）

私はテレサ・ティレット…

学校のお姉さんシスター！

今朝校長先生から私と華鈴

二人にテンペル騎士団から

聖十字軍への参加要請が…

二人と勿論私も怪しいけど

参加を決めました

ユカ先生は一人で授業

不安そうでしたが

心配…大丈夫でしょうか？

華鈴？そっちは違いますよ

こっちです！！もう華鈴…

！…何か嫌な風ですね…

鬼士学校から？―華鈴！！！！

それでは私もいきますよ！！

“緊張しますね”

輝け！！心のバツクル！！！！！！！！

私の可愛い生徒に手をだす  
天使共に裁きを！！！！！

そして貴方（女）読まないと言  
うなら作者に代わり私が

.....裁きを！！.....

## 第二十一話 鬼士戦慄と姫君の天使

### 第二十一話

「殺せ！…ヴィントラントを  
焼き尽くせ！…！…！…」

b o a a a a a a a a - g o a a a a a a a - b a a a

h y a a a a a a a a a a a a a a a a a a

h a a a a a a a a a a a a a a a a a a a

鬼士学校・職員室

華鈴

「拙者とテレサに  
出張ですか？」

キザーロフ

「名目上は養成技術の勉強会だが…」

テレサ

「何か？」

キザーロフ

「聖十字軍が君達を必要としている、」

何やら難しい話ですね！  
ウッチーは分かる？

ユカ

「私一人で大丈夫かな、」

別の心配ね、

ペガサス・クラス

フェル

「自習です」

自習です」

ニコニコと羽ペンを

右左に振る

プリーシア

「何故だ！？何故自習！！

こんな事があるのか？

いや無い！！反語！！！！」

バンツと教卓を叩き

ユカに詰め寄る

ハヤウエイ

「……………」

まだ前話のショックから  
立ち直れてないのか

ユカ

「でも…その…」

プリーシア

「然るべき理由を！！！！」

恐いぞ！！ユツキー引いてる

神楽

「むぐむぐ…かりっ、」

こんぺい糖は美味しいか？

神楽

「こくり」

聞いた俺が悪かった…

ユカ

「じゃあ！！グラウンドで  
模擬戦をします！！！！」

フェル

「そんなああ！！！！！！」

♪ テンテンテ…テン ♪

仮面ライダーユカイド

鬼士学校・グラウンド

ユカ

「さあ！！ペア組んだ？」

生徒達

「はあーい！！！！」

ユカ

「それじゃ相手ペアと戦ってください（笑）」

フリーシア

「覚悟するのだな！

ハヤウエイ！！！！」

シュツシュシュツと

レイピアで威嚇

ハヤウエイ

「…お手柔らかに、」

フェル

「大丈夫！！私の魔法で一網ッ打尽いん！！」

マジカルハンマーを  
ブンブンと振り回す

ハヤウエイ

「神楽…取り敢えず、  
二人が暴走しないように  
お互い気をつけよう、」

神楽

「こくりー!!」

そして…案の定な結果に…

フェル

「頭が…

ボンバツツヘッドオ…」

フリーシア

「わらはが…ツンデレで  
あるうか…いや無い!!  
……反語——、」

ドサツ

ハヤウエイ・神楽

「フェル!!!!!!」

（フリーシア様）!!」

フェルの挑発にブチ切れた

フリーシアと…高位魔法を  
見事？失敗するフェル

フェルは炎で髪がチリチリ  
フリーシアは爆風で真っ黒

ハヤウエイと神楽は二人に  
回復魔法をかける

フリーシア

「すまぬ神楽、」

神楽

「フリーシア様を…  
護ることが私の役目…」

神楽…フリーシア様…  
カグラ…フリーシアさま…

抱き合い囁き合う二人

フェル

「あーハヤウエイ？」

ハヤウエイ

「あーフェル？」

どうしたものかと困る二人

ユカ

「プリーシアちゃん!!

フェルちゃん!!

罰としてグラウンド…

100周!!!!!!」

眉を吊り上げ…当然ペアの  
ハヤウェイくん神楽ちゃん  
二人も一緒にね!!!!!!

かなりお怒りですね?ユカ

ユカは四人が走るのを  
眺めながら溜息一つ…

ユカ

「羽生ちゃん、

…教官ぽかったかな?」

羽生

「くりそつなのです!!」

今回の世界では不可視な  
羽生…決して作者が  
忘れてた訳じゃない筈?

ユカ

「なんで、

…戦争するんだろ、」

羽生

「…それは、いつの世も…

世界も人は幸福を求める

他人の幸せだとしても…

望み求めてしまうのです

決して枯れる事のない…

人で在る者の宿命…」

オヤシロサマとして語る

羽生にユカは耳を傾ける

しかできない…

ユカ

「悲しいね、分け合えば

良いのにね…」

羽生

「…共有には理解が必要

それはとても難しい…」

羽生

「人は傷つき漸く

理解するのです、」

走り終えた四人は

ユカの下に駆けて来る

ハヤウエイ

「先生！！

100周しました、」

プリーシア

「ユカ先生？」

ユカ

「あッ何でもないよ」

ゴシゴシとユカは目を服の袖で擦り笑顔を向ける

ユカ

「さっ帰ろ、」

他の生徒達は既に  
教室へ戻っている

教室に向けて歩きだす五人  
だが鬼士に平穩は無い

ブッブン…ブウオオーン

彼女達の頭上に巨大な  
魔法陣が顕現

ユカ

「！……まさか！？」

フェル

「て……天使？」

ブウーオオオオオーン

一際魔法陣が輝くと重厚な  
重騎士の様な鎧に包まれた  
巨人……轟力天使・ザクエル  
ソレが降って来る

ズドッーオオオ………ン

バチバチ……バチッ

ググッーギギッチ

ブッウン

砂塵の舞う中……轟力天使の  
目が光る

神楽

「……邪悪、」

プリーシア

「いきなり実戦か！」

ハヤウエイ

「コレが天使？」

ただ見上げる彼等に天使は

B o x t s u a a a a a - a a a a a a a a a a a

天使の歌声を響かせる

ユカ

「！？くッ、」

形容しがたい悪寒恐怖不快

不の感情が声に乗って

ユカ達を襲う

ゴゴッッーバサアアッ

マントの様な天使の翼を  
広げるザクエル

B o a a a a a a a - b o a a a a a a a

フェル

「いや、嫌だ!!  
来るなあああ!!!!!!」

マジカルハンマーに  
魔法陣を展開…

フェル

「フレイムランス!!!!!!」

ボアツードゴツン

ザクエルに巨大な炎の槍が  
突き刺さる

? - B o a x t s u

目障りな虫を払う様に  
炎槍を叩き落とす

フェル

「うああ!!!!!!ファイヤー!!!!  
ヴォルト!!!!ファイヤー!!!!  
ファイツファイヤー!!!!」

続けざまに炎球を放つ

.....

ブンッ

魔法陣を展開し炎球を弾く

ハヤウエイ

「止せ！！効いてない、」

取り乱し目茶苦茶に魔法を放つフェルを羽交い締める

フェル

「離せ！！倒す、私は……」

あんなー天使い、」

G o a x t s u

神楽

「……危ない！！！！」

暴れるフェルに手こずる  
ハヤウエイにザクエルの  
鉄球の様なパンチが迫る

ドゴォードン…グチャ

二人を突き飛ばすが神楽は  
直撃を受けて吹き飛び  
木に体を叩き付けられ  
深紅に幹を染めながら  
ずり落ちる…

フリーシア

「神楽ああ！！！！ッッ  
許さぬぞ！！天使…」

レイピアを構え天使へ  
駆けていくフリーシア

ユカ

「ダメ、ハヤウエイくん  
止めて…―うう！！！！」

頭を抱えながら告げると  
そのまま崩れ落ちる

ハヤウエイ

「先生！？けど、  
どうやって天使を…！」

ユカの手収まる音叉…  
迷わずソレを掴む彼は…

キツイイイイン

音叉を叩き額に持つていく

キツイイイイイイイン

アアアアアアアアアア

アアアアアアアアアア

輝く金色の光に包まれる

ハヤウエイ

「変身ツツ、タアッ!!!!!!」

光を手刀で裂くと…

変

鬼

響

紫

輝

身

響く鬼

仮面ライダー、響鬼が  
現れる…

プリーシア

「よくも……！！神楽おお……！！  
必殺ッグロウラッシュ！！  
でやあああ……！！！」

……… B o a a ?

カンッーカカンッ

無数の剣撃も硬い装甲に  
弾かれてしまう

b o a a a a a a a

プリーシア

「くッー！？しまッ、」

ドッオオン

天使の巨体により抉れた  
地面に足を取られる彼女

無情にもザクエルの拳が  
地面へ押し潰す

響鬼

「プリーシア！！！！！！」

ザクエルの背に音撃鼓を

叩き付ける

響鬼

「滅絶のツッ！！！！！！」

晩ッ餐の型ああ！！！！！！」

滅

絶

晩

餐

振り上げた音撃棒・鋼炎を  
ザクエルに合わせ展開した  
音撃鼓へ叩き打つ

ドンッ

ドゴッン

ドッオオン

清めの音がザクエルを包み  
掻き消える

b o a a | a a a a A a a a a a a a a a |

響鬼

「ふうッ、  
プリーシア！！！！」

押し潰された地面を見ると

ガッ

縁に手を着きプリーシアが  
ゆっくりレイピアを支えに  
起き上がる

プリーシア

「――ハヤウエイ？

天使を倒したのか！？」

ハヤウエイ

「プリーシア！！！！」

キミが無事で良かった」

変身を解き彼女に駆け寄り  
抱きしめる」

プリーシア

「な”！？”ハヤ””

”ウエイ””！？！？”」

ボンと顔を真つ赤にして  
狼狽えるプリーシア

ブッブン…ブウォオーン

再度魔法陣が顕現

ザクエルが舞い降りる

b o a a a a a a a a a a a

翼を大きく羽撃かせながら

向かってくる

ハヤウエイ

「くッ、

もう一度音撃で……！」

プリーシア

「！？ハヤウエイ……！」

彼が駆け出すのを彼女が

慌て止める

ハヤウエイ

「プリーシア？」

プリーシア

「——空を見る……！」

ハヤウエイ……」

彼が空を見上げると…

ブッブン…ブウンブウン

ブウオオーンブウオーン

十…二十…三十と魔法陣が

鬼士学校の空を塗り

潰していく

次々に天使が落ちて来る中

一際大きな白い天使が自身の  
輪を銃の様に変形させて

学校に向ける

h a a a a a a a a a a a a a a a a a

「…ファギエル、」

ハヤウエイ・プリーシア

「！？かつ神楽！！！！」

神楽がフェルに支えられ

こちらに歩いてきた

ハヤウェイ

「怪我は平気なのか？」

神楽

「私は死なずの巫女…  
平気…すぐ治るから…」

プリーシア

「ツ馬鹿者！！あんな無茶を  
わら…私がどれだけ心配  
…神楽ああ！！！！！！！！！」

神楽の手を握り脇目も

振らずに涙をぼろぼろ流す

神楽

「？プリーシア様…痛い？  
怪我…治します……」

プリーシア

「“コレは嬉し泣きだ”  
私は神楽が無事で嬉しい  
人は嬉しくても涙を流す  
だが笑顔が一番だな”」

神楽

「…笑顔？…ぷくーッ」

眉間に皺を寄せ頬を

膨らませる

フ  
エ  
ル

「それだと怒ってるよ、」

ハヤウエイ

「ううだよ！」

神樂のほつぺに人差し指を  
ぶにと当てる

神樂

「これ、何？」

プリーシア

「ふ、アハハ……！！！！」

ソレだ！！神楽  
〃  
〃  
」

和やかなムードを壊すけど  
天使群とユカ先生を忘れて  
やないかい？

# haaaaaaaaaaaaaaa

光輪天使ファギエルの輪の銃に魔法陣が次々浮かぶと熱く輝いていく…

バリッババチッヂリヂリッ

ギユウウウウ……

ヒュッ…ドギューウウン

輪の銃から光の矢が放たれ  
校舎に巨大な風穴を開ける

ハヤウエイ

「ツッ!?!?!?」

これが光の矢…、」

フェル

「……………みんなは?」

プリーシア

「ち…公爵殿!!!!!!」

神楽

「プリーシア様!?!」

天使達の攻撃で既に本来の  
入口は崩れ落ち彼女は  
ファギエルの攻撃で開けた  
風穴から校舎へと入る

ハヤウエイ

「待て!!!!プリーシア!!!!!!」

フェル

「ハヤウエイ！！！！」

ユカ先生はどうするの？と  
ハヤウエイを止めるフェル

ハヤウエイ

「く、…ユカ先生！！」

あの時倒れた場所で未だに  
ぴくりとも動かないユカに

駆け寄る三人

ヒサシイナ…オヤ？

タイヘンダナ…

貴方は！？！？

バツクルノセイ…ナンテナ

学校が…

チカラヲ…カソウカ？

断ります!!!!

エラクキラワレタモノダナ

！体が動かない！？

ユカノデルマクハナイ

戒めを解いて!!!!

マニアワナイサ…ソレニダ  
アレダケノ……テンシタチ  
ヒトリデヤルツモリカナ？

それでも私は…

カメンライダー…ツマラン

ガッコウハオチルウンメイ

マモルベキハガッコウカ？

え？

ユカは自身の精神世界から  
周囲を見渡す

ハヤウエイ・フェル・神楽  
心配そうにユカを取り囲む

あ！

ザンネンダガ…コンカイノ  
カクセイデユカノカラダハ  
シバラク…ウゴケナイ

そんな！？

イッタハズダデバンハナイ

？

「やはりか、」

「戻った甲斐があります」

白衣と黒き修道着を着た  
鬼神と悪魔の二人が  
天使達を見据える…

華鈴

「いくぞ…テレサ、」

シスター・ヘル

「天使に

裁きを…（ペロリ）」

トンと鬼士学校の大きな  
正門から飛び降りると――

男子寮を粉碎しようと組ん  
だ拳を振り下ろす轟力天使  
ザクエルを十字剣の切っ先  
で真っ向から受け止める――

b o a a a a a a a ?

シスター・ヘル

「なかなかですね！

……ですが悪魔に

勝てますか？天使！！！！」

ギッ……ガシャーン……ググッ

シスター・ヘル

「フォルティス……

十字剣に組み込まれた魔法  
石・プリズムが輝き刀身が  
ゆっくりと回り始める……

シスター・ヘル

――アビス……」

ゴッ……バガッ……ガララッ

g u o o o o o ! ? ! ?

高速回転する十字剣により  
触れた両腕が紙吹雪の様に  
バラバラに吹き飛んでいく

シスター・ヘル

「―貴方の仕えし神を  
怨みなさい…、」

g u a a a ……―

回転に因る振動波で天に  
舞い散っていくザクエル

シスター・ヘル

「華鈴…空は任せます、」

華鈴

「…承知、

壬生流剣術…竜牙斬…！」

空を飛び回る攻速天使達…  
ラディエルに向けて頭上で  
交差させた虎鉄と菊一文字  
を振り下ろす

グウオオ…ガアアア！！！！！！！！

蒼き斬撃は竜となり天使に  
喰らい付き頭を失った

ソレはグラウンドに次々に

落ちていく…

h y a a … a a a a a …！！！！！！

華鈴

「……………」

飛行モードから通常形態に  
戻り尚戦おうとする天使の  
頭だった部分を踏み付ける

華鈴

「…眠れ！！！！！！」

ザシュ…ブシャアアアア

熱したナイフでバターを切  
る様に虎鉄を剥き出しの魔  
法石に突き刺すと…まるで  
鮮血が噴き出すかの如く彼  
女の顔、白衣に紅い液状の  
魔力が吹き掛かる

華鈴

「……ハヤウエイ、」

ハヤウエイ

「ッ……はい!!」

華鈴

「……皆を中庭へ!!!!!!」

ただ呆然と二人が天使達を  
蹂躪する様を見ていた彼に  
中庭の隠し通路を教え再び  
天使の群れにヘルと向かう

フェル

「……行こ?」

ハヤウエイ

「ああ、」

フェルが神楽を支えユカを  
彼が背負うとプリーシアが  
消えた風穴へ歩きだす

フェル

「学校……帰れるかな?」

ハヤウエイ

「………」

神楽

「…プリーシア様、」

フェル

「プリーシアは大丈夫！！  
クラスで一番強いから」

神楽

「こくり！！」

ハヤウエイ

「必ず帰ろう…此処が  
俺達の帰る場所だ！！！！」

ぽつぽつと雨が業火に  
焼かれる学校に降り始める

グラウンドに転がる天使達

カラン

「猶予は無いか、」

暗黒騎士が天使の骸を  
見下ろすと次に華鈴と

ヘルを見つめる…

暗黒騎士

「魔刻…瞑斬剣！！！！」

ズッバアアアアア

華鈴・シスター・ヘル  
「ツッ！？！？」

続く

## 第二十一話 鬼士戦慄と姫君の天使（後書き）

魔王Kと勇者こなが

インターバルを挟む最中…

春香

「よし！！完成！！！！」

みさお

「おおー」

夏奈

「チーズケーキに…

シュークリーム…

ガトーショコラに…」

千秋

「ホットケーキに…

クレープ…モンブラン…

フィナンシェ…」

鞘子

「栗羊羹…ドラ焼き…

葛餅に…おはぎ…

牡丹餅…？一緒か…」

紀梨乃

「そのほか諸々」

魅音

「会心の出来だよ……!!」

かがみ

「失敗した……」

みゆき

「失敗は  
成功の素ですよ!!」

つかさ

「忍びねえな……!!  
構わぬよ……!!」

珠姫

「できた!!」

ユカ

「上手だね……!!」

奏

「後でツカサと  
一緒に!!」

みくる

「ドコですかああ!?!?」

有希

「…闇の魔王Kの城、」

ハルヒ

「面白いじゃない!?!?!」

ハルヒさん?こなたが…

良いのか?同じせ…ゴホン

みくるさんはコスプレを…

いつもしてるからか代わり

映えしないね?………

有希ちゃん!?!?!警官………

千秋に優るとも劣らない!!

ハルヒさんは…陵王制服…

夏バージョン!?!?!

良いのか?—因みに今回は  
本編担当の地の文さんだよ

よろしくね!!!(o^\_^)(b

ああ!?!時間が!?!?!

らきぬこ  
「にゃ も〜ん、」

次話前後書きに続く

次回仮面ライダーユカイド  
鬼士激闘と姫君の影で

蠢く騎士

輝け!!!心のバツクル!!!!!!

次回も変身(かなかな)

ユカイド

次回も…読むのです!!

…人の子よ!!!!!!

第二十二話 鬼士激闘と姫君の影で盡く騎士（前書き）

私フィーリア！！お兄ちゃん  
が大好きな妹キャラ！！！！！！！！

ロッカーに隠れてたら…  
あの人が助けてくれた！？

本当はいい人なのかなかな

きゅん！！フェルちゃん…  
ピンチッピンチで大変！？！？  
かな！かな！！かなん！！！！！！

私もいくよ！！いくよ！！！！！！！！

輝け！！心のバツクル！！！！！！！！

きゅん！！！！！！！！

スツキリ 私出番少ないな  
気のせいかな？かなん！！！！

第二十二話 鬼士激闘と姫君の影で盡く騎士

くう……スウ……んん……  
——  
——いや……ムウ、——  
——エへへ……え？……  
——ムリ……だよ……  
——  
どしても？……大きいよ……  
——ムグッ！？……ハミユ……  
あッ……美味しい……  
んんッ……もつと……欲しい

仮面ライダーユカイド

冒頭から何っー夢見てんだ

——やだ——汁が……垂れて……

せ……い……ユカ……お……て

ユカ先生……起きて……！！……！！

ユカ

「!?!?!ふああゝムウ、」

夏奈に超特大ソーセージを  
食べさせられる夢を見てた  
うっちー 勘違いすんなよ

ユツキーが目を覚ますと…

ブリーシアを始めフェル・  
ハヤウエイ・華鈴・ヘル…  
もといテレサ達が保健室の  
ベッドに横になったユカを  
心配そうに見つめる…

ユカ

「あれ…どうしたの?」

寝ぼけ眼でみんなを見渡す

## 第二十二話

サブム帝国の天使による  
鬼士学校襲撃事件から既に  
三ヶ月余り学校は修復され  
サブムも聖十字軍の活躍  
ヴィエーラ製造の究極天使

ウルティマ・アングル

テンペル騎士団<sup>リッター</sup>

団長ジュダスと共に国王の  
ゲロートを討ち取り平和が  
風に乗リヴィントラントを  
吹き抜ける…

プリーシア

「ーと言う訳です!」

ユカが眠り続けてる間  
起きた出来事を語り終えた  
プリーシアは誇らしげだ!!

フェル

「私の活躍

見せたかったな!!!!」

ハヤウエイ

「…私達だろ!」

テヘツと舌を出すフェル

華鈴

「後は神楽が

目を覚ませば万々歳だ」

ユカ

「神楽…ちゃん?」

ユカの隣のベッドで静かに  
寝息を立てる神楽

テレサ

「神楽さんは能力が有る分  
無茶し過ぎます、」

ユカ

「酷いんですか？」

華鈴

「いや神楽なら  
そろそろ――」

くきゆうう

神楽

「――ごはん、  
……お腹空いた」

むくとベッドから降り  
ふらふらッと食堂へ向かう

みんな

「……（相変わらずだ！！）（」

ユカ

「あの後、  
みんな聖十字軍に？」

フリーシア

「うむ、暗黒騎士に  
助けられてな!!」

三ヶ月前、天使と業火に  
焼かれ崩れる鬼士学校で

フリーシア

「公爵殿!——ごほ、  
お父様ああ!!!!!!」

そこら中に火が走り黒煙が  
充満する廊下を父を探して  
ひた走る彼女

フリーシア

「ごほッーげほ  
…ハア、んんッーうう」

バチ、パラッ——

煙りを吸い込み咽び天井が  
高熱で崩れ落ちてきた事に  
全く気付けない——

「魔刻ッ瞑斬剣!!!!!!」

黒き閃光が彼女の頭上を

駆け抜ける

フリーシア

「ッ！？」ごほ、

お前は…暗黒騎士！！！！」

暗黒騎士

「キザーロフは無事だ、

君は雛鳥達と共に

中庭へ行け、」

フリーリア

「暗黒騎士さん、

ありがとうございます」

ちよこと暗黒騎士の背から

現れたフリーリア

フリーシア

「貴様！！フリーリアが

どうして！！！！」

フリーリア

「！やめて！？」

フリーシアさん！！」

暗黒騎士にレイピアを突き  
付ける彼女の前に両手を広  
げ立ちほだかるフリーリア

フリーシア

「フリーリア！？敵だぞ！！」

フリーリア

「でも、私を

助けてくれたよ、」

キツとフリーシアに自分の

意思を瞳で伝える

フリーシア

「…分かった、暗黒騎士」

フリーリアを助けた事は

感謝する、」

レイピアを下げ礼をする

暗黒騎士

「中庭の校長像の下に

隠し通路がある…

逃げ学校も直に崩れる」

フリーシア

「うむ、フリーリア

行くぞ！！」

フリーリア

「はい！暗黒騎士さんも

気をつけてください！！」

暗黒騎士

「さて、時間稼ぎを  
しなければな…、」

二人を見送り風穴から  
グラウンドに出ていく

華鈴

「！雨か…終わったな、」

シスター・ヘル

「ですね、癒しの雨で  
有らん事を…」

両手を握り祈りを捧げる

華鈴

「拙者達も、  
皆と合流しよう」

天使の骸を掻き分け中庭へ

向かう二人―

ドゴツオアアアーン

左右に散開して閃光を躲す

暗黒騎士

「ほう、躲したか」

華鈴

「不意打ちとは騎士の  
風上にも置けぬ……!!」

シスター・ヘル

「何のつもりですか？」

暗黒騎士

「暫し余興に付き合え……」

暗黒騎士から禍禍しい気が  
放たれる

シスター・ヘル

「成る程、解りました……」

華鈴

「天使では準備運動にも  
ならん……ふふ……!!」

ドオオオアオオオーン

現在、鬼土学校・保健室

ユカ

「……（この二人、  
凄すぎだよ！！！！）」

華鈴

「？どうなされたユカ殿」

テレサ

「どこか痛みますか？」

額の熱を華鈴は手で確かめ  
テレサはユカの身体を触診  
優しい

羽生

「オヤシロサマも、

ビックリなのです!!」

ユカ

「（あッ！居たんだ！？）」

がぐんと頭を抱えるハニー

ユカ

「それから、

…サブلمへ？」

フェル

「うん！自称天才魔法操者

フェルちゃん大活躍!!」

自分で自称って…

サブلم領内・砂漠

b o a a a a a a a

フェル

「我が意に従い！我が手に  
集うべし！！世界を司る…

魂の輝きッ偉大なる…  
天空の怒号！！！！！！」

「スパークキング…  
レイッドオオ！！！！！！！！！！」

ブッウン…バチッバチ

ツバギツヤアアギイイギー

b o a a a a a a a a ! ? ! ? - g u o o o o o o ! ?

天使群の足元に顕現した魔法陣から雷撃が迸り天使は  
沈黙する

フェル

「むふふ 私最強！！」

教官率いる切り込み隊は  
聖地レスレクシオンまで  
後一步のところで足止めを  
喰らう

神楽

「…必中！！！！！！」

ヒュッ—ズバツ

プリズムの力で増幅された  
矢は天使内部のプリズムを

射貫く

g a a a ! ? —

プリーシア

「覚悟するのだな…、

秘技ツサザンクロス!」

飛び上がると共に十字の  
斬撃で天使を切断!!

G y a a a —

響鬼

「音撃鼓! 群雲! ! ! ! !」

複数個の音撃鼓を天使群に  
投げ付ける

響鬼

「鬼士による!!」

破壊の理！！！！」

音撃棒・鋼炎を群雲に投げ  
付けると次々に他の鼓に跳  
ね返り清めの音が天使群を  
包み込む

響鬼

「これで終りだ！！！！」

ギユウツードオオオン

清めの音が巨大な鼓を形成  
響鬼の手に戻った音撃棒で  
鼓を叩き殴る

b o o x o a o o o o o o x a x a —

漸く辺りに静けさが戻る

華鈴

「見事だ！！ハヤウエイ、」

シスター・ヘル

「皆さんも……」

バシバシッと変身を解いた  
彼の肩を叩く華鈴教官

フェル達に優しく  
笑みを向けるヘル

ハヤウエイ

「…華鈴さん痛いよ！！」

華鈴

「冗談は止せ！！二人の  
修行を熟して見せた  
お前が？笑わせる！！！！！」

みんな

「（…あれは痛い！！！！！！）」

——…フウウ…ブブーン

フェル

「あれ？変な音…、」

神楽

「むぐむぐーぷちん？」

ブブブツブツウンブブーン

プリーシア

「何処から？」

ハヤウエイ

「嫌な風だ、」

華鈴

「ッ空だ！！！！」

昆虫と獣を掛け合わせた  
様な黒い巨人が赤い翼を  
羽撃かせながら教官達の  
頭上を越えて行く…

シスター・ヘル

「ヴィエーラの究極天使！？  
先を越されましたね…」

華鈴

「陽動にはなつた、」

レスレクシオン目掛けて  
八体の究極天使は羽撃く

フェル

「……………」

究極天使を見上げて固まる

フェル

「…来るよ、」

ヒュードドッオオオン

フェルが呟くと二体の究極  
天使が皆の横の岩に落ちる

g u o o o o o ! ? …… H i k k u ! !

G u r u r u | B a x a x a

フラフラと酔った様な天使

G u r u ! ? H a y a w e i ?

天使の一体がハヤウエイを  
見つめる

ハヤウエイ

「えー俺!？」

プリーシア

「知り合いか？」

知らないと首を横に振る

G w u x u u

シスター・ヘル

「あなた…パーティ？」

p a … R u … T h i … ?

G u r u r u - U x u U x u … H i k k u

もう一体の天使は岩に

もたれ沈黙…

T e r e s a ?

K u r u s h i i y o o o

ハヤウエイ

「パーティ…なのか？」

D e s h i …

シスター・ヘル

「迂闊でした…未だに…

狂気の研究を…リッテの  
遺産を…ヴィエーラ！」

パーティ、…ハヤウエイと  
テレサが学校の依頼で王都  
へ買い物に出掛けた際に路  
地で出会った少女…里親に  
渡す土産と一緒に探した…  
そして港まで見送った少女

H a y a w e i … T e r e s a … U x u

ハヤウエイ

「パーティ…、」

バッアアン…ギョオオ

究極天使の胸の装甲に魔法  
陣が現れ魔力を高めていく

N i g e t t e … H a y a w e i …

ハヤウエイ

「止める！！！！パルティ、」

シスター・ヘル

「楽にして、

あげましよう…」

彼の前に立ち十字剣を

構える

シスター・ヘル

「フォルティス…、」

ギユウウウ…ギョオオ

ガツガシャ—グググッ

N i g e t t e e e x u a a x u x u —

——ッドバァアアア

シスター・ヘル

「……アビス！！！！！」

究極天使からファギエルの

砲撃を越える光の矢……

光の束が放たれる

プリーシア

「うああ”……、」

神楽

「ップリーシア様！！！」

華鈴

「固まれ！！」

テレサの後ろへ！！！！！！」

ギョウ——ガグオオオツツ

光の束を十字剣が裂くが  
二つに別れた光は彼らの  
横を空間ごと……もぎ取る

シスター・ヘル

「……私は動けない、

華鈴——彼女の胸を……

破壊してください！！！！！！」

華鈴

「――承知！！…壬生流剣術が  
奥義…月光斬ッッ！！！！」

ヒュッ

G w u a x a a g a a x a a a a ! ? ! ?

刹那の速さで魔法陣で輝く  
胸を合わせ持った二太刀で  
斬り抜ける

華鈴

「チッ浅い！！」

G u k i a a a a a

魔法陣は消えるが自身の光  
の束で融解した厚い装甲の  
胸を引っ掻いただけだ

プリーシア

「化け物め！！！！」

化け物じゃ…なッッい！！！！

プリーシア

「！？―フェル？」

今まで沈黙した究極天使の  
側にいたフェルが怒号した

フェル

「違う！！この子達は

化け物じゃない！！！！」

ハヤウエイ

「…フェル、」

G u o o o g a a a a a a a A a a a a a a a

嘶き究極天使が蟹の鋏の  
様な腕を振り上げる

華鈴

「ハヤウエイ！！！！！！」

キイイイイイイイイイン

ハヤウエイ

「パルティ…変身！！！！」

煌めく炎を右腕で横に薙ぎ

払うと同時音撃棒を両手に  
持って究極天使に突っ込む

G a a a a a ! ! ! ! !

ドオオオオン

響鬼

「ッッこれが」

究極天使の力が、」

振り下ろされた蟹鋏を

鋼炎で受け止める

華鈴

「いくぞ!! テレサ!! ! ! ! !」

シスター・ヘル

「少女にどうか祝福を……」

左右に別れる二人

シスター・ヘル

「フォルティス……」

華鈴

「壬生流剣術奥義!! ! ! ! !」

ヘルは十字剣を腰元に

構え体勢を落とす

華鈴

「蟒蛇ッ竜牙斬！！！！」

二刀を後ろへ振りそこから  
菊一文字を左上から右横へ  
虎鉄を一気に真上に振り上  
げると斬撃は蜷局を巻いた  
大蛇から竜へと変わり究極  
天使の左腕に喰らい付く！！

シスター・ヘル

「アピス！！！！！！」

高速回転する十字剣を推進  
力に究極天使へ弾丸の如く  
突っ込むと右腕を削ぎ取る

G y a a a x a a a x a a a

両腕を失った究極天使が

悶え苦しむ

響鬼

「清めの音に賭ける……」

血塗られた――

摂理の型！！！！！！」

理

塗

損

血

究極天使に音撃鼓・悠遠を  
展開―鋼炎のプリズムから  
炎の剣が現れ跳躍

究極天使を真つ二つに斬る

G u o o o g a a a a a a a ! ? ! ? |

パアアアア…|

究極天使は光の粒子になり  
それが消えると血まみれの  
少女が横たわる…

ハヤウエイ

「パルティイイ!!!!!!」

変身を解くと少女を  
抱き抱える

パルティ

「……ハ―…エ…イ」

今にも消え入りそうな声で  
空を掻くパルティ

パルティ

「―れ…あ―げるね……」

彼の胸にしっかりと風車の

髪飾りを渡す

ハヤウエイ

「―新しいお母さんに  
渡すんだろ？」

パルティ

「テレサ…―姉ちゃ…に  
あけて、ハヤウエイ…」

パルティ

「お姉ちゃ…照れ屋―から  
ハヤ…エイから…ね、」

テレサ

「ツツ、パルティ…」

そこに悪魔はいない…

一人の優しい女性しか

パルティ

「浮気―ない―？じゃあね  
バイ…バイ…でし、」

ガクリと首が…手が…

垂れる…

華鈴

「くッ…、」

神楽

「菖蒲！雛罌粟！！」

沈丁花！！！！」

癒しの魔法を何度も唱える  
が少女は次第に冷たくなる

フェル

「…死んだの？」

プリーシア

「神楽…止せ、もう…」

神楽の肩を抱き少女から  
引き離すプリーシア

神楽

「でも…でも…」

ふるふると首を振り魔法を

唱え続ける…

フェル

「なんで…死ななくちゃ  
いけないの、」

ブッウン

ハヤウエイ

「フェル！！！！！！」

沈黙していた筈の究極天使  
の胸と肩の眼から魔法陣が  
展開：フェルに向けられる

フェル

「あ…シャリー？」

G u w a a a a a a a a a a A a a a a a a a a a

眩しく輝く魔法陣から光の  
束・フレアディザスターが  
放たれる

フェルの下に駆ける彼だが

間に合わない

我、

主の命を受けし時、

其の輝きを以て有翼の民を

治む

輝いていた全てが

激しく…優しく…

羽撃く翼が…僅かに見えた

本当の天使かも知れない…

気が付くと究極天使は

消えていた…

そして―

少女の笑顔が…咲いた

続く

## 第二十二話 鬼士激闘と姫君の影で盡く騎士（後書き）

闇の魔王Kと勇者こなも  
甘い香りに誘われ休戦？

ハルヒ

「せっかくお城に来たから  
王様ゲーム！！！！！」

紀梨乃

「うわ！？本編のシリアスを  
思っきし無視だ！！！！！」

有希

「…海賊さん危機一発？」

魔王K

「王様ゲームだと！！！！！」

勇者こな

「海賊さんで王を決める  
訳だね（-ω-）」

ユカ

「ルールは—むぐ—！」

魅音

「圭ちゃんを戻す  
チャンスだよ！！！！！！」

春香

「?どうして、」

みくる

「禁則事項です！」

夏奈

「私！わかった！！！！！！」

千秋

「ホントか？」

珠姫

「えと、分量は…ふむ、  
隠し味に…ふんふん！」

奏

「それで手早く  
掻き混ぜてー、」

みさお

「ンツまあい！！！！！！」

つかさ

「おいしいね！

お姉ちゃん！！」

かがみ

「ホント」ほんと」」

みゆき

「ふふ」（太りますよ……）」

かがみ

「ーッ！？ゲホ、ごほ！！」

鞘子

「おい！大丈夫か？」

らきぬこ

「にゃ もーん」

次話前後書きに続く！！

長い萌え世界も遂に終りを  
告げるのか！？

そう言えば…作者と羽生は  
何処へ？

次回仮面ライダーユカイド  
鬼士邂逅と姫君の究極天使  
輝け！！心のバツクル！！！！！！！！

次回も変身（新雪）  
ユカイド

次回も…読むのです！！  
人の子よ！！！！！！

第二十三話 鬼土邂逅と姫君の究極天使（前書き）

私は、プリーシア・フォン  
・ローゼンベルグ！！！！

友達会話を練習中なのだが  
わ私〃神楽は別だが難しい  
だがわらはではなく私と  
言える様になつたぞ〃〃

あれからのフェルに元気が  
無い気がするのだ…いやな  
どこか空元気みたいだなと

シャリーとは一体？

おや？ーフェル！！  
慌ててどうしたのだ？

なに？鬼ごっこだと！？

頑張れ！！！！！！

あの娘のおかげかな？

それでは決め台詞をば

輝け！！心のバツクル！！！！！！！！！！

貴方（女）が読まぬことが…

あろうか？ いや、無い！！！！

.....反語.....

## 第二十三話 鬼士邂逅と姫君の究極天使

ガタガタと馬車がサブルム  
からヴィントラントへ走る

フィーリア

「うきゅ」

——お兄ちゃん……」

彼女はアーラ・グラディウ  
スと言うバスターソードを  
抱えて夢の中

フェル

「ハッヤ……ウェイ……！！  
——大好……むにゃ——」

ブリーシア

「スウーン……フウ——」

二人も夢の中

華鈴

「——」

テレサ

「——」

教官とテレサさんは瞼を

閉じながらも周囲を警戒

ハヤウエイ

「…痛た！？——グハ！？」

パーティ

「く〜…でし！…ウ〃〃」

ドゲシ

ハヤウエイはパーティから  
寝蹴りを鳩尾に食らう

神楽

「くちゅーちゅば…くちゅ  
むぐ…ぷちゅ、」

干し肉を咀嚼しながらも

馬車を操る神楽

もうすぐ夜が明け  
鬼士学校まで少し

オ~~~~イ!!オキロ!!!!!!

うるさいな!?誰?

キラワレモノダ…

あッ!…名前無いの?

………

仮面ライダーユカイド

そして現在の鬼士学校

ユカは学校の保健室で  
療養中…寝過ぎだ

ヒツヨウハナイカラナ

ふうん…お休みなさい

再び毛布に包まるユッキー

ナツコラ！！ネンナ！！！！

寝かせて、眠くて眠くて――  
クウ……か……ム――

………

コマッタ……アア……コマッタ

む？

ナンド？ネムタインダロ？

いやそうだけど……

オマエ……コレデセカイハ  
スクワレタツテイウナヨ

違うの？

マズハヒトツ

ナゼガツコウガオソワレタ

え？サブルムと

敵対してるから、

イイカタガワルカッタ  
ナゼシュウゲキデキタ

………

ツギニ…

ハイキサレタハズノリツテ  
レポート…カラツクラレタ  
キュウキヨクテンシ…

ナゼヴィエーラハリツテノ  
イサンヲ？

………

ツギニナゼサブルムハ  
キュウニガツコウヲ？

シュウゲキトハイエソコニ  
キザーロフ…カリン…ヘル  
サイキョウノキシガサンニ  
ンモイルニモカカワラズ？

ええと？

カレラハシツテイタカリン  
トヘルガソノヒガツコウヲ  
ハナレルコトヲナ

あッ—ああ！？

オノズトコタエハデル

ユカ

「ヴィエーラが？」

ゴメイトウダーユカ

ばちと目を覚ましベッドの  
上に座るユカ

ユカ

「うう体…だるい、」

ニヤリ

ユカ

「貴方のせいだよ！！！！！」

ソノトオリ！！！！

威張る事か？と頭を抱える

うっちー…可哀相に…

## 第二十三話

パルティ

「わぁゝい!!」

フェル

「コラァ!!」

ステッキ返せええ!!!!!!」

鬼士学校・グラウンドにて

パーティ

「べゝ、でしッ」

フェル

「こいつ、うわぁゝん

神楽ああ!!!!!!」

パーティにマジカル・ラブ  
リー・ステッキを奪われ…  
更に小さな赤い舌でバカに  
されたフェルは神楽に  
助けを求める

神楽

「パーティ…めっ!!!!!!」

パーティ

「ごめんなさいでし、」

素直にウォーハンマー?を  
返すパーティ

神樂

「  
∴  
いい子  
いい子  
〃  
〃  
」

神楽に撫でなでされる

パルティ羨ましい

パ  
ル  
テ  
ィ

「神楽お姉ちゃん」

だいすき // // でし //

神楽

7  
 //  
 //  
 //  
 //  
 8

羨ましいぞ… パルティ

フェル

「納得いかねえええ!!!」

♪ テンテンテ…テン ♪

リアリス

「気に入らない……」

少年

「……………」

暗黒騎士

「どうする？速水、」

ウーム

リアリス

「ココもさよならね！」

少年

「次はドコへ？」

《マキシマムドライブ》

ドガシャッアアーン

W

「逃がさねえぞつとー！」

壁をぶち抜きWが魔女達に

姿を晒す

W（フィリップ）

「良かったかな？」

「僕達が出てさ、」

W

「ヘッ時間稼いだ！！」

W・（フィリップ）

「さあ、お前達の罪は  
数え終ったか？」

ヴィエーラ・施設

g u a a a … a a g W u …

ジュダス

「ふん、虫けらが……!!」

ジユダスによって究極

天使の骸が転がる

ケスビム

「まさか暴走するとは……!!」

トーラ

「最後の一体は……」

ネイビム

「あの方角は――

鬼士学校か、」

ジユダス

「（潮時だな……クツクク）」

ケスビム

「ジユダスよ……!!」

トーラ

「我らは、

レスレクションの――」

ネイビム

「ウームに向かう……!!」

ジユダス

「そうか―だが死ね……!!」

3賢者

「なに!?!?」

ジユダスが剣を3賢者に

振り上げた――

サテソロソロナジンダカ?

あッうん体が楽だよ!!

鬼士学校・保健室

なんだかんだで仲良しか?

ユカとバツクルの精？

ユカ

「えとバツクルさんは  
いいバツクルさん？」

ナンダソレハ？

ユカ

「いや名前無いのは  
可愛そうかなと、」

ユツキー！！いい子だよ！！

フン…スキニシロ

ユカ

「よし！授業しなきゃ！！」

ポンとベッドから下りて

伸びをする

オイツヴィエーラヲ

ワスレルナ！！！！

ユカ

「そ、そっか戦争の  
黒幕がいるんだよね、」

じーーーーーッ

ユカ

「ふえ！？（ビクッ）」

オヤア？

羽生

「ひどいのです酷いのです  
ヒドイですよー！！！！」

ああ憐れな羽生久し振りの  
不可視な存在は堪えるのか

ユカ

「ごめんね、

羽生ちゃん！！」

羽生

「うゝ僕は神様なのです  
邪険にしたら祟るのです  
恐いのですよー！！！！」

物陰から手を角に見立てて  
あうあうと唸る…可愛いよ

ハニユウ…イタノカ…

羽生

「う”バツクルは、  
うるさいのです！！！！」

ポカツ

ユカイドライバーを叩く！！

イタクモカユクモナイ

羽生

「くっそ～なのです！！！！」

ハハハハッアハハハハ

ユカ

「羽生ちゃんを  
虐めないで！！」

イタタ！？！？

ユカ

「やっぱり私の精神世界に  
居るから私が思ったら  
痛いんだ！！！！」

心の中でバツクルさんを  
抓る絵を想像したユカの  
考えは正解の様だ！！

チツ、サスガダ

ガララッーボタン

パーティ

「ししつこいのでしッ、」

突然保健室に慌てて  
入ってきたパーティ

ユカ

「わぁ!?!?」

ぱパーティちゃん?」

パーティ

「あッユカ先生!!  
シートでし、」

口に入差し指を当てて  
外を警戒

ユカ

「(…どうしたの?)」

パーティ

「(子鬼に  
追われているのでし)」

子鬼

「どこだ!!」

あのガキイ!!!!!!」

保健室の外から声が

近づいてきた!!

ユカ

「あれ？」

フェルちゃんの声だよ」

パルティ

「ユカ先生怖いの!!!!!!」

ギュッ

ユカ

「パルティちゃん!?!?!」

抱き着き小さく

震えるパルティ

アノガキシヨウライガ

オソロシイナ

羽生

「あう……」

そつかもなのです、」

フェル

「ククッ我が意に従い  
我が手に集うべし……」

フェル

「メテオストラアアイー」

ユカ

「ダメえええ……！！！！！！」

フェル

「……きゃう！？！？」

最高度の魔法の発動を飛び  
付いてなんとか阻止危うく  
学校が消し飛ぶとこだ

フェル

「かかった……！！！！！！」

ユカ

「え？」

フェル

「ハリケーンウィップ!!」

ビュッオオオー

パルティ

「うわあああ!?!?」

コソと覗いていたパルティ  
風の鞭が彼女を捕らえた!!

フェル

「はい、タッチ!!!!」

パルティ

「ふえええ〜ん、

鬼はイヤでしゅ!!」

ユカ

「え?あの〜、」

全く状況が掴めないユカ

オニゴツコカ…

羽生

「大袈裟なんです!!!!」

♪テンテンテ…テン♪

ヴィントラント上空

!? Feruchanno - Ni oi!!

最後の究極天使が鬼士学校

目掛け空を羽撃く

鬼士学校・グラウンド

パルティ

「フェル…お姉ちゃん？」

ユカ

「フェルちゃん！！！！」

結局ユカは一緒に鬼ごっこに興じていたが突然に硬直したフェルを心配する二人

ハヤウエイ

「ユカ先生！！上です！！！！」

ユカ

「ハヤウエイくん？」

彼と教官達が駆けてくる

G u w a a a a a a a a a - A a a a a a a a a

ドオオオオ……ン

究極天使がユカの目の前に  
着地キヨロキヨロと辺りを  
見回すと

M i t s u k e t a y o - F e r u c h a n ! ! ! ! !

フェル

「ああ――

アア!? シャリー……」

G u g a x a a a a a a a a ! ! ! ! !

ドサツと尻餅を着くフェル

ユカ

「いくよ!

ハヤウエイくん!!!!!!」

ハヤウエイ

「はい!!!!!!」

《カメンライド》

キイイイイイイイイ

ユカ・ハヤウエイ

「変ッ身ん！！！！！」

《ユカイド》

ドゴーズバツアアアーン

10枚のカードがユカを  
ユカイドへ雷が彼目掛け  
落ち紫電を払うと響鬼に

ユカイド

「華鈴さんテレサさんは  
パルティと学校の皆を  
避難させてください！！」

華鈴

「しかし！？」

ユカイド

「三ヶ月も迷惑かけたから  
今回は私が戦います！！」

テレサ

「……分かりました、  
プリーシアさん神楽さん  
手伝ってください！！！！」

プリーシア

「私は戦います！！！！！」

華鈴

「駄目だ、拙者達だけでは  
全校生徒を無事に、  
避難させられない！！！！」

神楽

「プリーシア様！！！！」

プリーシア

「ツええい！！」

行くぞ神楽！！！！」

校舎へ駆け出す彼女達を  
見送りながらもバツクル

にカードを挿入

ユカイド

「新しい力、

見せてあげるよ！！！！」

《カメンライド

ブレイド》

ユカイド

「カードコンボだ！！！！」

《アタックライド キック メタル マッハ》《ブレイクソニック》

ユカイドにキック・メタル  
・マッハのカードの効果が

備わる

ユカイド

「ヌツコロス!!!!!!!!!!」

跳躍し究極天使の頭に

踵落しを喰らわす

G U O O O ! ? ! ?

響鬼

「我が意に従い…我が手に  
集うべし!!!!!!!!!!」

ギユツオオオオ

音撃鼓・悠遠を究極天使へ  
展開して左手を添える

響鬼

「バアツニング…インツツ  
パールスッ!!!!!!!!!!」

ドオオツン

ボガアオアオオオオオ

振り被った右拳を悠遠に打  
ち込むと究極天使は炎の柱  
に包まれる

G y a a a ! ? ! ? - g w u u ……

フェル

「や—

止めてええー！！！！」

フェルが究極天使を庇う様に二人の前に両手を広げて

涙を零す…

ユカイド

「フェルちゃーあれ？」

ユカイドはフェルに手を伸ばしたまま硬直してしまう

響鬼

「ユカ先生？」

ユカイド

「まさか！？

バックルさんなの？」

キョウリョクスルトハ  
イッテナイゾ

G a a a ! ! ! ! !

ビュッオープンッ

ユカイド

「ック!?——ん?」

ドオッ——…ン

迫りくる究極天使の尻尾に  
目を瞑るが響鬼がユカイド  
を庇い響鬼は校舎に叩き飛  
ばされていた

ユカイド

「ハヤウエイくん!!!!!!  
バックルさんお願い……」

コトワル

G u f u f u f u - B a a x a a

動けないユカイドに究極  
天使が嗤いながら迫る…

G o a a a a a ! ! ! ! !

ユカイド

「ーッッ…っヴアア！！！！」

蟹鉋による凄まじき突きに  
響鬼同様校舎に叩き付けら  
れた

フェル

「し、シャリー…  
もうーやめて、」

G a a a

フェル

「私を殺して、だから  
みんなを貴女を  
傷付けないで…、」

g u r u r u r u r u ?

究極天使の顔がフェルの  
鼻先まで迫る

フェル

「私が今こうしてココに  
生きていられるのは…  
シャリー…貴女のおかげ  
…だから私はもう十分に  
生きたよ…う、うう」

ぼろぼろと涙を零しながら  
究極天使の顔に手を優しく  
添えて頬を寄せる彼女

フェルちゃん？

シャリー…大好き

第二十三話 鬼土邂逅と姫君の究極天使（後書き）

魔王K―対―長門有希

魔王K

「まずはここだ！……！」

サシュッ

有希

「……こじっ、」

サシュッ

海賊さん危機一髪をプレイ

サシュッサシュッサシュッ

サシュッサシュッサシュッ

有希

「…………ッ」

魔王K

「私の勝ちだ！……！！！」

残った穴は一つ海賊さんは  
飛んでいない…そして次は

有希の番

有希

「…………許可を」

ハルヒ

「……………」

……………」

……………」

「やっちゃんないなさい！……！」

サシュツ……ポーン

魔王K

「ワゝハハ！……さあ……！……！  
今からどき ドキ！？  
水泳大会だ！……！……！」

みんな

「イヤアアアア……！……！……！……！」

有希

「……魔王、貴方の負け……」

魔王K

「バカな！?!？」

有希

「海賊さん危機一髪のルールは樽に剣を刺して海賊さんを飛ばせる事により勝敗を決めるがメーカーが設定したルールではなく言わばローカルルールがこのゲームの本来のルールだと思われる因みにそれは海賊さんを飛ばした人が負けるでも正しいメーカー側のルールでは海賊さんを助ける事が目的でつまり海賊さんを飛ばした方の勝ち貴方は具体的なルールの確認をしなかった則ちそれはメーカールールに依るゲームでの勝負だから私の勝ちで正しい魔王K貴方の負け……」

ハルヒ

「解ったかしら……!!!!」

魔王K

「そんな……そんな!?!?!」

魅音

「圭ちゃん！！！！  
目を覚まして！！！！！！」

かがみ

「急展開で  
付いていけないわ、」

みゆき

「まあ！？ローカルルール」

つかさ

「？？？」

みさお

「これ、  
美味いぞ！！柊妹！！！！」

こなた

「ちよつ私の立場は！？  
絶望した！！！！！！」

珠姫

「終わった？」

鞘子

「どうだろ？」

紀梨乃

「私、シャワー浴びたい」

奏

「確か作務衣で

汗かいてましたね、」

春香

「この季節で水着は  
危険だよね…、」

夏奈

「メイド服、

気に入ってたのに!!」

千秋

「バカ野郎!!!!!!」

ユカ

「私もスク水だよ、」

ボワン

Another

「あれ、もう解決?」

羽生

「あうあうあうあう!?!?!?」

Another

「羽生ちゃんが茶店で  
団子食べてるから…」

羽生

「Anotherだつて  
食べたのです!!!!」

Another

「羽生ちゃんが一時間も  
二時間も食べてるから  
私だつてお腹空くよ!!」

羽生

「あう”あう”」

Another

「しかも茶店を  
見つける度にさ!!!!」

羽生

「があ~~~~~ん」

らきぬ

「にゃ も～～ん」

次回前後書きに続く

次回仮面ライダーユカイド  
鬼士記憶と姫君の究極天使

にされた優しき娘

輝け！！心のバツクル！！！！！！！！

次回も変身（ひらりフワリ）

ユカイド

次回も…読むのです！！

……人の子よ！！！！！！

第二十四話 鬼土記憶と姫君の究極天使にされた優しき娘（前書き）

私は！！パーティでし！！！！

フェルお姉ちゃんは、私と一緒に遊んでくれるから！！  
とっても大好きでし”””

なんだけど…あの究極天使が現れるとお姉ちゃんは…

私に何かできないのかな？

ハヤウエイお兄ちゃん！！！！！！

ユカ先生ツ！！！！！！

フェルお姉ちゃんを助けて

物語はフェルお姉ちゃんと大切なお友達が会った昔のお話…それは悲しい記憶…

私に今できる事は…本編に

繋げる事でし！！！！！！！！！！

輝け！！心のバツクル！！！！！！！！！！

みなさあん！！！！

読んでください

第二十四話 鬼士記憶と姫君の究極天使にされた優しき娘

私がまだ孤児院にいた頃…

シスター

「フェル喜びなさい！！

里親が見つかったわ！！」

フェル

「ほんと？」

私が外で孤児の友達と遊んでいるとシスターが顔を綻ばせながら見知らぬ騎士の男の人と一緒に私に告げた

奥の馬車に白衣の人が二人いて私をじーっと見ていた

ジュダス

「元気な子だ、

神の子だな！！！！」

フェル

「エヘヘ」

そんな風に褒められたのは初めてで凄く嬉しかったな

シスター

「この方達に付いて  
行きなさい、」

シスターが言うには里親に  
会う前に健康診断をするら  
しく彼等はその施設の人達  
と護衛の騎士さんらしい

子供達

「フェルちゃん、  
ばいばーい！！！！！！」

フェル

「うん、ばいばい！！！！」

孤児院のみんなに別れを告  
げて延々と馬車に乗り続け  
てたらいつの間にか眠って  
たみたいで騎士さんに起こ  
された

ジユダス

「さあ行きなさい元気な  
身体で新しいお父さん  
お母さんに会いたいだろ  
神の子よ？」

フェル

「うん、

じゃあね！！騎士さん”」

私は施設の人達に連れられ  
白い大きな建物の中に入っ  
ていく少し振り返ると騎士

さんは既に馬車で

去っていた…

ジユダス

「憐れな子羊に

強大なる力を…」

白い廊下を歩き一室に通さ  
れるそこはベッドだけの簡  
素な部屋…壁も床も天井も  
淡く光っている―あッ窓が  
無いな…これじゃ朝か  
夜かも分かんない

それからはずっと毎日採血

に脳波？の検査検査で私は  
暇で暇で何度も施設の人に  
いつお母さんお父さん達に  
会えるのと問い掛けた

「もうすぐだよ、  
だから我慢してね？」

これだ退屈で死んじゃうよ  
おそらく今日最後の検査が  
終りベッドに飛び込む

ギシッと大きな音が鳴った  
が気にしてられない唯一の  
退屈を凌ぐ睡眠だ

コンッ

コンッコン

コンッ  
コンッ  
コンッ

ツなに、壁から？隣も確か  
部屋があつたような？

「ーかい…ん…よ？」

フェル

「だ、誰！…！！！」

シャリー

「あッやっぱり居たんだ！

私シャル・キエル！！！！

シャリーって呼んで、」

私と変わらない女の子の声  
が聴こえてきたから驚いた

フェル

「わ私、フェル…」

シャリー

「フェルちゃんか！私、

退屈で死にそうだったの

よろしくね？」

フェル

「あッ私も暇で暇で、

シャリーよろしく！！！！」

新しい友達ができた！！これ  
でっしだけ施設での生活も

楽しくなるかな？

それから私達は検査が終る  
度に他愛ないお喋りに  
花を咲かせる

そんなある日

シャリー  
「フェルちゃん、私天使に  
なれるんだって！！！！」

フェル  
「て、天使？」

シャリー  
「子供だけが天使になれる  
手術をできるんだって！！！！  
そしたらお空も飛べちゃう  
グリュンラントにも行ける  
ねえ！！フェルちゃんも！！  
天使になりたいよね？」

フェル  
「…う、うん、」

私は天使なんて正直どうで  
もいい早くココから出たい

それだけ…でもシャリーが  
あんなに喜ぶ声を聞いたら  
とてもそうは言えなかった

グリーンラントはシャリー  
の故郷…ヴェーラからは  
北へずうつと海も越えた先  
にあるとっても凄く寒い国  
そこには雪って物が空から  
降ってくるんだってしかも  
冷たくて暖かくてふわふわ  
しててとっても綺麗だって

雪が見れるなら天使も  
いいかもね？

フェル

「いつか一緒に

雪…見ようね…！！！」

シャリー

「フェルちゃん！！」

うん、約束だよ…！！！」

仮面ライダーユカイド

それから私達は初めて顔を  
合わせる…シャリーは凄く  
美人で銀髪が白い肌によく  
似合っていた

シャリー

「仲良しなのに顔見るの  
初めてだね？」

フェル

「そうだね！！  
おかしいね””」

こつと額と額をくっ付け

笑いあつたんだ

「何をしてる？急げ！！！！」

フェル・シャリー

「ごめんなさい！！！！？」

私達は今、他にもいた子供  
達と施設内を移動している

フェル

「ーうわ！？！？広い……」

そこは広間でベッドが幾つ  
もあつて横には大きな機械  
が置いてある…私達はそこ

に横になつて検査が終るのを待ったんだけどね…

検査が終つても部屋にすぐ帰してもらえなくてベッドの上でうつととしてたら…

G w u u a g u - g e a x a a a a

奇妙な声？が聴こえた

フェル

「な、なに！？」

横を見ると私より年上のお姉ちゃんが女の子とは思えない呻き声をあげていた

「うぐ… A a a a a ! ? — ハア、熱い！！助けてええ！！！！」

フェル

「ヒイツ！？ああ、誰か！！！！！！お姉ちゃんが苦…そ—

ボゴ―ブジブジブク

お姉ちゃんが俯せになると  
ビクンと海老反り…背中が  
膨らんで血が溢れていく…  
そして服を突き破って赤い  
ドロリとした何かが突き出  
てきて広がる…ああそれは  
羽だ…いや翼がお姉ちゃん  
の背中から生えてきたんだ

A a a a a a a a a a a a - A a a a a a a a a a a

グルリと周囲を見渡した  
お姉ちゃんは施設の人を  
見つけてニタアと笑った

ヒュッン―ドサツ

施設の人の一人が横に別れ  
て倒れた!?!?どうして!?!?  
私はお姉ちゃんを見る―翼  
があの人に向かって突き出

されていた―翼から何かが  
出たんだろうか?…二人は  
20メートルは離れていた

「馬鹿な!? 天使化まであと  
2時間は有る筈だ!…!」

「射殺しろ!…! 貴重なサン  
ブルを殺らせるな!…!」

パンツ

g u x y u e x t s u ! ? ! ?

お姉ちゃんの胸に穴が空い  
たでも―また風を切る音が  
して施設の人が二つに別れ  
て宙を飛ぶ穴が空くのと風  
を切る音が交互に続くが―

ドッオンーゴパッ

終った…お姉ちゃんは事切  
れた最期の顔はもう見れな  
い二度と絶対に…だって―

## 第二十四話

気付くと私は部屋のベッドに横になっていた―アレが天使？まさかとんでもないあれは悪魔だ！！！！私も……―

シャリー

「フェル…ちゃん、」

フェル

「シャリー！？？」

どうしたの？」

何時も元気なシャリーだが声に生気が…無くて驚いた

シャリー

「く、苦しいの…身体が…

熱くてヒュー、背中が―

裂けちゃう…よ、」

フェル

「シャリー！！大丈夫？

しっかり！！ああ……

今、助けを呼ぶから！！」

私はドアに駆け寄り施設の人を大声で何度も呼んだだけ

ど…誰も気づかない…ドア  
を開けようにも外側にしか  
ロックはなくていつも施設  
の人がロックを私が部屋に  
入るとしていたから外に出  
て助けも呼べない…今も私  
の親友は苦しそうに呻いて  
…いる―あれ？…私…

フェル

「うッー！？がッア、

あ…ぐ、うう”ん…」

ぐるんと世界が回ったかと思  
うと私は気持ち悪くて床  
に倒れ込む―何なのこれ！？  
ゾワゾワと背中を何かが這  
う感じがする身体も風邪を  
引いたかのように熱い熱い  
ああ―何かが私の背中を破  
ろうとしている痛い熱い！！

痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い

痛い熱い痛い熱い痛い熱い  
痛い熱い痛い熱い痛い熱い

ジュブルリーブジュブジュ

フェル

「ぐ、ぐあああ……ヒュ―  
い……嫌あーシャリー……」

私じゃない私が背中から溢  
れて………どんどん私を塗り  
潰していく……嫌！！シャリー  
私はシャリーの友達……この  
記憶を……想いを消さないで

どれくらい時間が経ったん  
だろ？うう気持ち悪い……  
服がごわごわする……血だ！！

私の…ん暗い！？淡く光つて  
いた筈の部屋が今は真っ暗

軋む身体を起こして壁に手  
を伸ばすと壁に吸い込まれ

私は転けてしまう

フェル

「痛たた！？…あれ？」

そこは廊下…なぜか部屋の  
ロックが外れたらしい

「みんな！よく聞いて！！  
此処から逃げなさい！！  
廊下を真っ直ぐ行けば―  
外への出口が在るから！  
急いで！！早く！！！！」

廊下の向こうから誰かの声  
が届く…誰だろ？逃げろ？

シャリー

「フェルちゃん！？」

大丈夫？」

フェル

「シャリー！！！！」

良かったあ、」

シャリーは血まみれの私に  
驚いていたがそれはお互い  
様だよシャリー？

シャリー

「フェルちゃんは  
逃げるの？」

フェル

「こんなトコに居たら…  
悪魔にされちゃう！！！！」

私はシャリーの手を取って  
長い長い廊下を駆ける走る  
私達の後を子供達が駆ける

フェル

「ーうわ！？！？」

シャリー

「ーキヤアア！？！？」

ザアツアザアアアアア

外は滝の様な雨が地面を  
叩き跳ねていた

フェル

「…ッ行くよ！」

グッとシャリーの手を握るともう一度駆け出すがすぐに泥に足を取られて転ぶ…  
そうだ…私達は裸足だった

「ッ大丈夫ですか？」

見上げると綺麗な眼鏡のシスターが心配そうに私達に手を伸ばすがそれを払う！！  
施設の仲間かも知れない…

「ッ！？何かあったーあ！？」

私達は振り返らずに施設を後にするシスターが何かを叫んだ気がしたがこの雨でよく聴こえなかった…

「一体施設で

何が？ーヒイツ！？」

ジユダス

「貴重なサンプルを

逃がしたのはお前か？」

シスターに冷たい金属が  
首筋に当てられる

「わ私は…て、テレー」

ザジュ

彼女が答える前に二人の  
背後に鬼が…響鬼が立つ

響鬼

「騎士が神に仕える者に  
剣を向けるのか…!!…!!」

ジユダス

「鬼士だと!?!」

シスターから離れ響鬼の  
間合いから外に出る

響鬼

「行きなさい、」

「あッはい…」

響鬼の後ろへ消える

ジユダス

「……………」

響鬼

「テンペルリッターが  
何故天使を？」

ジユダス

「答える必要は無いな！！」

響鬼は静かに音撃棒・烈火  
を構える

響鬼

「残念だよ、ジユダス」

ジユダス

「なに？―ツツ！？！？」

その瞬間爆ぜた空間が太陽  
の如く―施設も外壁が  
吹き飛ぶ

ゴガガッ―バラパラッ

「やはり交戦しましたか…  
私も急がない―と！？」

ガハッーゴビュッ!?!?

揺れる施設の廊下を大量の  
資料を持ってひた走る小柄  
な女性の背中から喉に剣が  
貫かれる

ケスビム

「裏切り者め!!!!!!」

トラ

「だが!!!!!!」

ネイビム

「究極天使の資料は大事に  
使わせてもらう」

3賢者が高らかに笑い  
テンプル騎士団員は黙って  
女性から剣を引き抜く

施設近くの林

フェル

「早く…ふ、早く…!!!!」

シャリー

「フェルーちゃん…」

はぁッはぁー待って!!」

私達は林の中を掻き分けて

走る走る

誰かが追い掛けて来る馬の  
蹄が地面を蹴る音がこの雨  
の中でも酷く大きく聴こえ  
る―ああ怖い死にたくない

シャリー

「ッそこに隠れよ…!!!!」

私達の背を越える草が生え  
た場所が見える…シャリー

ナイス!!!!!!

「いたか？」

「いえ、いません…」

「此処で足跡が  
途切れている…」

「捜せ！！！！！！  
近くにいるぞ！！！！！！」

フェル

「（あっち行けあっち行け！  
あっち行けあっち行け！！  
あっち行けあっち行け！！  
あっち行けあっち行け！！  
あっち行つてええ！！）」

私がどんなに願っても騎士  
はどんどん近付いて来る！！

シャリー

「フェルちゃん！  
私が囹になるから…」

フェル

「なに言ってるの？」

シャリー

「ココに隠れようって  
言ったの私だから…」

私の分まで生きてね？

フェルちゃん…約束を

守れなくてごめんね…！

「いたぞ…！！！！！！  
連れていけ…！！！！！！」

私は助かった…でも大切な  
…友達は…いない…

雪…絶対に約束は守るから

だから…どんな形でも

見ようね

一緒に…雪…

生きてて

シャ  
リ  
ー

第二十四話 鬼土記憶と姫君の究極天使にされた優しき娘（後書き）

こうして長きにわたる闇の  
魔王Kの阿鼻叫喚酒池肉林  
恐怖の宴は終焉を迎える？

夏奈

「いや」

良かった良かった！！！！」

千秋

「良くない！！

服脱げないぞ！！？！！」

有希

「……………」

ハルヒ

「――まさか！！？！！」

Another

「みくるちゃんが  
いない！！？！！」

羽生

「そつえば前回……  
喋ってないのです！！」

魅音

「圭ちゃん！どうして！？」

圭一

「いや俺にも分かん」

鞘子

「お菓子食べてる  
場合じゃないね？」

珠姫

「ですね、」

紀梨乃

「風邪を引くよ！……！！」

奏

「ツカサアア！……！！」

つかさ

「呼んだかな？」

かがみ

「いやいやいやいや……!!」

みゆき

「つかさん

らしいですね。」

みさお

「柊…大変だな、」

こなた

「グス、私がカッコ良く  
決める筈があ……!!」

春香

「まあまあ

お茶でも飲んで、」

ユカ

「まだ終わってない?」

らきぬこ

「にゃも?」

真の黒幕は一体誰か！？  
次回…変身しますか！？

次回仮面ライダーユカイド  
鬼士閃光と姫君の審判

輝け！！心のバツクル！！！！！！！！

次回も変身（アーク）  
ユカイド

次回も…読むのです！！  
人の子よ！！！！！！

第二十五話 鬼土閃光と姫君の審判 鬼土と姫君編 完（前書き）

消えた朝比奈みくるちゃん

魔王K以外の真の黒幕とは

羽生

「オヤシロセンサー！！！！！！  
なのです！！！！！！」

ピカンピカンピカンピカン

ピッピッーーーーー

「うわ”見つかった!?”」

A n o t h e r

「貴方は…誰だっけ？」

ハルヒ

「見た覚えが

うつすらとあるわね、」

有希

「…コンピ研部長、」

みんな

「知らないよ、」

コンピ研部長

「貴様達が知らなくても俺はよく知ってるぞ、」

A n o t h e r

「困るよ、大事な前後書きを…、」

コンピ研部長

「作者！！貴様に言われる筋合いは無い！！！！」

みんな

「おお！？！？A n o t h e r に…」

A n o t h e r

「む、いくら本編に出てないからって、その態度は許せない」

コンピ研部長

「そう本編に出番は無いがにも拘わらず、貴様がした事は何だ！！！！」

A n o t h e r

「？」

有希

「Another…これを、」

ハルヒ

「台本？」

Another

「まつまさか！?!？」

ユカ

「Anotherさん？」

ここは前後書き担当地の文

私が説明しようか

九話でJSが突っ込んだ校舎にコンピ研部室が在ったのだ…PCは全部完全に大破部費も出ず…そこで部長は作者に復讐を誓いゲームを作り密かに圭一の下へ運び洗脳…闇の魔王に変貌させ

闇の力で…前後書き元より本編を乗っ取る計画だった

まあバカ野郎だな

Another

「……………」

ユカ

「Anotherさん、」

ハルヒ

「バツカじゃない逆恨みも  
いいところ、ふざけるな」

有希

「Anotherは知らなかった  
それは本当…だけど、  
貴方は努力もせずに…  
人を利用して…!!!」

千秋

「おい、Another!!  
悪くないとは言えないが  
あの大バカ野郎を!!!!!!  
野放しにするのか?」

みんな

「Another!!!!!!」

Another

「わかったよ(o^\_^)b  
ゴメン、部長!!!!!!  
もう謝らないよ!!!!!!」

コンピ研部長

「なんだと?!?!?」

次回前後書きに続く!!

第二十五話 鬼士閃光と姫君の審判 鬼士と姫君編 完

校舎を走る教官達は外から聞こえていた激しい戦いの音が止んだの不思議に思う

華鈴

「ーッ、止まれ！！！！」

プリーシア

「わぷ！？！？ーッッ、教官？  
どうされました、」

急に前を走る教官が止まりプリーシアは顔を背中にぶつけ鼻を摩りながら尋ねる

暗黒騎士

「久しいな…雛鳥達よ」

フイーリア

「うきゅん、

…大変かなッかな！？」

暗黒騎士と一緒に何故かフイーリアが五人の前に

現れる

テレサ

「…貴方は今だにその鎧を外さないのですか？」

暗黒騎士

「時間が無い…話は後だ」

暗黒騎士が赤いプリズムを教官達に向け放ると赤い光が五人とフィーリアを包みそして掻き消えた

暗黒騎士

「次は…」

あの時の雛鳥が、」

仮面ライダーユカイド

g w u r u r u r u r - g a a x a a a a a a a

フェル

「うく、しシャリー！！！！！」

究極天使の蟹鉗に掴まれて持ち上げられるフェル

サテ、ドウデルカナ？

魔刻ッ…邪乱閃！！！！！！

G y e x t s u e a a a a a a a a a a a a a a a a

究極天使のフェルを掴む

右腕が宙を飛ぶ

暗黒騎士

「何をしている？

雛鳥よ、」

フェル

「―暗黒…騎士！？」

ヤハリカ…アンコクキシ…

暗黒騎士

「彼女を救うのだろう？

なら剣を取れ…爪を磨げ

牙を剥け！！！！！！」

座り込むフェルに自身の剣  
ハルザブシュナイダーを突  
き付ける暗黒騎士

フェル

「けど…シャリーはッ  
もう…もう！…！！！」

諦めるなッ！…！！！！

パーティを助けられた

シャリーだつて同じだ

G a a g a a g u r u x u o o o o o o o o o o o

猛り狂った究極天使を  
鋼炎で押さえ込む響鬼

アツイナ…カレラハ…

ユカイド

「バツクルさん…私は、  
フェルちゃんを助ける！！  
助けたい！！！！！！」

……イイダロウ…ユカ……

瓦礫を押し退け立ち上がる  
ユカイドの手に一枚の灰色  
のカードが握られる

フェル

「…シャリー、シャリー！！  
私は生きたい！！！！！！  
ハヤウェイや仲間達と…  
一緒に生きたい！！！！！！  
シャリーと一緒に……」

大好きな…あなたと一緒に

私は…今を明日を刻みたい

シャアアツリイイイツツ

《ファイナル・

フォームライド

・ヒビキ》

ユカイド

「フェルちゃんの中で眠る  
もう一人のフェルちゃんを  
目覚めさせる…恐れないで  
だってそれは―貴女自身…  
ビックリしないでね？」

ユカイドがフェルの肩に触  
れると凄まじいプレッシャ  
ーがグラウンドを包み込む

フェル

「ああ！？ユカ先生…私なの  
この力が…私？」

明滅するフェルの影が徐々  
に究極天使の其れに変わる

大丈夫なのです…貴女が…  
大切な人を…想う気持ちを  
失わない限り…其れは…  
貴女の力になりますです!!

目映い明滅が終るとフェル  
は究極天使に似た白き巨人  
に姿を変えていた

響鬼

「フェル!! やれるか?」

フェルUA

「うん、いけるよ!!」

フェルの胸と肩のプリズム  
から魔法陣が白き輝きと共  
に現れ大きく熱く光る

G u r u r u r u r u r u r u ! ? ! ?

フェルUA

「我が意に従い…我が手に  
集うべし！！！！！！」

そは全ての…生命への畏怖

魂の祝福を超え……

浄化されし光明！！！！！！

ルナアツ……

ラアツイトツオオオオツツ

## 第二十五話

レスレクシオン

・

ウーム

《ジョーカー》

《マキシマムドライブ》

W

「さあ!!」

メモリブレイクだ!!!!」

W（フィリップ）

「翔太郎!この場合は

プリズムブレイクだ!!」

ああ?そうか...面倒だな...

じゃあ仕切り直しだ!!

コホンッ

W・（フィリップ）

「プリズムブレイクだ!!

ジョーカー!!!!!!

エクストリーム!!!!!!」

自身が巻き起こした竜巻と  
共に飛翔… 相手目掛け両半  
身がスライドして続けざま  
に飛び蹴りを放つが…

パッパキヤッアン

W

「どわ!?!と、」

相手が展開した魔法障壁に  
弾かれる

W

「チィ、

プリズムの力か?」

こいつは厄介だな?

フィリップ

翔太郎！！既にプリズムの  
能力は検索済みさ！！

よっしゃ！！次いくぜ！！！！！！

《ヒート》 《メタル》

《ヒート メタル》

サイクロンジョーカーから

ハーフチェンジ

ヒートメタルへ

いいかい？翔太郎！！

なんだよ？

僕達はカメンライドでこの  
世界に存在しているんだ！！

それが？

致命傷に近い攻撃を受ける  
と僕達は此処に存在しては  
いられないんだよ

風都に戻されるって訳か…

だから考えて戦いたまえ！！

了解だ、フィリップ!!

W

「Wの力を見せてやるぜ！  
3賢者！！！！！」

ケスビム

「愚かな！！！！！」

トーラ

「我らは、  
神となる存在！！！！！」

ネイビム

「仮面ライダーなど  
敵ではない！！！！！」

《メタル》

《マキシマムドライブ》

メタルシャフトにメタルの  
メモリを差し込む

W・（フィリップ）

「メタルブランディング！！」



「やはり……暗黒騎士は」

フリーシア

「この場所は？」

神楽

「フリーリア、危ないから  
…パーティをお願い、」

フリーリア

「はいッパーティちゃん！！  
あっちに行こうね！！！！」

パーティ

「わかったでし！！！！」

物影に身を潜める二人

ケスビム

「鬼士学校の！？」

トラ

「あの時のシスターか？」

ネイビム

「丁度いい！！！！！！」

3 賢者

「纏めて始末してくれる」

3 賢者はWから教官達に目標を変えて狂気の眼差しで

睨み不敵に嗤う…

翔太郎！3 賢者は彼らに任せよう、僕達は魔女を

W

「魔女！！付き合って  
もらおうか！！！！」

少年

「……………」

リアリス

「止しなさい！

戦う必要は無い」

変身しようとカードを掴む  
少年を制し微笑を浮かべる

リアリス

「W、保坂達とは出ていく前に会うつもりだから安心なさい、クスクス」

そう言いながら徐々に闇へ溶けていく魔女と少年

W

「な”ッおい！？待て！！！！！！」

手を伸ばすが間に合わず

空を掻いて終る

W

「くそ！！逃げられた！！！！！！」

W（フィリップ）

「まあ、落ち着きなよ！！！！」

W

「なんだ―余裕だな？」

魔女は嘘は付いていない！  
心理学も検索済みさ！！

W

「あー…さいですか、」

後は、この世界の連中に  
任せるか…イレギュラー

だしな、俺達は

木枯らしが吹き姿を消すW

ケスビム

「満たされし器よ！！！！」

トーラ

「我らを神に！！！！！！」

トーラ

「レリヒオンを超える神に  
我らを！！！！！！！！」

ビュッオ…シュル―ビュル

姫君の力により満たされた  
カプセルからコードが伸び  
3賢者に突き刺さり凝縮液  
が身体に流れ込む

プリーシア

「―気持ち悪い、」

華鈴

「これが、3賢者様の  
正体か！?!?!」

シスター・ヘル

「神を語る愚者に  
裁きを!!!!!!!!!!」

神楽

「…禍津神」

四人の前に立つそれは光の  
翼を生やしどす黒い波動を  
撒き散らしながら嗤う

神とは掛け離れた

邪悪なる化身

ケスビム

「我らが!!!!!!!!!!」

トーラ

「神ッ!!!!!!!!!!」

ネイビム

「矮小な人間よ!!!!!!!!!!」

3 賢者

「崇め！敬え！讃え！  
我らが全知全能！！  
世界を肅正する！！！！  
神である我らに！！！！！！  
従うのだ！！！！！！」

シスター・ヘル

「ふざけないでください…  
貴方達が神？フッフフー  
可笑しくて可笑しくてッ  
神は…自らを神等とは…  
申しませんよ！！！！」

華鈴

「レリヒオン教を賢者様が  
自ら…お捨てになるか…  
ッの屑が！！！！！！」

プリーシア

「お前達の支配など…  
誰も望まぬ！！！！！！」

神楽

「…神は昼は大地を照らし

夜は優しく包み込むもの  
… 貴方達は違う！！！！」

怯む事なく3賢者に真つ向  
から啖呵を切る四人

ケスビム

「ならば… 死ね！！！！」

ケスビムが翼を広げ魔法陣  
を瞬時に展開、球状の光か  
ら無数のレーザーが四人を  
襲う

ヒイヒイヒッヒュヒュン

「ーぐ！？… ガフッ、」

「ン…、 あああ！！！！」

プリーシア

「きッ教官！！！！！」

神楽

「――テレサ先生！？！？」

二人を庇って賢者の光の線を受けた教官とヘルの身体には複数の穴が空く幸い血は流れてはないが黒く焼け

焦げてしまう

華鈴

「ぐう、未熟！！！！！」

シスター・ヘル

「侮りま……したね、」

太股と膨ら脛を貫かれ立ち上がれない教官とヘル

トラ

「おお！？！？これが  
神の力ああ！！！！！！」

ネイビム

「我らが――神なのだから」

翼を震わせ――嗤う嗤う嗤う

フリーシア

「黙れ…3賢者、」

神楽

「……覚悟して」

神楽は弓・天雅深尊に矢を  
つがえ天に向け構える

神楽

「フリーシア様!!」

何時でもいけます!!!!!!」

フリーシア

「うむ、神楽!!」

見せてやろう!!!!!!」

フリーシアは神楽の肩を台  
に跳躍、神楽はフリーシア

目掛けて矢を放つ

神楽

「夜叉ッ!!!!!!」

フリーシア

「秘技！！！！ミラージュ、」

彼女が展開した万華鏡の  
様な魔法陣に矢が当たる

プリーシア・神楽

「滅殺！！！！！！散るは…

紅葉…咲くは…吹雪…」

目にも留まらない突きを魔法陣に放つと数え切れない  
矢が3賢者に降り注ぐ

オオツードトドトドトドトド

3賢者

「ギエツ！？！？」

グバツヘエエエエ！！！！」

魔法矢が3賢者を蜂の巣に  
変え、肉片だけが残る

プリーシア

「ふふん、見たか！！！！」

神楽

「…教官、

…テレサ先生、」

血が滲みだした二人に駆け

寄る神楽

ニユ  
…ル

プリーシア

「華鈴教官！！テレサ先生！！  
帰りましょう！！！！！」

ビュ  
ー  
ル

ニユブル…ヌユルブックク

フィーリア

「プリーシアさん、

…後ろ——後ろ！！！！！」

プリーシア

「どうした？

終わったのだ—ぞ—？」

b u r u r u b a h e a a a a a a a a a a a

パルティ

「うそーでし!?!?」

フリーシアが二人の様子に  
後ろへ振り向く…

フリーシア

「ば…馬鹿な!?!?」

g y o o w o - j a r u a a a g a b u a a

3賢者だった肉片は一つに  
融合しそれは醜く酷い腐敗  
臭を撒き散らしながら既に  
骨だけの翼をガシャガシャ  
鳴らして咆哮する

華鈴

「ッ神楽、回復はいいから  
あの怪物を倒せ!!!!」

二人に癒しの魔法をかける  
神楽を止めさせる華鈴

神楽

「……でも、」

シスター・ヘル

「心配は……いりません」

神楽

「……はい、先生」

二人の想いを受け取り  
プリーシアの隣に並ぶ

プリーシア

「もう一度滅殺だ！！！！」

神楽

「はい、プリーシア様」

RESURREXION！

ゴゴゴードンッズスッズゲ

プリーシア

「な、なんだ!?!?」

フリーリア

「ああ―床が…、」

姫君の台座を中心に床がホ  
ールケーキ状に迫り上げる

融合変異体

「J a r a b a b a - R e t t o u s h u ! !」

みんな

「うあ―キヤアア!?!?」

上昇する床の激しい揺れに  
プリーシア達は放り出され  
てしまい3賢者―融合変異  
体は高く高く床と一緒に遥  
か雲の上まで消えてしまう

「間に合わなかったか、」

「いえ、発動はまだです」

赤い光からディエツチと

カナーズが現れる

ディエツチ

「バベル…賢者はどこまで  
理解してるのか、」

カナーズ

「少なくともアークの  
コードは入力されてない  
まだ間に合います!!」

フォオオアアウウン

ジェットスライガーが降り  
てくる…カナーズが飛び乗  
りディエツチは足をかけて  
プリズムをプリーシア達に  
投げると白い光が彼女達を  
包み癒す

華鈴

「これは…」

お主達は一体!？」

ディエツチ

「通りすがりの  
仮面ライダーだ!」

プリズムのお蔭で華鈴と  
ヘルの傷も完全に癒える

シスター・ヘル

「さつき居た半分個  
怪人に似てますね、」

パルティ

「ぶぶ、変でしー!」

ああWよ、笑われてら……

うわああひいやあっぴやい

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ぶ、ブレ!? ブレーキィ!!!!!!!!!!  
ストップ!! ストップウツ

ぶつかる!? ぶつかるってえ

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ドッゴッグウオーン

バベルに激突する巨大な影

ディエツチ

「これで揃ったな、」

激突時の埃が晴れると

フェル

「へちやああ>( < | > )ゞ」

ユカ

「星が見へりゆよう!?!」

ハヤウエイ

「鍛えてなかったら

死んでたな俺達…、」

ふらふらとフェルとユカが

床に座り込みハヤウエイは

バベルに手をおき溜息

みんな

「……………」

突然の出来事に反応が遅れ  
てしまうプリーシア達

ブリーシア

「フェル！？」天使は  
どうしたのだ！！」

フェル

「……………終ったよ、」

大人びた顔でこくりと頷く

ディエツチ

「カードに

色は戻ったか？」

ユカ

「はい〃保坂さん〃〃」

カナーズ

「それじゃ行きましょう

天国…へ、」

JSから薄青緑のプリズム  
を二つ取り出して床に投げ  
るとテーブル状に変化

ディエツチ

「乗れ！！！！」

慌てて二つのテーブルに六  
人が上がるとヒュンと上昇  
必死に端を掴みながら抗議

の声をカナーズに向けるが  
風に掻き消される

フェル

「よし、変身……！！！！」

奇妙なポーズを決めて  
究極天使に姿を変える

フェルUA

「乗って乗って……！！！！」

フェルの肩にハヤウエイと  
ユカが乗るとJSも一緒に  
一気に上昇し雲を突き抜け  
てプリーシア達と合流

ヒュウ……ドッオオーン

十一人は融合変異体が居る  
バベルの頂上に飛び出るが

融合変異体

「Shinee-Rettoushu、」

カッ  
カ  
カッ  
ー  
ヒ  
ヤ  
ッ  
ア  
ア  
ン

光のシャワーが全方位から

十一人を襲う

フェル  
U  
A

「Haxtu!!!!!!」

無数の光全てに魔法陣を広げ数倍に増幅して跳ね返す

融合變異體

「Nani!? Higgiiyaaaaa」

全弾命中し肉片と骨だけの融合変異体は床に倒れ込む

パ  
ル  
テ  
ィ

「ヤッターでし!!!」

ファイリア

「弱  
いかな？かな  
！！」

# ディエツチ

「まだだ、」

ブクブク…ビュ  
ルルルルル

融合変異体

「神は！！！！！！」

F u j i m i x i i u a x i g y i、  
」

周囲のカプセルが紅く輝き  
完全に再生する融合変異体

カナーズ

「周りのジェネレータを  
破壊しましょう！！」  
」

華鈴

「よし、

いくぞ！！みんな！！！！！！」  
」

神楽

「必中…夜叉！！！！！！」  
」

シスター・ヘル

「フォルティス…

パアルスッ！！！！！！」  
」

プリーシア

「サザン…クロス！！！！！！！！」  
」

華鈴

「壬生流剣術が奥義！！

双刃…炎覇斬ッ！！！！」  
」

《フィニッシュライド

ディエツチ》

《エクシードチャージ》

空気に触れ爆発しながらも  
神楽の放った矢はジエネレ  
ータープリズムに突き刺さ  
り、十字の斬撃がそれを切  
断、振り被った十字剣をG  
プリズムに投げ付け次々に  
破壊、虎鉄と菊一文字に焰  
が走りGプリズムを消し炭  
へと変え、ドライバーから  
オーラカードが出現し極太  
レーザーでGプリズムを横  
に薙ぎ払う、ポインターを  
取り付けたカナーズフォン  
で多重ロックオン！！取り零  
したGプリズムを完全

一掃した

融合変異体

「神であるWaryurani!!!!!!

Purijubunado-Fuyou!!!!」

ユカ

「あつそ、でもね…

終りだよ！賢者さん」

《カメンライド》

バツクルさん…お願い

協力してくれる？

カンチガイシタ…アアイウ  
レンチュウハ…キライデナ

《ユカイド》

キイイイイイイイイイイ

アアアアアアアアアアア

ハヤウエイ

「フェル…これが俺と

きみの変身だ！」

静かに燃え上がる炎が晴れ  
ると究極天使の波動を受け  
足元から金色に姿を変える

融合変異体

「下等な人間風情が！

Shinueexeeeeee!!」

激しい輝きを放つ魔法陣から闇の深淵が湧き出る

# 《ファイナル

アタックライド

ヒビキ

天を突き抜け一本の槍が融合変異体に突き刺さり動きが止まって魔法陣も

搔き消える

融合變異體

「なんだ！？これは！？力が…」

U  
O  
O  
O  
O  
O  
O  
O  
!  
!  
!  
!  
!

Kamerridaaxa!!!

ユカイド

「カリス・ロンギアス、  
神の槍だよ！！！！」

A  
響鬼

「剣を、ファイリア!!!!!!」

ファイリア

「はい、お兄ちゃん!!」

剣を手渡すフィーリア

《ファイナル

フィニッシュライド

ヒビキ》

A 響鬼

「みんな…俺に力を  
護り抜く強さを……!!」

これは…

フェルUA

「希望……!!」

希

望

テレサ

「加護……!!」

加

護

ブリーシア

「信念！……！！」

信

念

華鈴

「正義！……！！」

正

義

神楽

「奇跡！……！！」

奇

博愛

不

屈

「パーティ  
不屈!!!!!!」

天

命

「ファイリア  
天命!!!!!!」

跡

福音

未来

これが…今を生きる彼等の

明日への輝く心のプリズム

神は…彼等を………信じる

癒し…祈り…誇り

楔くわぎなさい…

ユカイド

「この尊き想い

こそが………!」

A 響鬼

「審判の剣………!」

我、主の命を受けし時

其の輝きを以て…

有翼の民を治む！

みんな

「うおおおおあああ！！！！  
あああああああ！！！！」

響鬼が天に翳す剣が目映く  
光り、輝く柄に付いた翼の  
装飾が左右に大きく広がる

A - L A - ！！

G - L A - D I U S ！！！！

虹色に煌めく翼は響鬼達を  
閃光に変える

M a m m a s a k a ! ?

R e r i h i o n n n o - S o n n n a h a z u h a

みんな

「真なる裁き、

その身に刻め！！！！！！

アーラ・グラディウス」

輝く俺達が…賢者に因って  
散った全ての心の想いを乗  
せて…二つの影が見える…  
小さな影は今を俺達に任せ  
もう一つの影は剣に手を添  
えて…いつの日か…きつと  
…必ず会いましょうと  
俺達に力を貸してくれた…

静かに、大地を照らして…

遙かな空へと君は旅立つ

些細な出来事…甦る、

私を残して…君はどこかで

同じ夜空を見えていますか？

いつかこの道で出会いたい

貴方と響き合いたいから

優しく抱きしめて欲しい

それから一年後…

風車がゆっくり回る…俺のお気に入りの場所なんだよ

ドタドタバタバタ…トット

バツタン

プリーシア

「ハヤウエイ！授業に教官が遅れる事が

あるのか？いや無い！！

反語ツ反語！！！」

俺は鬼士学校の実技教官になつて日々生徒に鬼士の何たるかを教えているのだが

プリーシア

「全く、私がいないとダメダメだな……」

顔を赤らめながらも叱る  
プリーシアちゃん

ハヤウエイ

「つい、気持ち良くて」

プリーシア

「フィーリアが

お冠だぞ……!」

ハヤウエイ

「それは

不味い!？」

俺は慌てて風車小屋から  
グラウンドへ続く階段を

駆け降りる

プリーシア

「ハヤウエイ!？まつ待て!!  
私を置いて行くな……!!」

♪ テンテンテ…テン ♪

ヴェエーラ

華鈴

「整列！！！！……おや？

アクティ、なんだ

その顔は？」

アクティ

「いや猫一匹に騎士団を動かすのは……」

心底怠そうなるバカの一人

アクティくん

華鈴

「ならアクティ！！！！死ね、今すぐにだ！！！！！！」

絶対零度で睨む華鈴……怖い

テレサ

「あらアクティさん？

どうしたんですか？！

まるで子羊ですよ！？」

両手一杯に野菜や果物が入ったカゴを額にうつすら汗をかきながら抱えるテレサ

華鈴

「ご苦労、テレサ！」

テレサ

「皆さん！孤児院で取れた  
新鮮な野菜と果物です、  
召し上がれ」

テンテンテ…テン

和の国

バチバチツバチバチツ

神楽

「お父様、お母様、神楽は  
毎日が楽しいです」

プリーシア様とても優しい

みんなも…大好きです

ハヤウエイを想うと胸が、

ちくちく…むずむず…

プリーシア様が…羨ましい

お父様…お母様…

神楽は…元気です！…！！

“テンテンテ…テン”

ビュオオオオオオオオー

パルティ

「しゃびゅいでしょ!?!」

フェル

「うぴゅ、

寒い☆(＜―＞:;)ゞ」

グリーンラントとある山の  
山頂目指してひた歩く

パルティ

「おなかが空いたでし」

フェル

「うう、お昼にしようか」

地面にシートを敷いて  
弁当を広げる…フワッ

パルティ

「なんでしょ―冷たい!?!」

フェル

「もしかして!?!―これが」

シャリー

「雪…だよ、フェルちゃん  
パーティちゃん」

ひらり…ふわり…ユラユラ

キザーロフ

「いくのか？」

暗黒騎士

「ああ、」

鬼士学校を見下ろす丘

キザローフ

「子供に顔を  
見せずにか？」

暗黒騎士

「まだ終っていない…  
その時まで仮面は  
取れないな…」

キザローフ

「そうか、きみが帰らぬ  
事があるのか？―いや  
無い！！！！反語…ん？」

一陣の風と共に姿を消した

暗黒騎士

キザローフ

「相変わらずだな、  
マイステルよ！！！！！」

鬼士学校・裏山

時の列車らき ライナーと  
星の列車が共に待機…

リアリス

「さよなら保坂」

保坂

「速水、次は必ず…」

リアリス

「春香を救う方法は  
これだけ…なのよ」

藤岡

「それでも俺達は」

リアリス

「期待…してる」

時の列車に少年と一緒に

乗り込み手を振りながら  
走り去っていく

七美

「お別れは  
済みましたか？」

保坂

「さて、次の行き先は…」

藤岡

「夢見の世界か…  
それとも…あの世界…」

パ  
ア  
ッ  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ア  
ン

とある浜辺をトコトコ歩くとある浜辺をふわふわ進む

二人は…ユカと羽生…

羽生

「ふわぁあ…ううん、」

大きな欠伸一つ

ユカ

「ねぇ羽生ちゃん？」

羽生

「あう？なんですか、」

ユカ

「一年も居たのに…全然成長してない」

えいえいと背伸びしながら

尋ねた…ユカ

羽生

「世界と世界では時の流れは異なるのです、響鬼の世界で一年でもユカにとっては一週間ぐらいですよ…!!!!」

驚愕の事実だが自分の世界

に戻った時…お婆さんじゃ  
恥ずかしいなと思ったユカ

羽生

「あうあうあう!?!?!? 漸く  
鏡が反応したのです!」

ユカ

「どれどれ、」

二人が覗き込むと

摩天楼を淡く照らす満月に  
蝙蝠に似た影が映った

ユカ

「キバ…の世界かな?」

第二十五話 鬼士閃光と姫君の審判 鬼士と姫君編 完（後書き）

次回仮面ライダーユカイド

「お二人はしっかりと  
掴まって下さい！！！！！」

「急転直下のハリケーン  
なのですよ！？！？」

「ここはどこなの！？！？？」

「わーぷ ユウちゃん」

「誰が野良猫よ！！！！！」

「じゃあ居候猫だな、」

「天？困らせたら  
ダメでしょ！！！！！」

「ロックオンが無理なら  
手動で狙い撃つ！！！！！」

「ああ私は死ぬのね？」

「おはぎ作り過ぎちゃった  
おすそ分けだよ””」

「今日からホームレスか」

「だから俺様はキバツトだ  
アングロスじゃねえ!!」

私を…死なせなかった  
償いをして貰うから!!

なんだ―その理由は!?

ユカと羽生は  
再び戦争の世界へ

次回も変身(わーぷ)  
ユカイド

次回も読むですよ  
あう

## 第二十六話 真夜中・月を背負つ者（前書き）

真の黒幕はコンピ研部長！！

作者 Another と対決？

みさお

「終ゝなんか知んねえけど  
面白そうだぜ！！！！」

かがみ

「私は早く帰りたいわ！！」

みゆき

「ゲームで洗脳ですか、  
技術だけは凄いのですね  
ある意味感心です。」

つかさ

「あの人…生理的に、  
無理ッッなんつって」

こなた

「私は鳥人なのだよ！！！！」

つかさ

「あッこなちゃんも、  
見たんだ？」

こなた

「まね〜！」

圭一

「魅音！？その格好は〃〃」

羽生

「気付くの遅すぎ  
なですよ！！！！！」

魅音

「お嫁に行けない！？  
責任を取ってくれる〃」

珠姫

「暑いですが、」

紀梨乃

「着ぐるみだもんね  
（ペンギン可愛い〃〃）」

鞘子

「（反則だよ””）」

ハルヒ

「あら？イケるわね！！  
このスイーツ””」

有希

「…………（”こく”）」

奏

「うう、ジュガジャアア  
ふわぁああぁあん」

春香

「落ち着いて下さい！？  
カナカ…カナデさん、」

夏奈

「危ないねえ…春香？」

千秋

「ほ、よかったです！！」

「春香姉さま」

ユカ

「ツカサお兄ちゃん、  
元気かな？」

フェル

「あれえ！？どこ？」

神楽

「ぷぷりーシア様！？」

（おろおろ、オロオロ）

二人ともよく来たな

らきぬ

「にゃもにゃも  
にゃも〜ん」

次回前後書きに続く！！



## 第二十六話 真夜中・月を背負つ者

真夜中の大都市・ESP兵器

対応擬似東京

夜空の風を切りながら一機のステルス戦闘機が日本を  
目指し駆ける

「そろそろ日本の索敵  
範囲か、通信終る―」

華奢な身体でそれを操縦する少女は振り向かず後ろのVIPに声を掛ける

「ユカ様、羽生様お二人は  
私が命を懸けて、お護り  
しますから。」

ユカ・羽生

「あッはい（なのです）？」

後部座席に座る二人は窮屈なシートよりも現在の自分達の状況が掴めずにいた―

同時刻―擬似東京

「ねえ、クリスマスの  
予定は？朱実、」

朱実

「まだ勤務時間、  
私語は慎みなさい！」

「つまり、お一人？  
寂しいねえ、」

5メートル程の蜘蛛型索敵  
戦闘機のコクピットで暇を  
持て余す女性二人

朱実

「うるさい、  
撃つわよ！！！！」

グロツク17の銃口を相棒の  
蟀谷に突き付ける朱実

「アハハ―敵さんだよ、」

朱実

「ふざけるな！夏蓮！！！！」

夏蓮

「モニター見てみ、」

疑いの眼差しで夏蓮から  
モニターへ顔を向ける…

朱実

「何も映ってな―…い！？」

モニターにはシャープな黒  
と灰色の機体が微かな  
シルエットで映る

夏蓮

「ビンゴッしょ？」

朱実

「ッ、部隊に

連絡を―って！？」

通信機のスイッチを切る

夏蓮に驚く朱実

朱実

「正気？」

夏蓮

「ふふふッ 私達で手柄を  
頂きましょ！！！！！」

朱実

「……一応戦闘機だけど、  
所詮この子は索敵専用…  
マニトのESP兵器を相手  
するのは自殺行―い！？」

ガッコン

夏蓮

「♪バンバラ〜テッテテ  
バンバン！テッテ〜♪」

蜘蛛型戦闘機・群雲の背部  
が開き230？対空ブラスタ  
ー砲が現れ夏蓮は照準をマ  
ニトの戦闘機に向けるが三  
つのカーソルはそれを捉え  
る事ができず右往左往

夏蓮

「朱実い〜ロツクオン  
できないよ？」

朱実

「バカ！！ロックしたら  
位置特定されるでしょ！！  
いい加減にしない！！」

夏蓮

「ロックオンが無理なら  
手動で狙い撃つ！！！！」

手動に切り替えてコントロ  
ーラーを握り照準をミリ単  
位で合わせる

夏蓮

「CATCH&ドカーン！！！！」

仮面ライダーユカイド

擬似東京・上空

「……高エネルギー反応！？  
真下から……チィッ、」

機体を僅かに右に反らして  
躲すと操縦席手前のレバー  
を二つとも引くと、それは  
コントローラーだった

「ユカ様羽生様、少し揺れ  
ますので、何かに掴まっ  
ていて下さい、」

慌てる二人と冷静に熱源を  
特定した彼女は掴んだコン  
トローラーの親指の位置に  
あるスイッチを押した

# 『CHANGE - FORM』

ステルス戦闘機のモニター  
にそれが表示されると機体  
が変形し人型に変わる

「気付かれた以上は…  
消去します！！！！」

スラスターを調整、地上の  
群雲目掛け最大出力でブー  
スターを点火して文字通り

の急転直下で突撃する

羽生

「急転直下のハリケーン  
なですよ!?!?!」

ユカ

「ってか此処は、  
どこなの〜〜!?!?!」

擬似東京・地上

夏蓮

「あッ!?! 躲された、」

朱実

「しかもマニトの  
可変ESPU: クラフト、」

どうしよう?と朱実を見る  
が、彼女は頭を抱えて  
こちらを睨む

朱実

「ああー死ぬのね？

貴女のせいで私は、」

クラフトの右手の甲がスライド、シユンと青白く光るブレードを展開し回転しながら迫り来る

朱実

「形状記憶ゲル合金！？」

本物は初めて見る！！！！！！」

夏蓮

「ーッ私のむらくもつちを舐めるなあ！！！！！！」

その日、季節外れの花火が  
一つ咲いた…

## 第二十六話

同時刻―東京府

一人のOLが息を切らし  
ながら繁華街から路  
地裏へ駆け込む

今宵… 我の渴きを癒すは…!  
甘美なデザート…

「ハアツハア、  
何なのよ…!!!!」

彩るは自らが奏でるオペラ

「ストーカー? 警察に  
電話するわよ…!!!!」

強気な彼女だがケータイを  
掴む手と足はガクガク  
と震えている

芳醇な香り… 何と食欲を…  
そそのめるのか… 君は

「かッ隠れてないで…  
出て来なさいよッ!!」

お望みとあらば…

「―?…ああ!？」

ファンガイア

「その命、

貰い受ける!!!!」

槍の様な吸命牙を掴み両手を  
広げ彼女の背後に立つは  
ステンドグラス柄の怪人…

「おいッテメエ!!!!!!

かわい子ちゃんから

離れろ、バカ野郎!!!!!!」

バタバタと奇妙な蝙蝠が  
ファンガイアの周りを

飛び回る

ファンガイア

「なんだ？コイツは！！！！！」

「マドモアゼル！」

「さあ、お逃げ！！！！！」

「は、はいい！？！？」

蹠跟けながらも駆け出した  
彼女を見送り振り返る蝙蝠

キバット

「このキバット様が、  
貴様を断罪してくれる」

ファンガイア

「ちっぽけな蝙蝠がか？」

「遊んでないで、いくぞ！！」

「アングロス！！！！！！！」

キバット

「な”！！俺様は、

キバットだ！！！！！！！」

「アングロスじゃねえ！！！」

優等生風の眼鏡を掛けた  
高校生が、さつさとしろ  
と蝙蝠を引っ掴む！！

キバツト

「や！？やめてえ！！！！おいッ  
そこのバカ野郎！！！！  
助けるおお！！！！」

啞然と二人のやり取りを  
見つめるファンガイア…

「メシ抜くぞ？」

「よっしゃあ！！！！！緊張って  
いくぜええ！！！！！！  
ガブツ！！！！！！！！」

蝙蝠が手に噛み付き彼の顔  
に痣が浮かび腰に鎖のベル  
トが巻かれる

「変身、」

蝙蝠をベルトに逆さまに装  
着すると全身に鎖が巻かれ  
仮面ライダー、キバに変身  
ファンガイア

「キバ！？東京に  
居たのか、」

キバ

「バカ猫がお腹を空かせて  
待ってるからな、  
さつさと終らせるぞ！！」

キバツト

「ウエイクツ！！！！！！  
アアップ！！！！！！」

フエッスルをくわえてキバ  
の右足の鎖を解き放つ蝙蝠  
もといキバツト！！

右足に翼が生え満月を背に  
ファンガイアに飛び蹴りを  
打ち込む

ファンガイア

「ぐうツツーガバツ！？！？」

壁に叩き付けられキバの紋  
章が刻まれてガラスが  
割れる様に消えていく

キバツト

「ザコが!! なあなあ、  
メシなんだ?」

キバ

「オムライス…、」

キバツト

「またオムライスかよッッ  
!!!!!!!!!!!!!!」

## 第二十六話 真夜中・月を背負つ者（後書き）

次回仮面ライダーユカイド

「これからどうするの？」

「あうう、

ひもじいのですよう…」

「大丈夫です！日本ガイドブックがありますから」

「おい、家賃半分払え！！」

「う、身体じゃダメ？」

「俺様は貴女のような女神と同じ空気が吸えるだけで充分です（キラーン）」

次回も変身（テンテン）

ユカイド

次回も読むですよ あう



## 第二十七話 シュークリーム・アイスバー（前書き）

作者とコンピ研部長の

戦いをよそに

こなた

「ふいゝ、緊張したゝ」

つかさ

「こなちゃん、

お疲れゝ!!」

みさお

「まあ、

良かったんじゃないか」

みゆき

「お疲れ様です！

こなたさん、」

かがみ

「??こなた、

何処に行つてたのよ!？」

蓬

「俗に言う、

友情出演ですね!」

奏

「蓬…さん!？」

「…どういう事?」

圭一

「あーそうかそうか!?!?!?」

魅音

「なるほどね!?!」

ハルヒ

「有希ちゃん、

解説よろしく!?!」

有希

「第二十七話本編において  
泉こなたはコンビニ店員と  
して出演している…探して  
みて、分かりやすくしてあ  
るから、…これでいい?」

ハルヒ

「ばっちり!?!?!?!」

フェル

「美味い!甘い!?!」

蕩けるゝ””  
」

神楽

「ぱくぱくもぐもぐむしゃ  
むしゃ…こくこく…こくん  
むぐむぐむにゅーぱくり  
こきゅこきゅむぐもぐー」

夏奈

「コスプレ…  
癖になつたかも、」

千秋・春香

「えええ！?!?!?!?!?」

ユカ

「私は車掌に旅行者、転校  
生、被告、妹、師範に  
今回VIP?にコスプレ…  
楽しむ暇もないよ…、」

羽生

「なんだか本編で甘い物が  
貰える気がしますです」

コンピ研……どうでも  
いい気がするな、

らきぬこ

「にゃも〜？」

にゃも！…にゃも！…」

わかった！！わかった！！

次回！！！！前後書きの  
切り札はこれだ！！！！！！

『ユカイドライバー』

『ハニユーゼクター』

『ウルティマ・アングル』

『アーラ・グラディウス』

『オニガリノリュウオウ』

蓬

「俗に言うパロディですね  
それじゃ、ではで〜」

## 第二十七話 シュークリーム・アイスバー

擬似東京湾・埠頭

海自と陸自の他目的作業用

ESPU―白波と牛蛙が平べっ

たい黒と灰色のステルス戦

闘機・クラフトを海面から

引き揚げる…

夏蓮

「いや、

まさか勝つとはね？」

朱実

「たまたまでしょうが！！

危うく死ぬとこよおっ」

海自の制服を着た二人が牛蛙のクレーンで吊り上がるクラフトを見上げながら危うく命を落としかけ本来は上官から除隊命令が下りる筈だが敵の最新鋭機を見事に撃墜した事で一応不問に

朱実の進言で六ヶ月の減給を甘んじて受ける事になり

彼女は相棒の短絡的思考に  
怒り夏蓮は全く懲りてない  
様だ

仮面ライダーユカイド

海月型の白波がクラフトの  
ハッチを開けるコクピット  
はゲル状の液体に満たされ  
情報解析すら不可能な状態  
でパイロットの痕跡も無し

夏蓮

「奴さんの方が上手だね」

朱実

「アングロスも  
いないか…」

## 第二十六話

ありがとうございましたー

ユカ

「ふうすつきりだよ、

これからどうするの？」

羽生

「あうう、

ひもじいのですよう……」

コンビニから手を拭きふきしながら出て来たユカと陳列されたおにぎりやお弁当惣菜を口の端によだれを光らせ……お腹を押さえる羽生

「大丈夫です！！日本ガイドブックがありますから」

につこりほほ笑む少女には悪いがそれには萌えスポットやらのデーパーなお店の事しか載っておらず複雑な表情で顔を見合わせる二人

「ええと北は……どっち？」

数分程右往左往して戻ってきた少女は「…あ、安心して下さいね…もう少しお待ちを…」と言いながら必死にガイドブックを見る

ユカ

「―龍騎の世界を  
思い出すよ…」

羽生

「ッあう!?!?!忘れて  
ほしいですよ、」

「すいません、  
私達を泊めて下さい」

二人が最悪だった世界を思い出して此処でもそうなるのかと気温とは関係ない身震いしていると少女が見ず知らずの恐らくは高校生にとんでもない頼み事をして彼を困らせているのに気付き慌てて少女の下へ駆ける

ユカ

「ごめんなさい!?!」

羽生

「あう！？シュークリーム  
なのですよー！！！！」

ペコペコ頭を下げるユカと  
彼の持つ袋の中のスイーツ  
に心を奪われてしまう羽生

「お嬢様方これも何かの縁  
ささ、お食べなさい！！」

奇妙な蝙蝠が彼から袋を  
奪うと羽生に口渡す

「おい、キバット！！  
勝手にお前は…」

「蝙蝠が喋ってる！？！？」

ユカ

「え？ーキバットバット」

羽生

「かぁいいのです””  
ーぱくあむはむ””」

少女と羽生は置いてユカの  
言葉を聞き逃さなかった彼  
はガバツとキバットを掴む

キバット

「うお！？わ悪い…優弥、」

優弥

「ファンガイアか？」

キバットの口からスイーツの袋が落ち涙目の羽生と黒い瞳で彼の次の行動に注意を向ける少女としまったと口を手で押さえるユカ

一触即発の空気の中で

「優弥、遅い、  
アイスは？」

全く空気を読まずに地面に落ちた袋を見た彼と同じ指定のコートを羽織った娘は

「ああ！？わ私のお…あ”あ”  
アイス…ア”イ”ス”ウ”

しくしくと両手で顔を押さえ  
えてやり直すと優弥に命令  
を下した

優弥

「……………バカ猫が  
買ってこい！！」

「やだ、」

優弥

「じゃあチョコバナナは  
一生食べるな！！！！」

「ふ…負けを認めるのね」

フォローしようがない程の  
つるぺたな胸を此れ見よ  
がしに反らして勝ち誇った笑  
顔を浮かべる彼女

優弥

「……………チィ、」

いらっしゃいやせー

ありがとやしたー（・ω・）

「素直でよろしい！！」

優弥

「明日もう一度勝負だ」

コンビ二袋を押し付けて懲りずに勝負を申し込む優弥

キバツト

「お嬢様方、あの二人…  
仲が良いだろ」

ユカ

「そう—なんですか？」

羽生

「シュークリーム…、」

「日本人は優しいと聞きました、少しの間だけ…  
私達を泊めて下さい…  
お願い…します……」

吸い込まれる様な黒い瞳で  
彼を必殺！上目遣い

優弥

「断る！！！！！！」

「ちょっと優弥！？  
酷くない、」

少女が可哀相に思えた彼女は  
非難の眼差しを優弥に向けて  
少女を抱き締める

天

「私は朝霞天、  
あなたの名前は？」

「……覚えてない」

優弥

「IDは？学生証とかさ、」

ふるふる首を左右に  
動かす少女

優弥

「そっちの二人は？」

ユカ

「内田ユカです！！」

羽生

「オヤ…」

古手羽生なのです」

再び少女に顔を戻した優弥

は思案…そして―

優弥

「野良猫―予知しろ、  
俺達の未来を…」

天

「野良猫！？誰が！！！！！」

優弥

「なら居候猫…予知しろ」

天

「フシャー！！！！！！…  
しょうがないな」

そう言うとき静かに瞳を  
閉じて集中した天

天

「私達…一緒に暮らしてる  
…キバとは違うキバ？  
彼女の名前は…――」

ふっと目を見開いた天は

天

「ユカちゃん…だっけ？  
きみが名付ける…」

ユカ

「ええ！？ーんと」

驚きながらも少女の名前を  
しっかりと考えたユカ

ユカ

「アスナちゃんだよ！！！！！」

優弥

「どうゆう意味だ？」

キバツト

「良い名だ！！プリティで  
クールな君にピッタリだ  
アスナちゃん」

優弥

「だから意味は？」

天

「よろしくアスナちゃん」

優弥

「オイ意味は！！！！！」

羽生

「アスナ、僕も

よろしくなのです！……！」

アスナ

「よ、よろしく……」

優弥

「マジで酷い！？！？」

東京府・軍病院

正式名称

「EAST DEFENSE AGENCY  
CAPITAL HOSPITAL」

「イクサが完成…ですか」

様々なコードが取り付けられ数台のモニターにベッドに横になった娘の詳細な情報次々と下から上へと流れていく

「君がイクサだ、  
熊野柚香くん」

柚香

「忙しくなりますね？」

「マニトのエージェントが東京府に潜伏している…あれの回収が目的だろう吸命鬼も活動が活発化…スケープゴートも役には立たなかったな…」

淡々と語る技師を見ながら  
首を振る柚香

柚香

「約15年間も持ち  
堪えてくれましたよ」

「そうだったな、」

柚香

「お花が枯れなければ  
良いんですけど、」

## 第二十七話 シュークリーム・アイスバー（後書き）

次回仮面ライダーユカイド

「さ寒いよう（ガクブル）」

「あうう凍るのです、」

「おフロ入る？  
アスナちゃん、」

「あ…はい」

「不肖、キバット！！！！  
お背中お流しします」

「テメエは黙って！！！！  
洗濯物を干せ！！！！」

次回も変身（キクリン）  
ユカイド

次回も読むですよ あう



## 第二十八話 コールド・ホット（前書き）

始まりは…些細な事だった

だけど彼には重大な事

終りは必ず迎える

I s u k a ・ D e k a n a ｝より

A n o t h e r

「ユカちゃん、

これを！！！！！！」

投げ渡されたのは  
ユカイドライバー

ユカ

「よっしッ変身！！！！！！」

《カメンライド

・ユカイド》

ユカイド

「羽生ちゃんフェルちゃん

力を貸して！……！！」

梨花

「いくわよ、羽生……！！」

羽生

「……！？梨花？―あう、  
わかりましたのです……！！」

フェル

「任ッせてえ……！！……！！」

《ヘンシン》

《キャストオフ》

《チェンジリカビートル》

《ファイナル・

フォームライド・

リカブト・ヒビキ》

リカブト

「ハニュー……」

キャストオフ……！！」

《ハニューキャストオフ》

《チェンジ

ハニュービートル》

フェル

「変身だあ！！！！！！」

凄まじいプレッシャーが城を包み込み白き究極天使へ

コンピ研部長

「フン、いでよ！！！！！！」

ミララミラミクル！！！！！！」

バッアアアアアアアアア

ミララミラミクル

「ワタシハ…ミクル

ブチヨーダイスキ」

みんな

「キモ！？最低！！！！！！  
やり過ぎだよね、」

圭一

「コイツ…萌えが、  
分かつちゃねえ！！！！！！」

コンピ研部長

「煩い、五月蠅い！！  
うるさーい！！！！！！」

A n o t h e r

「まるで、

悪魔なガ○ダ○!？」

コンピ研部長

「ハハハ!!!!!!

跪けAnother!!!!!!」

Another

「フッフ!!あまい甘い、

コンデンスミルクを

かけた小倉トーストより

甘すぎるよ!!!!!!」

ユカイド

「ですね!!!!!!」

《ファイナル・

アタックライド

・リカブト・ヒビキ》

ユカイドとHカブトが鬼狩

柳桜とアーラ・グラディウ

スを握り締める!!

有希

「エネルギー充電開始……

…82、86、93、——120

——846%!!!!!!」

Another

「前後書き、

特別バージョン!!!!!!」

《エクストラ・

アタックライド》

《ハニユフェルハンマー》

Hカブト

「ハニユーコネクト!!!!!!」

ユカイド

「フェルコネクト!!!!!!」

ガツキングガシャガシャアン

鎚の先端に変形したフェル  
に鬼狩柳桜とアーラ・グラ  
ディウスを差し込んだ

ハルヒ

「燃えてきたわ!!!!!!」

かがみ

「好きにきなさいよ、」

つかさ

「マジどんだけ！?!?!」

紀梨乃

「熱いね〜!!!!!!」

鞘子

「ウツシャアラア

!!!!!!」

魅音

「ドでかいの頼むよ!!!!!!」

奏

「……………早く終って」

蓬

「俗に言う、

やり過ぎですね」

みさお

「ハハッもっとやれ!!!!!!」

みゆき

「なんだか凄い展開です」

神楽

「むぐむぐ〜ぱくはむ」

珠姫

「よく食べますね!？」

夏奈

「出力安定したよ!!!!!!  
春香!!!!!!」

千秋

「やっつけましょう、  
春香お姉さま!!!!!!」

有希

「準備完了…許可を…」

春香

「よし、いくよ!!!!!!」

春香・ハルヒ

「これが私達の勝利の  
切り札…承認!!!!!!」

バッキイイイイイイイン

ユカイド

「ハアアアア！！！！！！！」

Hカブト

「ウアアアア！！！！！！！」

ユカイド・Hカブト

「ハニユフェルハンマー

！！！！！！！！！！！！！！」

ミララミラミクル

「！？！？！？！？！？」

コンピ研部長

「何故だ！？貴様達は、  
みくるを犠牲に！？」

楔ぎ、 天に……

還れええええええええ

ミララミラミクル

「……………」

自己再生が粒子還元を  
上回っている

ユカイド・Hカブト

「く、効かない!?!?!」

コンピ研部長

「は…ハハハ!?!?!流石だ」

Another

「……………フ、」

こなた

「これが最後の鍵、  
受け取りたまへ!?!?!」

《エクストラ・

フィニッシュライド》

ユカイド・Hカブト

「フェル!?!?!」

アンド!?!?!」

ハニユー!?!?!」

ハニユーフェルハンマーが巨

大な両腕に変形ユカイドが  
右腕Hカブトが左腕を装着  
余った片手を握り締め合い  
ミララミラミクルに突撃！！

みんな

「やっちやええええええええ  
！！！！！！！！！！！！！！」

ユカイド・Hカブト

「これが諦めない明日の  
力だあああ！！！！！！」

パアアアアアアアアアア

ミララミラミクル

「アアアアアアアア」

光の粒子へと…変わる

コンピ研部長

「ぐ、だが！！！！朝比奈

みくるを殺したな！！！！」

Another

「バカ野郎！！！！」

みんな

「バカバカ野郎！！！！」

千秋

「ツとにバカ野郎だな！！！！  
オマエは！！！！」

コンピ研部長

「な、なにを！？！！」

フェル（UA）の腕には朝比  
奈みくるがすやすや寝息を  
たてながら横たわっている

フェル

「—よつと、」

変身を解いて彼女を神楽  
に預けるフェル

Another

「終りにしよつか？」

ニコツと微笑を浮かべて  
コンピ研部長に歩み寄る

みんな

「……………」

コンピ研部長

「ぐ、—……………」

Another

「反省してる？」

コンピ研部長

「へ?...はハイ!!!!!!」

Another

「なら先ずは、

謝ろつか!!」

...ごめんなさい...

Another

「どうする?みんなは、」

みんな

「もちろん、決まってる」

許して…あげるよ

こうして長きに渡る  
前後書きの戦いは…

幕を閉じる

らきぬこ  
「にゃ も~~~~ん」

アナザちゃん  
「あッでも、

前後書きは続くよ  
」

## 第二十八話 コールド・ホット

夢望む都市… 東京府…

懐かしいものだな

さてとキバは何処かな

## 第二十八話

「あのさ、優弥？」

「なんだよ？」

天

「暖房が効いてる部屋で  
食べるからアイスは、  
美味しいの！！！！！！」

テーブルを叩きながらアイ  
スを齧る天と苛ついた顔で  
無視する優弥

羽生

「凍えるのです!!あう”!?”  
シュークリームが……!!!  
おお!?美味しいのです”  
これはこれで””””  
」

ユカ

「さ寒いよう……、」

アスナ

「エアコン…これが?」

旧式も甚だしい茶色のエア  
コンが仕事もせずに鎮座…

天

「おフロに入ろう!!!」  
」

ユカ・羽生

「賛成ー(なのです)!!」  
」

アスナ

「……………」

天

「アスナちゃんも、  
おフロ入ろうよ!!」  
」

アスナ

「あッ……はいッ」

四人は流石に入れないので  
先に天とアスナが脱衣所へ

キバツト

「不肖、キバツト……！！  
お背中お流しします」

優弥

「テメエは洗濯物を  
干せええ……！！」

パタパタと二人の後を追う  
キバツトにピンクのブラが  
覆い被さり床に墜ちる  
（ブラは天の物）

キバツト

「貴様……このヤロー……！！」

羽生

「キバツトは僕と一緒に  
入りましょうです」

キバツト

「はは……！！喜んで……！！」

くッ羨ましすぎるぞ!!!!!!

仮面ライダーユカイド

ユカ達は優弥と天と一緒に  
暮らすアパートに一時的に  
住まわしてもらう事に

大家の稲敷雪枝さんの許し  
を貰ったは良いのだが

優弥

「やっぱエアコン…  
買わなきゃダメか？」

キバット

「よつと…物を大事にする  
心は素晴らしい…が、  
そのうち死ぬぞ？」

せつせと洗濯物を干してる  
キバット…起用ですね  
心做しか天の衣服は大事に  
大切に扱っている

ユカ

「―あッついた!？」

フ…ウウン

暖かい風が部屋を包み込む

羽生

「ぬくぬく…なのです」

優弥

「まだ現役だな!！」

ガチャ…

天

「ちよっ!？」

あアスナちゃん!!!!!!」

三人と一匹が脱衣所の  
方に振り向くと…

優弥

「な」何も絶対に  
見てないからな””」

ユカ

「キバットもダメだよ!？」

羽生

「????」

生まれたままの姿で脱衣所から出てきたアスナとバスタオルを慌てて引つ掴んで体を隠しながら彼女を止めようとするも時既に遅しな状態に思考停止した天

みんなが慌てている理由が分からず首を傾げるアスナ

羽生

「温まりましたか？」

はい、もう一人いましたね

キバット

「麗しき女神の肌を許可も無しに見わしません!!」

ギュッと目を瞑るキバット

ユカ

「紳士なんだね、キバットは!!」

キバットから手を離すユカ

優弥

「と取り敢えず」

ドアを閉める””」

アスナ

「はい？」

ボタン

優弥・天

「……って意味が

違うあーう！……！！！」

閉めたは良いのだが脱衣所  
から出たままのアスナと再  
び目を逸らして瞑る優弥：

アスナ・羽生

「……………？」

ユカ

「……あははーハア、」

羽生

「あっあっあっうっ  
あっうあっうっ」

ユカ

「絶対 Jump  
限界 Kick」

キバット

「ランララン、ララ  
ララララン」

ユカと羽生とキバットの二  
人と一匹は仲良くおフロを  
楽しんでいる。キバット！  
羨ましいなくそツツ！！

ユカ

「キバットも一緒に  
湯に入ろうよ！」

ひょいとキバットを両手で

持つてそのまま湯に浸かる

羽生

「あうあう!!」

えい なのです」

ギュッくとキバットを

抱き締める

キバット

「う”む”!!?……””””」

プニプニ むにむに

ユカ

「ずるい羽生ちゃん!!」

スリスリ なでなで

キバットを抱き寄せて頭を  
撫でなで頬でスリスリ

キバット

「極楽だ!?! 極楽が此処に  
あるぜ!!!!!!!!!!」

キバットは二人に抱き着か  
れ、柔らかい膨らみの中で  
デレ”と顔が綻び溶ける

ユカ・羽生

「〃〃キバツト〃〃」

かぁいいね〜!!!!!!

かぁいいのです!!!!!!

擬似東京・埠頭

「アングロスは…何処だ」

全身黒ずくめのサングラス  
をかけた男が早朝マニトの  
ESPUを陸自と海自がサルベ  
ージした海面を見詰め呟く

「貴方がマニトの  
エージェントですね？」

学校指定のコートを羽織り  
風に靡く髪を片手で押さえ  
ながら美少女は腰にベルト  
を巻き、手に持つ彼女に似  
つかわしくないそれを手の  
平で押さえる

《レ・ディ・ー》

舌打ちをしながら男はフ  
アンガイアに姿を変えた

柚香

「その命、天に  
還しなさい！！！！！！」

右手を横に伸ばしベルトの  
バックル部分にナツクルを

装着

柚香

「変…身…！！！！！！」

《フィ・ス・ト・オ・ン》

金の十字架状の光が彼女を  
仮面ライダー、イクサへと  
変身させ――

イクサ

「!?!?」

吸命牙を利用した銃撃が、  
イクサに撃ち込まれていく

ファンガイア

「愚かなる人間よ、  
キバは越えられないか」

イクサ

「ツツ……」

そう思いますか!!!!!!」

ファンガイアが吹き飛ばし、  
イクサの手に剣が握られて  
いた

《イ・ク・サ・

ナツ・ク・ル・ラ・イ・ズ  
・アツ・プ》

フェッスルをバツクルに差  
し込み立ち上がるようにする  
ファンガイアに駆ける

イクサ

「もう一度言います!!」

ファンガイア!! その命、  
天に還しなさい!!!」

ファンガイア

「——!?!?!」

グツと腰を落とし、ファン  
ガイアのがら空きの腹に—  
ナツクルを撃ち込み入れる

ファンガイア

「—アングロスは…」

何処だ? 人…間…—

ゆっくり粉々に崩れ落ちる

イクサ

「貴方が知る必要は  
ありませんね、」

東京府・とある運河

優弥が住むアパート近くの  
運河をケータイ片手に杖を  
使い歩くはツインテールの  
座敷童子こと神明菊菜

菊菜

「あッユウちゃん？  
熱ココスタバでオケイ？  
すぐにそっち行くから」

優弥

「は？熱コなんだ！？」

ピッ

菊菜

「わ〜ぷ  
」

そう言つと彼女の姿は  
掻き消えた…

第二十八話 コールド・ホット（後書き）

前後書き劇場

Another 対コンピ研部長！！！

エンドロール

内田ユカ

羽生

泉こなた・伝説の勇者こな

南 夏奈

南 千秋

南 春香

古手梨花

千葉 紀梨乃

桑原鞘子

川添珠姫

前原圭一・闇の魔王K

園崎魅音

遠日 奏

神崎 蓬

柊かがみ

柊つかさ

高良 みゆき

日下部みさお

フェル&神楽

涼宮 ハルヒ

長門有希

朝比奈みくる

真の黒幕コンピ研部長

音響・VFX

撮影・制作・監督

Another&amp;アナザちゃん

スペシャル サンクス

超監督涼宮ハルヒ

次回仮面ライダーユカイド

あれれ！？スペースが…！？

次回も変身（熱ココスタバ）  
ユカイド

次回も読むですよ あう

## 第二十九話 ココア・ホットチョコレート（前書き）

さあて今回の前後書きは

ノベラジ・ラジノベの  
放送スタジオ

かがみ

「ええと」かがみです」  
さて今回の仮面ライダー  
ユカイドは！！！！！！」

有希

「心拍数上昇…大丈夫…  
…落ち着いて、」

神楽

「かりんとう…食べる？」

蓬

「かがみさん、  
チ〜リ〜ですよ！！」

かがみ

「みんな…」  
「ありがとう」

通りすがりの老人

「おやおやゝかがみん、  
萌え萌えゝ（-ω-）」

ゴツン

かがみ

「ッさい！！殴るわよ？  
こなた！！！！！」

こなた

「ひ酷い！？緊張を  
解そうとしたのに…、」

梨花

「クスクス…退屈しないわ  
！あら、美味しい””  
酢ぶどうジュースね！！」

千秋

「…バカ野郎ばっか！！！！！」

つかさ

「言うよねっ!!」

パティ

「エネルギー充電120%…

重力砲発射デスネっ?」

紀梨乃

「二つ混ざってる…」

## 第二十九話 ココア・ホットチョコレート

我等が…理の破壊者…

—アルフェー—

アングerosを渡せ…人類よ

仮面ライダーユカイド

「これが第二の月、火星の特異点から我々人類宛ての知的生命体アルフェーによるメッセージです、」

「15年前の時と、何が違うのかね？」

如何にもお偉いさんな爺さ

んが退屈そうに目の前の資料をパラパラと捲り尋ねる

「…フウ、続きます  
聞いてください、」

我等にスケープゴート等は  
通用しない…マニトの小型  
核爆弾で東京に自爆テロを  
仕掛けたのには驚いた

アンゲロスの事象改变能力  
のお陰で気付くのに遅れて  
しまった…まさか騙す為と  
は言え日本にソレを仕掛け  
るなど、かなりの切れ者が  
地球にはいるようだな

だがアンゲロスを匿ってい  
る事は明白だ…フォボスを  
火星に落とした時に気付く  
べきだったな…地球衛星軌  
道に乗る事などまさに天文  
学的な確率なのだから

本題に入ろう…一週間の猶  
予を与える…それまでに君  
達の…そして我等の友を引

き渡して貰おうか

これは命令だ…我等の力は  
よく知っている筈だな

火星行きの物資輸送船に擬  
装した戦艦の末路は…

賢明なる判断を我等は望む  
彼我の戦力差は歴然だ

紛い物のESP Uでは勝ち目は  
皆無だ…人類の諸君…

「馬鹿にしようて!!!!!!  
タコイカ宇宙人め!!!!!!」

「―では、さようなら  
タコ親父……、」

ハラリと資料が床に落ちて  
いく…老人の服だけが椅子  
に掛けられていた

「こちらは完了した、」

キバと彼女と彼を探し出して貰おうか、ファンガイア

ハイテート

「勿論だ…アルフエ、」

## 第二十九話

所変わって―稲敷アパート

優弥

「熱ココスタバ…？  
解るか…みんなは、」

ケータイを閉じてユカ達に  
尋ねる優弥に皆は首を振る

天

「うっ…あッ！！」

優弥

「お手上げたな、」

何か気付いたエフェクトを  
出す天を完全にスルーする  
優弥にユカ達は苦笑い

天

「ねえ！もしかー来たら  
解るだろ、放っとけ、」

天

「だからーそうだ！  
ココア飲むか？」

アスナ

「ーコ…コ…ア、  
何ですか？」

キバット

「僭越ながら俺様が貴女、  
天使アスナ嬢にご説明  
して差し上げましょう」

黒い瞳を右上に動かして次  
に左下に動かし考える彼女  
にキバットが胸？を張って  
ココアを懇切丁寧に説明し  
始め…アスナは正座をして

傾聴する

キバット

「ココアとは力カオの実を

粉末にして水、又は牛乳に溶かしお好みで砂糖を入れたスイートな飲み物さ」

アスナ

「―飲んでみたいです、」

優弥

「待つてろ、作るから」

悔しそうに睨む天を無視し冷蔵庫から牛乳を取り出し棚に置いてあるココアの瓶のフタを開けスプーンで掬いコップにそれぞれを入れてレンジでチン♪

優弥

「アスナにユカと羽生、熱いから気をつけるよ」

しっかり掻き混ぜたココアをアスナ達だけに渡す優弥

キバット

「俺様には？」

優弥

「自分で作れ！！！！！！」

天

「……優弥のバカ、——!?」

すっかりいじけた天の額に  
コツンと暖かい衝撃が

天

「優弥?」

あゝありがと〃〃」

キバットを除く五人で仲良  
くココアをフウフウ飲んで  
いると、あッ!と天が優  
弥を指して叫んだ

優弥

「なんだ?

どう——ブツぐはあ!」

優弥の頭上に制服のスカ―  
トを押さえたツインテツ娘  
菊菜が落ちてきた

天

「キクちゃんが優弥の頭に  
落ちてくる——よ!?!?」

菊菜

「わっぷ完了！ーて、  
あらら？ユウちゃんてば  
そんなに私のパンツが〃  
見たいのかな？〃〃」

菊菜のお尻に潰された優弥  
だがココアはなんとか死守

優弥

「予知したなら早く言え！！  
バカ猫が！！！！！」

菊菜の腋の下を持って退か  
し天を怒鳴る優弥に彼女は  
フンだとココアを嘍る

ドッス

躊躇わずに天に手刀を

喰らわす優弥

天

「なんで、どうして！？！？  
殴られるの！！！！！」

理解できない彼女に手刀を  
もう一度喰らわす優弥

菊菜

「あれ？知らない娘が…  
もしかして天ちゃんとの  
間に作っちゃたのね！？」

ゴンッ

鉄槌を菊菜の頭に落とした  
優弥は、ふと一切喋らない  
二人を探すと自分のベッド  
の上で仲良く手を繋いで寝  
息をたてるユカと羽生を見  
つけ毛布を掛けようと二人  
の下へ向かう

キバット

「俺様と一緒に甘〜い  
夢を見よーお”お”！？」

バシッとキバットの翼を掴  
み窓を開けて赤い月・火星  
に向けてブン投げると鍵を  
しっかり掛け、閉め出した

優弥

「よし、晩飯は天麩羅だ」

天

「え？なにそれ、」

菊菜

「やだな〜天ちゃん！！」

天ぷらだよ！！！！！！」

「空襲警報発令！！空襲警報  
発令！！」府民の住民の皆さ  
んは、最寄りのシェルター  
に避難して下さい！！繰り返し返  
します」空襲警報発令！！！！

ドンドンツツ

「お兄ちゃん！！大変だよ！？  
空襲だよ！！避難しなきゃ  
開けるよ！！！！！！」

鍵を開けて部屋にバタバタ  
とパジャマ姿で入ってきた  
線の細い少女は稲敷楓

キバツト

「おお〃楓ちゃん！！！！！！  
おはぎ美味かったぜ」

優弥

「よ！慌てるなよ、」

悠長な事を言ってる場合？  
早く早くと優弥達を急かす

ユカ

「う”う”ん……くああ」

羽生

「ふあう～あうあう～、」

周りの騒ぎにユカと羽生は  
漸く起きたのだ

天

「大丈夫！だいじょ～ぶ！！  
私の予知だとアパートに  
傷一つ付かないよ」

ポンと見る度に悲しくなる  
胸を叩き楓を安心させる天

楓

「そう、なんですか？  
良かった…天さん！！  
ありがとう””」

さあさあ！私キクが買っ  
てきた中華まんを食べよう！！  
と言いながらコンビ二袋を  
テーブルに置いた菊菜

楓

「あッママに  
知らせてきますね！」

再びバタバタと部屋を出て  
いく楓を見送るキバットを  
残して優弥はドアを施錠！！

キバット

「ああ！？テメエ優弥！！  
開けるコノヤロ！！！」

優弥

「黙れ、近所迷惑だ！！！」

ガルルとドア越しに唸り合  
う優弥とキバット

ユカ

「優弥さんて優しいのか  
怖いのか分からないね」

羽生

「なのですよあうあう」

アスナ

「……………」

そつとカーテンを開けて月に並ぶ第二の月・火星を見上げるアスナの未来を天は  
予知してみた

天

「――見れない！？こんな事…  
今までなかった、」

第二十九話 ココア・ホットチョコレート（後書き）

一方、魔王Kの城では

ハルヒ

「私の勝ち〜！！！！！！」

羽生

「あ”う”…負けたのです」

七美

「次は私だよ！

ハルヒお姉ちゃん！！」

オセロですか…ある意味で  
神様な三人の遊戯…貴重だ

A n o t h e r

「みんな〜！！！！！！」

お年玉配るから！！！！！！

集まれ〜！！！！！！」

みんな

「 やったー」

」

A n o t h e r！？太っ腹

次回仮面ライダーユカイド  
パパは裏切り者じゃない!!

次回も変身(シノブン)  
ユカイド

次回も読むですよ あう

第三十話 絶対予知・ライダー大戦 修正率90%? (前書き)

本編を…読むのです…

人の…子よ…

第三十話 絶対予知・ライダー大戦 修正率90%？

仮面ライダーユカイド

有り得ない事象に天はもう  
一度意識を集中してアスナ  
の未来を予知し始める

ザッーザザ…

一瞬の脳内ノイズに顔を顰  
める天の目の前に荒野が広  
がり…仮面の戦士達がある  
一点を目指して駆けていく

「覚悟したまへー！！」

《フルチャージ》

「二回目だ…大丈夫！！」

赤い戦士が体に雷を走らせ

「二度と…悲しませない」

頭の角を左右に開き金色の  
オーラを右足に溜める戦士

「面倒事は慣れてるさ、」

《エクシードチャージ》

「もう過去に逃げない！」

《キック》 《サンダー》

《ライトニングブラスト》

「オヤシロ様が言っていた  
のです！明日は自分で…  
切り開けと！！！！！！」

《1、2、3》

《ライダーキック》

「先生…見ていて下さい」

鬼の様な戦士が紫炎を  
右足に纏わせ

「私が助けてあげる!!」

《ファイナルベント》

「キバっちゃうぜ!!!!!!  
ウエイクアップ!!」

キバが黒き月を背負う

「……………」

《DEN-O KABUTO FAIZ

RYUKI BLADE HIBIKI

KIVA KUGA AGITO》

《FINAL KAMEM RIDE》



ごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい

どうして謝るの？

どうして許さないの？

ごめんなさい……

### 第三十話

キバ達の…必殺のキックが  
ディケイドを襲う

《FINAL ATTACK RIDE  
DE DE DE DECADE》

ディケイドの周りに顕現したオーラカードがキバ達を簡単に弾き飛ばす

優弥 あッッ！?!？

声にしたかった…けど

私の口からは息しか出ない

だから何度も心の中で叫ぶ

ゆうや…ユウヤ…優弥あ—

「……ゴパシザ……」

ディケイドが静かに宙に浮いて優弥達へカードを縦に並べる…たぶん最終宣告を優弥達に言っただ…

ほら…キバ達が転がってる  
みんな動かない…うッ…あ  
な…で…どうし…ーんだろ

「ディケイド…オオ、」

漸く口にしたのは憎む  
相手の名だった…

「……ヒ―デ…ザガー」

気付かれてしまった！？私は  
地にへたり込んで最後の時  
が刻まれていく音を感じて  
ガクガクと震え上がるだけ  
しか出来なかった

「やっと見つけた…！」

「貴女を止める…」

「俺が…いや…」

「俺達（私達）…  
二人が！！！！！！」

《FENRIR》

《FASOLD》

「変身ッ！！！！」

《FENRIR FASOLD》

吹き荒ぶ凍える風が晴れる

二人は一人の仮面の戦士に  
姿を変えて悠然としていた

「……………」

《FINAL ATTACK RIDE》

《DE DE DE DECADE》

『やれるか？…相棒！！』

「フツ相棒が一緒だからな  
負けないさ！！！！！！」

《FENRIR FASOLD》

《MAXIMUM DRIVE》

「ニーベルング  
ツヴァアイッツ」

三人の蹴りが激突して起きた…凄まじき閃光と爆風に

私は意識を手放さざる

終えなかつた

第三十話 絶対予知・ライダー大戦 修正率90%? (後書き)

これが…運命…なのか

…人の子よ…

### 第三十一話 スリープ・イントルーダー（前書き）

さうて！！今回の前後書きは

ノベラジもしくはラジノベ

放送スタジオ

みゆき

「予知された未来！？そして  
アスナさんの正体は一体！？  
アルフェの侵略が、ついに  
始まってしまいます。」

こなた

「流石ツみゆきさん！！  
かがみんとは大違いだね  
ねーつかさ？」

つかさ

「こなちゃんのくせにー！！  
お姉ちゃん頑張ったよ  
自信持つてね！！」

かがみ

「ありがとう」つかさ」  
そこまで言うなら次回予告

は…こなた…！あんたが…！  
やんなさい…！！！！！！」

こなた

「いいよ…！」

任せたまへ」

アナザちゃん

「うわー本編が私達の  
仕事を奪っていく…」

主人公

「ってノベラジリノベは  
作者が病んでる時しか  
更新してない？」

ミュウ

「フフ」先ずは前書きです  
あわわ！？！？よし」

### 第三十一話 スリープ・イントルーダー

仮面ライダーユキイド

「……………」？

——…「優弥ア！！」

天の瞳に映ったのは真っ白な壁…自分の身体に伸びたコードとよく解らない機械

「お目覚めですか？天」

「……………」で？…「柚香が？」

柚香

「寝ぼけてますか？  
寝過ぎですよ！」

微笑を浮かべて天の額を

小突く柚香

天

「痛！？——私は…？」

「アルフェの侵略が始まりました——天」

アル…フェ？

「貴女の絶対予知が、必要不可欠です」

天

「ねえ柚香…優弥は？」

「優弥くんは対ESP U 擬似  
虚数空間でアルフェと  
戦っていますよ」

擬似…きよすう空間？

柚香

「現実世界でアルフエと戦  
闘しても時間の無駄です、  
彼等は一つで有り―無数…  
虚数空間でなら演算処理能  
力を鈍らせる事ができます  
…ただ末端をいくら消去し  
ても無尽蔵に増殖してしま  
いますから時間稼ぎが関の  
山なんですけどね。」

天

「あ”あー大体解ったよ、  
うん！あはは…はは」

柚香

「本当に理解しましたか？  
天…疑問です。」

柚香うるさいと言いながら  
右手を摩る天

「ねえキミはーどうして、  
私と一緒に？…なんで  
あんなものを？」

### 第三十一話

「ああ急にな、いつ頃  
こっちに来れる？」

「あと少しです、  
待っていて下さいね！」

### 稲敷アパート

電話を切った優弥はベッド  
に寝かした天に顔を向ける

キバツト

「俺様の口づけで眠れる  
女神の目を覚まして  
あげましよう!!」

バシッ

菊菜

「空気を読もうね！  
キバツトちゃん、」

あと5センチのところで翼を  
掴まれたキバツト…惜しい

羽生

「あうあうあうあうあう  
あうあうあうあうあう」

楓

「あわあわあわあわあわ  
あわあわあわあわあわ」

ユカ

「まず落ち着こうか、  
二人とも…ね」

「空襲警報は解除されました！！ご協力ありがとうございました！繰り返します――」

優弥

「――まずは安心か、」

キバツト

「――いや、どうかな――！」

菊菜の手を離れパタパタ飛び回るキバツトは何かを感じ取ったらしく辺りを

警戒し始める

.....

ユカ

「なに……この感じ！？」

ユカもそわそわしだす

ドオオツガガアアアーン

楓

「キャアアアアア！?!?」

慌ててベランダに出た優弥  
の瞳に大きく抉れ黒煙を上  
げるアパートが映った

優弥

「チツ、警報は解除され…  
待て―予知が外れた!?!」

アスナ

「対ESP U…鳳仙花か、」

優弥の隣でアパートを砲撃  
したデザートカラーの戦車  
を見据えるアスナ

楓

「ッママー!!」

菊菜

「うわ!?!とと、」

菊菜を押し退け砲撃された  
下階のすぐ隣の自宅へ駆け

出した楓

.....

ユカ

「よく分からないけど、  
このままじゃダメだ!!」

キバット

「ユカ姫の言う通りだ!!」

優弥

「パイロットに  
聞けばいいか、」

キバット

「めがつさ!!」

気張ってくぜ！！！！  
ッガブ！！！！！！」

キバ

「ユカ！天達を頼むな」

ベランダから飛び降り鳳仙  
花に向かって行くキバ

《カメンライド

・ユカード》

菊菜

「おお！？凄いすごい！！！！  
でも…顔痛くない？」

変身の最後に顔にカードが  
刺さるのを見てユカを心配  
する菊菜…変身はスルー！？

ユカイド

「ん…はい！！」

ドオオッガガアーン

キバツト

「俺様の城が…優弥!」

優弥の家に黒い影が

突っ込んでいた

稲敷アパート・優弥宅

ユカイド

「く、クラフト!」

キュイイイイン…ブウン

クラフトのモノアイが

四人を捉える

『ジャッジャーン

これがマニトのESP...  
ばッ化け物か!?!?』

クラフトから全く緊張感が  
微塵もない声が聞こえてき  
て拍子抜けするユカイド達

『あッ朱実!?!どこ触つて  
—うるさい撃つわよ!?!』

『そこは女の子はエレガ—  
バッ—う撃った!?!?』

『当たらなければどうと—  
バンツドツ—ひえ!?!』

『夏蓮...あんたの頭は!!  
カボチャプリンかあ!!  
えええええッ!?!?!』

『二度ならず三度も撃つた  
お父さんに...ゴブ—

シーーーーー

菊菜

「やばくない？」

羽生

「良い子には、

見せられないのです!？」

プシュッー

クラフトの胸にあるハッチ

が開き中から……

夏蓮

「海自の魚雷海豹こと……!

藤岡夏蓮一等海曹!!!!!!

参上でッありま……ケホ」

朱実

「同じく大濠朱実一等海曹

……はあ、ええと皆さん

ご無事ですか？」

若干青ざめた夏蓮と心底疲

れた様子の朱実が出てきた

三人

「ご、ご無事です！！」

三人は両手を上げて返事をする――理由は朱実の手に未だ硝煙が出ているグロツク17が握られているからだ！！

稲敷アパート前

キバット

「フハハハッアッハハ！！！！  
たかがブリキ玩具風情が  
このキバットバット様に  
勝てるとても？フハハハ  
実に愚かしーアッ痛！？」

ダークネスムーンブレイク  
で砲芯がひしゃげた鳳仙花  
の周りを飛び回るキバット  
をキバが手刀で叩き落とす

キバ

「痛ッてー！！！！くおら！！  
何しやがる！！！！！！」

キバ

「何と無く……」

噛み付こうとするキバット  
をペしペし払うキバ… 実に

仲良しだ

ヒュルルルーゴシャアア

鳳仙花は見るも無惨に  
ぺっしょんこ 巨大な  
機械竜がその上に立つ

イクサ

「優弥くん！！  
遅れてすみません、」

機械竜・パワードイクサー  
から、イクサが降りてきた

キバ・キバツト

「ぱ、パイロットが…」

イクサ

「心配は必要なしです!!」

アルフェの超長距離

遠隔操作ですから。」

事も無げに話すイクサこと  
柚香に…かなり引いちゃう  
キバとキバツト…わかるよ

稲敷アパート・優弥宅

夏蓮

「あっちも終わったし帰ろ

夢見る空にさ!!」

朱実

「四人も乗らないわよ?」

キバとイクサが合流したの  
を見届け帰る為にクラフト

へ乗り込む夏蓮に質問した  
朱実に対する返答は？

夏蓮

「―忘れてた、テヘ」

バンツ―チュインチュン

既に容赦なく発砲する朱実  
弾丸はクラフトの装甲に当  
たり火花を散らして跳ねる

夏蓮

「跳弾してる！？危ないから  
私が悪かったから！！！！」

跳弾で掠めた頬から血が垂  
れて夏蓮は漸く反省した！！

ユカイド

「あのく足が無いなら  
用意しますよ、」

《カメンライド

・ファイズ》

《アタックライド  
・ジェットスライガー》

こうして冒頭に戻る訳です

アルフェ対策本部

夢見る空

柚香

「あッ優弥くん？」

柚香が天の部屋から出ると  
優弥が目の前に立っていた

柚香

「天ならたった今、  
目を覚ましましたよ！」

優弥

「アスナを知らないか、」

柚香

「いえ…知りません、  
彼女は恐らくアルフェの

エージェントかと…」

優弥

「天の予知が外れた…

彼は死んだのか？」

これは私の考えですがと前置きして柚香は話し始める

柚香

「彼は生きています、天の予知は見たいと思った事柄しか見れませんか…つまり空襲でアパートが被害を受けるかを予知した訳で彼等…アルフェに因る襲撃は彼女の―彼の予知外だったと私は思います、如何ですか」

優弥

「―そうか、」

予知が外れてないにも拘わらず俯く優弥を柚香は不思議そうに見詰める

柚香

「優：弥くん？―！、  
侵入者です！！」

優弥に手を伸ばそうとした  
柚香は動きを止める僅かに  
近くで機械が高速で作動を  
し始めた音が聞こえる

優弥

「マニト…アルフェか？」

柚香

「いえ―お友達です。」

薄く微笑を浮かべた柚香は  
とても嬉しそうだ

柚香

「迎えに行つて下さい！  
そして真実を彼女に  
伝えましょう…。」

優弥

「機密事項なんだろう？」

柚香は小首を傾げると

世界が終ってしまつのに…

機密も秘密も必要ですか？

優弥くんは面白いですね

### 第三十一話 スリープ・イントルーダー（後書き）

次回仮面ライダーユカイド

こなた

「出たなジャック星人！！

ゲキレツ！！フレアー！！！！！！

そんなパパ！？…触覚しか

分らないんだ…だから

ちゃんぼんは作れない…

ウオオオアアオオー！！

コック兼パイロットとは

俺だアアアアー！！！！」

かがみ

「ツツコミも怒る気も

失せたわ…帰ろう」

こなた

「やだな～冗談だよ！

かつがゝみんな！！！！！！」

かがみ

「おばあちゃんが言ってた  
空気読めない子は天才か  
バカ野郎だと」

こなた

「じゃあ私は、  
天さーゴツンーぐわ!？」

かがみ

「最初に言っておく!!--!!  
殴るわよ!!--!!!--!!」

こなた

「本編ならかがみも  
痛いのに!!--!!!--!!」

らきぬこ

「にゃも〜ん」

次回も読むですよ あう

### 第三十二話 マーカー・テイクオフ（前書き）

さあて今回の前後書きは？

かがみ

「また私達か？」

こなた

「仕方ないよ」《禁則事項》だから」

つかさ

「《禁則事項》でメインだった私達だから今回の前書き担当になったんだよね」

かがみ

「禁則事項禁則事項って訳が解らん！！」

みゆき

「かがみさん…取り敢えず始めましょう？」

かがみ

「みゆきが言うなら……だけでもさ、私達って前後書きレギュラー化してない？」

みゆき

「確かに私以外はよく出てますね〜ふふ、フッフ」

かがみ

「みゆき！？ 大丈夫よ」 これからは出番が増える筈よ！……  
たぶん」

こなた

「ん~~~~~ア~~~~~む~~~~~

~~~~~

イ~~~~~ゆ~~~~~ウ~~~~~

~~~~~」

つかさ

「こなちゃん？」

みゆき

「どうされたのでしょうか？」

かがみ

「放っておきなさい、後書きでは前後書きで登場してない人達が出るから楽しみにしときなさい！！」

梨花

「私も一応レギュラーよ」



### 第三十二話 マーカー・テイクオフ

「お父さん、お父さんは……私達を護ってくれてるんだよね？」

「当たり前だよ、詩忍」

「じゃあ何で東京都に核を落としたの？」

「貴女の父はマニトの工作員で『マーカー』でした」

「だから施設から離れる事が出来なかったのです」

「彼は私達にとって裏切り者……が表向きですが、実際はアルフエの目を『』から逸らせる為に仕掛けたミスリード、小さな犠牲が出てしまいました  
が」

「小さな犠牲？ 小さな」

「犠牲無くして平和は保てません」

「大義名分です……くそ喰らえですね」

仮面ライダーユカイド

『我々はアルフェ、人類が戦いを選ぶと言っならば……先ずは東京だ』

「でかいね〜羽生ちゃん」

「沢山の空飛ぶ馬が〜あうあうあう!?!?」

擬似東京湾にて羽生のボケに気付く事なくユカはドライバーにカードを挿入

《K A M E M R I D E ユカイド》

「宇宙戦艦か、飛べないし」

ナラ、コレヲツカエ

《アタック R I D E Q U I C K シルバー》

「それで……どうなるの？」

イキタイバシヨニ ジブンガドノヨウニイクカラ ノゾメバ イケル

「へえ……わあ！？ て、あれ？」

上空数千フィートを飛ぶバームクーヘン型の戦艦に瞬間移動したユカイド

ツギハ、コレダ

《ATTACK ライド KIBAT》

「ここ何処だ！？ 優弥……！！！！！」

灰色のカーテンから出てきたキバットを掴み響鬼のカードをバックルに挿入

《KAMEM RIDE ヒビキ》

「はああああああ……タッア……！！」

《アタックライド KIBATSUDUMI》

「キバット、ちよこつと我慢してね」

キバットが音撃鼓に超絶変形してユカイドは音撃棒を構える

「はぁぁぁ……牙哭の型!!!!!!」

アルフェの戦艦に音撃を叩き込む

「痛い痛いユカ姫痛いつてえ!?!?!」

喚くキバットだが戦艦は機首が音撃で吹き飛ぶ

「ありがとう、優弥さんの所へ」

「イヤアアアアア!!!!!!」

地上にキバットを投げ飛ばすと音撃棒・鋼炎から清めの刃を出して  
戦艦の動力炉を貫いた

『優弥さんとユカさんはアルフェの注意を引いて下さい』

「発射は可能か？」

『難しいです、天がごねてまして』

「だろうな、また後で」

ケータイを閉じると落ちてきたキバットを掴む

「いくぞ？」

「扱いが酷いぞ〜ガブリ」

キバに変身して胸の鎖を解き放ち真っ赤な翼を羽撃かせ何隻もの戦艦の1つに飛び掛かる

「急展開なので……何かな〜あッ——う〜!？」

灰色のカーテンを覗き込んだ羽生は吸い込まれてしまう

「此処なら安全——この世界も奴らの魔の手が!？」

「何なんですか!？ 戦艦に……キバまで!？」

羽生が吸い込まれたカーテンから現れた男女

《ATTACK RIDE QUICK SILVER》

「どうして人が!？ 危険だから逃げてください」

「士くん!？」

「この世界にもディケイドが……」

「2人は僕に任せて貰おう」

上空から2人を見付けて降りてきたユカイドの肩に手を置いたのは  
ディエンド

「保坂さんじゃ……ないですね？」

「僕は泥棒さ、いくよ夏メロンに鳴滝」

ディエンドは2人を連れて灰色のカーテンの奥に消えた

### 第三十二話

「あうあう……怪人だらけなのですよー！？！？」

「こつちだ！」

「あうう！？ 僕は美味しく無いから放すのですー！」

羽生は瓦礫の影に引きずり込まれる

「角があるから怪人かと思っ たが……違っ みたいだな」

「ば僕は羽生なのです！？ 偉いオヤシロ様なのですよ、あう」

「俺は……破壊者だ」

吐き捨てる様に言っ た男を覗き込む羽生

「あう？ そうは見えないのですよ」

「ディケイドを知ってるか？」

「勿論、一緒に旅をしてるのですよ！ あッ正確にはユカイドなのです」

「ディケイド……リッベダ」

カブトムシの様なグロンギが2人に向かってくる

「ゆっくり話ぐらいさせろ！ 変身！！」

《K A M E M R I D E D E C A D E》

男はディケイドに変身してグロンギに立ち向かう

「ビガラバゾ、ゴセグダゴグ」

「グギグギうつせえな!!」

《FINAL ATTACK RIDE DE DE DE DE  
ECADE》

10枚のオーラカードに弾き飛ばされたグロンギにディメンションキックを胸に撃ち込む

「ラダ、ゾググラギザンクウガ」

グロンギの体に電気が走りディケイドを弾き返す

「ガグガゴザバ……だが!!」

《FORM RIDE HIBIKI KURENAI》

《FINAL ATTACK RIDE HII HII HII H  
IBIKI》

「ガバギ……ヒビキ」

「ハアアアアア……爆裂真紅の型ッ!!!!!!」

響鬼 紅に変身し音撃でグロンギに息吐く暇を与えずに圧倒する

「!? 凄いです、いけえなのです!!!!!!」

「——リツヤアア!!!!」

「ツギパ……ババサグ」

音撃を喰らい蹠踉めくグロンギの後ろにカーテンが現れグロンギは  
その中に消えていく

「フン、ゴ程度で俺に勝てるか!!」

「何故、この世界は怪人が溢れてるのですか?」

羽生は変身を解いた男に近付いて尋ねる

「怪人に因る世界の征服だ……俺が全ての怪人を倒す」

「あう……ユカも戦ってるのですよ、1人じゃないのです」

「大体解った、行け角っ娘」

灰色のカーテンが擬似東京を映す

「改めて僕は羽生」

「門矢 士だ、覚えておけ!!」

羽生がカーテンの奥に消えていく

「?.....これは」

カーテンが消える直前に灰色のカードが風に乗って土の手に収まった

擬似東京 夢見る空・廊下

「やだ、絶対に予知しない!!」

「天ちゃん.....」

「困ります、絶対予知が無ければ命中精度が達しません」

逃げる天を柚香と菊菜が追い掛ける

「テンテンツ逃がさないよ!!」

「に逃がしません!!」

茶髪ポニーテールの詩忍と楓が通せん坊!!

「く、しまった!？」

「ムッフ天ちゃん覚悟を!!」

ニマニマした夏蓮が天に覆い被さった

「天を確保、私は優弥くん達の助成に行きますね」

朱実にそう告げてパウードイクサー保管庫に柚香は向う

「あッ柚香、待って!」

柚香を呼び止めた詩忍は

「お父さんの事を教えてくれてありがとう」

「辛いお話でしたね」

「でも、お父さんはお父さんだったから」

「軍が公表する事は決してありませんが、詩忍さんに伝えて良かったです」

「それじゃ頑張つて！」

ビツと親指を突き立てた詩忍に「はい」と返事をして柚香は今度こそ保管庫に向かった

「天をシステムに繋げるわよ」

「ラジャー!!」

「嫌だああ!!!!!!」

「キクリン、ワープ!!」

「了解、わぷ」

菊菜は戻った詩忍と4人を自分と一緒にワープさせた

パワードイクサー保管庫

「アレは出来ましたか？」

「調整が途中で……」

「なら使いながら調整しますから付けちゃって下さい」

《RE A D Y F I S T O N》

《I X A W I N G S E T U P》

柚香はイクサに変身して外部装着式フライトユニット『IX A W I N G』を背中に取り付ける

「では、行ってきます」

《I X A W I N G T A K E O F F》

研究員に敬礼してイクサは擬似東京湾に飛んでいった



### 第三十二話 マーカー・テイクオフ（後書き）

後書き！！ みんな出番だよ

聡莉

「お、初でしゅ!?」

都

「落ち着け、お邪魔します」

詩音

「私と沙都子も出させて貰います!」

沙都子

「お邪魔させて貰いますですわ!!をゝほほ」

レナ

「レナも居るんだよ、だよ」

飛鳥

「うちも、ええ?」

ブリーシア

「うむ、私も出るぞ!」

華鈴

「拙者もだ!!」

テレサ

「みなさん結構出てなかったんですね」

梨花

「もう居ないわよね？」

羽生

「ええと出せない人が1名あうあう」

ユカ

「もう1人居るよ」

シャリー・パルティ

「私達も忘れないで（でし）」

あやの

「私だけ出番なんてみんなに悪いな」

ユカ

「今度こそ全員だよな？」

梨花

「そつね、恐らく」

羽生

「いっぱい居たのです!？」

春香に魅音、奏に　つかさ、こなたと紀梨乃が軽食や菓子等を用意してくれたからご自由に

黒井先生

「……………グス」

悪いけど黒井先生…ゴメン

黒井先生

「ええんや、子供達で楽しみ……」

次回仮面ライダーユカイド予告

「予知しないって言うてるでしょ!?!」

「このまま持久戦になれば人類の敗北です」

「責任を取ってやる!!!」

「超長距離わ〜ぶ」

次回も変身（ASTERISK）

ユカイド

次回も読むですよ あう

第三十三話 あなたと一緒に・次曲へ キバ編 完（前書き）

前後書き劇場Aパート

『教えてッ 柚香先生ー！！！！』

柚香

「皆さん、ご機嫌よう 熊野柚香です」

梨花

「……………は羽生、これは一体何なの！？」

羽生

「梨花は、いつレギュラーになったのですか？ 僕が知るかぎり『彼女の箱編 前書き』以外は片手で数える程度しか登場してないのです」

梨花

「煩いわね！！ キムチ食べるわよ！！」

羽生

「ひいひい！？ あ”うあ”う」

柚香

「ユーザネーム、柚香大好きっ子さんから「やらせね」柚香大好きっ子さんからのお便りです」

羽生

「ぷ、ふ」 無視されてるのです。 あうあう」

がぶり……ジューブ……ボタボタ

羽生

「ごふ！？ かりゃハ……ひ——ガク」

あらあら梨花ちゃん、白菜キムチを丸ごと齧り付くことはないのに。

柚香

「ああ！？ 時間みたいです。Bパートでお会いしましょう」

梨花

「出番無し組は前回で終りなの？」

### 第三十三話 あなたと一緒に・次曲へ キバ編 完

びしょびしょの制服姿で玄関に立つ天。

「……………」

「何時まで突っ立てる気だ？」

優弥のきつい言い方に冷たい体をビクツと震わせた天は優弥を睨む。

「女の子が風邪引くかもしれないんだよ？」

「ああ、だから帰れ」

「家まで遠いし、冬だよ！」

「なら走って帰るんだな」

天を玄関から追い出してドアを閉める。……即、咽び泣きが聴こえてきた。

「やめろ！ ご近所迷惑だ」

「じゃあ、お風呂と洗濯機貸して！！」

優弥は苛つきながらも夜中に玄関前で泣かれたら堪らないと天を部

屋に招き入れ、風呂の用意する。

「綾瀬……借りる、ね」

申し訳なさに頭を下げる天にさっさとしろと優弥は手を縦に振った。

「……胸は無いが可愛い娘だなあ〃〃」

「アングロス、出てけ!!」

「断る、耐性が有る人間は中々見付けられないからな」

テーブルの上に座った奇妙な蝙蝠、キバットがニヤニヤと優弥の右腕を見ている。

「ESPはそこらに溢れてるだろ!」

「優弥のESPは特別なのさ! 後、彼女も特別みたいだな」

「朝霞もESPか?」

「自殺の原因はESPだな。大方、軍に徴兵されるのが余程嫌だったんだろうな」

「正解、蝙蝠さん」

バスタオルを巻いた天が5分も立たずに風呂から出てきて、優弥とキバットの話に答えた。

「早すぎだろ！？　後、コイツを不思議がれよ！！」

驚きながら人差し指でキバットの頭を突つつく優弥。

「話せる蝙蝠なんですよ？」

「は？」

「あれ？　私、変な事を言った！？」

「確か常に最下位だったなテスト」

「な何！？　今、関係ないでしょ！！」

周知の事実とは言え、面と向かって言われて天は恥ずかしさに赤くなる。

「徴兵ぐらいで自殺するか？」

「帰って来れないから、二度と永遠に——だから」

自嘲気味に天は答えて俯く。

「朝霞嬢、貴女的能力は？」

「えと予知、それも絶対の……」

「自分の未来を見た訳だ」

こくんと頷いた天。そんな彼女に優弥は疑いの眼差しを向ける。

「信じてない？」

「いや俺にもESPは有るし、ただ絶対って断言は信じない」

「優弥は頭が硬いからな。だから万年2位なのさ」

「万年は余計だ！」

バカにした感じのキバツを掴み、ソファアのクッションにぶん投げた。

「バカ蝙蝠は無視して、帰れよ朝霞」

「え！？ 帰るの私？」

「いや風呂と洗濯機貸すだけだろ、制服も乾いたしな」

いつの間にか乾燥機に入っていた制服を優弥は取り出して天に渡す。

「あの！ その、此处に置いてくれない？」

「へいッ喜んでえい」

嬉々と天の周りをアクロバット飛行するキバットを  
優弥  
がティッシュ箱で叩き落とした。

「貴様ああ！！ 俺は蠅か蠅か？ ハエかああ！？！？」

「さすがにハエをティッシュ箱では捉えれないな。虻や蜂辺りなら  
楽勝だ」

「んなこと聞いてねえよ！？ 俺様の扱いが酷いつて話なんだよ！  
！！」

「私、家に遺書を置いてきたから、帰る場所が無いんだよね」

「…………だからって親が心配してるだろ？」

キバットを無視して話は続く。

「親は15年前の核で、おばあちゃんと暮らしてたけど先月…………」

「親戚は？」

「私が徴兵されるの知ってるんだよ、遠慮しあうのは嫌！」

「けど、俺が置いてやる義理は無いな」

「理由なら——有るよ」

「はあ？ それは何だ」

「私を死なせてくれなかった責任がある！！ 私を優弥の家に住まわせなさい！！！」

乾いた制服を握り締め優弥を射抜く様に、天は見詰め続ける。

「こじつけ甚だしいが、一理ある。年が明けるまでなら住んでもいいぞ」

「——ほんと？！」

「大家の雪枝さんが許可するならな」

嬉しさのあまり万歳した所為でバスタオルがはらりと落ちた。

「落ちたぞ、制服着ろよ」

「……………なんで冷静なの？」

「だって——いや何でもない」

優弥の視線が一瞬、天の胸に向いたかと思うと素早く逸らされる。

「どうせ貧乳よ！！ A - よ！！！！ ばかああああー！！！！！！」

その後すぐに、大声に驚いて駆け込んできた雪枝さんと楓ちゃんに事情説明して、ふたりと1匹の共同生活が始まったんだよね。

仮面ライダーユカイド

第三十三話

夢見る空の廊下を引き摺られていく天は現実逃避に優弥との出会いの日を思い返していた。

ほんとこじつけ甚だしいな、運河を越える橋から下のブロックに飛び降りた私を助けてくれたのに責任とかさ。——それから始まった賭けは私の全勝だったよね。

「今日は何で賭けるの？」

「夕食が何か予知しろ、当たったらチョコアイスだ」

優弥の家にお世話になってから朝に必ず私の絶対予知を覆す勝負を挑まれるようになり、最近は予知が当たれば色々私の軽い要望を聞いてくれないと予知しないようにした。絶対なのに優弥って本当にしつこいんだから。

「えっと……おはぎないしそれに準ずる物」

「つまり、お彼岸の牡丹餅、夜船と冬窓も含むのか？」

「うん。作った本人がおはぎって言うけど、一応ね」

逃げ道、言い訳をできないように塞ぐ。信頼はしてるから「今は冬だからお萩じゃなくて冬窓だ！ 予知は外れたな」なんて優弥はそれこそ絶対に言わないと私は知ってるけど、悔しがる優弥って可愛いから。

「お兄ちゃん！ いっぱいおはぎ作ったからお裾分けだよ」

楓ちゃんが両手で支えながら頭に乘せて持つて来た大皿に、ぱっと見50個のおはぎがあった時は私も軽く引いたね。昼夕食とおはぎに決定した瞬間だった。

通算99回目は『私が頼んだアイスを渡せない』で帰りが遅いから迎えに行くとユカちゃんと羽生ちゃん、アスナちゃんが居たんだっけ。

『ID、指紋、網膜、各毛細血管パターン承認。入室を許可します』  
朱実が端末に左手を添えリーダーにカードを挿入。監視カメラが周りの人間の顔認証して電子音声と共にドアが開いた。

「さあ菊菜ちゃんと天ちゃんを切り札に取り付けて！」

夏蓮の号令以前に菊菜はわづぶで切り札とシンクロ済み。

いゝやゝだあ！！ 放して！！」

「仕方ない。菊菜さん、お願い」

「はいはい、わづぶ」

切り札のシートにワープさせられた天は手足を切り札に拘束され大人しくなった。

「ふん、予知しなければ一緒よ」

「往生際悪いね〜テンテン」

「そう、人類は往生際が悪い」

「やはり来たわね、アルフェ」

グロック１７の銃口を現れたアスナの額に向ける朱実。

「良い銃だな」

「褒めてくれてありがッ——熱!？」

床に落としたグロック１７が熱で溶けていく。

「へえ火を操るアングロスか」

「攻撃型のESP能力者は私だけだ。降伏しろ人類」

「アスナちゃん!？ 本当にアルフェなの？」

「朝霞 天、貴女のアングロスも回収対象だ」

夏蓮に朱実もESP能力者相手には手を出せず、アスナが向かう天の目の前まで妨げるものは無かった。

「朝霞 天、貴女の予知に僅かに干渉した。私の未来ではなく別の未来が見えた筈だ」

「だから、アスナちゃんが居なかったのか」

「冷静だな、自分の最期を予知したのか？」

首を横に振り天は微笑む。

「？ 理解できない」

「アスナちゃんと私達は一緒に暮らすって予知したよね。その時も干渉したの？」

「いや、回収対象の事象改変力は把握している。あの場合の予知では干渉する必要は無かった」

天は「やっぱり」と笑う

「あの時、ケーキを囲んでた。アスナちゃんとね」

「それが……なんだ？」

「ローソクを1本刺してアスナちゃんが吹き消したんだよ」

「それがどうした！！」

苛々しだしたアスナは天の髪を掴み引つ張る。

「ッ……誕生日、アスナちゃんの誕生日を優弥とユカちゃんに羽生ちゃんと祝う未来を見たんだ」

「私に誕生日は存在しない」

「アスナちゃんの誕生日はクリスマスイブだよ」

「それは……私と天が接触した日だ」

明らかにアスナは動揺を見せ始めた。

「まだ解らない？ 私達は……あッ!？」

「どうした天？」

「——アスナはね、私達と1年間をこれから過ごすんだよ」

「有り得ない!？ 天は、人類は我々アルフェに因って——絶対予知の矛盾だ!？」

掴んでいた天の髪を放し、アスナは頭を振りながら後退る

『矛盾ではありませんよ』

天達がいる部屋、白一色の巨大ホール、下部は所狭しと設置されたPCとサーバーが延々と演算を続ける。天井ハッチは開かれ火星に向けられた『切り札』見た目レールガンの横のこれまた巨大モニターにイクサが映っていた

『彼の予知は絶対です。天も気付きましたね?』

「うん、私の居場所を護る為に予知するよ」

『これで証明されるな、絶対予知は有り得ない』

「そうみたいだね、たった1勝だけど私の負け。望みは何かな？」

『考えてなかった、終るまでに考えとくよ』

キバ、優弥と会話を終えて天はアスナをじつと見詰める。

「絶対予知を絶対予知にするには、アスナちゃんは私みたいにバカじゃないから、もう解ってるよね？」

「回収対象は絶対予知能力を持つアングロス。今、回収すれば予知に誤りが生じる、私はアルフェだ……天は受け入れるのか？」

「私はアスナちゃんと友達だっと思ってたけど、アスナちゃんは違った？」

「？ わからない」

「簡単だ、アルフェではなく、きみはアスナなのだから」

数十匹の蝙蝠が空から飛んできてファンガイアに変身してアスナの横に降り立った。

「これは裏切りだ、ハイテート」

「アスナはアスナとして生きればいい。アルフェに裏切りは存在しない」

「私はアスナ？」

「彼女から名前を貰った時から声は聴こえなくなった筈だ」

アスナは下を向いて黙り込む。

「夢見る空の諸君、火星の特異点を消滅させる気だな？」

「邪魔をするつもり？」

そう発言した夏蓮も朱実も余裕を見せている。

「いや、特異点に鎮座している旗艦を先に落とすべきだと伝えに来たまでだ」

「やっぱり？ ワープじゃダメ？」

「事象改変力中和システムを搭載している。距離を考えれば中和、無効化される」

『なら私達が打って付けですね』

『柚香が平気でも、俺とユカは大丈夫か？』

『あッ酸素が問題でしたね』

『それなら解決だよ！』

モニターに映ったユカイドの手に3枚のカードがあった。

「優弥さん、驚かないでね」

アルフェ戦艦の甲板にてユカイドはバツクルにカードを挿入。

# 《FINAL FORM RID KIVA》

ユカイドがキバの肩を叩くと運命の鎖と拘束具が解き放たれ、半透明の海月の様なアングロスがキバを包み込み、虹色の鎧と空色の3対の翼を背に生やした姿に変身した。

「柚香さんもびっくりしないでね」

# 《FINAL ATTACK RIDE KIVA》

続いてイクサの肩に触れ、柚香がイクサと分離、アーマーがカリバ  
ーイクサに変形。

「イクサウイングまで一緒に変形しちゃいますか!？」

「ちよつくら世界を救いに行ってくる」

『あ、優ちゃん！ 飛んでいくと時間が掛かるから、超長距離わぶ』

カリバーイクサを持って翼を広げたキバ\*を菊菜は火星の特異点前方にワープさせた。

「さて、優弥くんが旗艦を落とすと同時に空間遮断砲を発射させた  
いから天ちゃんに菊菜ちゃん、頑張つてね」

「夏蓮、その『空間遮断砲』って？」

「要はドーンと撃つて『向こう』から来るアルフエが地球への玄関  
にしている特異点を、摩訶不思議アングロスちゃんパワー搭載ESP  
Uのレールガンで閉じちゃいましょうって訳だから！ 『空間遮  
断砲』」

簡潔に纏めた夏蓮はノリノリでモニターを見ている。

レールガン型ESP U『群胡蝶』地球から火星まで約38万440  
0?、この距離から正確に目標の『特異点』を撃ち抜くには、天の  
絶対予知に菊菜の空間転移能力をシンクロさせた状態でなければ不  
可能。

天の予知によって導き出された式をPCが演算、菊菜の空間転移能力で障害を発射時に排除する計画。

『チャージ完了、誤差修正、射線上に障害あり、ユカちゃん、優弥くん……お願い』

夏蓮の通信を受けてユカイドは最後のカードをバツクルに挿入。

「お家に帰ってください」

《FINAL FINITISH RIDE KIVA》

《CALIBUR I X A R I Z E

U P》

火星の特異点前方にワープしたキバ＊がカリバーイクサの切っ先を旗艦に向けた。

「ウェイク、アップ……アスタリスク!!!!!!」

キバットが叫ぶとキバ＊の後ろに満月が浮かび上がる。

『我々は奇数であり偶数、そして理の破壊者だ。ここでゲートを閉じても再び人類の前に現れよう』

「その時は俺達と『友達』で返り討ちにしてやるさ」

一旦、カリバークサを腰元で構え下段から上段へ魔皇力と事象改変力の融合斬撃波を放ちアルフェ旗艦を一刀のもとに斬り捨て、射線上から飛び退くと同時に『群胡蝶』からの砲撃が歪なステンドグラスの様な『特異点』を消し去った。

「ユカ、時間が無いのです!?!」

「羽生ちゃん!?! もう次の世界に行くの?」

「羽生さん!?! ユカさんも待つ——て……………」

羽生が既に光り始めた世渡りの鏡を持って、高層ビルの屋上から火星を見上げていたユカに飛び付いた瞬間、ふたりは次の世界に消えていく。

鏡には赤い石と天使の様な翼が映っていた。

第三十三話 あなたと一緒に・次曲へ キバ編 完（後書き）

前後書き劇場Bパート

『教えてッ 柚香先生ー！！！！』

柚香

「また、お会いしましたね けど予告の時間みたいです」

こなた

「むぐむぐ……ハー」

みくる

「素敵な香りです」

ハルヒ

「いいじゃない！？ あんた」

有希

「「「にゃん」」」

梨花

「……………また何よ、これ？」

次回仮面ライダーユカイド

「グロンギ！？　クウガの世界だね」

「あつ？　挟み撃ちなのですよ！？」

「悪いな？　クウガじゃなくて！！　変身」

「ヨミだと言っておるうに！！」

「バゼ、ゲゲルグダセダ？」

「２回目の今日だからだ！」

次回も変身（邪ロリ）！！！！

ユカイド

次回も読むですよ　あう

### 第三十四話 交錯（前書き）

前後書き劇場Aパート

『教えてッ 柚香先生ー！！！！』

柚香

「皆さん、ご機嫌よう      今回から天と一緒に送りします」

天

「どうも、朝霞    天です」

『どうして地球から火星までの距離が約38万4400？なの？』

天

「確か地球から月の距離が……そうだったよね？」

柚香

「はい、その通りです      しっかり予習したみたいですね」

天

「まあね」    当然だよ。柚香、続けて」

柚香

「先ず、アルフェはアンゲロスを倒そうと火星の衛星『フォボス』

を火星に落としました。しかしアングロスは衝突を防ぎ、尚かつ衝突を擬装して地球に向かったのです。人類に助けを求める為に」

天

「もしかして、事象改変力かな？」

柚香

「正解ですよ。その事象改変力でアングロスは、火星を地球の衛星軌道に乗せました。結果的に地球の衛星である、月と大体同じ距離となった訳です。解りましたか？」

天

「柚香は教え方が上手だから、よく解ったよ」

柚香

「天が理解できたなら、皆さんも解りましたよね？」

天

「それ酷いよ、柚香あー!!」

柚香

「? 優弥くんが言っていたので……ごめんなさい」

にゃんこ天

「優弥くー!! フシャー!!!!!!!!!!」

柚香

「で、では」 Bパートに続きますね!」



## 第三十四話 交錯

仮面ライダーユカイド

### 第三十四話

世界を越えると同時に、ユカはコンクリートの斜面を転がり落ちた。

「痛たゝ……羽生ちゃん？ 突然すぎるよゝ！？」

擦り剥いた肘を押さえながら痛む体を起こしたユカは今回、訪れた世界を把握たする為に辺りを見回してみる。

「坂だね、寒いなゝ冬なのかな？」

「ユカ！？ 囲まれたのです！！ 挟み撃ちなのですよ！！」

ひゅんと斜面の上から降りてきた羽生の言葉通り、3体の怪人がふたりを取り囲んだ。

「グロンギ！？ クウガの世界だね、変身！！」

《K A M E M R I D E Y U K A I D》

状況と世界を即座に理解してユカイドに変身、バツクルに次のカードを挿入。

《K A M E M    R I D E    K I V A》

「キバって、いくよ!!」

キバにカメンライドして目の前の蜘蛛に似たグロンギを蹴り飛ばし、敵の陣を崩す。

「グガダゾバゲダ!?    ザラスゼクウガ」

「3体1は卑怯じゃ——!    わぁ!?!」

横から鋭い突きを受けてユカイドは倒された。

「ズ・ガルメ・レダ、クウガ?」

緑色のカメレオンの様なグロンギが片手を上げながら姿を一瞬で消すと直ぐさま鋭く長い赤い何かが槍の如くキバの鎧を砕く。

「く、コレだ!」

《F O R M    R I D E    K I V A    G A R U L U》

キバの目が蒼くなり狼を模した様な剣、ガルルセイバーでズ・ガルメ・レの赤い何かを叩き斬った——が、蜂に似たグロンギが飛び掛かりガルルセイバーを弾き落とされてしまう。

「もう！ 取り敢えず1体目！！」

《FORM RIDE KIVA KIVA》《FINISH  
RIDE KIVA》

キバフォームに戻ると右足の鎖を解き放ち、飛び上がる。最初に蹴り飛ばした蜘蛛に似たグロンギに『ダークネスムーンブレイク』を喰らわせるとキバの紋章が体に浮かび上がり爆散した。

「逃がさないよ！ ハチさんにカメレオンさん」

《FORM RIDE FAIZ AXEL》《FINISH  
RIDE FAIZ》

直接アクセルフォームに変身して右足にポインター、右手にデジタルカメラ型パンチングユニット・ファイズショットを装着。背を向けたズ・ガルメ・レにファイズショットによる必殺技『グランインパクト』を放ち、飛び去ろうとする蜂に似たグロンギをポインターのビームで多重ロックオン。『アクセル クリムゾン スマッシュ』で複数個のφを刻み、フォトンブラッドの赤い光りと共に背後に抜ける。

《3……2……1、TIME OUT》《KAMEM OUT F  
AIZ》

ファイズからユカイドに戻ると蜂に似たグロンギの体にφのマーク

が幾つも浮かび上がり灰になって崩れ落ちた。

「ダベロボレ……」

「言ってくれるね、カメレオンさん」

# 《K A M E M R I D E B L A D E》

必殺技を耐えきったズ・ガルメ・レに対してユカイドはブレイドに変身する。

「封印つと」

ブッカーから何も描かれていないカードを取り出し、ズ・ガルメ・レに向けるとカメレオンの様なマークが浮かぶ。ユカイドがカードを放り投げるとズ・ガルメ・レのバックルに刺さり吸い込む様にして封印。そして自動的に戻ってきたカードを確認してユカイドは変身を解いた。

「はぁハア……、疲れた」

アスファルトにへたり込むユカを見守る羽生は一抹の不安を感じて空を仰ぎ見る。

『明らかにユカは強くなってるのです。悪いことじゃないのに、何故こんなにも心がさざ波立つのですか？』

そんなふたりの横を大型バイクが走り抜けていった。

「！？ 今の……アギトだった？」

「僕には分からないですよ」

ユカは慌てて立ち上がるがよろよろとコンクリートの斜面に手を付いてしまう。

「無理はダメなのです！！」

「うん、でもアギトがクウガの世界に？」

駆け寄った羽生に肩を貸してもらい、ユカはアギトらしき者が向かった方向に坂を下っていった。

「未確認生命体F群39号及びS群1号を追跡中、各隊は戦闘をクウガに任せて後退。民間人の保護を優先しなさい」

指揮車から指示を飛ばすのは真田夏子、『才色兼備』という四字熟語は彼女の為にある！

『夏先輩、このまま進めば廃墟がある。39号と1号をそこに追い込むから、よろしく』

黒と赤のスマートなバイク『ビートチェイサー』に乗った赤き古代の戦士、クウガが亀に似たグロンギとジャガーに似たアンノウンを廃墟に追い詰める。

「何故、ゲゲルがばれた？」

「2回目の今日だからだ!!」

「クウガ……アギトゾギジョグジャラゾグスベバ!!」

「ああ、何度でも——ッな!!」

答え終る前にビートチェイサーから飛び降りてフックをアンノウンに当て、続けざまに回し蹴りを喰らったアンノウンは廃墟となった倉庫の中に吹っ飛んだ。

「ウオオオオオオ!!!!!!」

背後からグロンギのタックルを受けてクウガも壁を突き破り倉庫内へ。

「クウガもまた、人を超えてはならない」

アンノウンの真上に天使の輪が出現して輪から2本のサーベルが降りてきた。

「超——変身!!」

霊石『アマダム』をバックルにしたクウガのベルト『アークル』の左側の上部を軽く叩き、姿を青色に変え跳躍、アンノウンの剣撃を躲し天井を両足で蹴って反動を利用。スピードを得る代わりに失ったパワーを補い、アンノウンに必殺のキックを決める。

「が、は!? ア、ギトも……クウガも——そんなし」

封印の刻印が浮かび上がり、再びアンノウンの真上に天使の輪が出現すると強く輝いてアンノウン諸共爆発した。

「超、変身!!」

今度は紫色に姿を変えてアンノウンが落とした2本のサーベルを拾うとサーベルも大剣に形を変えた。そして鉄球を振り回しながら向かって来るグロンギに向き直る。

「——ッオリヤアアア——!!!!」

鉄球をしゃがんで躲して、剣をグロンギの胸と腹に突き刺し、更に力を込めて体を貫くと封印の刻印から始まった亀裂がグロンギのバックルを破壊してアンノウン同様に爆発した。

「広宇、上出来よ! あっさり倒したね」

『1回目は亀鉄球に苦戦したから。じゃあ二刀流だつてな』

ビートチェイサーからの映像を見ていた夏子から通信が入り、それに答えながら廃墟から外に出ていく。

「あー夏先輩、会わないといけない娘がいるから先に帰ります」

『そうなの？ お疲れ様。ゆっくりお休み』

通信を終えてビートチェイサーに跨がり、夕焼けに広宇は消えていった。

同日深夜、何かから逃げる緑の怪物。

「ギルスも存在してはならない」

「gwa?」

ギルスの周囲に天使の輪が複数現れ、中から飛び出した光りの触手がギルスの体を貫いていく。

「xuu——Guruxuaaaaaaa!!!!!!!」

ギルスが叫ぶと角や爪に牙がより鋭く長くなり更に攻撃的な姿に変身して背中に新たに生えた触手状鞭『ギルススティンガー』をアン

ノウンに目掛けて振るうが先に天使の輪から伸びた触手が頭部を貫通しギルスは事切れた。

「アギト、ビダバ」

「神気取りだな」

アギトの気配に気付いたアンノウンが振り返る。そこに立っていた男の腰に金色のベルト『オルタリング』が顕現。バックル部分に赤い牙の様な物が遅れて現れ、両手を前方に突き出し、X字に手をクロスさせてからベルト両腰のスイッチを叩き、業炎の鎧を纏ったアギト、バーニングフォームに変身。

「アギトもギルスも、そしてクウガも危険だ」

ギルス同様に天使の輪を周囲に出現させて光りの触手がアギトを襲うが全てを鎧が塵に変え、自分の間合いまで進んだアギトは重く、激しく、荒々しい殴打を連続で叩き込む必殺技『バーニングラッシュ』をアンノウンに決めると背を向ける。

「人は、人は、ひひッヒト——は」

天使の輪から輝きが消えてアンノウンは地面に溶けていった。

「ふむ、残念だったの〜ユート」

空から羽生に負けず劣らずな死神コスプレしたロリチビっ娘（注：レオタードかスク水にしか見えない衣装）が大鎌に腰掛けながら降りてくる。

「また、2回目でも間に合わなかった」

「仕方ないな、夢見師とて万能じゃないのだ」

「テメーが仕事しろよ！」

えっへん」と胸を反らした死神に変身を解いてからツツコミを入れた。彼なりの優しさだろう。

「異世界からの旅人が来たようだぞ？」

「昨日、聞いた。こよみ帰るぞ」

「……遊斗は昨日聞いたかもしれないが、あたいが伝えるのは今日が初めてなんだから、少しはリアクションしろー！！」

喚く死神こよみを無視して遊斗は歩き出した。

### 第三十四話 交錯（後書き）

前後書き劇場Bパート

『教えてツ柚香先生ー！！！！』

天

「さて、次回の『教えてツ柚香先生ー！！！！』は？」

柚香

「ええと——！？ 『天でも解るグロソギ語講座』を……予定しています」

にゃんこ天

「フーッ！！ ニヤア”アアア！！！！！！」

ねこ有希

「……にゃあ」

梨花

「こなた！？ 有希を元に戻しなさい！！」

こなた

「いや、どうやって戻すのかな？」

ハルヒ

「面白いから暫く楽しみましょう!~!」

次回仮面ライダーユカイド

「うーん、見間違いだったのかな?」

「あうあう? 僕は不可視みたいなのです!~?」

「本当だ! 珍しいね」

「ほほ、見習いとして働いて貰おうかの?」

「邪ロリ、ハチミツ舐めてろ」

「死神キャンディー食べるか?」

「やめろ、邪ロリ死んでくれ!~!」

「死神に死ねとは!~? 狩ってやろうか!~!~!~!~!」

次回も変身(邪ロリ×2)!!

ユカイド

次回も読むですよ  
あう

### 第三十五話 甘党（前書き）

前後書き劇場Aパート

『教えてツ 柚香先生ー！！！！』

く天でも解るグロンギ語講座

柚香

「皆さん、ご機嫌よう      今回、ユカさんにお越しいただきました」

ユカ

「おはよう。こんにちは。こんばんは。内田ユカです」

天

「それでは例文です」

グロンギさん

「バゼ、ゲゲルグダセダ？」

クウガさん

「2回目の今日だからだ！！」

柚香

「ゲゲルは私達の言葉でゲームですね」

ユカ

「33話後書きと34話を読むと何て言ってたのか、解ると思います」

天

「え！？ どころ辺なのかな？」

ユカ

「クウガ対F39号とS1号の戦闘シーンに、33話後書きの次回予告セリフと同じ箇所がある筈だよ」

天

「ここかな？ …… あっ 本当だ」

柚香

「天が解ったみたいなので、解答はBパートで！」

ユカ

「ヒッ、グス…… 何故か涙が止まらないよ」

## 第三十五話 甘党

仮面ライダーユカイド

### 第三十五話

アギトが乗っていたと思われる、金色の大型バイクを追い掛けて坂を下り、ユカと羽生のふたりは商店街を歩き回っていた。

「うーん、見間違いだっただのかな？」

「あうあう、もう遅いのですよ。空も星が見えるのです」

腕を組んで首を横に傾げるユカに羽生は、おなかを押さえながら空を見上げ、暗にアギト搜索を止めて、泊まる所を見付けようと言っている。

「そうだね。怪我してるし、野宿は嫌だもん」

肘の怪我を確かめて今度は宿を探しはじめるユカと羽生だが、小銭が18円しかなかった事実をすっかり忘れていた。——と、羽生が通行人とぶつかってしまう。

「あうあう？ 不可視のようなのです！？」

「珍し——私、今までイタい娘……だったんだ」

体を擦り抜けていった通行人を見送り、初めて今回の世界では不可視だと気付いた羽生。周りから今まで独り言を喋る、可哀相な娘だと思われていた事実、軽くショックを受けるユカ。

「居たいだ。ユカに羽生、家に泊まればいい」

声がした方に振り返れば、ビートチェイサーを押しながら、ぶつきら棒に手を振るクウガこと広宇が居た。

「あの！ どうして名前を！？」

「2回目だからね」

「僕とユカは初めて会ったのですよ？」

驚くふたりに説明が長くなるからと先に家へ案内すると言う広宇。ユカは羽生にビートチェイサーはクウガ専用のバイクであると教え、取り敢えず付いて行くことに。

ユカと羽生は、趣ある大きな和風の家に案内され、何故か表は避けて裏口から中に通された。

「来たか、おお！？ 可愛い娘達じゃ」

ふたりが中に入ると小学校低学年、もつと下かもしれない、おかっぱ頭の和服が似合う女の子が、ころころと笑みを浮かべて玄關に

座っていた。しかし、広宇の言葉で間違いだと気付く。

「ばあちゃん、ただいま」

「「ば、おお婆ちゃん?!?!?」」

皺ひとつ無い珠の肌。見るからにマシユマロの如く軟らかそうな頬つぺたである。

「今日は酢豚じゃぞ! ……その前に怪我の手当てが先じゃの」

ユカのコングリートの斜面を転がり落ちた際にできた怪我の具合を確かめる。見た目幼女、実はお婆ちゃん。

「ふむ……消毒して絆創膏を貼れば、すぐ治るかの?」

とてとて奥に消え、とたとた救急箱を持って戻り、てきぱき手当てをした。見た目幼女、実はお婆ちゃん。

「ありがとうございます。ええと?」

「夢村 登瀬じゃ。そこに突っ立ってるイケメンが、わしの孫にして3股を掛ける度量の持ち主!! 広宇じゃ」

「ばばあ!? 何つー紹介だ? それとイケメンじゃねえし死語だら!」

ほほと笑い広宇の罵詈雑言を受け流す見た目幼女、実はお婆ちゃんの登瀬さん。

「ささ夕食が冷めてしまっぞ？ お上がり」

「は、はい」

『ユカは何歳だと思いますか？』

「知りたいか？ 角っ娘ちゃん」

玄関からリビングに案内される途中。不可視をいいことに、聞きづらい話をユカに振った羽生に、登瀬さんは不敵に笑いかけた。

「もしかして、広宇さんも登瀬おばあちゃんも、羽生ちゃんが本当に見えてる？」

「所謂、夢幻体みたいなものじゃろ？ ごはんは食べれるかの？」

「本気を出せば食べれるのです」

そんな事に本気を出さないでよ……とユカは思ったが口に出さないでいる。気が付けば常識人になったな私と感慨に耽っていた。

「パイナップルパイナップルパイナップルパイナップルパイナップル豚肉パイナップルパイナップルパイナップルパイナップルパイナッ

ツプル…… e t c」

テーブルの上には、酢豚とは名ばかりのパイナップルの酢漬けが、お皿に盛り付けられている。あまりの甘さに謎の呪文を唱えるユカと嬉々と貪る羽生……。

「ユカちゃんは俺と一緒に振り掛けを食べよう」

「……………ありがとうございます」

侘しい食事を終えたユカと広宇。登瀬おばあちゃんと羽生はパイナップルの酢漬けにハチミツを掛けて笑っている……練乳までも取り出した所で広宇に止められた。

「糖分摂取はわしの趣味であり、生き甲斐じゃあゝ!?!?!」

「愛と勇氣と甘味が、奇跡を呼ぶのですよゝ!?!?!」

うるうると下から広宇に『W上目遣い』を繰り出す見た目幼女、実はお婆ちゃんの登瀬さんと見た目幼女、実はオヤシロさまの羽生。

「話が前に進まないし、却下だ!!」

ぴしゃりとぶった切った広宇は酢豚、実はパイナップルの酢漬けにラップをして冷蔵庫に納め、登瀬おばあちゃんと羽生をキッと睨み付けてからテーブルに戻った。

二回目の今日、広宇と咲夜と、後ひとりに対して通じる言葉じゃ。打って変わり説明を始める、登瀬おばあちゃん。

彼らは『夢見師』、正確に明日を見る事ができる存在。寝ている間、明日起こる出来事を夢で見える事ができる、故に彼らは今日を二度体験する。それ相応の対価が必要じゃがの。起きるべき運命を変えれば自分自身の記憶から対象を忘れてしまうのじゃ。それが死なら対価は虚無……。希望は忘れるだけで消えるのでは無いこと。広宇がユカと羽生を知っていたのは今日を夢見たから、つまり『二回目の今日』じゃな。

「……その説明なら私達を忘れてしまう？」

「広宇は平気じゃ、愛の力での」

「黙れ邪口リ！！ハチミツ舐めてろ！！！！！！」

ハチミツ入りチューブを登瀬さん目掛けて投げ付けるがサツと躲し、棚に片付けて尚且つ、ニタリと笑う見た目幼女、実はお婆ちゃんの登瀬さん。

「まだ、僕が見える説明が済んでないのです！」

「さつき、夢幻……体って言っていましたよね？」

「簡潔に言えば幽霊みたいなもんじゃ、夢見師用語で『夢幻体』じゃな」

幽霊と言われ、いじける羽生をよそに話は続く。

「3人だけですよね？ 登瀬さんは、どうして見えるんですか？」

「わしが知る夢見師は4人、ひとり旅の途中じゃ。羽生が見えるのは、わしも夢見師の端くれの様なものじゃからだ」

「端くれですか？」

「明日を見る事はできぬが、人の夢を見る事ができる。広宇は両方できるがの」

「ところで羽生ちゃん、眠いの？」

さつきから、こっくりこっくり舟を漕ぐ羽生はゆらゆらと宙を揺れている。

「もう寝ようか？ クウガにアギト、グロンギとアンノウンについては明日な」

仲良くお風呂と歯磨きをしたユカと羽生は、使われていない部屋を貸してもらい、布団を引っ付けて敷くと夢の中へ。

『本日未明、——会社前にその社員である阿草 恵さん26歳の転落死体が発見されました。警視庁の発表では未確認生命体S群の犯

行とみて捜査を進めて——」

朝から気持ちの良くないニュースを眺めている、どこか有希に似た女性が、お好み焼きに特濃ソースを掛けている。

「朝からお好み焼きかよ……咲夜」

「当然、地元を愛している」

広宇も食べる？と箸で摘んで差し出すが、いらないと目玉焼きを焼き始める広宇と昨日の残りの酢豚、実はパイナップルの酢漬けを食べている登瀬さん。

「おはようございます?」

「——なのです……」

知らない人が居たので少し驚きながらテーブルに着くユカと、瞼を擦りながらテーブルをすり抜け、羽生は壁に激突した。

「おはよう、ユカ。私は住吉 咲夜……羽生は大丈夫?」

「あうあう!!?!?!? 痛いのです」

真っ赤になった鼻を摩りながら漸く、テーブルに着いた羽生。

「説明はした？　そう、私も夢見師。ユカに羽生は説明しないでいい。広宇に聞いたから」

「ええと、咲夜さんも忘れちゃう？」

「平気、広宇がいるから」

何故か咲夜は、顔を赤らめて広宇をちらりと見遣る。

「咲夜も記憶を失わずに、夢見を使えるのじゃ」

パイナップルの酢漬けを平らげた登瀬さんが、にやにやと広宇を見ながら答えた。広宇は登瀬さんを無視して朝食を食べ終わると食器を片付けて、ユカと羽生に簡単な食事を用意すると、食後に温かい緑茶を飲んでいた咲夜と一緒に出掛けていった。

「S群って何ですか？」

「F群がグロンギ、FIRSTじゃ。S群がアンウン、SECONDO。簡単じゃろ？」

「最初にコンタクトした未確認がグロンギで後からアンウンと出会ったんですね？」

「両者は似ていたが違いがあった。殺人の法則性に天使の輪じゃ。だからFとSに区別する事にしたのじゃ」

「詳しいですね！？」

「クウガが孫じゃからの」

あっそうかと手を打ったユカは、チャンネルをピッピッと変え続ける羽生を掴まえると、登瀬さんに今度はアギトを捜してきますと告げて家を飛び出していった。

今朝のニュースの現場に真田夏子が長い黒髪を靡かせながら、ちっさい女性を連れて周囲を歩き回っている。

「F群9号より遥かに高い所から落とされている。やっぱりS群よね？」

「うーん、発表は早過ぎですよ！！　まだ確かな証拠も無しに」

「上と言うより、あっちの判断。私はアンノウンの可能性が高いとしか」

「夏先輩、仮にも専門家でしょ？　そんな発言したら、はいそうですかってなるに決まっていますよ！」

ブンブンと夏子に怒る女性は、森田　奈緒。考古学者の卵である。

「ごめん、ごめん。で、何か解る？」

「さっぱりですね。やっぱり、広宇先輩に聞いた方が早くないですか？」

「広宇には頼ってばかりで悪い気がして……ね」

「最近ではテレビで、クウガが出ない日は無いですもんね」

KEEP OUTの中で話しているから、ふたりの会話は野次馬には当然、聞こえていない。

「あの、刑事さん？」

「!?!?……あつと、私は刑事じゃなくて——きみは？」

「夢川 遊斗です。被害者は阿草 恵さんですよ。」

KEEP OUTのテープを潜り抜けてきた遊斗に夏子は一瞬、広宇に見間違えたの隠すように笑顔を向ける。必要な証拠品や写真は撮り終わっているから、直ぐに摘み出すことはしなかった。

「知り合い？ 阿草 恵で間違いないけど……どうして？」

「血縁者は？」

「貴方、詳しいわね。アンノウンに」

表情を陰しくした夏子に遊斗は微笑を返すと、踵を返して雑踏の中に消えていく。

「待ちなさい!!」

「夏先輩！？ 広宇先輩と会う約束でしょ！！」

追い掛けようとした夏子の腕を、引っ付かんで止めた奈緒は、携帯電話の時間を見せると『ならさわ』に向かって、遊斗を追い掛けた夏子を引っ張っていく。

「気になるでしょ」

「はいはい、アイスモナカとクリーム善ざいが待ってますよ」

ばたばた暴れる夏子を器用に引き摺って、奈緒は甘味処『ならさわ』へ。

「なあユート、正義のヒーローは正体を隠すものか思ってるのか？」

「別に、どうせ明日になれば会わないから必要ないだろ？」

「そうだ！ 近くに天才占い師、夢村 登瀬さんの家がある筈だぞ？ 挨拶と、ついでにサインを貰おうぜ」

「それも明日な」

大鎌に乗って遊斗の横を飛ぶ、こよみは面白くないと言わんばかりに溜息を吐き、ドク口を模した『死神キャンディー』を取り出して舐め始める。

「ん、ユートも死神キャンディー食べるか？」

「頼むから邪口リ、死んでくれ」

「死神に向かって死ねとは！？ 狩ってやろうかー！！！！！！」

じーっとキャンディーを舐める自分を見ていた遊斗に、キャンディーを勧めると死神として見逃せない『ワード』が出たので、こよみは乗っていた大鎌を振り上げ殺気を迸らせた。遊斗は意に介せず、振り下ろされた大鎌を半歩後ろに下がって躲し、こよみの額を指で弾いた。

「ッ痛い！？ おのれ……覚えてろよー！！」

額を両手で押さえたまま、大鎌に乗って空に飛んでいった見た目幼女、実は死神のこよみを見送った遊斗。内心、夢だからこよみ自身も覚えてないだとツツコミを入れて――目を覚ました。

### 第三十五話 甘党（後書き）

前後書き劇場Bパート

『教えてツ 柚香先生ー！！！！』

く天でも解るグロソギ語講座

柚香

「それでは解答を——？」

天

「私に言わせてよ！」

ユカ

「じゃあ、お願いします……うあーん」

天

「バゼ、ゲゲルグダセダ（何故、ゲゲルがばれた）？」

ユカ

「大正解ー！！ う、ふええ」

柚香

「ユカさん大丈夫ですか？」

天

「目が真っ赤だよ!？」

ねこ有希

「……にゃあにゃあにゃあ」

ハルヒ

「成る程、気のせいよ」

ねこ有希

「……にゃにゃ」

ハルヒ

「でも、気をつけてだつて」

ユカ

「うん。了解だよ」

梨花

「猫語が解るの!？」

羽生

「信じる心があれば、聞こえるのですよ」

こなた

「そう、愛だよ!……!」

次回仮面ライダーユカイド

「ギグシユブズブドバス」

「言われてみると——私、浴衣か巫女装束ですよね？」

「人が溶ける……、これは！？」

「F19号——これ以上は殺らせない」

次回も変身（ならさわ）！！

ユカイド

次回も読むですよ あう

### 第三十六話 溶融（前書き）

前後書き劇場Aパート

『教えてッ 柚香先生ー！！！』

ガッシャアーン

天

「ああ！？ セットが……」

柚香

「倒れちゃいましたね」

???

「きゅーっうん！！ 酷いかな酷いかなー！！！！！！」

梨花

「ぶ、フィーリア！？」

フィーリア

「なんで出番無し組回と呼ばれてないのかな？ かな？」

ガシャンッ パリーン

梨花

「お”落ち着きなさい！？ 物に当たらないのー！！”

フィーリア

「ブラシでドカーン！」

ブンブン……Bowaxaaaaaaa!?!??

フェル

「ザクエルバリアー!!」

ザクエル

「Goxaaa……」

梨花

「フェル、助かったわ。何気に天使が可哀相だけど」

天

「ロボット？　ロボットなの!？」

柚香

「遺跡を守護する『ゴーレム』と似てますが『ウーム』の天使製造機から造られた機械……いえ生物？　少し難しいですね」

フィーリア

「あの2人なら仕方ないよ！　だけどフィーリアを呼ばないなんて納得いかない!!!!!!」

フェル

「く、変身!!!!!!」

《ルビエルジャベリン》

ルビエル

「H y a a a a ! ? ! ?」

ドカーン……ブスブス

フェルUA

「フェル式メガサイコミユ粒子ビットー!!」

ズギュンズギュンズギュン

フィーリア

「ブラシは伊達じゃないかなー!!!!!!!!」

ブンブンブンブンブンブンブンブンブン

《ツインファギエルライフ》

ゴッバアアアアアアア

ファギエル×2

「A x a a a a x a ! ! ! ! ! !」

フェルUA

「続けてローリングツインファギエルライフ!!!!!!!!」

グッバアアアアアアア

フィーリア

「お菓子が食べたーい!!」

グシャ……ゴキユ……

ファギエル×2

「A x a a a x a……」

梨花

「仕方ないわね……ほらシュークリームよ！ 因みに魔王Kの城はこの紙に書いたから好きにしないさい」

フィーリア

「梨花さん！ ありがとうございます」

フィーリアは去っていきボロボロのスタジオが残された。

羽生

「摩訶不思議有り難いオヤシロパワー なのです」

見る見る内にスタジオが修復されていく。

ハルヒ

「やっとなるわ……フェルちゃん！ ちょっと身体を解剖させてくれる？ 天使なんて中々見れないわー！」

フェルUA

「嫌ター！？ ハヤウェイ助けてー！！！！！！」

ハルヒ

「CHECK」

飛んで逃げるフェルに青白いビームが伸びてロックオン。

柚香

「デルタ——ですか」

ハルヒ

「フフフ」 覚悟しなさいフェルちゃん!!!!!!!!!!」

戦慄にフェルは変身が解けてしまう。

羽生

「あう!? 僕のシュークリームが無いのです!?!?!」

梨花

「それならフィーリアに渡したわよ」

ハルヒにフェルが擦られている横で神と魔女のケンカが始まるのだ  
った。

柚香

「え〜と、グロンギ語講座はBパートで」

天

「あつ柚香、待ってよ」

一旦スタジオを後にする天と柚香。

ユカ

「あはは……有希さんは帰る?」

ねこ有希

「……にああ」

こなた

「むぐむぐ……ハ」

ぽわわわん

有希

「……戻った」

こなた

「（これで かがみんに怒られないで済むよ）」

## 第三十六話 溶融

此跡・某会社前 午前0時09分

忘れ物を持って会社から出てきた阿草 恵は何と無く夜空を見上げ、ひらひらと空から落ちてきた物を手で掴んだ。

「羽根？ カラスかし……ッ」

背後に感じた気配に振り向くが何も無く、気の所為かと溜息を吐こうと口を開きかけた時には彼女は先程出てきた会社を越えて、星空と此跡の夜景が目飛び込み思考が追い付かなく混乱し始める。

「死が祝福となる」

何者かの不吉な言葉を聞きながら彼女の視界が反転して硬い地面に落ちていく。悲鳴は上げない、何故なら彼女は未だ状況が掴めていない。

後僅かで死が口を開けて待っていた阿草 恵は真横からの風を感じること無く、硬い背に横たわり気を失っていた。

「ゴウラム……クウガか？」

彼女を助けた飛行体を睨む鴉の怪人は真上からの風を切る音に振り向く。

「悪いな？ クウガじゃなくて！！ 変身」

アギトの変身時に放つ光りに思わず目を塞いだ鴉の怪人は、もう1人の気配も感じて翼を傾ける。

「邪口リ！ 翼を斬れ！！」

「ヨミだと言っておろうに！！ —— ヤッアア」

大鎌が空気を切り裂く。鴉の怪人はすれすれで体を翻して避けると、鎌を振り抜いた体制で動けない。こよみを蹴り飛ばしアギトの手刀も躲すと急降下していく。

「アヤツ……中々やるな！？ 後を任せて平気か？」

「問題ない。休んでろ」

アギトの金色のバイク『マシントルネイダー』の車体が前後にスライド、車輪が90度回転して飛行能力を持ったスライダーモードに飛び乗ったアギトは鴉のアンノウンを追って一直線に降りていき、地面に激突寸前で直角に曲がったアンノウンと、アギトの力『オルタフォース』を噴出させトルネイダーを回転させたアギトは速度を落とさずに方向転換してアンノウンを追い詰める。

「火の力で……止める」

ベルト右側のスイッチを叩き右腕を赤色に変え『フレイムフォーム』に変身。バックルの『賢者の石』から灼熱の剣『フレイムセイバー』を取り出してアンノウンの左側に移動すると攻撃を仕掛けた。

「アギト……邪魔をするな」

「ッッ——なに!？」

アンノウンが翼をアギトに振ると風の刃がトルネイダーを包む。操作不能に陥ったトルネイダーから飛び降りたアギトはスライダーモードから通常形態にトルネイダーを戻すと風の刃は消えていく。

「風が……目には目を」

今度は左側のスイッチを叩き左腕を青に変え『ストームフォーム』になると、バツクルから疾風を宿した双刃の槍『ストームハルバード』を取り出し、再びスライダーモードに切り替えたトルネイダーに乗ると丁字路を左に曲がったアンノウンを追い掛け、ハルバードを左右に振り回し嵐を起こしてアンノウンの動きを弱める。

「ググッ、アギ——ト!？」

嵐を劈きながら飛んできたハルバードを咄嗟に天使の輪で飲み込んだアンノウンの先に灰色のカーテンが現れた。

「……ラダガゴグ」

カーテンに向かって走り出したアンノウンを見据えながら両側のスイッチを叩き右腕が灼熱、左腕は疾風、身体には大地の力を宿した三位一体の姿『トリニティフォーム』に変身したアギトの角『クロスホーン』が左右に展開。前方に出現した展開時のクロスホーンに酷似したアギトの紋章からオルタフォースを吸収して、腰を落とす。

「——ハッ!！」

トルネイダーがカタパルトの如くアギトを射出し、一回転したアギ

トはアンノウン目掛けて両足を突き出すとカーテンに蹴り飛ばした。アギトはカーテンを飛び越えて火花を散らしながら地面を数m進みカーテンに振り返りクロスホーンを閉じると爆発音が響きカーテンは消滅するのだった。

## 仮面ライダーユカイド

### 第三十六話

夢村家 午前8時12分

広宇と咲夜が家を出て行ってから少し経ち、ユカは玄関に向かっていた。

「（うーん。何処を捜せばいいのかな？）――！？？！」

突然チャイムが鳴り、お邪魔しますと入ってきた遊斗と大鎌を背負ったこよみに……特にこよみに啞然としたユカは登瀬さんに助けを求めるためにリビングに引き返していく。

「登瀬おばあちゃん！？ か鎌を持った羽生ちゃんみたいな人が――！？」

「鎌？ ああ知り合いじゃ。ユカは少し落ち着きなさい」

玄関からリビングに向かう途中に居た登瀬さんはユカを落ち着かせると遊斗とこよみをリビングに招き入れテーブルに着かせた。ついでにユカも何と無く付いてきて、そわそわしている。

「んむゝ……ユカゝ眠いので二度寝するのです。あうあうゝ」

こよみに驚くことも忘れて羽生はユカに声を掛けて、自分達の部屋に戻っていった。

「（大丈夫かな？ 羽生ちゃん）」

夜更かしはしてない筈なのになゝと思いつながらユカは登瀬さんの隣に座った。いくら怪人と戦えても、さすがに大鎌を持った幼女の隣には『オヤシロさま』と旅をするユカでも座れないらしい。

「さて説明は必要かの？」

「彼女が旅人以外は必要ですね」

「なら1回目じゃな？」

「いや2回目だよな？ ユート」

ああと頷いた遊斗と こよみにユカ自らも登瀬さんと一緒に説明して一通り話を終えた。

「本当にアギトなんですか？ しかも夢見師に……し死神とか！？」

「本当だぞー！ 死神だあ！！ 怖いだろう？」

「——あはは。怖くないよ？」

大鎌を振り上げて殺気すら放たない こよみはただ単に可愛いだけである。ユカは こよみが羽生ちゃんに改めて似てるなと思った。

「探す手間は省けたけど私がすべき事は何なんだろう？」

ブッカーから取り出した灰色のクウガとアギトのシルエットが描かれたカードをユカは見つめて呟く。

「見た目は……巫女だよな？ こよみはどう思う？」

「登瀬の家に居候するなら占い師じゃないか？」

「言われてみると——私、浴衣が巫女装束ですよな？」

この世界に來た直後にグロンギと戦闘に入り、アギトを追って町中を捜し回していたから服装を確認する間もなく、今更ながらユカは自分の服装を席から立って確かめてみる。黒色の羽生の装束に袴ではなく膝上のスカート、寒い筈だった。

「ほほ、見習いとして働いて貰おうかの？」

「占いとか出来ませんよ！？」

わたわた手を振って私には務まらないと断るユカ。

「お茶汲みとか、わしと一緒に話を聞くだけでも構わないよ」

「なら——やってみようかな？」

此跡・甘味処　ならさわ　午前11時38分

「はぁ〜美味しい」

「うん。いくらでも入りそう」

「広宇、アーン」

「……自分で食べるから」

「ひ広宇！？ 私の事が嫌いに?!」

ショックを受けるも咲夜はクリーム善ざいを自分の口に運ぶのを止めない。それじゃ私の食べかけアイスモナ力をくと奈緒。ふたり共！ 広宇が困ってるでしょ？ と言いながら奈緒の腕をクロスカウンター気味に押し退ける夏子。

「……………帰るぞ?」

その一言に同時に頭を下げた仲良し3人娘に半場呆れながら広宇はコーヒーに口を付ける。

「………なんで『ならさわ』に集合したの?」

「へ? —— 定期報告会ですけど」

「ならさっさと済ませて。これから広宇とデート」

「約束した覚えは無い」

「そーだそーだ!! 根暗女!!!!!!」

「……………爆裂暴走小娘、ペチャパイ」

ピシッと空気が凍った。何気に毒舌な咲夜ちゃん……。暫くお待ち下さい――。

「あつ……で電話だ。ごめんね?」

奈緒の次は間違いなく私だと思っていた夏子のマナーモードにしていたケータイが振動して、内心ホツとしながら着信の相手を確かめて電話に出た。

『夏子先輩。また例の殺人が……広宇ちゃんと奈緒ちゃん居ますよね? 連れて来て貰えますか?』

「F群19号ね? わかった。咲夜さんも連れていくから」

夏子のアイコンタクトに頷いた咲夜。

『了解です。例の如くな状況なので……覚悟してくださいね』

「勿論よ亜佐美さん。また大人は軽傷なの?」

『ええ、大人の死者は居ません。19号に因るゲゲルに間違いなさそうです。――それでは』

「――続きは現場でね。じゃあ」

ケータイを閉じると現場への地図が添付されたメールが届き、皆に見せると会計を済ませて広宇達は外に出た。

此跡・某幼稚園 午後0時9分

パトカーに『未確認生命体対策機関』の特殊車両のバンが数台ずつ敷地内に停められている。その中を先程夏子に連絡を入れた人物、前田亜佐美が広宇達を現場に案内していく。

「見てください。完全に溶けています」

「人が溶ける……、これは!？」

室内には水溜まりが点々と広がっていて、防護服を着た人達が特殊な容器に水溜まりを形成している液体を採取している。

「これ……みんな子供なの？」

口を押さえ顔を青くした奈緒が恐る恐る聞くと夏子と亜佐美が頷いた。

「58名全員です。ただ確認作業中なので……生存は望めませんが」

「広宇、今日は？」

「2回目。1回目は事件の知らせは無かったよ」

広宇の答えに夏子は落胆を隠せない。

「……誰かが今日を変えたからかもしれない」

「そうだとしても誰かを護る為の結果なら何も言えない」

咲夜の意見と同じ考えをしていた広宇の思い当たる人物は1人。

「悪いのは19号」

「ねえ……何か聴こえない？」

奈緒の呟きに4人は周囲に注意を向ける。

「ロッカーから？　——開けますよ？」

『掃除用具入れ』と書かれたロッカーを開けると中には赤いリボンを付けた少女が膝を抱えて居た。

「良かった……立てるかな？」

奈緒を見上げた少女は恐怖から差し伸べられた手を払い退けると開け放たれたドア目掛けて駆け出していく。

「待つて！？　大丈夫だからー！！」

ドアから外に飛び出していく少女を見て広宇は、まだゲゲルは続いていると確信してアークルを顕現させ奈緒と一緒に追い掛ける。

外に出ると何故か少女は立ち尽くしていた。怪訝に思い広宇は周囲を見渡すが奈緒は構わずに少女に駆け寄った。

「もう平気だよ。お姉ちゃん達が——？」

ぶくぶく——ブジュフシュ……と音が聞こえる。

振り返った少女が目を見開き、奈緒の頬に小さな手を伸ばし掛けて

落ちた。

文字通り地面に少女の手が落ちている。

手から少女に視線を移す。

下半身が溶けていた。

上半身も溶けていく。

カチカチッと少女の――少女だった水溜まりの後ろに百足の怪人が顎を鳴らして立っていた。

「これでバギングバギンググシギド　バギングズガギドズガギ」

### 第三十六話 溶融（後書き）

前後書き劇場Bパート

『教えてッ 柚香先生ー！！！！』

く天でも解るグロング語講座

柚香

「えっセツト裏で梨花さんと羽生さんが最強フォーム&オヤシロ覚醒してますが気にせず進行していきます」

天

「……本編がアレなのに下らないね」

ユカ

「さあッ例文にゴー！！」

アンノウンさん

「ギグシュブズブドバス」

アンノウンさんは恵さんを空から地面に落とす。

阿草 恵さん

「はいいッ意味が分かりませーん！？！？」

アンノウンさん

「……ラダガゴグ」

灰色のカーテンがアンノウンさんの前に現れた。

アギトさん

「逃がすか!!」

ユカ

「アギトさんとの例文は予測しやすいかもだよ」

柚香

「恵さんとの例文は少し難しいですね」

天

「次回予告に出てきたグロンギ語なんだよね。恵さんが出てるから……本編で鴉のアンノウンが最初に言ったセリフかな？」

柚香

「正解、後1つですよ。天がんばって!」

天

「うーん……アンノウンは逃げてるけど慌てた様子は無い? 捨て台詞だとしたら?」

ユカ

「合ってるよ! さあ解答をお願いします」

天

「ギグシュブズブドバス（死が祝福となる）と、ラダガゴグ（また会おう）かな？」

ユカ・柚香

「大正解ー！！！！！」

天

「よかった。何だか楽しくなってきたよ」

ユカ

「次回の為に予習復習を忘れずに！」

柚香

「では次回予告ですよ」

次回仮面ライダーユカイド

「広宇さんが！？ 私、行ってきます！！！」

「気を付けるのじゃぞ！ 相手は広宇が何度も交戦して倒せなかった強敵じゃ！！！」

「バンソジャデデロゴバジザ！！！」

「ッッ、お前だけはあああ！！！！！！！」

「アギト」こときが私を倒せるとでも？」

「……空間を操れるのか？」

次回も変身（予兆）！！！！

ユカイド

次回も読むですよ あう

### 第三十七話 予兆（前書き）

前後書き劇場Aパート

『教えてッ 柚香先生ー！！！！』

～天でも解るグロンギ語講座～

柚香

「皆さん、ご機嫌よう」

天

「クウガ アギト編恒例のグロンギ語講座です！」

珠姫

「ユカちゃんが忙しそうなので……代わりに私が参加します。よろしく願います」

礼儀正しくお辞儀するタマちゃん。

柚香

「グロンギ語……珠姫さんは解りますか？」

珠姫

「大丈夫です！ ユカちゃんに教えて頂きましたから」

天

「うう……あんなに難しいのに」

珠姫

「天さん」 ゆっくり学んでいきましょう。れ例文へゴー」

『例文1 お部屋』

こなた

「あちゃー負けた！？ ねえもう1回！ あと1回だけだから」

みゆき

「構いませんよ。こなたさんの気の済むまで」

グロンギさん

「バンゾジャデデロゴバジザー！」

みゆきさんと一緒にパズルゲームで対戦する こなたに、またかとグロンギさんは呆れながら呟く。

『例文2 ドライブ』

グロンギさん

「ガギガグバボシゴボチザ」

こなた

「……ゆいねーさんの車に乗るのが過ちなのだよ」

車から下りてきたグロンギさんが膝を付きながら言うと こなたは苦笑いを浮かべながら答えるのだった。

珠姫

「日常？ グロングさんが可愛いです」

柚香

「今回は2つとも簡単ですね」

天

「1は呆れてるね。2は……災難だね」

珠姫

「解答はBパートで行います。それでは本編を読んでもください！」

### 第三十七話 予兆

此跡・某幼稚園 午後0時21分

水溜まりの前で蹲った奈緒を飛び越えてクウガが百足のグロンギに拳を振り下ろす。

「夏先輩、奈緒も皆も此処から退かせてください」

クウガの打撃を物ともしないグロンギは押されるままに後退していく。

「……あのリント達はゲゲルの対象ではない。そう熱くなるなクウガ」

夏子と亜佐美に肩を貸して貰い何とか立ち上がる奈緒を見ながらグロンギはクウガに話し掛ける。

「F19号——これ以上は殺らせない!!」

「クウガ、それは呼び名か？ ゴ・ムガド・バだ。覚えたか？」

最後に繰り出された拳を受け止めるとグロンギは黒水晶の眼を光らせクウガを4人の方へ放り投げた。

「ッ……撤退しろ！ 護りながらじゃ奴とは戦えない」

「広宇、帰ったらお好み焼き食べよう」

咲夜の約束に振り返らずに頷いて再びグロンギに立ち向かっていく  
クウガの頭上に、巨大な鋏形虫型の意思を持った装甲機『ゴウラム』  
が飛来する。

『シエンク・ゾ・ター』

巨大な鋏でグロンギを掴むと幼稚園を飛び立ち、クウガもビートチ  
エイサーで追い掛けていく。

此跡・夢村家リビング 午後0時25分

「！ ユート感じたか？」

「アンノウンか……鴉とは違う？」

登瀬さんとユカが予約していたお客さんの対応に席を離れ、暇を持  
て余していた こよみと遊斗は死神とアギトの力でアンノウンを察  
知。

「登瀬とユカはどうする？」

「伝えなくていいだろ？ ……伝言だけは残しとくか」

棚のメモ帳に走り書きして破るとテーブルの中央に置いて、遊斗は  
玄関に停めたトルネイダーへ走り、こよみは後を付いていく。

ふたりが家を後にした直後に夢村家の電話が鳴り響いた。

夢村家・応接間 午後0時15分

客の見た夢の話を聞き占いを終えた登瀬さん達は談笑していた。

「見習いらしいけど登瀬さんの孫かしら？」

「孫は広宇だけじゃぞ」

「じゃあ曾孫ね？」

「いや流石に歳が危ないじやろ！！」

笑い合う登瀬さんとお客さんの湯飲みに緑茶を注ぐユカは夢占い師見習い（仮）として頑張っている。

「まさか彼女とか？」

「え！？——熱ッ！？！？」

動揺して手がブレて緑茶が指に掛かってしまい、危うくお客さんにぶち撒けそうになるが何とか持ち堪え3人同時に息を吐いた。

「ち違います」 彼女なんて……広宇さんには凄く綺麗な咲夜さんて人が」

「あれ？ 夏子ちゃんに奈緒ちゃんも——そうそう亜佐美ちゃんも」

「テレビで知ったがハーレムと言うらしい。モエ〜じゃそうだ」

若いわね〜と何度も頷く登瀬さんとお客さん。ユカは苦笑いが精一杯だ。

電話が鳴っているが此処はリビングから離れていて耳には届かない。

ガツバギバグクウガ

「（バックルさん？ クウガが危ないって！？）」

デンワガナッテイル

「すみません。電話が掛かってきたみたいです」

お客さんに頭を下げてユカは足早にリビングに向かい、鳴り響く電話の受話器を手取る。

「はい、えと——夢村です」

『ユカ？ 丁度いい。広宇が危険』

「咲夜さん！？ 何かあったんですか？」

『広宇がF19号と交戦した。詳しくはトレーラーの中で』

そう言つて通話が切れるとけたたましいブレーキ音が家を震わせユカは急いで外に出てみた。

早く乗つてとトレーラーの運転席側の窓から乗り出した夏子が、靴を履くことに手間取りながら出てきたユカに声を張り上げる。

「い今いきます！！」

「待て何があつた？」

ユカの様子に異変を察した登瀬さんが呼び止めた。

「広宇さんがF19号と戦ってるらしくて……私、行ってきます」

「そうか……気を付けるのじゃぞ！ 相手は広宇が何度も交戦して倒せなかった強敵じゃー！」

夢占いの時に見せた心の奥底まで射抜く様なそれでいて慈愛を感じさせる凜とした眼差しの登瀬さんに、顔を引き締めもう一度「行ってきます」とユカは応えトレーラーに乗り込む。

## 仮面ライダーユカイド

### 第三十七話

此跡・港付近 午後0時34分

『キー・ムー』

灰色のカーテンからゴウラムが飛び出し、ゴ・ムガド・バを鉄から解放して空の彼方に飛んでいく。

「ガギガグバボシゴボヂザ」

降り立ったゴ・ムガド・バは前方に現れた灰色のカーテンを、ビートチェイサーに乗って潜ってきたクウガに言い放つ。

「……………」

答える代わりにアクセル全開でゴ・ムガド・バに前輪を振り上げ体当たりを噛ますクウガだが、片手で止められビートチェイサーごと地面に叩き付けられた。

「オリヤアア!!」

直ぐさま立ち上がり掛けに放った下段からの封印エネルギーを込めたブローは、ゴ・ムガド・バの層状の甲殻の前に意を成さない。頭部の蛇腹状の腰まである触角がクウガを痛め付けていく。

「バンゾジャデデロゴバジザ!!」

ゴ・ムガド・バの顎が開き口から強酸性の毒液を放射され、クウガは咄嗟にタイタンフォームに超変身して凌ぐが、強靱なタイタンの鎧がまるで悲鳴の上げる様に溶けていく。

「今のクウガでは勝てはしない」

タイタンの鎧を失ったクウガの腹をゴ・ムガド・バは執拗に殴り続ける。

「心を闇で満たせ、究極の闇で空を覆うのだ」

ゴ・ムガド・バはクウガの首を掴み高く持ち上げた。

「クウガ、恐れを捨てろ」

《ATTACK RIDE SLASH》

斬撃が残像を残しながら、クウガを掴んでいるゴ・ムガド・バの腕を斬り付け、ユカイドが間に割って入る。

《ATTACK RIDE QUICK SILVER×3》

超速で移動するユカイドがイメージした通りに、先ず正面から頸椎にブッカーを突き当て、次に腰元から脇下までを逆袈裟に斬り、最後に上段から思いつ切り背中を切り付けた。

「グボラデザジョグロン——ぷっうブ?!?!?」

的確に突き出されたゴ・ムガド・バの拳がユカイドの脳を揺さ振る。高速移動に怯まず、斬撃に傷付く事も無く、新たに現れた敵に、本能のまま牙を剥ける。

「ダザンビンギョグバ!!」

「んっっ? ……どう言う意味!?!」

「言葉通りだ。幼くか弱きリントよ」

尻餅を突き鼻の辺りを押さえたユカイドはゴ・ムガド・バの言葉の意味が理解できないでいた。

ココハブレイドダ

《KAMEM RIDE BLADE》

「——広宇さん、大丈夫ですか?」

ブレイドにカメンライドしたユカイドは後ろのクウガに問い掛ける。

「一応は……ッてみんな!？」

ユカイドがゴ・ムガド・バの相手をしている間に赤のマイティフォームに戻ったクウガは、ピンクと黒水晶色の異形2人の奥に見えるトレーラーから何やら重そうなトランクを下ろす夏子と亜佐美、奈緒はカーゴ側から手伝い、咲夜はクウガに手を振っていた……。

《ATTACK RIDE SLASH THUNDER MA  
CH》《LIGHTNING GUST》

無事を確認したユカイドは振り上げたブッカーに蒼電が宿らせるとゴ・ムガド・バ目掛け蒼雷を飛ばしたが、触角を地に付けたゴ・ムガド・バはアースを作るとクウガに触角を向けて蒼雷を返した。

「ひ広宇さん!？」

直撃を受けたクウガはその場に蹲り、体にスパークが走り続ける。

「え? ちょっ——じGM-01、ACTIVE……広宇!」

咲夜に則されGM-01と呼ばれるサブマシンガンをトランクから取り出して、ロックを解除すると夏子はクウガに投げ渡した。

「ッッ、お前だけはああ!!!!!!」

クウガは超感覚を持った緑の『ペガサスフォーム』に超変身してGM-01を構えると体に金の装飾が走り、GM-01も封印エネルギーを込めた空気弾を射出する『ペガサスボウガン』に変化して同

じく金の装飾が施されると、更に銃身も雷を宿した物に強化される。

「ライジンググッツ……私が目覚めさせたの!？」

「その力だ。それで良い」

驚くユカイドとは違い冷静に見守るゴ・ムガド・バに、クウガはボウガンから空気弾を3連射するが甲殻に弾かれてしまう。

「甲殻と甲殻の隙間を狙うしかない」

「だからコレの出番ですよ広宇先輩!」

何時の間にか隣に立った咲夜の冷静な分析に、奈緒がプルプルと腕を震わせながらクウガに長さ50?、厚さ5?の角を丸くした長方形の金属版を手渡した。

「何だよコレは？」

「形状記憶合金のBT鋼で出来た貴方の剣で在り矛よ」

そう説明して咲夜と奈緒の後襟を掴み、夏子は後方に下がる。

「有り難く使わせてもらう。超変身!」

俊敏な青の『ドラゴンフォーム』に超変身。BTボードは『ドラゴンロッド』と呼ばれる棒に変化して先程のペガサス同様に身体に金の装飾が走り、ロッドにも金のラインと両方の先端に鋭利な金の矛が装着された。

「ゴンチヨグギザ」

来いと手を引くゴ・ムガド・バにクウガは触角による攻撃をロッドで払いながら向かっていく。

「ンンツリヤアア！！！」

ゴ・ムガド・バの甲殻と甲殻の隙間をクウガはロッドで突き、更に押し込んだがゴ・ムガド・バはロッドをへし折る。怯まず折れたロッドを持ち替えて背を向けて下から再度、クウガは甲殻と甲殻の間にロッドを突き刺す。

「何故子供ばかりを狙った！？」

「……それが今回のゲゲルだから、だ！！」

後ろからブッカーで切り付けようとしたユカイドを触角で叩き飛ばしながらゴ・ムガド・バはクウガに答える。初撃と現在突き刺されている部分に封印の刻印が現れ亀裂が走っていきバツクルにも亀裂が入った。

「ゲームで人を殺して、293人の……あんな小さな子供に激痛を味わせながら殺す理由がツツグロンギにはあるのか！！！！！！」

クウガの脳裏に奈緒の目の前で死んだ子供の顔と、禍禍しい4本角の漆黒の影が映る。

「その感情だ……忘れるなクウガよ！！」

強引にロッドを引き抜いたゴ・ムガド・バが、クウガをロッドで突

き倒し馬乗りになり、クウガの喉元目掛けロッドを振り下ろした。

「……………これは何だ？」

寸前で動きを止めたゴ・ムガド・バのバックルにカードが突き刺さっている。

倒れた格好のままユカイドが右手を伸ばしていた。

徐々にゴ・ムガド・バがカードに吸収されていく。

「ブグツビギデパジャスバ」

その言葉を最後にゴ・ムガド・バはカードに封印され、ユカイドの手にカードは戻った。

### 第三十七話 予兆（後書き）

前後書き劇場Bパート

『教えてッ 柚香先生ー！！！！』

く天でも解るグロンギ語講座

珠姫

「天さん、解答をお願いしますね」

天

「バンゾジャデデロゴバジザ（何度やっても同じだ）！！ ガギガ  
グバボシゴボチザ（最悪な乗り心地だ）かな？」

柚香・珠姫

「大正確です！！」

柚香

「ご褒美にチョコバナアイスをプレゼントです」

天

「わあ” ありがとう”」

珠姫

「次回のグロンギ語講座の為に予習復習を忘れずに頑張りましょう」

綺麗に締め括られた『グロンギ語講座』のセット裏では……。

梨花

「はあはあ、パーフェクトゼクターのタキオン粒子波を弾くなんて……やるわね!？」

羽生

「失せる——人の子よ」

神通力でマキシマムハイパーサイクロンを四散させ更にリカブトを吹き飛ばし、変身の解けた梨花に羽生は鬼狩柳桜を突き付ける。

奏

「本編が大変だったのに……何をしてるんですか!！」

羽生

「梨花が、梨花が僕のシュークリームを断りも無く勝手に渡して……食べ物への恨みは怖いのですよ!！」

梨花

「だ、だからって鬼狩柳桜を持ち出すことないじゃない!！」

羽生

「梨花もハニューカブトに変身してパーフェクトゼクターまで使うことないのです!！」

呆れる理由に頭を抱える奏はスタジオに通り掛かったことを後悔し始めるのだった。

次回仮面ライダーユカイド

「通り掛かりの仮面ライダーだ」

「試したい方法がある。動きを止めてくれ」

「彼女には伝えない方が良い」

「まだ寝てたの！？ 本当に大丈夫かな？」

「貴方がアギトなの！？」

「少し前髪を上げて目を瞑って、暫くそのまま——」

次回も変身（不調・仮）！！

ユカイド

次回も読むですよ あう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0276i/>

---

仮面ライダーユカイド

2010年10月10日12時36分発行